
竜の華は蒼月に舞う

ひなき つぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の華は蒼月に舞う

【Nコード】

N3687V

【作者名】

ひなき つぐり

【あらすじ】

気が付いたら21世紀の砂漠の戦場から、肌寒い森へ飛ばされました。出会ったのは、史実とはかなりかけ離れた伊達政宗でした。つて、なんで私子供の姿なの!？

戦国BASARAの世界で人とは違う力を持った主人公が、伊達軍メインの面子に囲まれて成長する話・・・になるはずです。タブン。

10/3 第一部完結しました。 10/10 小話は、竜の華

は朧月に微睡む へ移設しました。

第二部スタートに向けて、キーワード一部変更しました

1 出会い（前書き）

十ウン年ぶりに二次小説を書きます。読みにくい等あるかと思いますが、寛大なお心で読んで頂けたらと思います。

なお、作者は英語が大の苦手であります。英文は滅茶苦茶かと思われませんが、雰囲気ではそこはスルーしていただけたら、嬉しいですよ（笑）翻訳機能に頼りきっております（笑）

1 出会い

20xx年。中東某所

「It is confirmed that the battle field is point XX01. (ポイントXX01にて交戦確認!)」
「Diana is made to go there. (ディアーナを向かわせる。)」

報告を受けた男は、目の前の通信機を手にした。

「Diana must go to point xx01. (ディアーナ、ポイントXX01に向かえ。)」

ガーピーと雑音の中、抑揚の無い女の声が了承を伝えてきた。

戦況はあまり芳しく無い。

特殊部隊でもトップクラスの腕を持つディアーナならば、少しはこの状況を打開できるだろうか。

そんなことを思いながら、通信機を元に戻した時、モニターを見つめていた部下が悲鳴を上げた。

「Commander! It was point XX01 and there was an explosion! The damage situation is uncertain! Communication were broken! (隊長! XX01にて、爆発! 当方の被害状況不明! 通信が途絶えました!)」

「What!? How did Diana become i

t!?(なんだと!?ディアーナはどうした!?)」

「Diana cannot be communicated!

(ディアーナも通信不能!)」

「The enemy force is in the state of annihilation! (敵軍も壊滅状態!)」

「What? The enemy force? It is

absorbed what!? (何!? 敵軍もだど? 何がお

こっている!?)」

次々に舞い込む劣勢を報じる情報に、男は頭を抱えた。

硝煙と砂埃と、汗と血の臭いが充満する戦場が私にとっての日常。わずかな判断ミスが、自軍の隙を生み死に至る世界で生きていた私は、大抵のことは動揺せずに対処する自信はあった。

「What happened?(なにがあつた?)」

意識を取り戻すと同時に、状況確認のために周りを見回す。

中東の砂漠にいたはず。

なのに、今日の前に広がるのは若葉の茂る木々。そして肌寒い。

オアシスか？先程の爆発でオアシスまで吹き飛ばされたのか？
しかし、オアシスが肌寒いというのはおかしい。
理解不能な状況に、心臓がきゅっと縮む思いがした。
それでも自分の状況を調べるために、わざとゆっくりと体を見下ろし、そして今度こそ悲鳴を上げた。

「Why do it become a child!？」（なんで子供!?!）

何かの破片が掠ったらしく、右太腿と、左手脇腹を負傷していたが、そんなことは日常茶飯事だからどうでもいい。
動けないほどの重傷でもないし、私は人より治癒が早い。

問題なのは、体そのもの。

見慣れた自分のそれよりも、はるかに小さい手。
短い足。

低い視線は、身長が縮んだ事を示している。

着ていた砂色の戦闘服がぶかぶかで、下手をすれば脱げてしまう。

「It became it so why what!？」（なにがどうしてこうなった!?!）

ああ、言葉すらもうまく話せない！

どうすべきかわからずに、その場で座り込んでいると、大地が振動しているのに気がついた。

何かが来る。

敵か？味方か？

座り込んでいては、いざという時に動けない。

ズボンは諦めて、上着の腕を捲り上げて手を出し、長すぎる裾を膝の位置までくるようにポケットにしまっていたロープをベルト代わりにして調整。

よし、これでなんとかいけるか？

次は身を隠す場所だが。

木の上に隠れるしかないかと、登りやすそうな木を見つけて登ろうと手をかけるが、子供の体になったせいaka力が入らない。

これでは木に登れないじゃないか。

若干焦り始めた時、地響きかわすぐ近くまできた。

こうなったら、木の裏に隠れるしかない！

登るのを諦めて少しでも奥に隠れるために身を翻そうとした時、先頭を走る男とバッチリ目が合ってしまった。

しまった！！

慌てて逃げようとする、右足に激痛が走り、バランスを崩して今度は左脇腹に痛みが走って息が詰った。

そのままその場に座り込んで、激痛をやり過ごすが、落ち着く頃には当然私の存在は男たちに発見されていた。

「なんでこんなところにガキがいるんだ？」

「この辺りには人は住んでいないはずですが……。」

戸惑う様子の男たちは、日本語を話している。
日本の軍か？それにしても、恰好が……。

見上げれば、馬に乗った日本のサムライの様な恰好の男たちが、
訝しげに私を見下ろしていた。

サムライの様な、というのは、鎧や刀をさしている辺りはサムライ
っぽいのだが、リーゼントに、モヒカン、スキンヘッドなど、私が
以前学んだ日本のサムライとはかけ離れたヘアースタイルの男があ
ちこちに見えたのだ。

なんだ？新興勢力か？

こんな奴ら、見たことも聞いたこともないぞ？

「Is there a samurai it is what
? (なんでサムライがいるの?)」

呆然と呟いた言葉を聞き取った隻眼の男が一瞬驚いた後、喜色を浮
かべた。

「Hey, you! Can you speak English
? (おまえ、南蛮語が話せるのか?)」

うわ、英語まで話すサムライなんて聞いたことない。

何が起こってるんだ？ここはどこ？こいつ等何者!?

ある村で何やら不穏な動きがあると黒脛巾組からの報告が上がり、
がつつり釘を刺してきた帰り道で、木にしがみついている五つか六
つくらいのガキを見つけた。

春が来たばかりのまだ薄ら寒い山の中で、ガキ一人で何をしている
んだ？

ある程度近づくと、こちらを振り返ったガキと目が合った。

そして、慌てたように動き出したとたん、躓いたのかその場につず
くまった。

「なんでこんなところにガキがいるんだ？」

「この辺りには人は住んでいないはずですが……。」

馬に跨ったままガキを見下ろし、誰にともなく尋ねれば、背後に
控えた小十郎が戸惑ったように答えた。

困むオレらを見回して、ガキも戸惑いの表情を浮かべる。

まじまじ観察していると、ガキが口を動かした。

「Is there a samurai it is what

？（なんでサムライがいるの？）「

は？今こいつ、南蛮語を話したか？

おもしれえ！こんなガキの癖に、流暢に発音してやがる。

「Hey, you! Can you speak English
?（おまえ、南蛮語が話せるのか？）「

丸い目がさらに丸くなった。

おいおい、目が落ちそうだぜ？

馬を下りて、うずくまったまま動かないガキの側に行くと、血臭がした。

「怪我したのか？」

様子を見ようと手を伸ばすと、ガキはビクツと震えて身を硬くした。

「Ah、傷を見るだけだ。怯えんな。」

「あなた、てきじゃないの？」

「敵？お前、襲われていたのか？」

「ううん。てきのところに行くところとちゆうで、ばくはつにあったの。」

「What? 爆発？」

爆発って、お前！

慌ててガキの着ている妙な着物を捲りあげれば、右太腿に酷い裂傷があった。

まだ付いたばかりの傷のようで、血が止まってねえ。
背後で様子を伺っていた小十郎が息を飲み、慌てて後方にいる奴に
布と薬を持ってくるように命じた。

「痛くないのか？」

「だいじょうぶ。なれてる。」

「こんなもんに慣れるんじゃないよ。ほら、治療するから、これを
脱がすぞ？」

小十郎がガキに一応の断りを入れて、着物を脱がせると、ガキは大
人しく従った。

「っ！腹もか。」

「ないぞうまではいつてないから、ちがとまればもんだいないよ。」

おいおいおいおい、どんなガキなんだよ、こいつは。

大の大人でも泣き喚くような大怪我なのに、泣くどころか悲鳴一つ
上げやしねえ。

「ねえ、ここはどこ？あなたたち、さむらいに見えるけど、なんで
そんなかつこうをしているの？」

貧血なのか青ざめた顔色のガキが、オレや後ろの連中を見ながら恐
る恐る聞いてきた。

「お前、ここがどこだか分かってなかったのか？ここは奥州だ。オ
レはその奥州筆頭、伊達政宗だ。You see？」

「おうしゅう？・・・え？・・・おうしゅう？
きよとんとした後、強張って、そして愕然となった。

「おうしゅうって、にほんのむかしのちほうのなまえだったよね・・・
。。そして、さむらい・・・。」

「おい？大丈夫か？」

真つ青になつてブツブツ言い出したガキは、声をかけるとがばつ！と勢い良く顔を上げた。

「いまなんねん!？」

「あ？天正13年だろうが。」

「て、てんしょう……。ああ、だから、さむらい。でも、リーゼンとはないよ……。うん。ないない。」

治療が終わつた小十郎も気味の悪いものを見る目でガキを見下ろしていたが、そんなことに気づくこともなくひたすらぶつぶつ何事か言つていた。

「そうか。なるほど。」

「何一人で納得してんだ？」

「うん。わたし、なんでかしらないけど、ここにとばされてきたんだ。」

「What？」

「え？あ、なんでもないよ。じぶんのたちいちをりかいしただけ。」

こいつ、年齢の割には小難しい単語を使って話しやがるな。南蛮語を話す辺りも、ただもんじゃねえ感じだ。

「お前、どこから来たんだ？」

治療を終えた小十郎が、服を着せてやりながら問えば、ガキはうんと首をかしげた。

「どこといわれても……。」

「帰る家はあるのか？」

「ない。とりあえずきょうはこのあたりでのじゅく。」

「このあたりって、正気か？」

「だいじょうぶ、サバイバルはなれてるよ。」

けるっとした顔で答えると、ガキは立ち上がって小十郎に頭を下げた。

「てあてしてくれてありがとうございます。んじゃ、そろそろいくな。」

「あ、ああ……。」

小十郎、困ったような顔でこっちを見んじゃねえよ。

しかたねえ。オレもコイツには並々ならぬ興味があるからな。

立ち去ろうとするガキを問答無用で抱き上げそのまま馬に飛び乗った。

「え？ええええええええ！？」

「怪我が治るまで、オレのところに来い。You see？」

「で、でも……！」

「でもクソもねえ。オレが決めた。お前に拒否権はねえ。」

「いいの？」

「同じことを言わせんな。それより、お前名前は？What is your name？」

「つき。」

「つき？」

「そづ。moon」

ああ、月か。

「つき、しっかりと掴まってるよ？Are you ready？」

「OK」

きゅっと小さな手でオレの腰にしがみつくつきを抱きしめ、馬の腹を蹴った

「ちよ、て、てばなしうんでんあぶないいいいいいい……！」

聞こえねえな！

1 出会い（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございました。

2 お世話になります

戦場で数々の危険をおかし、尚且つ危機一髪的な目にも沢山遭遇してきたけど、馬の手放し操縦はそれ以上の恐怖だった。もう、政宗の馬には乗らない。

手放し操縦、ダメ、ゼツタイ。

貧血と荒い運転でぐったりな私を、手当をしてくれた男が慌てて抱き上げながら、政宗に小言を言っている。そうだー、もっと言っただれー。

連れてこられたのは、こじんまりとした感じの城だった。小田原城を昔一度だけ見たことがあるけど、それよりはかなり低い。城つてもっと高くてきらびやかなイメージだったけど、実際はそんなでもなかったのか。

そんな感想を抱きつつ部屋に通されると、女の人が先に知らせを受けていたのか待ち構えていた。

Wow、日本美人って感じの綺麗な人だ。こここのところ、アメリカやら中東の濃い顔ばかり見ていたから、和風美人に少し尻込みをしてしまう。

子供の姿になってから、どうも私らしくないというか、自分の感情をコントロールできなくなっている。

汚れを拭き取ってもらって、着物を着せてもらうと、また別の部屋に連れて行かれた。

「お連れしました。」

襖越しに連れてきてくれた女の人がいうと、中から政宗の声で中に入る様に言われた。

「ご苦労だったな、喜多。」

中に入ると、着物姿になった政宗と、さっきの男が座っていた。

男の人の横に私が座ると、政宗はわずかに首を傾けた。

「An?なんで、女の格好なんかさせてんだ？」

政宗、今心底不思議そうに聞いたね。

まあ、この時代ショートヘアの女の子はいないだろうから、勘違いされても仕方がないけど、さっき思いつきり真っ裸の上半身を見られたんだけどなあ。

子供だから、胸見ただけじゃわかんないか。

この女の人は何も聞かすともわかったんだけどなあ。

「殿、もつと見る目を養いなさいませ。」

ため息混じりに女の人が見えれば。

「おい、小十郎、お前わかったか？」

若干罰が悪そうに頭を掻いた政宗が、隣に座ってた男の人に矛先を振った。

「もちろんですとも。」

お兄さん、目が泳いでるよ。

私を介抱してくれた男の人は片倉 小十郎と名乗り、着物を着せてくれた女の人が喜多さんといって、小十郎の異母姉であり、政宗の乳母なんだってことを教えてくれた。そしてここは米沢城で、政宗はここで一番偉い人ってことも教えてくれた。

多分、隻眼の伊達政宗ってなると、あの伊達政宗って間違いないんだろうけど、あのリーゼントやモヒカンが戦国時代の末期であってもあり得ない。

って、ことは、ここは、過去の時代ってわけでも無さそう。異世界？そんな非現実な話、あり得ない。

あり得ないけど、私は子供の姿に戻ってて、ここにいます。もしかしたら、実際の私はあの爆発に巻き込まれて、意識不明の重体とかなのかもしれない。ま、どちらでも、今起こってることをどうにか出来るわけでもない。なるようになるしかないか。

「Rather!（それよりも!）ツキ、お前のことを教える。」
喜多さんに非難の眼差しを向けられて、タジタジだった政宗が、それを振り切るように荒っぽく言った。
誤魔化したな。まあ、いいや。

「わたしはここではない、べつのせかい、べつのくから、どうい
うげんいんかはわからないけどここにきた。

ここにくるちよくぜんは、さばくでてきところせんちゅうのなかま
をたすけるために、はしっていたんだけど、じらいかばくげきは
わからないけど、とにかくはつにまきこまれたの。

で、きがついたら、あのもりにいたの。」

別に隠したり誤魔化したりする必要性は感じなかったし、追い出
されてもなんとかなると思っただし、あつたままを正直に話した。

政宗はしばらく何か考えた後、胡坐を崩して立て膝で頼杖をつい
て私を見下ろした。

「南蛮から来たってことなのか？」

「No」

「お前がいた場所に戻ることはできるのか？」

「たぶん、むり。」

「お前の世界では。その歳で戦にでるのか？」

「そういうこともいる。わたしは10さいのころからだけど。」

「What? ツキはまだ6つにもならねえ位じゃねえか。」

「ああ、みためはそうなっちゃったんだけど、なかみは17さいだ
よ。」

ん? あれ? もしかして、ここだと年齢は数え年でカウントするの
か?

「ちよつときくけど、うまれたばかりのあかんぼつって、0さい?
1さい?」

「1歳だろつが。なんだ0歳って。」

「わたしのせかいでは、うまれたときは0さい。まるまるいちねん

たつたら1さいってかぞえるの。って、ことは、こちらだと、わたし19さいだ。すごい、いつきにとしをとったきぶんだ。」

ちよつとまで、6歳に見えるってことは、私見た目は4歳って事か？

そりゃ、しゃべるのも体を動かすことも難しいはずだ。

参ったな。4歳にサバイバル生活できるかな。知識はあっても、体力とかがあやしい。

なんて考えているうちに、政宗がひよいと私を抱き上げた。

「19って、その形でオレと同じ歳か？」

にやにや笑っていた。

信じてないな。・・・まあ、逆の立場だったら私も信じないが。

「ま、ツキが行く当てもないことはわかった。しばらくここにいろ。その傷が治ったら、里親探しもしてやる。喜多、ツキの面倒を見てやれ。小十郎いいな？」

「受け賜りましてございます。」

「承知。」

二人が手を付いて頭を下げると、政宗は満足げに頷いた。

どうやら、私はしばらくここに置いて貰えるらしい。

「ありがとう、まさむね・・・さま？」

なんて呼んだら良いのかいまいち分からなくて、間があいた挙句、疑問形になった。

そもそも、英語生活が長かったから、敬語とか敬称とか苦手なんだよ。

手招きをされたので、立ち上がって政宗の前に立つと、膝の上に座らされた。

「政宗でいい。お前はオレの客だからな。」

「うん。」

抱っこされた状態で、こっくり頷けば、大きな手がワシワシと頭を撫で回した。

頭がもげる！

ここに来て一番最初に通された部屋が、私の部屋となった。障子を開ければ、見事な日本庭園が見える。

食事も終わり、喜多さんが布団を敷いてくれて、おやすみなさい。・・・はいよ。まだ日が沈んでそれほど時間がたってないよ。完全に子供だと思われてるんだな。

縁側に出て、傷を庇いながらゆっくり膝を抱えて座った。

細い三日月が西の空に傾き始めている。

満月にはまだ日数がかかるか・・・。

それでも、月の光を体に帯びる事によって、怪我をしている部分の痛みが和らぐのを感じた。

私は月の一族の最後の生き残り。
両親も兄も殺された。

もう月の名を継ぐのは私一人。

異形の力は、正にも負にもなる。
家族は決してこの力を、人を傷つけることには使つなと教えてきたけれど。

両手を月に透かすように天に向ける。
血に染まった両手。

私は家族とは違う道を選んだ。
もう戻ることはできない。

背後で何者かがこちらを伺っている気配がする。

戦国なら、忍者かな。
なんて思いつつも、その場から動かずにじっと月を見上げていると、
気配が動いた。

「春とはいえ、まだ冷える。いつまでもそんなところにいたら風邪を引くぞ？」

ゆっくり振り返れば、藍染の着物を着た政宗が部屋の入り口で立っていた。

「うん。」

頷きはしたものの、部屋に戻る気にはなれず、再び月に視線を戻した。

「何を見てる？」

私の横に腰を下ろして、胡坐をかくと、政宗はひょいと私を抱き上げて足の上に乗せた。

「Oh、ずいぶん冷えてやがるな。」

傷を思つてか、ふわりと軽く腕が回されて、私も抵抗せずに背中を政宗に預ける。

「まさむねはあつたかいね。」

「……そうか。」

何か私に用事があつたのかと思つたのに、政宗はしばらく黙つたまま、私と一緒に月を見上げていた。

背中の温もりと体に伝わる鼓動に、だんだん瞼が重くなつてきて、やがて意識がとぎれた。

初めての場所でツキが心細い思いをしていなければ良いと様子を見に来て見れば、縁側でぼーっと月を見上げて座っていた。

その小さな体を淡い光が包んでいて、ツキが手を天に向ければ尚一層光が増した。

普通の子供ではないと思ったが、もしかしてこいつも……。

「春とはいえ、まだ冷える。いつまでもそんなところにいたら風邪を引くぞ?」

声をかければ、特に驚いた様子もなくゆつくりとこちらを振り返った。

幼い顔には表情がなく、まるで人形のような。

「うん。」

こくりと頷いたが、その場から動く気はないらしく、再び視線は外に向けられた。

「何を見てる?」

言いながら隣に座り、胡坐をかいた足の上にツキを乗せてやれば、いつからここにいたのか、小さな体はすっかり冷え込んでいた。

「Oh、ずいぶん冷えてやがるな。」

まだ傷も痛むだろう。

なるべく傷に当たらないように抱きしめてやれば、大人しくもたれかかってきた。

本当に小さな体だな。

この城にコイツくらいのがきはさすがにいないから比較はできないが、かなり小さいほうだろう。

「まさむねはあつたかいね。」

独り言のように呟かれた言葉に、一瞬どう言葉を返そうか、悩ん

だ。

「……………そうか。」

結局それだけ言うと、会話は途切れた。

昔、まだオレが梵天丸と呼ばれていた頃、小十郎にこうしてもらっていたことがあったな。

言葉もなく、ただ二人で月を眺めていたことが。

あの頃自分が感じていたはずの感情を思い出そうとしたが、もう思い出せない。

いろいろなことがあって、必死に生きてきた日々を埋もれてしまったんだろう。

それを寂しいとか悲しいとか思うほどガキじゃねえが、たまにはこうして思い出そうとするのも悪かねえな。

腕の中の小さな体が重くなったような気がして覗き込めば、いつの間にか寝ていた。

起こさないようにそっと持ち上げて、布団に寝かせた。

「Good night ツキ。」

2 お世話になります（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございました。

3 人形の夢（前書き）

流血、暴力描写を含みます。苦手な方は回避願います。
少し短めです。

3 人形の夢

人の気配を感じて、目が覚めた。

体は動かさず、目だけで辺りの状況を観察する。

見慣れない天井に、見慣れない部屋。

私なんでここにいるんだっけ？

覚醒しきれない頭のまま、人の気配が近づいてくる襖を見つめた。

すつと襖が動いた瞬間、布団を跳ね除けて起き上がろうとしたら、

脇腹に痛みが走り息が詰まった。

「ツキ？・・・おい！大丈夫か!？」

痛みあまり、蹲ったまま悶絶している私に、慌てて走りよってきた小十郎を見て、ようやく昨日の出来事を思い出した。

「っ、いったあ・・・。きずのことわすれてた。」

昨夜月光浴で痛みは半減したものの、傷自体が癒えている訳ではなかった。

「おい、無茶はするな。」

ゆっくりと布団に戻されて、楽になった体に知らずため息が漏れた。

「こじゆるう、ありがとう。」

「いや。それより、顔が赤いようだが、熱でも出たか？」

そう言いながら伸ばされる手に、一瞬緊張が走った。

小十郎もそれに気が付いたのか、手がぴくっとなったけど、そのまま私の額に載せた。

「少し高いな。傷が熱を持ち始めたのかもしれねえ。今日は一日ここで養生している。いいな？」

「うん・・・。ごめんね？」

面倒をかけてごめんなさい。

良い人だと分かっているのに、警戒しちゃってごめんなさい。

二重の意味を込めて言えば、小十郎は少しだけ笑った。

うわー・・・強面のお兄さんの微笑って破壊力すごいわー・・・。
熱がまた少し上がったような気がするよ。

「後で姉上に朝餉を運んでもらうから、それまでもう少し寝ている。

」

「うん。」

ゆっくりと頭を撫でられて、私は目を閉じた。

ごつい手の割に、撫で方が優しくして気持ちいいな
子供がいるのかな。慣れてる感じがする。

二、三回撫でた後、小十郎は音もなく立ち上がって部屋を出て行った。

それにしても、昨日ある程度回復したと思ったのに、熱が出るなんて。

治癒が遅い。

元の世界なら、三日月でも傷がふさがって多少の痛みが残る程度だったのに。

包帯をとって見ないとわからないけど、多分まだ傷は塞がってなさそうだ。

子供の姿だからか？

それとも、世界が変わったから？

まだ小さかった頃は、確かに癒しの力はそれほどじゃなかった。

転んで怪我をしても、他の子よりは少し治りが早いって程度だ。ちやんと力をコントロールして自分のものにできたのは、いつ頃だったっけ。

浮かんだのは、1人の男。

私に力の使い方を教え、そして、家族を殺し、戦場で何度か戦った男。

もう、会うこともないだろう。

悔しく憎く思う気持ちの片隅に、解放されたような安堵感もある。

薄情、なのかな。

疲れた、なんて考えたりするのは。

うつうつとしては、目が覚め、すこし起きてはまたうつうつと……。その間に、いくつもの夢を見た。良い夢も、悲しい夢も、次々と流れるように。

大きな月が昇る夢を見た。

私はその月の下で、無心に舞を舞っている。

扇の要に結ばれた銀色の鈴がリンリンと揺れ動き、静かな夜に響いた。

その隣に、母が、父が、兄が現れ、共に舞う。

一族に伝わる、秘伝の舞。

蒼い月の昇る晩に、次代の宗主を選ぶための儀式。

やがて、月は小さな光と変わり、私の目の前に下りてきた。手にしていた扇で受け止めれば、何の変哲もなかった白い扇は、冷たい青い光を纏った鉄扇へと変化した。

母はそれを見届けると、満足げに笑った。
父も兄も一緒に笑った。
扇はずしりと重く、そして冷たかったが、とても美しかった。

月明かりに照らされていた辺りが、一瞬にして暗闇に覆われる。

「やはりお前が、今代の蒼月そうげつとなったのか。」
暗い愉悦に歪んだ顔が突然現れた。

(いやだ……。この先は見たくない……。)

「お前に決まったのなら、もう他はいらないよ。」
にいつと三日月のように細められた目は、狂喜しか宿してなかった。

叫ぶ間もなかった。

まず父が首の動脈を手に使っていたナイフで深くえぐられ、血を噴出して倒れた。

鉄の匂いをした、暖かな赤いものが私の顔に飛んできた。

兄は眉間を銃で撃たれ、後ろに倒れた。

母を助けようと、飛びつこうとしたとき、後ろから羽交い絞めにされた。

「お前は見ていなさい。」

耳元で囁く声は、いつそ優しいくらいだった。

そして、母も銃で頭を撃ち抜かれて、絶命した。

「くくくつ、これでいい。これで、お前は僕と同じところに堕ちて来る。」

男は父の血に濡れた手で私の頬に触れ、嬉しくて堪らないというような表情をした。

「待っているよ？僕の蒼月。僕を殺しにおいで？」

なぜ？どうして？

あんなに優しくかったのに。

あんなに大切にしてくれていたのに。

信じていたのに。

大好きだったのに。

ゆるさない。地の果てまでも追いかけて、追い詰めて、殺してやる。

その為ならば、なんだってやってやる。

私は、朔夜^{さくや}お前を絶対に許さない。

目が覚めたとき、辺りはすでに夜だった。

熱は下がったようで、昼間だった体がすっかり元に戻っていた。月明かりが差し込む場所に寝かされていたようで、傷ももう痛まなかった。

寝間着を脱いで、右の足とお腹に巻かれた包帯を外せば、ピンク色の新しい肉で傷が塞がれていて、もう動いても問題はなさそうだ。

寝間着をもう一度着なおして、試しにストレッチを試してみるが、痛くないし傷も開かない。

障子を開けて、昨夜と同じように縁側に出て月を見上げれば、昨日より太くなった三日月が昇っていた。

朔夜は今頃私が消えたことをどう思っているんだろうか。

XX01ポイントで交戦中の敵兵の中に、朔夜もいたはず。

きつと私が巻き込まれた爆発を見ただろう。

もう、私をあゝの狂気の目で見ることはない。

私の中に、私の母を求める目で。

朔夜が母に思いを寄せていたことは、前から薄々感じていた。母を愛し、母が愛した父を憎み。

私の師として家族と共に過ごしてきた日々で、朔夜は何を思っていたのだろう。

いつから、私を母に重ねて見ていたのか。

優しくかった。温かかった。

朔夜がとても好きだった。

なのに。あの夜に一瞬で全ては消えてなくなった。

憎んだ。殺してやると、誓った。

朔夜が望んだとおり、裏の世界に身を墮とし、死に物狂いで力を見につけた。

朔夜を殺すために、関係のない人をたくさん殺した。家族のためではない。

裏切られた自分が、朔夜を許せないと、叫んでいた。

7年。

全てを捨てて駆けてきた。

こんな結末は想像もしていなかった。

私か朔夜のどちらかが、もしくは互いが、自らの血に染まって息絶えるまで続くと思っていた。

私から憎しみを取ったら何も残らない。

糸の切れた操り人形になったみたいだ。

「・・・・・・・・つ。」

見上げていた月が滲んで、涙が溢れた。

ぼたり、ぼたりと頬をつたって落ちる滴が寝間着を濡らすのを、どこか他人事のように見下ろした。

3 人形の夢（後書き）

お読みいただきまして、ありがとうございました。

4 告白

ツキが熱を出したと聞いて、執務の合間に何度か部屋を訪れてみたが、いずれも眠っていて喜多に追い払われた。

Shit! 喜多はいつまでもオレをガキ扱いしやがる。

今日の執務も終わり、これならば文句はねえだと、小十郎を伴って部屋に来て見れば、喜多の姿はなかった。

おまけに、ツキもいねえ!

二人で風呂にでも行ったのか?

「政宗様、庭に……。」

小十郎がわずかに開いていた障子を指した。

「また月見でもしてるのか?」

「また、とは?」

「昨夜も縁側に座り込んでやがった。」

障子を開けてツキの姿を探したが、縁側にはいない。

「どこいった?」

暗い庭で気配を探れば、隅に植えられた椿の辺りにいるようだ。

「小十郎、体が温まる様なもんをなんか用意して来い。」

「はっ。」

小十郎が部屋を出て行くのを見送ってから、庭に下りてまっすぐツキのいる場所に向かった。

「Hey、熱出してるくせに、こんなところにいるんじゃねえよ。」

膝を抱えて蹲ったまま動かないツキを構わず抱き上げれば、泣いているようだった。

「What's up? (どうした?)」

ぼろぼろ零れる涙を拭ってやりながら聞いたが、ツキはふるふる首を横に振るばかりだ。
相当前から泣いていたのだろう。
着ている寝間着の袖はびしょびしょに濡れている。

縁側まで戻って、ツキを抱いたまま搔卷で包んでやった。

「家に帰りたいのか？」

ふるふる

「どこかが痛むのか？」

ふるふる

「腹減ったのか？」

ふるふる

「怖い夢でもみたのか？」

こ………ふるふる。

頷きかけたが、やはり横に振った。

「話す気にはなれねえか？」

.....

迷っているようだ。

しばらく視線があちこちを彷徨っていたが、きゅっと目を閉じ、そして開いてまっすぐ俺の左目を見た。

ようやく涙はとまったが、真っ赤に腫れた目元が痛々しい。

「わたしを、ここにねかせたのはまさむね？」

縁側に程近い場所に敷かれた布団を指差して、ツキが尋ねた。

その質問に、オレは自分の考えが正しかったことを感じた。

「ああ。」

「そっか.....」

ツキは一つ頷くと、オレの膝から下りて、搔卷を外した。

そして、廊下に通じる襖を見て

「こじゅろう、はいつて？」

廊下で成り行きを窺っていた小十郎の存在に気が付いていたのか。

一瞬の間が開いて、険しい表情の小十郎が入ってきた。

「どうして俺がいるのがわかった？」

「それも、はなす。」

まずは冷えた体を温めると、小十郎が持ってきたお茶を政宗が私の前に置いた。

「ありがとう」

湯気の昇る湯呑みを両手で持って、一口飲んだ。

口に含んだ瞬間、甘みが広がった。でも、後味はさっぱりとしていて、砂糖が入られているわけでもないようだった。

「おちやなのにあまい……」

「甘茶だ。」

驚いてお茶を観察していると、警戒心で刺々しかった小十郎が苦笑した。

廊下にいた小十郎の気配を感じたからただ呼んだだけだったのに、子供らしからぬ事をしたために警戒心を持たせてしまった。

私は決してこの人たちに害を加えるようなことはしないのに。

「で、話してくれるんだろう？」

湯呑みを空ける頃合いを見計らって、政宗が促した。

「うん。」

さて、どうやって説明しようかな……。

見せた方が早いかな。

「これを見て。」

寝間着の裾を払い右腿を見せた。

「・・・傷がふさがっている？」

小十郎が驚きの声を上げた。

あの生々しい傷を手当てしたのは小十郎で、たかが一日で治るようなものではないことを知っていた為の驚愕だ。

「たぶんまさむねはもうきがついているとおもうけど、わたしはぶつづのにんげんではないの。つきのちからをあやつることができるんだよ。このきずも、つきのひかりをあびてなおしたの。こじゆるう、ちよつとかたなをぬいてみて？」

「お、おう。」

脇に置いていた刀を戸惑いつつ小十郎が抜けば、私はためらいなくその刃を自らの腕に走らせた。

「な！！」

慌てて小十郎が刀を腕から放し、政宗が私の腕を取りあげて、止血をしようとした。

「だいじょうぶ。みてて。」

思ったよりも浅い傷を二人に見せた後、障子を開けて腕を月の光にさらした。

「こうしているだけで、きずがなおるの。」

そういつている間に、血が止まり、ゆっくりと傷が塞がってかさぶたがのこった。

「ほら。」

「So great! (すげえな)」

「おお！」

完治とは行かないまでも、塞がった傷を見せれば、二人は目を見開いて私の腕を見つめた。

「と、まあこれでわたしがふつうのにんげんではないってことは、わかってもらえたとおもってもいい？」

「確かに普通じゃねえな。すげえ力だな？」

え？なんでそんな羨望の眼差し？

ここは気味悪げに見るのがセオリーってもんじゃ？

政宗も警戒していたはずの小十郎も、すごいと感嘆はするものの、気味悪がる様子は一向に見られない。

見せた人は必ず恐怖を隠して、誤魔化し笑いを浮かべて逃げていったのに。

「なんて面してるんだよ。」

「え？」

苦笑している政宗に抱き上げられて、また膝の上に座らせられた。ちよ、いいの？小十郎がまだ警戒してるんじゃないの？

焦って小十郎を見れば、どういうわけか小十郎も同じように苦笑している。

「そんな泣きそうな面をするな。」

泣きそう？私が？

「ふたりはわたしのちからがきもちわるくないの？」

「なぜだ？この世界で癒しの力を持つ人間なんて聞いたことがねえ。お前しかできないことだ。Specialなことを誇りこそすれ、なぜ怯える？」

「みんなきもちわるいっていつの。」

こんな弱気なことを言うのは、いつ振りだろうか。

また滲む目尻を拭いながら、恐る恐る口を開いた。

「わたしのせかいでは、かがくがすべてで、こういうふたしかであ
やしげなことはいたんしされていたの。わたしはちゆのほかにもい
るいってきたから、いちぞくのなかでもきみわるがられた。」

「他には？」

「こつげきされたときに、かべをつくってぼうぎよするとか、あと
からだがうごきやすくなるようにきょうかしたりとか。」

外来語を使わずに説明するって難しい。

政宗たちも良く分からないって顔をしている。

これもやって見せたほうが早いな。でも、コントロールできるかな
。。。

「やってみせるね？できるかどうかはいまいち自信がないけど・・・
」

政宗の膝に座ったまま目を閉じて、手のひらを前に突き出してそこ
に意識を集中させる。

「Expand the shield・Level 10・(シ
ールド展開。レベル10。)」

そつと目を開けて見れば、青白い透明の膜が出来上がっていた。

おお、やればできる！

「これがぼうぎよのかべ。これくらいだととんでくるいしをはじく
くらいしかできないかな。こじゅうつ、なんかなげつけてみて。」

「いいのか？」

といつつも、やる気は満々ですね。

後ろで政宗もすげえと言いながら、シールドに触ろうと手を伸ば
した。

「さわっちゃだめ。しびれるよ?」

と、警告してるのに、聞かずに触れてOuch!と手を振っていた。かなり弱いものだから、びりって来るくらいだと思っけど、本気で張ったものに触れたら手が消滅しちゃうよ?

「だいじょうぶ?」

「ああ。このくらいなんでもねえ。しかし、おもしれえな。オレや小十郎の雷もこういうことができる戦略に幅が広がるかもな。」

一応声をかけてやれば、なんとも楽しそうな答えが返ってきた。

「?かみなり?」

「お前の話が終わったら見せてやるよ。この壁ももういい。」
言われて、シールドを解除。

弱いものとはいえ、張りっぱなしは結構疲れるんだよ。

でも、これで話はしやすくなった。

「このちからは、わたしのいちぞくにうけつがれていて、ははをそうしゅとしてひっそりといきていたんだ。わたしが10さいのときに、つぎのそうしゅとしてわたしがえらばれた。」

さきほど見た夢を思い出し、痛む心を手を握り締めることのできる。

「そのばで、わたしのししょうであり、いところもあるおとこに、わたしいがいすべてのいちぞくがころされた。」

握り締めた爪が手のひらに食い込んで、ぶつと皮膚を破る感触がした。

不思議なことに、言葉は淡々と紡がれて物音一つしない部屋に消えていった。

「わたしはそのおとこにふくしゅうをするとちかい、このちからをみがいた。そしてそのおとこをおいもとめて、たくさんのせんじょ

うをわたりあるいた。だから、けはいをよむくらいのことではでき
し、それいじょうのことまでできる。たくさんのひとをころしたし、
なんどもころされそうになった。」

「ツキ、もういい。」
政宗が静かに止めたけど、私はまだ話し尽してない。

「ここにくるちよくぜん、わたしはそのおとこがいるばしょにむか
っていた。こんどこそ、さしちがえてもころすつもりだった。なの
に……。ふくしゅうはもうかなわない……。」

「ツキ!」

いきなり握り締めていた手を大きな手がつかんだ。

小十郎だ。

無理やり手を開かれたので何かと試してみれば、血が流れてい
た。

「すまなかった。敵国の間者ではないのかとお前を疑った。」

「んーん。それがふつうだとおもう。こっちもふよついにけいかい
をさせちゃってごめんなさい。」

こちらも謝れば、政宗が優しく撫でた。

「これで、ツキのことはわかった。そうだろ。小十郎?」

「はつ。唯一つ、疑問に思うことがございます。」

「なに?」

「ツキは10歳の時に襲名をしたと言っていたな?」

「うん。いった。」

「Ah、そういえば、昨日オレと同じ歳だとかも言ってたな。」

「うん。それもいった。」

じいじいと二人が私を見下ろした。

やっと信じる気になったのか？

「Hey、ツキ、お前の世界はその形で成人なのか？」

「そんなばかなことあるわけないでしょ。わたしだって、・・・そりゃ、へいきんしんちようよりはたししょうちいさいけど、ちゃんとせいちょうしてたよ。」

うう、成長期に栄養剤中心の食生活だったせいかな、150センチしかない私は、政宗たちにとっては子供とそう変わらないかもしれないけど。

「わたしだって、なんでこんなにちぢんだのかしりたいよ。うごきにくいし、バランスもとりにくい。ちからだって、こどものときにもどつたみたいにコントロールがむずかしいし。」

「ま、焦らずとも、そのうち成長するだろ？少なくとも、元の姿になるまではここにいれば良い。」

政宗が言えば、小十郎も頷いた。

「ここにいろ。自分のやりたいことが見つかるまでは。」

「え？」

「やることがねえっていうなら、オレの相手をしろ。You see

e？」

「は？」

「政宗様は目を離すと、すぐふらつとどこかに行ってしまうわね。」

ツキが監視をしてくれるならば俺も仕事がかどる。」

「おい、小十郎！」

バツの悪い顔で小十郎に詰め寄る政宗。

・・・ここにいてもいいの？

あの時は、この時は、そういえばあの時に、と過去の問題行動を次々と暴露され、ほじくり返して小言を言われ、政宗のほづが子供に見える。

「……ふふっ」

二人のやり取りがおかしくて、笑いがこみ上げてきた。

「あはははは！まさむねのかんしにんむね。ふふっ、りょうかい。おうけします。」

驚いたように私を見ていた二人も、やがて嬉しそうに笑って私の頭を代わる代わるなでた。

暗い眼をして自分の過去を語り、全てが果たされることなく終わってしまったと嘆くツキ。

居場所がないならここにいれば良い。

やりたいことが見つからないなら、見つかるまでオレの側にいれば良い。

初めて見せた笑顔が、もうこれ以上曇ることのないように。

「さて、ツキだけに手の内を晒させたんじゃないからな。」

立ち上がった、ツキをつれて庭に下りる。
刀は一本でいいだろう。

渋い顔をしている小十郎の側を離れないようにツキに言い置いて、
抜刀する。

「HELL DRAGON!」

空に向けて放った一撃は、青い雷の竜となり、空に昇った。
よし。まあ、こんなもんだろ。

刀を納めてツキを見れば、小十郎の服の裾をつかんだまま、目を見
開いて硬直していた。

猫の子供みてえな反応だな。

「どうだ？オレも気持悪い、か？」

はじかれたように顔を上げて、それから首が飛んでいくんじゃねえ
かってくらいに横に振った。

「すごい！あんなことできるんだ!？」

「まあな。」

ここまで素直に賞賛されて、悪い気分はしねえ。

「どうやってやるの!？」

「まずは、「政宗様!」・・・小十郎がだめだとよ。」

やり方を教えようとしたとたん、鬼の形相をした小十郎がオレとツ
キの間に入った。

「危険なことは教えてはなりません!」

Oh、小十郎、お前はツキの父親かよ。

4 告白(後書き)

本日はここまでで。お付き合い頂きましてありがとうございます。

次話をうっかり抹殺してしまった(^o^) /

これから思い出しながら頑張って書き直します(涙)

5 最終兵器彼女(前書き)

すみません。タイトルこれしか浮かばなかったです

5 最終兵器彼女

戦国時代の朝は早い。

一日は日の出と共に始まって、太陽が沈むと終わる。

殿様な政宗はともかく、働いている人たちはもっと早くから起きて動き出している。

私の朝も当然のように早い。

ここに来て10日程がたち、最初は人の気配だけで飛び起きていたけれども、最近は起こされて目覚める。

今朝は喜多さんだ。

まだボーっとする頭を顔を洗うことで解消させ、着物に着替えさせてもらう。

本当は着物は着ようと思えば一人で着られるけれど、どこことなく楽しげに着付けてくれる喜多さんに任せている。

私のいた時代と、このことでは微妙に着こなし方も違うみたいだし。

「今日は天気がよくそうね。そろそろ桜が咲く頃かしら。」

「そうだね。このじだいもおはなみってするの?」

自分で寝ていた布団をしまいながら尋ねれば、喜多さんはいっぺりと笑って頷いた。

「しますよ。殿はそういう行事を大切にされる方ですから。」

「へえ。」

「さ、片付いたら朝餉にしましょう。そろそろ殿も鍛錬を終えられる頃合でしょうし。」

良くできましたと頭を撫でられて、それから手をつないで部屋を出た。

喜多さんはなんとなく私の母と同じにおいがするから、安心する。年齢もほとんど変わらなさそうだ。

優しいだけじゃなくて、時には政宗や小十郎すらも叱り飛ばす厳しさも見せるけれど、それも冷たくはないから好きだ。

他愛もない話をしながら廊下を歩いてしていると、前方からたくさん人の気配と、二つの荒々しい気配を感じた。それから、怒号と歓声が聞こえてきた。

「あら。今日の鍛錬は打ち合いでもしているのかしら？」

「え？ころしあいとかのまちがいじゃなくて？」

「いやだわ、ツキったら。」

クスクス笑っている場合じゃないよ、喜多さん。

結構すごい気だよ？

気配のするほうへ向かうと、広い庭に設けられた鍛錬場で、伊達軍の兵士のみんなが輪になっていた。

「ヒヤッハー！」

「ハア！！！」

みんなの輪の中心には、殺気紛いの荒々しい気を発している、政宗と小十郎。

目付きがもう、なんというか……。

「ねえ、きたさん、あのふたりけんかしてるとかじゃないんだよね？」

「もちろんですよ。鍛錬です。」

「えー……っと、なんか青く帯電しているようにも見えるんだけど……。」

「鍛錬です。」

「……………へえ……………」

あ、兵士の一人が巻き添え食らって吹っ飛んだ。

衝撃派を食らったスキンヘッドが、モヒカンやリーゼントに担がれて運ばれていった。

「喜多様、お嬢、おはようございます！」

縁側で立っていた私たちに気が付いた兵士の一人が、輪の中から抜けてさわやかな笑顔を浮かべて近寄ってきた。

背景と表情が合ってなさすぎだよ。

「おはようございます。ねえ、あれってどうしたの？」

「え？筆頭と片倉様ですか？いつもの鍛錬ですよ。」

マジか。マジで言ってるのか？

兵士の目を見ても、洗脳されているってことはなさそうだ。

私たちに気が付いてない政宗と小十郎は、ますますエスカレートして放電量を高め、ここにまで静電気が飛んできている。

肉眼では追いつけないほどの刃先のスピードって、どうなってるのさ。

「Enhanced dynamic visual acuity・（動体視力強化）」

小声で呟くと、目がほんのりと暖かくなって、見えなかった刃先が

良く見えるようになった。

二人ともすごい速さで刀を操ってる。

私が出うのもアレだけど、人の域を超えてると思うよ。

飛んでくる放電は、二人の刀がぶつかり合って弾き飛ばされているんだね。

うん。なんて迷惑なんだ。

「……きたさん。あれ、そろそろとめないとまずくないですか？」

ちらりと喜多さんを見上げれば、菩薩のような優しい表情をして私を見下ろした。

「ツキ、アレを誰が止められるというのですか？」

のおう！！悟りを開いてる！！！！

喜多さん以外の誰に、あの二人を止めることができるか！？

伊達軍の最終兵器リーサルウェポンと噂される喜多さんが悟りをという現実逃避をしている中、政宗と小十郎はいったん距離を開けて、止まった。

終わったの？

そうほつとしかけた時、政宗の構えが変わった。

対する小十郎も政宗の動きを見て、刀を顔の横で構えた。

ぎゃー！！あれは絶対大技だ！！

「喜多様、お嬢！ここは危ねえ！奥へ逃げてくだせえ！」
側にいた兵士も気が付いたようで、慌てて私と喜多さんに奥に行くように叫んだ。

仕方ない、もし怪我をしたら、反省文100枚書かせてやる！！

「Expand the shield・Level 100！！
(シールド展開。レベル100)」

なるべく大きな盾を思い描きながら、両手を前に出す。

男が私たちの前に立ち、自ら壁になってくれようとしたその後ろに、シールドを展開。

「HELL DRAGON！！」

「鳴神！！」

ふざけんなああああ！！こんな今の私のシールドで守れるか！！

ぶつかり合った雷同士が弾け飛び、私たちのほうまで飛んできた。余波にもかかわらず、かなり重い衝撃が両手にかかった。

歯を食いしばって何とか耐え切ったあと、シールドは自然に消滅。二人はどうなったと、砂煙の向こう側を目を凝らして見れば、無傷で立ってやがりましたよ。

しかも、まだ構えを解いてないし、更なる技を仕掛けようとかして

ないですよね？

「きたさん、あぶないからさがってたほうがいいよ。」

「ツキ？いまのは？」

戸惑う喜多さんを見無視して庭に下りると、コキコキ首を鳴らして軽く準備運動。
よし。

「Enhanced body・Strengthen the instantaneous force・(肉体強化、瞬発力特化)」

青い光が体を包み、纏わり付くようにぴったりと寄り添った。
なんとかいけそうだ。

こちらにまったく気が付いてない二人は、次の技を出そうと姿勢をわずかに低くした。

「Ready・・・」

私も身構えてぐつと体を低くする。

「はああああ！！」

「うおおおおおお！！」

どこの格闘マンガの主人公だよと、突っ込みを入れたくなるような雄叫びを上げて、二人は刀を構えたまま走り出した。

一気に終わらせてやる！

「GO!!」

弾丸のごとく飛び出した私は、ちょうど二人がぶつかる地点に飛び込んだ。

ようやく二人は私の存在に気が付いたようだけど、技を出しかけていた体が、そう急に止まるものではない。

「なっ！」

「あぶねえ！」

驚愕に目を見開く二人が、まるでスローモーションのように見えた。

瞬発力と筋力を上げたおかげで、二人の動きを楽に追うことができる。

まずは刀を握る二人の手を払って、刀を弾き飛ばした。

そのまま、右足を振り上げて小十郎の脇腹を上段回し蹴り。

着地したその足で、飛び上がって、左足で政宗の首を目掛けて中段回し蹴り。

小十郎には綺麗に決まったけど、政宗はとっさに腕でガードして蹴りを防いだ。

「・・・ちっ。」

小十郎が脇腹を抑えて膝をつき、政宗が腕で顔をガードし、私が華麗に着地したという図だけが、他の人の目に映った。完全ではないとはいえ、この私の攻撃を防ぐとは、やるな政宗。

強化を解除して、ふつと息を吐く。

倒れるほどではないけど、大技連発は前よりも堪えるなあ……。なんて考えながら立ち上がるうとしたとき。

「Hey 今何しやがった？」

ワシつと頭を大きな手がかんだ。

「いたい。ぼつりよくはんたい。」

頭を掴む手をペシペシ叩きながら振り返れば、凶悪な笑みを浮かべた政宗がこちらを見下ろしていた。

こわっ！！ただでさえ目付き悪いのに、その笑顔は禍々しさを更に強調してるね！

つか、う こ座りで目線合わせるのもやめて。

似合いすぎてるよ。

「からだをきょうかして、しゅんぱつりよくをあげて、ふたりのあいだにとびこんだんだよ。いったでしょ？からだのきのうをあげることができるとて。」

「そういえば、言ってたな。でもよ、あとちょっとで小十郎に勝つところだったのに、邪魔すんじゃないよ。」

頭から手を離して、面白くなさそうに拗ねる政宗。

これで良いのか？奥州筆頭……。

「あばれすぎでしょ？さつきスキンヘッドがはじきとばされてけがしてたよ？やるならわざなしで、ひとにめいわくかけないようになりなよ。」

「それじゃおもしろくねえだろ？」

「たのしけりやてしたがけがしてもいいのか？」

「あいつらそんなにヤワじゃねえよ。」

「はんせいしろよ！」

「……ツキ、おめえオレにだけ口が悪いんじゃえか？」

「きのせい。」

なんて、二人で話をしていると、横から冷たい空気が漂ってきた。政宗も気が付いたらしく、あん？と呟きながら横を見上げ、固まった。

私もつられて横を見上げ、同じく固まった。

そこにいたのは、ボコられた小十郎を片手でぶら下げた、満面の笑顔の喜多さんだった。

い、いつとくけど、私あそこまで小十郎をボロボロになんかしてないからね？

「殿、ツキ、お話があります。そこに正座なさい。」

怖い。政宗や小十郎さんなんてメじゃないくらい、怖すぎる！！。慌ててその場に正座する私と政宗。

それを見て、喜多さんはうんうんと頷いた。

あ、なんか許してもらえそう・・・？
そう思った瞬間。

「貴方たち、いい加減にきなさい!!」

カッと目を見開いて叫んだ喜多さんは、阿修羅そのものでした。

それから小一時間ほど、延々と喜多さんの説教は続いた。

途中で意識を取り戻した小十郎も加わって。

暴れまくっていた二人は、大人としての限度と常識を弁えろと懇々と説教され、止めただけなのに私まで危ないことをしたと一緒に怒られた。

ようやく説教から開放されて、遅い朝ごはんを食べる頃には、政宗も小十郎も口から魂が抜けかけていた。

喜多さんが最終兵器リーサルウェポンだという噂が本当だということを身をもって実感した朝でございました。

もう、喜多さんにだけは絶対逆らいませんとも。

5 最終兵器彼女（後書き）

お読み頂きまして、ありがとうございました。

6 歓迎会（前書き）

未成年の飲酒は法律で禁じられています。お酒は二十歳になってから！です。

6 歓迎会

朝から大騒ぎをして、喜多さんに私の力について説明をして、朝ごはん食べて、仕事をしている政宗が逃げ出さないように監視をして、ついっつかり昼寝していたら一緒に政宗まで添い寝してて小十郎に二人して小言を言われ、また仕事して、私だけまたうたた寝して、気が付いたら夕焼けだった。

「おおつ、こうしていちにちをふりかえると、なんのみのりもないよ……。」
ひとり残された政宗の部屋で呆然と赤く染まる空を眺めた。

喜多さんは私の力について少し驚いたものの、政宗や小十郎という能力者がいるせいか、あっさり納得してくれた。
傷の治りが早かったことも、それで納得したらしい。

ホント、前の世界では考えられないほど、みんなに受け入れられているよなあ。

良く寝たせいか、朝力を使ったにもかかわらず、絶好調と云っても良いくらいに体が軽い。

少し運動でもしないと、夜眠れなくなりそう。

でもなあ……。小十郎がなあ……。

ちよつとでも着物の裾を乱すと、小言が飛んでくるんだよなあ……。

リーゼントがいるんだから、ズボンとかないのかな。ついでにTシャツも。

着物でするスポーツっていったら、羽子板か？鞠つきか？
政宗相手してくれないかな。

・・・いや、やめとこ。間違いなくデスマッチになるな。

それにしても、政宗どこいつちゃったんだろ。

誰かしかが必ずそばにいたのにみんな居なくなるなんて、なんかあったのかな。

人様の家で勝手にうるついでいいかもわからないなあ。

うーむ。とりあえず片付けでもしておこうかな。

書き損じてぐしゃぐしゃに丸められた紙をゴミ箱っぽいカゴにまとめて、散乱した本をタイトル順に並べてみた

あ、あいうえお順じゃなかった。イロ八だ。

家に先祖代々の書物とかがあって、容赦ない古文書を小さい頃から読まされていたので、ミミズがのったくったようなも難なく読めるんだけど、読めるなんて言ったら、何をさせられるかわかったもんじゃない。

この前なんか華押を私に押させようとして、小十郎に大目玉を食らっていたし。

うお、これ収支報告書じゃん。なんでこんな下のほうに埋められるのよ。

わざと一番上に置いといてやれ。

「ごつちやごちやだった部屋がなんとか見栄えよくなった頃、廊下に人の気配がした。」

「と、思ったら、スパーン！と小気味の良い音を立てて襖が開け放たれた。」

「梵！おつまたせ〜！……つて、あれ？」

政宗と同じ年齢くらいの男が、満面の笑顔を浮かべて飛び込んできたが、部屋の真ん中で書簡を政宗が嫌いな仕事順に並べていた私を見て首をかしげた。

「あれ？ここつて、梵の部屋だよ？君だれ？」

「ぼんつていうのがだれのことかはわからないけど、ここはまさむねのへやだよ。」

「そう、その政宗つてのが、梵なんだけどさ。梵を呼び捨てにする君は、一体何者？」

「わずかに警戒心を見せる男に、そっちこそ誰さ？と思いつつも態度からこの人だろうと推測して答えた。」

「わたしはつきです。いそろうです。」

「ついでにぺこんと頭を下げれば、男も」

「ああ、君がツキか。梵から聞いてるよ。俺は伊達成実だよ。」
と、警戒心をといてぺこりとお辞儀した。

「……名前を言っただけで、警戒を解かれたのは初めてだよ。」

城主の部屋で一人で書類をいじっていた部外者が居て、なんでもっと警戒心を抱かないんだ？

大丈夫か、この城のセキユリテイ。

なんて内心で心配をしている私を他所に、成実は部屋をキョロキョロと見回した。

「で、梵はどう？」
「知らない。ねておきたらだれもいなかった。わたしもちょっとまってる。」
「むう。じゃ、一緒に探しに行こうか？」
「うん。」

二人で手をつないで自己紹介をしながら、城の中をうろつろ。成実は大森城ってお城の城主を任されてるらしくて、何時もはそこに居るんだけど、今日は政宗に呼び出されたんだって。米沢はともかく大森城ってどこさ。馬で一刻くらいだって言ってたけど。

もう少し成長したら、馬の練習して、私も外に出てみたいなあ……
そのうち政宗に相談してみよう。

なんて思っていると、良い匂いが漂ってきて、自然と足がそちらに向かった。
よく兵士のみんなが集まってご飯を食べたりする広間から漂ってくるようで、膳をもった女中さんたちが出入りをしている。
「ゆづげのじゅんび？」
それにしては量がハンパない気がする。
「いや、違うな。今日は宴会をするみたいだ。」
「やりいっ！と喜ぶ成実。」

宴会か……。一体どんな様相になるんだろ。
まるで暴走族の乱闘のような騒ぎになるんだろうか……。

それはそれで、ちょっと見たい。

「ツキ？」

夕日を背負ってクロスカウンターな政宗と小十郎を想像してニヤついていると、ちょうど広間から小十郎が出てきて、怪訝そうな顔をした。

あう、おもいつきりにやけ顔を見られた。

「政宗様がお前を探していたが、成実といたのか。」

「うん。しげざねがまさむねをさがしてるっていったから、いつしよにさがしてたの。」

ね？って成実を見上げれば、そうそうと頷き返してきた。

「まあいい。まもなく始まるから、お前らも中で待ってる。」

顎で広間を示されて、恐る恐る中を覗いてみると、ヤンキー集団が所狭しと座っていた。

うわあ。むさくるしいなあ。

隅のほうで大人しく待ってるか。

成実に手を引かれて中に入ると、何人かが気が付いたらしくお嬢おー！と叫んで手を振っていた。

「大人気だねえ。」

「ははは・・・どうも。」

一番の上役が来てないのに、飲み始めてる連中もいるよ。いいのか？

なんて思っていると、目の前で成実も手酌で盃にお酒を注いで煽り始めた。

「んまーい！やっぱり酒はうまい！」

「まだえんかいはじまってないのに、のんでいいの？」

「え？大丈夫！梵はそんなこと気にしないよ！それより、ツキちゃんも飲む？」

くいつと盃を差し向けられて、ちよつと迷った。

いや、私お酒大好きなんだよねえ。日本酒とかもつ最高。飲みたい。飲みたいけど……。

「なーんてね。子供にはまだ早い早い！」
迷っているうちに、盃を引っ込めて、再び手酌で飲み始める成実。

……。おのれ。この恨み晴らさずに置くべきか。おぼえてるよ？

「どこにいたのか。」

ひょいと抱き上げられて、びっくりして振り返れば、苦笑いをした政宗がいた。

「うん。おきたらだれもいなくて、しげねがきたからいっしょにまさむねをさがしていたんだよ？」

「Sorry・良く寝ていたから、もう少し寝かせておこうかと思つてな。」

筆頭コールに沸きあがる広間を、私を抱いたまま突っ切り、一番の上座に座った。

「Hey, guys! Are you ready?」
にやりと笑う政宗。

「「「「y e a a a a a h ! ! 「 「 「 「
ノリが良いなあ……。」

「今夜はツキのwelcome partyだ。お前ら、派手に楽しめよ!？」

「「「「「yeaaaaaaaah!」「「「「「

はい？私の歓迎会なの？これ。

「Let's party!」

「「「お嬢、ヨロシク!!!!」「「「「

「あ、よろしくおねがいます。」

よろしくが、夜露死苦って聞こえたのは気のせいだね。

かくして、野郎共の野太い歓迎の声と共に、歓迎会という名の飲み会がスタートした。

小一時間ほどもすると、みんな程よく酒が回ってきて、あちこちで泥酔する人や、楽しくなっちゃったのか踊り出す人やらでカオスだ。

政宗の横でご飯を食べていると、モヒカンが現れて問答無用で私を抱き上げて肩車をした。

食べたものがリバーズしちゃうよ!!

そのまま仲間のところまで連れて行かれ、意味不明な盛り上がり巻き込まれた。

酒が入ってるお前らは良いよな!

素面すまな私にはついていけないよ！

「今朝の筆頭と片倉様の間に割って入った技凄かったな！どうやってやるんだ？」

「どりよくとこんじょう。」

適当に答えたのに、モヒカンは酔っ払っているらしくて、

「そうか！俺もがんばるぜ！！」

と感動していた。

ま、努力するのは悪いことじゃないから、頑張れ。

できたら足軽から大将になれるよ。

生温い目で酔っ払いどもを見守っていると、背後からベロベロに酔った成実が、がばあっと抱きついてきた。

「ツキちゃん！楽しんでるう！？」

「おまえほどではないがな！」

「あはは、子供って肌がすべすべだねえ。」

すりすりと頬擦りされて、更に強い力で抱き潰されそうになる。

ぐえ！マジで痛い！

「ちよ、いたい！ばかぢからでだきつかないで！」

「ツキちゃんはかわいいなあ。こんな子供が俺もほしいい。」

「ぎゃー！！はなれるー！」

酒臭い顔でキスをしようとする成実を全力で拒否するが、大人の男の力には到底敵うはずがない。

「まさむねえええ！！へるぶ！！へるぶううう！！！！」

「すっ……」

鈍い音がして、成実が後ろに倒れるのと同時に、ひよいつと抱き上げられて我に返ったときには政宗の首にしがみついていた。

「Hey、成実。ちよーつと悪戯が過ぎるんじゃないか？」

「うう、梵手加減してよね。」

「Shut up! ツキが穢れるだろうが。」

「ひどい！梵ひどいよ！」

「しげねごどものまえに、もっとちからかげんをまなばないと、まずおよめさんがこないよ？」

「がーん！」

打ちひしがれる成実を放置して、政宗は小十郎の待つ上座へと私を抱っこしたまま戻った。

最近抱っこされ慣れてきたなあ……。

元の場所に戻った政宗の胡坐の上に座ったまま、再び食事を再開。なんでここなんだ？

私の席はすぐ隣だったはずなのに。

降りようとすると、政宗に押さえられるので、もう諦めというか開き直りの境地で食べてます。

これ、子供の姿じゃなくて、元の姿で想像したら、恥ずかしくて死ぬるよ……。

子供デヨカッタア・・・。

それにしても、さつきからいいペースで二人とも飲んでる割には、顔色一つ変わらないな。

つか、とってもおいしいそうですね！飲みたいですよ！

うまい食事にうまい酒と来たら、もう最高だと思えますよ。

ここの食事、ほんとに美味しいんだよね。野菜とか味が濃くてさ。味付けもいいし。

うっかりすると体重が増えそうで怖い。

「ああ、酒が切れましたな。ただいま用意させます。」

「頼む。」

小十郎は女中さんたちが動き回っているところに危な気なく歩いて行った。

「こじゅろもまさむねもおさけつよいねえ。おいしい？」

「おう。お前も飲んでみるか？」

と、なみなみと酒の入った盃を差し出された。

さつきは成実にしてやられたから、今回は考えることもせず受け取り、一気にあおった。

芳醇な香りでも、爽やかで飲みやすい飲み口。いい酒飲んでやがるな！

喉を通れば、胃の辺りがあつと熱くなり、くくうつと声が漏れる。

「お、おい、ジョークのつもりだったのに、飲みやがった！」「んまーい！

久しぶりの日本酒うますぎっ！

どいつもこいつも、子供だからって見せびらかすだけで、自分たちばかり楽しみやがって。

私も飲ませる！

「政宗さま！なにしたらつしやるんですか?!」

徳利を手にした小十郎が帰ってきて、額に青筋を浮かべている。

「おいしー！たんれいからくちうまうまーさいこー！」

「お、おい、ツキ？」

心のままに叫べば、小十郎が戸惑ったように呼んだが、気にしない。

もっと飲ませろ〜足りないぞ〜

「こじゆるろつ、もっとちようだい？」

上目遣いをお願いして見たけど、駄目だと怖い顔で言われてしまった。

ちえつ、だめかあ。

子供の体のせいか、ほんのわずかの酒量でも、顔が火照っているの
がわかる。

「あれ？ツキちゃんどうしたの？」

小十郎の後ろから成実が顔をだした。

おでこがまだ赤くなっていて、なかなか面白い顔をしている。

「ツキが酒を飲んじまった。」

「はあ？梵だめじゃん。子供にはまだ早いよ。」

「こどもじゃないよう！おとなだよ！」

どいつもこいつも！

子ども扱いはおもしろくなーい！

むくれて視線を下げれば、成実の手にある徳利を発見。

さっきはしてやられたからな。

「おたからげつとだぜ!!」

子供の頃見ていた、某黄色い電気ネズミを連れた少年の様なセリフを吐きつつ、成実の手から徳利を奪取。

「あ!!」

「コラツキ!!」

「おい!!」

成実、小十郎、政宗が止めようとする前に、徳利ごとぎゅっぎゅっぎゅっぎゅっ!!と一気飲みしてくれた。

うまい酒だけに勿体ない気もするけど。

「お~~~~いし~~~~」

天にも昇る気持で、意識はブラックアウト。

6 歓迎会（後書き）

本作では政宗も小十郎も成実も独身設定となっています。

7 竜の花

やっちまった。

一気に酒をあおったあと、なんともいえない幸せそうな顔をして、そのまま後ろにひっくり返ったツキ。

本来はどうだかしらねえが、子供の体で一気飲みはよっぽど刺激的だったようだ。

「今の所問題はないようですが、心配なので部屋に寝かして姉上に診てもらいます。」

「いや、お前らはここにいろ。」

動こうとする小十郎を止めて、ツキを抱き上げた。

「梵が介抱するなんて、めっずらしく。」

「こいつは特別だからな。」

にやりと笑えば、成実が今度こそ本当に驚いたという顔をしたが、気にせず部屋を出た。

ツキの部屋に入り、敷いてあった布団から掻巻を取って、ツキを包んだ。

そのまま縁側に出て空を見上げれば、満月が東の空に見えた。

怪我が治るくらいだから、アルコールもこっすしていれば抜けるだろう。

相変わらず気持よさそうに眠っているツキの頭を撫でながら、今朝の出来事を思い返した。

小十郎との打ち合いで、つい技まで出し合うほど白熱していた。

あの状態になれば、並の人間には手出しはできない。

だが、ツキは易々とオレらの間に入り込み、刀をはじき、蹴りま

で入れてきた。

体が小さかったから小十郎のダメージも小さかったが、成人したツキが同じことをすれば、肋骨の一本は折っていただろう。

もし、他の武將にツキの存在が知れば、否応にもツキはこの戦国の世に巻き込まれる。

それだけは、なんとしてでも防いでやりたい。
求めるものがあつて戦場に立つオレとはちがう。

力があつたが故に、人に忌み嫌われ。

その血族の中でも異端な力を持つが故に畏れられ。

そして、家族を殺された後は、その力を使って復讐を為そうと生きてきたツキ。

この世界に来て、復讐をすることは叶わなくなったと嘆いていたが、解放されて少しずつ明るさを取り戻してきた。

元々喜怒哀楽の激しい性格だったんだらう。

笑つたと思うと、怒り出したり、叫んだりしては、城内を走り回っている。

見えて飽きない。

側にいると、オレも小十郎もしばらく忘れていた穏やかな気持ちになる。

他の連中も、ツキを見かければ楽しげに笑っている。

この城の人間にとって、ツキは特別な存在となった。

外にその存在が洩れるようなことがあったら、ツキの平穩は消えてしまうだろう。
ここに閉じ込めてその存在を隠し続けられれば、ツキを護ることはできる。
だが、それは、羽を切って飛べなくしてしまうこととなんら変わりはない。

「どうしてやるのが一番良いんだろうな？」
一人呟いて、満月を仰いだ。

「この娘の望むままにしてやればよい。」
「ツキ？」
起こしちまったか？

見下ろせば、わずかに青い燐光を放ってオレを見上げるツキと目が合った。
その目はいつもの黒ではなく、青。
それに気が付くと同時に、ツキから得体の知れない気配が発せられていることに気が付いた。

「誰だ？」
脇に置いた刀を手繰り寄せて尋ねれば、ツキはふわりと浮かんでオレを見下ろした。

「妾は蒼竜。この娘をこちらに連れて来た者じゃ。」
「あ？連れて来た？どういうことだった？」

ツキの体に乗っ取ってるのか？

殺気は感じられないが、人ではない凄烈な気配を感じる。

「異なる次元の、遙かな時空の先にて終焉を迎えた我が一族の末の娘をこちらへ連れて来たと申したのじゃ。」

胸を張って偉そうに答えると、蒼竜と名乗ったツキは宙に浮かんだまま庭に降りてキョロキョロ辺りを見回した。

「なかなか住み心地のよさそうな場所じゃの。安心したわい。」

「何しに出てきた？ツキの体は大丈夫なのか？」

刀を持ったままオレも庭に下りて尋ねた。

「いや、うまそうな酒に誘われて降りて参ったのじゃ。今宵はちょうど月も満ちておるでの。娘は問題ない。安心せい。」

「ツキをお前の一族の者と言ったな？きちんと説明しろ。」

「畏れを知らぬ者よの。・・・まあよい。うまい酒の礼じゃ。」

そういうと、蒼竜はにんまりと笑った。

酒好きは血筋か？

「妾は月を司る神の僕しもべ。平行して成り立つ幾つもの次元を渡り歩く者。この娘が居った次元も、お主が今居るこの次元も、その他の次元も全て交わることなく平行して存在している。時の流れは人の子にとつては過去から未来へと流れるものだが、妾は戻ること進むこともできる。ある時妾は人と交わった。その血の末がこの娘。我が一族と呼べる者はこの娘とあと一人だけになってしまったがな。」

もの悲しげに目を閉じて、蒼竜は声もなく笑った。

「ツキは神に連なるものだと言うことか？」

「まあ、そういうことになるかの。」

「なぜ、この世界に連れて来たんだ？」

「限界だったのじゃ。・・・娘の心が。」

感情を殺し人形のようなツキ。

確かに、ふらりと死の世界へ行ってしまいそうなほど、暗い眼をしていた。

「ここでなら、娘の力は異形ではない。次元を超え、時を遡る危険を冒してでも、連れて参りたかったのじゃ。多少縮んだ位でこちらに送り届けられて、本に良かった。」

「ツキが子供の姿になったのは、時間を遡ったからなのか？」

「その通りじゃ。消滅の危険もあったが、この娘を救うにはやるしかなかったのじゃ。」

「たった一人のために、神がそこまでするか？そこまでするならなぜ、ツキの家族が殺される前に助けなかった？」

ツキが蒼竜の血筋ならば、ツキの家族もそうなるだろう。

問いに蒼竜は自嘲を浮かべた。

「神とて万能ではない。妾が娘の許へ参ったあの惨劇の晩。あの男が狂気に走るのを娘の内で見えた妾は、当然止めようとした。だが、あの男は妾の存在に気がついていて、自らの力を使って妾を娘の内に封じて動けぬようにしたのじゃ。まさか己の血族に妾を封じることができるなど、思いもよらなんだ。それから封を破る力を蓄えるまで、この娘の目と心を通じて、全てを見てきた。」

自嘲はそのままに、蒼竜は月を仰いだ。

「妾が愛した者の末裔すえが、もがき苦しみ、己を殺し、人の血にまみれ、心を引き裂きながらも憎悪を止められぬ姿は、本に哀しく、何もしてやれない己を呪った事か。神の僕として永劫を生きる妾にとつて、血族の幸せを見守ることが唯一許された慰みだったのじゃ。この娘は妾に残された最後の花じゃ。どうしても、護りたかった。ようやく封を破る力が戻り、頃合をみてこちらに運ぼうと思ったとき、この娘のすぐ側で大きな爆発が起こったのじゃ。それに乗じて事を為した。」

「それで、爆発に巻き込まれて……って言ったのか。All right。これで納得できたぜ。それで、ツキは元の姿に戻るのか？それともこのまま普通に成長していくのか？」

それによつては、今後のツキの身の振り方も変わってくるだろう。だがどちらにしても、オレの側においておくことは決定だがな。ツキを離す気は更々ねえ。

「満る月が一つ昇るたびに、娘はひとつ時を取り戻す。季節が一巡りすれば、本来の姿に戻り、力も戻るはずじゃ。それまで、娘を頼みたい。妾も側に居てやりたいが、務めを果たさねばならぬゆえ、神の御前に参らねばならぬのじゃ。」

「ツキは必ずオレが護る。安心していいぜ。」

「……頼む。……。」

？どうした？

まだなんかあるのか？

何かを言いかけては口を閉ざす蒼竜。

何度か同じ事を繰り返した後、ようやく呻く様に言った。

「頼む。決してあの者に娘の存在を気づかれてはならぬ。」

「あの者つてのは誰だ？」

嫌な予感しかしねえ。

まさか……。

「……一族に滅びを与えた男。」

「ツキの家族を殺したって男か？なんでそいつもこっちにいる？」

「爆発の瞬間、娘のすぐ側に居たようでの……どうも娘を爆発から救おうと飛び込んできたようじゃ。娘の体にしがみついていたせいで、一緒にこちらにつれてきてしまった。」

「その男はツキを殺そうとしてるんじゃないかねえのか？」

なんで助けようとした？

「解らぬ。だが、決して娘と接触させてはならぬ。万が一、この世界でまたあの二人が出会うと事になれば、もう妾にもどうすることもできぬ。」

「Shite! !他国の武将よりも厄介じゃねえか！で、その男はいまどうしている？」

「解らぬ。だが、間違いなくこの世界のどこかにいる。娘のように子供に戻っているはずじゃ。」

「なら、しばらくは向こうも動けねえってことだな？」

「おそろく。」

「OK。万が一ツキに気がついて接近するようなら、殺るぜ？」

はつきり宣言をすると、蒼竜は無言で頷いた。

「そろそろ時間切れじゃ。妾は行かねばならぬ。」

ツキの体を纏っていた青い燐光が薄れてきて、蒼竜はオレの右の頬に手を当てて仄かに笑った。

「隻眼の竜の子よ。お主に妾の花を託す。今はまだ蓄なれど、やがては大輪の華となるう。大切にしておくれ。」

「ああ。任せろ。」

必ず、護るぜ。

燐光が消え、気配が遠のいた途端崩れ落ちたツキを抱きとめ、様子を探った。

何事もなかったように良く寝ている。

ここに来た頃は、ほんの少しの物音でも飛び起きて警戒していたが、今では多少揺すったくらいでは起きやしねえ。

それだけ安心できているってことなんだろう。

しかし、問題は山積だ。

自国の問題もある。

先日起きた一揆は抑えた上で、農民側とこちらの話し合いの場を設けたことで沈静化した。

だが、他にも問題は山積で少しずつ改善しているのが現状。

他国に目を向ければ、北は最上、南部、南は北条、武田、西には上杉。

今は織田や豊臣の猛攻のせいで各国とも動きは控えめだが、いつどこがどう動くか分からない。

どこにいるか分からないツキの仇を密かに捜し出す事は難しい。ツキにどういふ人間なのかを聞けば、多少は探しやすくもなるが、またあの暗い底なしの表情をさせたくなどはない。

「むっ、もお……のめないっ……。」

……をい、人が悩んでいれば、幸せそつな夢を見てやがるな？
口をむにむにと動かして、ほにゃっとな笑うツキ。

……かわいいじゃねえか。

まあとりあえず黒脛巾を動かして情報を集めて見るしかないか。

ツキを抱えて立ち上がり、布団に寝かせる。

立ち上がるうと上体を起こした途端、くいつと何かが引っかかった。見れば、ツキが小さな手でオレの着物を掴んでいる。引き離すこともすぐにできたが……。

眠るツキの横に静かに寝転んで、オレもゆっくり目を閉じた。

7 竜の花（後書き）

お読み頂きまして、ありがとうございます。

次回は週末更新予定です。よろしくお願いいたします。

8 おはようございます

青い月が昇る草原で一人。

ただ月を見上げていると、誰かに頭を撫でられたような気がした。政宗や小十郎たちとは違う、柔らかな優しい手。

喜多さんかな？

《この様な形でしか護ってやれなくてすまない。許しておくね。》

頭に直接響く声が聞こえた。

ああ、貴女は。

たった一度だけ、あの時のあの一瞬。

逢えたと思ったら、消えてしまった、蒼い月の方。

《妾の蒼月華よ。そうげっか

もう、側には居られないが、どうか、この地で幸せに。

強く、気高くあれ。さすれば、月はいつでも其方と共にある。》

ああ、私をここへ連れてきてくれたのは、貴女だったのか。
私を助けてくれたのか。

手を伸ばせば、名残惜しむように、ふわりと頭を撫でられた。

やがて優しい手はゆっくり離れ、頂天にあつた月は小さな光の粒になり、私の掌に降りてきた。

あの日のように。

《強くあれ。気高くあれ。》

それが、貴女が私に願う事なれば。

今はまだ、立ち止まる事もあるかもしれない。
でも。

「蒼月華の名に恥ぬよう、心いたします。」

掌の光が、青い美しいあの扇になった。

朝日が部屋に差し込んで、その眩しさに意識が浮上した。

夢を見ていたはずなのに、思い出せない。
誰かと話していたような気がする。

むう。あれは誰だったのか。

ぼーっと考えつつ、眩しさから逃れるために、布団を被ろうと手探りをしようとしたが、何かに拘束されているのか体が動かない。

「……?」

うつすらと目を開けて状況を確認しようとしたけど、目の前が真っ白いものでいっぱいだった。

なにこれ？

自慢ではないが、本来私は低血圧で寝起きが悪い。

緊張が強いられるような場所では、眠りが浅いためそんなことはないけど、安全だと知ってしまったここではすんなり覚醒することはほとんどない。

今朝もぼーっと目の前の白を眺めていた。

・・・まあいいや。まぶしい。眠い。

目の前の白いものに顔を押し付けて、朝日から逃げると、再び夢の世界へ。

行こうとしたら、白い壁が震えた。

「くつくつくつく、どんだけ寝起きが悪いんだよ。」
「んー？なにこれ？」

すすすす・・・と白いものを上へ上へと上っていくと、肘枕をしなからさも愉快そうにこちらを見ている政宗の顔とぶつかった。

「まさむね・・・？」

「Good morning」

「おはよう？」

空いている方の手は、しっかりと私の体に回されていた。
動けない原因はこれか。

しかし、それにしても・・・。

無駄に顔の綺麗な男が、朝の気だるげな顔で、しかも掠れ気味の低い声で囁くな。

そして、なぜここで一緒に寝ている？

「朝から無駄にエロい。」

「えろ？」

「なんでもないです。それよりも、なんで一緒に寝てるの？」

「ツキが離さなかったからだろ？」

そう言うと、政宗はわたしの目尻を指で拭った。

「離さなかったって、んな馬鹿な。・・・ん？なんかついてた？」

「泣くほど悲しい夢でも見たのか？」

泣く？え？

驚いて目をこすると、泣いていたようで、指が濡れた。

「んー、覚えてない。夢を見た事はわかるんだけど、なんの夢だったのかさっぱり。でも、どっちかっていうと、いい夢だったと思う。」

「そうか。」

そう言うと政宗は左目を和ませて、頭をなでた。

それが意外にも心地よくて、うつかり二度寝しそうになる。

危ない。こんな状況を小十郎や喜多さんに見られたら、憤死するほど恥ずかしい。

温い布団に未練を残しつつ、えいやあ！と勢いよく跳ね起きると、なんか違和感を感じた。

「あれ？なんか寝間着が小さい？」
「それでもって、言葉がいつもより明瞭に話せる。
なんだ？なにが起こった？」

首をかしげて自分を見下ろしていると、政宗があくびをしながら
起き上がった。

「すこし成長したんだろ。」
「は？」

「昨日より大きくなったから寝間着が小さくなったんだろ？」

確かに、数センチくらいだけ成長したようだ。
でも、昨日まで1ミリも伸びてなかったのに、何でだろう？

「昨日なんかあったっけ？」

昨日あったことを思い返して、挙げていってみよう。

「朝から大暴れして、喜多さんに折檻された。」

「Shite!!余計な事を思い出させるんじゃないねえ！」

「昼寝いっぱいして、小十郎に小言を貰った。」

「それも言うんじゃないよ。」

「あとは、政宗の部屋を片付けながら、嫌いな仕事を優先でやるよ
うに書簡を並べかえた。」

「そんなことしやがったのか！？おまえ、オレがどんだけ苦勞して
誤魔化していると・・・！」

「ほほう、そんなことをされていたのですね？政宗様？」

すすすーっと開いた襖から小十郎の地を這うような声が聞こえた。

「げっ！小十郎！！！」

「今日はこの小十郎が、しっつっつかりとお側で控えさせていただきます！」

「Nooooooooooooooooo！！！」

小十郎たのしそうだなあ……。

なんて眺めていると、喜多さんが何時ものようにおはようございますと言いなから襖を開けて入ってきた。

「あらあら、なんの騒ぎですか？」

おっとり微笑む喜多さんに、三人で仲良く朝のご挨拶。

喜多さんにだけは礼儀を欠いてはいけないと、昨日骨の髄まで染み込ませて頂きましたから！

「あら？ツキ少し大きくなった？」

喜多さんが私の寝間着を見て、首をかしげた。

「そうなの。朝起きたら寝間着が小さくなってたの。昨日の歓迎会までは普通だったのに。」

「用意したものだど、少し小さいわね。ちょっと待っててね。」

喜多さんが私の着物を選びなおしに出て行くのを見送っていると、隣で、政宗に無断で私の部屋で寝たことや、仕事を溜めまくっていたことなどを、くどくど説教していた小十郎が、そういえばと言って、私を見た。

「酒飲んで引っくり返って、具合は悪くねえか？」

「うん。ぜんぜん。すつごくおいしかったよ？」

「うまかった、じゃねえ。子供の体で、あんな無茶しやがって。ぐつと小十郎の眉間の皺が深くなった。」

「一気飲みは確かに無茶だったかな・・・。」

「ごめんなさい。次からは、ちびちびやります。」

素直に謝ったのに、拳骨を貰ってしまった。

痛い！

「人の酒を奪うたあ、どんだけ酒好きなんだよ。」

呆れ顔の政宗に、私はむっとなった。

「みんな美味しそうに飲んで、拳匂わざと見せびらかすのが悪い！」

「Sorry. お前がそこまで酒好きとは知らなかったからな。」

オーバーアクションで肩をすくめる政宗。

知らなかったなら、これからは忘れるな！

「私が酒好きだということを肝によおっく銘じておけよ！そして、

晩酌には私も誘って下さい。」

ぺこり。

「偉そうなんだが、下手なんだかわからねえ奴だな。」

「そもそも、ガキが酒を飲むな！」

小十郎がすかさず突っ込みをいれてきたが、無視です無視。

二日酔いもないし、体調も良いくらいだもん。飲んでも問題ないよ。

・・・って、ん？
あれ？

「昨日って満月だったよね？」

「Yes。」

「だから、体調がいつもより良いんだ。」

「そうなのか？」

「うん。昨日結構力をいっぱい使ったのに、なんともなかったもん。」

満月はその名の通り、月が満ちる日なので、私の力も一番強くなる。二日酔いも無いもお陰かも。

「あ、もしかして、私が成長したのも、満月だったから？」

理屈は良く分からないけど、満月の力で体が少しずつ元に戻るのかも。

「まあ、次の満月のときにまた成長すりやはつきりするだろ？それよりそろそろ朝餉にしようぜ？」

「ですな。朝餉が済みましたら、すぐに執務に入りましょう。」

「ぐつ。……………わーったよ……………」

肩をがっくり落として政宗は小十郎に引きずられるようにして、部屋を出て行った。

日ごろの行いって、大切だね。勉強になったよ。

8 おはようございます(後書)

読んでいただきまして、ありがとうございます。

9 お仕事の時間

朝食後は、お仕事の時間です。

げんなりした表情の政宗と、まだ眉間の皺が取れない小十郎と、二日酔いで頭を抱える成実があまり広くない部屋で仕事をしている。いくら顔がいい男たちとは言え、鬱陶しいことこの上ない。

苦手な仕事を全て隠していたことがバレた政宗は、小十郎監視の下、必死に処理促進中。

成実もなんかの報告書が提出されてなかったとかで、強制的に書かされている。

日ごろから真面目にやってりゃ苦勞はしないのに。

「ツキい、これを持っていつて。」

成実がようやく書き上げた紙を乾かすように振りながら差し出したので、受け取った。

ちらっと見れば、やる気のない字で領地の状況についての報告が書かれているようだった。

「成実、これほんとに持っていくの？」

「そっだよ？何で？」

「問題なしと、概ね平和しか書いてないじゃん。」

「なんだと？」

私の言葉に、小十郎が反応して手にしていた紙をひったくっていった。

「うわっ！なんでツキちゃん読めるんだよ！？読めないと思って頼

んだのに!!」

すでに逃げの姿勢に入った成実が、裏切られた!などと人聞きの悪いことを言いながら、逃走を図った。

「さて!!こんな報告書上げられるか!!書き直せ!!」

その後を、小十郎が疾風のごとく追いかけた。

成実、Good Luck!

さて、そろそろ墨でも擦って置くかなあ。

この墨の匂いって、好きなんだよねえ。

うつとりしながら擦っていると、なにやら左前方から視線を感じた。顔を上げれば、政宗がじいじいっところちらを見ていた。

「なに?」

「お前、字が読めたんだな。」

.....しまった。

「.....ヨメマセンヨ?」

「通りで、書類を並べ替えられた訳だ。」

「イヤ、ダカラ、ヨメマセンテ。」

「朝から普通に話せてただらうが？」

ニヤニヤしながらにじり寄ってきやがった。

手には大量の書類が握られている！

「仕事追加だ。読んで不備がないか確かめろ。」

「いやいや、どれが不備だかなんて、判断つくわけないじゃん！」

「No problem. お前の勘でいけ。」

「無茶振り！！推定7歳のお子様は墨を擦ってるお仕事が一番だつて！」

「Shut up! 誰のせいで、こんな目にあってると思ってやがる！」

「政宗が自分で蒔いた種でしょうが！」

びしっと言ってやれば、政宗は少し考えた後、ニヤリと笑った。

「お前が手伝えば、仕事が速く終わる。早く終わったら、城下に連れて行ってやるぜ？」

う……。卑怯な……。

確かに、この世界に来て半月近くになるけど、一度も城から出たことがない。

「行きたくねえか？」

耳元で囁くように言われ、びくうっと飛びのいた。

み、耳元で囁くなー!!

耳はダメなんだよ!

耳を押さえて固まる私を見て、ニツタアと政宗が笑った。

「耳が弱いんだな?」

「ち、近寄るな!ロリコンめ!」

「ろりこん?なんだそりゃ?」

現代用語は通じねえのか!

「幼女趣味ってことだ・・・ぎゃあああ!!ななななななな!!!!」

耳を舐めやがった!!

「誰が幼女趣味だ。」

お前がだああああ!!

ほとんど押し倒されて襲われている状態ですが!?

「手伝う!手伝うから離れる!!」

息も絶え絶え政宗の下から這い出て、未だに治まらない鳥肌を撫でつけまくった。

ちくしょー、今ので一気に立場が弱くなった気がする!

まあ、最初から居候だから、偉い立場ではないんだけどさ。

「このオレ様にそんな態度をとるのはツキくれえなもんだぜ?」

私の机に書類を遠慮なく置いて、自分の机に戻った政宗は、ニヤニヤしながら筆を取った。

「うるさい!」

耳が強くなる訓練方法とか無いもんかな……。

やるからには、仕事は完璧に！が、モットーです。

渡された書類を手に取り、端からしっかり読んでいく。
時候の挨拶から始まっているこれは、他の城主からの手紙のようだなになに？……

「政宗え、これ冬に届いた手紙じゃん！どんだけ放置してたのさ！」

「先を読んでみるよ。放置したくなるオレの気持ちかわかるぜ？」

手を休めることもこちらを見ることもなくウンザリだというように
答えた政宗。

どれどれ

「ああ、嫁をもらえって督促ですか。しかも、この人の娘さんをめ
っちゃアピールしてるね。」

「しつこいんだよ、そいつ。オレが元服したすぐ後からずっとだぜ
？」

何か苦い思いでもあるの？走らせる筆が微妙に荒れてるよ？

仕方ない、これは小十郎行だな。

次は……

って、これ私が見てもいいのか？

各城の兵士の配置状況と軍備の実状、支出などが細かに記されてい

た。

城の名前で書いてあっても、場所がわからないし、これがこの時代にとつて良いのか悪いのか、さっぱりわからないんだけどさ。

「なんか引つかかるか？」

熟読していると、政宗が覗き込んできた。

「んー、状況とか規模とかさっぱりんだけどさ、この城、最近修繕かなんかした？」

「あ？記憶にねえな。もしかしたら、小十郎なら知ってるかもしれねえが。」

それがどうかしたか？と促されて、私は数力所を指で示した。

「これ単価は少ないけど、足して行くと他の城の倍くらいの金額になるよ？」

「What？」

書類を見る政宗の目が、段々厳しくなる。

そりゃそうだろう。

細かく分散してわかりにくくしてるつもりだろうけど、注目して見れば、大した規模でもなさそうなのに、軍備費や食費、食費、その他の支出が少しずつ他より多い。

塵も積もればで、さっと暗算をして見た感じで、成実の城の倍は金を使ってる。

「これは調べる必要があるそうだな。綱元に任せるか。」

鬼庭 綱元さんは主に政治関連を請け負っている人で、喜多さんの父親違いの弟で、小十郎の血のつながらない兄弟らしい。なんか複雑だね。

とりあえず兄弟ってことで納得した。

まだ直接会ったことはないけど、政宗の仕事を手伝うようになっ

て何度かその名前を聞いてはいた。
どんな人なのかな。小十郎みたいに強面系の渋いオジサマかな。それとも、喜多さんみたいに美形中年かな。

「はい！政宗！私が持つて行きたいです！」

「あ？」

「それ、綱元さんに渡すんでしょ？」

「そうだが、小十郎の目を通してからだな。小十郎に持つて行かせりゃいいだろ？」

「えー、つまんない。美形中年見たい！！！」

机にしがみついてガタガタさせながら抗議をすれば、政宗がハン！と鼻で笑った。

「お前が綱元んところに行つちまったら、誰が仕事すんだよ。」

「おまえだ！！！」

「いいから、次いけ、次。」

うう、なんでこんな目に……。

小十郎が戻ってきたら、言いつけてやる。

溜め込んでいた仕事の2割が早く結婚しろよっていう、家臣たちからの嘆願書に近い手紙。

4割が政宗が決裁しないとまずい稟議書。

3割がさつき成実が書いてたような、各城の城主からの報告書。

1割が私的な手紙だった。

見た感じで、溜め込んだせいで何か悪影響が出ると言うようなもの

はなかつたけど、決裁待ちの稟議書は不味いんじゃないの？

「政宗、この束だけでも自分で見て。問題ありそうなのと、あなたの判断が必要な奴ね。」

押し付けられた書類のうち、3分の1まで絞ってあげた私をほめる。政宗は、はいと手渡した書類を素直に受け取り、二、三枚めくって見たあと、満足気に頷いた。

「Good job. 見る目は確かだな。」

「褒められてもうれしくない。で、これが後でちゃんと読んで返事してあげなよって政宗宛ての個人的な手紙。つか、私的な手紙を読ませるな。それと、こっちは小十郎に相談して、お断りならちゃんとそれなりの対応をしなよなって、手紙。んで、報告だけの書類で問題なさそうな奴。」

はあ、肩こった。

小十郎が居れば、こんな無茶振りされずに済んだのにさ。

二人が部屋から飛び出してから結構経つのに、戻ってこないってのはどうしたんだろ。

「小十郎と成実はどこまで行っちゃったのかねえ。」

「さあな。それより、そこら辺の女中を捉まえて茶を持ってくるように言っただ来てくれ。」

「了解。」

ツキが部屋を出て行くのを見送って、渡された書類を改めて見た。実は一度目を通していて、内容は大体把握しているのもを試しに渡してみたんだが、ここまで見事に振り分けができるとは、嬉しい誤算だぜ。

的確に内容を吟味した上で振り分けをしてる。

「誰かいるか？」

一枚ずつ書類をめくりながら声をかけると、どこからともなく黒い服に身を包んだ男が音もなく降り立った。

「御前に。」

「小十郎は何をしている？」

「成実様と共に、綱元様のところに居られます。」

ふむ。綱元につかまっただのか。あれだけ騒げば見つかりもするか。しかし、三人が揃ってるなら、好都合だな。

「これを綱元のところに持っていけ。」

「御意。」

書類を受け取ると、音もなく男は去った。

綱元を呼びつけると、ツキが騒ぎそうだし。

逆に綱元がツキのことを知ったら、スカウトして連れて行っちまいそうだからな。

昨日のうちに整理されていた他の書類や本も、隠しておいたものが引つ張り出されているのはいただけないが、見やすくなって仕事がりやすい。

最初に見た小十郎も驚いていたな。

これでツキに仕事を手伝わせても、文句は言わなくなるだろう。

しかし、計算までそろばんも使わずにやってのけたのには驚いた。ツキのいた世界では、一体どんな教育を行っているのか。今度ゆつくり聞きたいもんだ。

書類をあらかた片し終わる頃、人の気配がした。

「Hey ずいぶん時間がかかったじゃねえか。迷子にでもなったのか？」

最後の書類に筆を走らせてながら声をかければ、ツキではない男の声が届ってきた。

「申し訳ありません。私がツキの足止めをしていたんですよ。」

「あ？綱元？」

顔を上げると、綱元を先頭に、ツキ、小十郎、成実が雁首を並べて立っていた。

「お茶を持っていく途中でみんなに会って、政宗のところに行くつて言うから一緒に来たんだよ。」

自分で使っていた机に茶を載せた盆を置いて、かいがいしく円座を

人数分並べると、ツキは小十郎たちに座るように指示した。礼を言いつつ各自が座ると、茶を並べ始めた。

「政宗、仕事終わりそう？」

オレの机に茶を置きつつ覗き込むツキ。

「That's all.」

「Good.」

ツキはにっこり満足げに頷くと、立ち上がって一番下座の円座に座った。

全員が落ち着いたところで、綱元が口を開いた。

「小手森の件ですが、早速調査を開始しております。大内は最近蘆名と通じていると言う話もあるようですし……。」

「ああ。結果が分かったら報告しろ。」

「御意。」

まあ、大内を討つことになるだろうな。

早ければ、ひと月後には戦か。

「梵、その話は後でも良いんじゃないの？それよりさ、ツキちゃんって字が読めるけど、どこで学んだの？」

すかさず成実が話を断ち切ってきた。

確かに、ツキが居る場で話すことじゃねえな。

話を振られたツキは、首を傾げて少し考えたあと、オレを見た。

「Can I talk to them about me？」

私のことを彼らに話していい？」

「Ok, No problem.（ああ。問題ねえよ。）」

こいつ等ならばなんの問題もねえ。

頷いてやれば、ツキは茶を一口飲んだ後、んーとと呟いてから話し

出した。

「私はこの世界ではないところから、ふとした拍子にこっちに飛ばされてきて、森で困っていたところを政宗と小十郎とその他大勢が通りかかって拾ってもらったの。」

「この世界じゃないとこつてどこ？」

「んー、このこと良く似た世界の、ずっと未来。」

自分のいた世界を思い出すツキの目は、思ったよりも落ち着きを見せていた。

小十郎もそれに気がついたようで、ほっと息を吐いた。

「日の本の国、私たちの世界では日本って言うんだけどね、そこでは6歳・・・えと、ここだと8歳か。その年齢になったら、全員学校って言うところで、勉強をするんだよ。字や計算はもちろん、いろんなことをね。」

そうだったのか。だから計算もできたんだな。

「8つの子供は、身分に関係なく全て、ですか？」
綱元が興味深そうに尋ねる。

「私の世界では、表向きは身分による差別はないの。勤労、教育、納税は日本国民の三大義務で、教育は嫌でも受けなきゃダメなんだよ。」

「子供が学んでいる間、誰が田畑を耕すのですか？」

「機械・・・カラクリが人の代わりに全てをこなすから、働き手はそんなに居なくても大丈夫なんだよ。」

「面白いですね。もっと詳しく教えていただきたいのですが。」

「私は私が学んだことを知っているだけだから、大して教えられないよ。学校だって、ほとんど行かなかったし・・・。」

つと、ここらでStopだな。

「できるのは文字を読むだけじゃなさそうだな。よおーっし、ツキはこれからはオレの補佐役な。Are you OK?」

「誰が承諾するか！小十郎もなんとか言ってやってよ！..!」

「禄は出してやるから、諦める。」

「こじゆるおおおおお！?」

これで決定だな。

ニヤリと笑えば、ツキは畳に両手を突いて頂垂れた。

これから執務も楽しくなりそうだぜ。

9 お仕事の時間（後書き）

本日もご訪問ありがとうございます。

10 春は 季節です

政宗のところでお世話になってるんだかしてるんだか分からない居候生活も、早くもひと月が過ぎた。

弥生に入りここ奥州でも桜が咲き始めて、つい昨日満開を迎えた。

政宗の執務を手伝い、ようやく本日の目処がついたので、障子をあけて窓から見える桜を眺めた。

今日午後から花見の宴が行われるらしく、階下では兵士みんなが楽しそうに会場作りをしている。

ちなみに、政宗の執務室は2階にある。私の部屋は1階。政宗の就寝する部屋も1階。

最近知ったんだけど、政宗の私室は私の部屋の並びだった。不審人物を招くにあたって、殿の部屋の近くにすくな。

政宗があそこにしろって言い張った結果らしいけどな。

閑話休題

ぼへ〜と桜を眺めていると、政宗が筆をおいてこっちに来て座った。

膝の上はやっぱリデフォルトですか。

まあ、慣れちゃったからもう良いけど。

風にのって舞い込んできた桜の花びらを手のひらで受け止め、しげしげと眺める。

私の知っているソメイヨシノとは、少し色も形も違うようだ。

こっちの方が、色味が強い。

「日本人の桜好きは、どっちも一緒だねえ。」

「ツキのところも花見の習慣があるのか？」

「あるよ。花見っていうより、宴会がメインだけど。」

「そりゃ、うちも同じだな。」

でしようねえ。

ここ数年は中東やら南アフリカやら熱い国が多かったし、毎日紛争やら戦鬭やらで花を愛でる余裕も時間もなかったからなあ。

こうしてピンクに染まる景色を見ると、あっちの世界の出来事は夢だったような気がする。

平和だなあ……。

ここが戦国の世で、あちこちで戦がおきてはたくさんの人が殺されているって分かっているけど、ここは人の笑顔が耐えない平和な国に見える。

きつと、政宗が私に気を遣ってくれてるからなんだろうけど。

風に乗ってひらりひらりと花びらが舞い降りる。

膝の上でそれを眺めているうちに、春の陽気とあいまって、催眠術でもかけられたかのように瞼が重くなってきた。

うう、いかん。昼寝をしては、また小十郎に叱られる。

「眠いのか？」

「うん。子供って、こんなに眠くなる生き物だったっけ……。」
目をこすって眠気を追いやろうと頑張っていると、政宗はひよいと私を持ち上げて、横抱きに座らせて、背中をトントンし始めた。

「何してんの？」

「今夜は遅くまでPartyだから、昼寝しとけ。」

「小十郎に怒られちゃうよ。」

「No problem. 今日はこちらにはこねえよ。あいつはやることがあるからな。」

「やること・・・？なんだろ。準備かな。」

「と、いうか、ほんとに眠い。」

「部屋を出るときは起こして行ってね。」

「分かった分かった。」

「んじゃ、ちよつとだけ・・・。」

目を閉じると、あつという間に意識が途切れた。

どこかから笛の音が聞こえてくる。

それに合わせる様に、琴の音も続く。

凜として澄んだ笛の音と、零れ落ちるように爪弾かれる琴の音。心地の良い音楽になって響いてくる。

ゆっくり目を開けると、政宗の執務部屋だった。

ぼーっとしながら起き上がると、政宗の羽織がずり落ちた。

「・・・まさむねえ？」

「起きたか？」

しょぼしょぼする目をこすりながら声をかけると、意外にも真面目に仕事をしていたのか、机に座っている政宗がこちらを見た。

いや、違うな。明日は二日酔いで潰す気満々なんだな。

明日の分まで今日頑張っつて片付けよつと言っつことか。

ぼーっとする頭で判断すると、重力には逆らわずに、再び畳の上に横になった。

「起きるんじゃないのか？」

「んー。笛と琴の音がきこえたような気がしたんだけど、誰か演奏していた？」

「いや、オレには聞こえなかったぜ。」

「夢だったのかなあ。」

ずり落ちた羽織をもそもそ肩まで持ち上げて、夢と現実の間に居るような感じを満喫する。

「ホントに目覚めが悪いな。」

「んー……。気持ちよすぎる……。。」

呆れた政宗が立ち上がってこっちに来ると、私に覆いかぶさった。
……。なんか、とんでもなく、嫌な予感再び。

カツと目を見開いて、政宗の腕の中から脱出すべく横に横転。
そのまま素早く立ち上がって、しゅたつと敬礼。

「起きました！見ての通り、すっかり起きました！！」

「ちっ。もつと気持ちよくして起こしてやろうとしたのによお。」

冗談半分本気半分な顔をして私を見上げる政宗。

危なかった……。危うく、R18な世界になるところだった……！

着崩れをささつと直して、寝癖のついた髪も手櫛で整え、落ちていた羽織を拾って皺がよつてないことを確認。

よし。昼寝の証拠隠滅。

再び仕事を始めた政宗の肩に羽織をかける為に背後に回りながら、机の上を確認。

ほんとに明日は仕事しなくても大丈夫なようにしてるよ。

「羽織ありがとう。」

「おう。」

と、肩にかけようとした瞬間、ぐいっと引き寄せられて、気がつけば政宗の膝の上に仰向けでひっくり返っていた。

「な、な、な、・・・!?!?」

「あんまり可愛いことばかりやってると、ほんとに襲っちまうぞ?」

そういうと、フリーズしている私の頬にキスをした。

いやね、欧米人に囲まれて生活してから、頬へのキスなんて挨拶程度のものなんですけどね。

なんですけどね。

艶っぽい笑みを乗せた唇とか、獲物を狙うような目とか、そんな才プシヨンなんか挨拶にあるわけなくてですね。

つまり。

「ふんがあああああ!!!」

政宗を思いっきり弾き飛ばして、敵前逃亡をいたしました。

どこをどう走ったのか、気がつくとも人気のない廊下でせえぜえ息を切らして座り込んでいた。

最近運動不足だから、すぐ息が切れちゃうなあ………って、そうじゃなくて!!

なんなの!? あれは一体何事!?
誰か説明してください!

ダンダン! と床を叩きながら悶絶していると、背後に気配を感じて、慌てて立ち上がった。

政宗が追いかけてきたのかと思ったら、驚いた顔で私を見下ろす小十郎だった。

「どうした? 何でこんなところに居る?」

膝を突いて視線を合わせて小十郎が尋ねてきた。

説明して欲しいとは思ったけどさ、説明の前にこちらが説明しなきゃならないわけで。

こっぴどくかしくて言えません。

多分真っ赤な顔をしているだろう私が、目をうるうる彷徨わせて拳動不審な動きをしていると、小十郎はやれやれと溜息をついた。

「政宗様にからかわれたんだな?」

からかわれた? あれが?

いや、そうなのか?

そうだよな? きっとからかったんだよね。

やだなあ、政宗ったら役者なんだから。

もつそついうことで納得しよう。

でも、これだけは確認しておきたい。

「あのさ、政宗って小さい子供が・・・その・・・性的な意味で好きなの？」

恐る恐る尋ねると、小十郎はは？と呆けた顔をした。

これはこれで貴重な表情だけど、今はそれを鑑賞する余裕なんかない。

「政宗様がツキに何をしたのかは知らねえが、政宗様に限ってそんなことはねえ。この小十郎が断言する。」

「だ、だよな？からかわれたただだよな？」

はああああああつ！！安心した！！

そうだよな、あの政宗に限ってないよね！？

「幼女には興味はねえ。だが、ツキは別だろうな・・・。」

心からの安堵の溜息について力が抜けていた私は、同じく溜息を吐いた小十郎の呟きは聞こえなかった。

10 春は 季節です(後書き)

ひなきにとつての春は、仕事の季節です。一年間でもっとも忙しい季節です。桜を愛でる気力も湧かない(涙)

11 桜の下にて

暮れ六つ（18時頃）になり、ようやく花見が始まった。

恒例の政宗の号令が上がり、みんなでテンション高い雄叫びを上げてスタート。

場内の外堀を囲むように植えられた桜の木の下が会場で、当然政宗は特等席の一番桜が綺麗に見える位置に居た。

その横には、私と小十郎も当然居る。今日は成実は自分の城で盛り上がるらしくて不参加らしい。

小十郎に連れられて外に出た私は、どういう態度をしたら良いのか分からなくて、小十郎の後ろに隠れている。

大丈夫だとは思っただけど、なんか恥ずかしいんだよう。

早くも大盛り上がりで酒を飲み交わす野郎共が憎い。

相変わらず旨そうに酒を飲んでやがるな。

いいなあ。飲みたいなあ。うまそうだなあ。

「ツキ、分かっているとは思っが、ダメだぞ？」

じいっと見ていたのに気がついた小十郎が、政宗の盃に酒を注ぎながらいった。

くっ、小十郎め。

泣く泣くお茶をすすりながら、桜の花を見上げる。夜桜は初めてだ。

辺りにはたいまつが幾つも灯されていて、それなりに明るい。

昼に眺める桜も良いけど、夜は夜で良いもんだねえ。

「願わくば 花の下にて 春死なむ その如月の 望月の頃」

桜を眺めながら小声で囁くように言えば、ぶはつと盛大に酒を嘔出す音が聞こえた。
なにごと？

隣を見ると、顔を赤くして咽ている政宗と、介抱する小十郎がいた。
「大丈夫？どうしたの？」

ああ、酒がもつたいない。

「ごほつ！いま、なんていいやがった？」

「ん？今？」

「辞世の句みてえなのが聞こえたが？」

苦しげにしている政宗に代わり、小十郎が背中を撫でながら聞いてきた。

「ああ、聞こえてたのね。西行ってお坊さんの有名な和歌だよ。知らない？」

「聞いたことねえな。」

「そっか。」

「ツキ、ずいぶん渋い歌を歌ったもんだな。」

ようやく呼吸が整った政宗が、ちよっぴり涙目でこちらを見た。

「そう？私は好きだよ、この歌。」

これだけ綺麗な景色の中、静かに息絶えることができたなら。きつと幸せな人生だったなあって思いながらいける。

なんて、ちょっとぴりセンチメンタルなことを考えちゃうのも、桜のせいかな。

ちよつとでも風が吹けば、ひらりひらりと桜の花びらが舞い踊り、その動きは見ていて飽きない。

しばらく眺めていると、なにやら目の前に赤い毛氈が敷かれ、琴が運ばれてきた。

え？誰かが演奏するの？

尋ねようと横を見れば、小十郎が立ち上がって、琴の方へ歩いていった。

「え？まさか、小十郎が琴を演奏するの？」

残った政宗に聞くと、にやっと笑って琴が運ばれてきたほうを顎で示した。

「琴は喜多だ。小十郎は童笛。二人とも結構名の知れた名手なんだから？」

言われて振り返れば、喜多さんが桜重の着物をきてこちらに向かってきた。

「うわぁ……。喜多さん綺麗……。」

小十郎が喜多さんの斜め後ろに座って、二人でそろって一礼。さすがのヤンキー集団も、静かにその演奏が始まるのを待った。

懐から横笛を出した小十郎が、日ごろからは想像もできないような優雅な所作で笛を構える。

それにあわせて、喜多さんも琴に手を乗せて、一瞬だけ二人顔をあわせた。

澄んだ高い笛の音色が最初に響いた。
それから追うように琴の音。

楽曲なんて分からないけど、凄く綺麗な音楽だ。
時には強く、時には消え入りそうなほど優しく。
桜が舞い散る風景と、二人の姿が夢のように儂くも美しいものに見える。

ゆっくり目を閉じて音の世界に聞き入る。

瞼の裏で、まだ両親が居た頃の私が、兄と楽しく舞を待て居る姿が
浮かんだ。

ずっと辛い思い出しか思い出せなかったのに……。
優しく笑いかける兄に思わず頬が緩んだ。

やがて笛の音が夜空に消え入って、二人の演奏は終わった。
ゆっくり一礼をする二人。

「That's great!」

静寂を破ったのは、政宗の満足げな言葉だった。

「相変わらず、最高だ。」

「ありがとうございます。」

それを皮切りに、あっちこっちで指笛や歓声があちこちでやんややんやと始まった。

あーあ、雰囲気一瞬で崩壊。

でも、これが伊達軍らしいっちゃ、らしいのかも。
喜多さんも小十郎もみんなの所に引きずり込まれちゃった。

「どうだった？」

いっきにお祭騒ぎに戻った連中を眺めながら、政宗が尋ねた。

「すごいね！あんな綺麗な演奏、初めて聴いたよ！」
「だろっ？」

まるで自分が褒められた様に嬉しげだね。

自慢の家臣なんだって全身で語っていて、ちょっと可愛いね。

って、ことを口にしようものなら、どんな目にあうか分からないので、言いませんけどね。

でも、本当にすごかったなあ。

「笛については、私やったことないから分からないけど、琴は本当にすごい。あんなに綺麗な音が出るんだねえ。今度喜多さんに教えてもらおうかな。」

「なんだ、ツキも琴を爪弾くのか？」

「うーん。まあ、ね。ほら、古くから続く家だったし、神楽とは少し違うけど舞を舞うのが宗主の仕事みたいなところもあって、その伴奏に琴とか笛とかみんなちよつとずつかじるんだよね。私笛はどうしてもダメだったから、琴をやったんだけど、琴もねえ……。酷いときは糸を切っちゃって、みんなに呆れられてたなあ……。」

はうつと、内心落ち込んでみると、政宗がこちらをじいっと見ているのに気がついた。

「なに？なんかついでる？」
花びらでもついでているのかと、頭を撫でて見ていると、ちよいちよいと手招きをされた。
ん？なんだろ。

ハイハイするように近寄れば、また膝の上に抱え上げられた。
……しまった！！昼間の悪夢再びか！？

ビシツと固まっていると、政宗がくつくつ笑った。

「なんもしねえよ。ただ、少し肌寒いから、行火あんか代わりだ。」

「お酒飲んでるんだから、私よりはよっぽど暖かいでしょうが。」
言いつつも、私自身が暖かいので、降りようとはしないけどね。

結構座り心地も悪くはないし、暖かいし、いい座椅子なんだよね。

思っていることがばれたのか、むにとほっぺを抓られた。

「いひゃい！」

「ツキ、ここでの生活は慣れたか？」

思いもよらなかったことを聞かれて、思わず振り返って政宗の顔を見上げた。

穏やかな左目にぶつかって、私は素直にこくと頷いた。

「ここに来てすぐの頃は、ちよつと一人になったりすると、前の世界のことを思い出したりしては、苦しかったり悲しかったりしたけど、今は大丈夫。思い出すのは、子供の頃のこととか、楽しかったことの方が多くなったよ。」

離れたところではしゃいで踊りまわっている、モヒカンとスキンヘッドを眺めながら、くすつと笑った。

先日あの二人と会った時の事を思い出して笑いがこみ上げる。

「なんだ？」

「あのね、この前あの二人が私のところに来てね、・・・ぷぷぷつ
！」

「なんだよ、気持ちわりいな。」

「うるさい。でね、よっぽど私が暇そうにしてたように見えたらしくてさ。一緒に遊んでくれたのね。その遊びって言うのがさ、・・・
・あははははは！！思い出したらお腹がよじれる！！！」

あの強面がよ？必死に鞠をついたり、人形遊びをしようとしたり。普通なら気持悪いとしか思えないんだけど、彼らすんごく真面目に私の相手をしてくれてね。

もう、おかしくておかしくて。

何のバツゲームかと思っただわ。

結局耐え切れなかった私が提案した、鬼ごっこをすることになったんだけど、これがまた凄くて。

通りすがったほかの兵士も巻き込んで、気がつけば伊達軍総出の鬼ごっこになっちゃった。

小十郎にばれたら、そうとうヤバイ鬼ごっこだったね。

「と、とにかく、一緒に、ね、遊んで、くれたん、だよ。」

「大丈夫か？死にそうだぞ？」

息も絶え絶えになる私の背中を撫でながら、政宗は呆れ顔だ。

「大丈夫。えと、何の話をしてたんだっけ？」

「いや、もう分かったからいい。」

くいつと盃を空けて、再び酒を注ごうとしたが、徳利の中身は空っぽだった。

転がってる徳利は、5個。

結構良いペースで飲んでるなあ。

小十郎も帰ってこないし、仕方ない。貰いにいつてやるか。

立ち上がるうとしたら、政宗に止められた。

「お酒貰ってくるよ?」

「いい。そろそろ行くぞ。」

「行く?どこに?」

抱っこされて連れてこられたのは、厩舎だった。

馬?何で馬?

そのまま自分のところに行くと、馬も政宗がわかったようで顔を上げた。

サラブレッドを一度だけ見た事があるけど、あれに比べれば全体的に少しずんぐりしてる。

まあ、サラブレッドは走るためだけの馬で、この馬たちは戦場に駆り出される馬だからねえ。

「一応聞くが、馬に乗れるか?」

馬に手綱を着けながら政宗が顔だけ振り返った。

「一応つてのむかつくけど、乗れせん。」

今時馬で戦争する人はいませんから。

近場だからと、手綱をつけただけで鞍も着けずに馬を出すと、私を片腕で抱き上げて、そのまま馬に乗り上がった。

「ちょ、マジ？」

ここに来た時の悪夢再びか！？

「しっかり捕まってるよお？」

「お前が手綱をしっかり握れよ！！」

「No problem！」

問題ありまくりだつて！

落馬する時はお前も道連れじゃあ！と、渾身の力でしがみつく事し
ばし、馬のスピードが徐々に落ちて来たので恐る恐る顔を上げた。

ふおおおおお！

城で見た桜も綺麗だったけど、ここはもっとすごい！

小高い丘の上に何十本という満開を迎えた桜が、風に花を散らせて
いた。

松明の明かりとかはないけれど、半月を過ぎた辺りの月が思ったよ
りも明るく辺りを照らしてる。

「すげえだろ？」

「うん！城のも綺麗だけど、ここのはもっとすごい！」

馬から下ろしてもらったのももどかしく、地面に足が付いた途端走

り出した。

人があまり来ない場所なのか、散った桜は踏み潰される事なく綺麗なピンク色の絨毯が広がっていた。まるで雪みたいに降り続く桜。

「ここはオレが子供の頃見つけた場所だ。小十郎も知らねえ。」

隣に来た政宗が、いつの間に用意していたのか、徳利と小さな盃を二つ取り出した。

「ほれ、飲むだろ？」

差し出されれば、素直に受け取った。

「ありがとう。気が利くじゃん。」

「あれだけ物欲しげな目をされればな。」

一言余計だ！

ひらりひらり……。ひらりひらり。

二人並んで、特に会話もなく、静かに盃を傾けてはまた桜に魅入られる。

ひらりと、花びらが一枚、盃に落ちた。

「……………こんな綺麗な世界に、ずっと居られたら良いのに……………」

思わず零れた言葉。

政宗はハッと笑った。

「汚いもんがあるから、綺麗なものが綺麗に見えるんだよ。綺麗なものだけなら、いつか何も感じなくなるぜ？」

「うん。そうかもね。」

夢は夢だから、綺麗なものとして憬れていられるんだろうね。手に入れたら、それもいつか不要なものとして捨ててしまうのかもしれない。

「でも、願うことは、大切なんだよ。」

真つ暗などん底の世界で憬れていた綺麗な夢のような世界。
二度と私には手に入らないと思っていた。
諦めて、綺麗な世界さえ憎みかけていた。

けれど。

ここに来て、沢山のものを与えてもらった。

安心して眠れる場所。

毎日食べられるおいしいご飯。

笑って語り合える時間。

自分を認めて、受け入れてくれる人たち。

全て政宗と出会わなければなかったことだ。

「政宗、ありがとうね。」

「You're welcome」

この場所に連れて来たことのお礼と思って受け取ったのかもしれないけれど。

私を見つけて、拾ってくれてありがとう。

11 桜の下にて（後書き）

西行の和歌は印象に残っている歌の一つです。特に古典に造詣が深いわけでもない作者ですが、学生時代に読んで、想像して、共感した歌です。

12 猿も木から落ちる(前書き)

ヒロインの知識レベルは、作者と同じです。サンデー様、アニキ様ごめんなさい(´・`・´)

12 猿も木から落ちる

風の強い日も落ち着いて、爽やかな季節の卯月がやってまいりました。

田んぼでは田植えが始まって、なんとなく心躍る季節。もちろん、ここ米沢城の人たちも私も農業に精を出して、みんな丸となって頑張った。

驚いたことにその指揮は全て小十郎がしているらしくて、執務中の政宗の監視も程ほどに畑に行ってしまうこともしばしば。その表情は愛しの彼女にでも会いに行くんですか？ってくらい嬉しそう。

初めは本当に彼女に会いに行くのかと思ったくらいだ。

先月の満月の翌朝、また少しだけ成長して、小学校入学くらいの身長になった。

これで満月の度に少しずつ元の大きさに戻ってるんだと分かって、かなりほっとした。

ただ、伊達軍の皆の反応が少し怖かった。

普通の子供じゃないって分かって、怯えられたりしたらどうしようって。

でも、皆大きくなったと喜ぶだけで、ごく普通に接してくれたのだ。

不思議に思っただけに皆に聞いて見たら、小十郎から説明があったんだって教えてくれた。

皆の前で力を使ったすぐ後のことだったらしい。

道理で歓迎会からこっち、誰も何も聞かなかつたんだな。ほんと、良い人たちばかりで感謝するばかりだよ。

今日も日課となった政宗の手伝いのため、執務室に向かうと、政宗と小十郎以外に、成実と綱元がいた。
おや、珍しい。

「おはようございます。成実来てたんだね。綱元さんもここに来るなんて珍しい。」

「ツキちゃんおはよう。」

「おはよう、ツキ。」

なんとなくビリッとした空気を感じつつ、なんかあったのか？と内心首を傾げていると、政宗が見ていた書類から顔を上げた。

「ツキ、今日は執務はなしだ。」

「ん？なんかあるの？」

「使者が来る。敵国の武将だ。何があるか分からないから、今日はこっちには近寄るな。」

ほうほう。だから、みんな集合してるんだね。

政宗愛されてるなあ。

「了解。緊張を要する場に、私みたいな子供が居たら違和感だしね。休暇を貰ったってことで、ゆっくりしてるよ。」

ふふっ、これはチャンスだ。前から実行しようとしていた、お出かけのチャンス！

「なんだ、てつきり除け者にされたと騒ぐかと思ったが、嬉しそう

だな。」

「もう、肩凝る作業をしなくて良いと思うと、嬉しいですよ。」
鋭い小十郎の突っ込みに、こっそり冷や汗を拭いつつ、にっこり答えた。

「安心しろ。アイツが帰ったら、溜まった分の仕事がある。」

「ぐはあ！休暇が楽しくなくなるようなこと言わないでえ！」
ただでさえ、最近回される仕事量がハンパなくなってきてるって言うのに！！

冬は何もできないから、比較的暇らしいんだけど、雪解けと共に回ってくる書類の数は日々増えるばかりだ。

明日のこと考えない。考えたら負けだ。うん。

「興味本位で聞いちゃうんだけど、誰が来るの？」

部屋に帰ろうと襖を引きながら、ダメもとで尋ねると、小十郎が苦虫を噛み潰したような顔になった。

政宗は不敵な笑い。

綱元さんはちよつと頭がいたそう。

成実は何時もと変わらないニコニコ顔。

なんだ、この反応は。

「甲斐の武田のオッサンの所の、真田幸村って武将だ。」

「……ん？真田幸村？」

え？あの大阪夏の陣の真田幸村？

今まであまり他の国について考えたことなかったな。

政宗が回してくる書類は奥州内のことばかりだったし。

・・・こりゃ、すこし勉強しておかないと・・・かな。

そんなわけで、他国に多少は詳しくそんな人を求めてやって参りました、兵士の詰所。

鬼ごっこ以来結構顔見知りもできて、今では政宗が忙しい時はここで暇をつぶす事が多くなった。

女が兵舎に行くなどと、小十郎がぐちぐちいうので、内緒だけどね。

「たのもーう！」

一応声をかけて戸を開けると、丁度休憩中だったのか、円陣を組んでしゃがみこんでいるのが見えた。

つかさ、豊あるのに、なんでわざわざ地面でう　こ座り？

「お嬢！どうしたんっすか？」

ニコニコ愛想がいいのは、ちよつと小太りな孫兵衛。

「今日はお客さんがくるから、お休みなんだって。みんなは忙しい？」

「ヒマっす！丁度これからヒマだってんで、裏山で山菜でも採ってこようかと話してとこなんすよ！」

孫兵衛を押し退ける様に出でて来たのは、長髪の文七郎。

「へえ、裏山で山菜採れるんだ。私も行ってもいいかなあ？」

「もちろんっすよ！」

文七郎をさらに押しつけて前に出て来たのは、リーゼントの良直。この三人が、人形遊びまでしてくれた、なかなか面白いトリオだ。「んじゃ、ちよつくら着替えてくるんで、待ってて！」

この前小十郎と一緒に畑仕事を手伝うのに、用意してもらったのがあったはず。

着物は動きにくいし、すぐ着崩れするから、袴を貸してもらったんだ。

よくこんな小さいサイズがあったねえって言ったら、政宗が元服前に着ていたやつなんだって。

それはそれで、汚しちやまずいんじゃない？と思っていたら、濃紺の袴はすでに所々泥汚れっぱいのがついていて。

不思議に思っただけなら、政宗もよく小十郎と一緒に畑に行ってた様で、その時着ていた物だと、喜多さんが教えてくれた。

そんな訳で、ダッシュで部屋まで戻って、私用の箆笥の中から、着物と袴を取り出す。

今日はチビ政宗コレクションより、濃茶の袴と、若草色の着物をチョイス。

ぱぱっと帯を解いて、ちゃちゃっと脱いで、着物を羽織る。

男用の着物はお端折りないから楽ちんだわ。

帯を結んで、後は袴。

袴もそんなに難しくないから、ささっと着込んで、準備完了！

うむ。鏡を見ながらじゃないから、多少不恰好かもしれないけど、子供だし問題はないでしょう！

いざ出陣！

裏山と言つて、どの規模の山を想像しますか？

私はドラ もんでよく見る山くらいかと思つてました。

「マジで山だと思わなかつたよ！」

草履で来た私は敗者だ！

皆はすっかりした皮足袋を履いて来ていて、山登りする気満々だ。うう、みんなの足でまとい決定。

仕方ない。ここまで来ただけでも満足しなきゃ。

「ねえ、草履で来ちゃつたから、私ここで馬と一緒に待ってる。」
「めんね。」

やる気に燃えてるところを水をさす様で申し訳ないけど、山中で皆に迷惑かけるよりはました。

「お嬢一人をここに置いていく訳にはいきませぬ。おぶつて差し上げますよ？」

良直がしゃがんで背中を見せたけど、そういうわけにはいかない。

「大丈夫。ここから動かないようにするし。」

しばらく悩んでいたようだが、やがて意を決すると皆山の中に入つていった。

山の入り口の、比較的開けた場所で、すぐ近くには川が流れている。

川の水を飲んだり、草を食べてまったりのんびりしている馬を、少し離れたところからぼんやり眺めた。

そろそろ政宗の所にお客さんが来た頃かなあ。

真田幸村かぁ……。どんな人物だったっけ？

歴史にそこまで詳しくなかったから、伊達政宗がいつ何をしたのか？とかその辺りのこともサッパリなただけだよ。

そもそも私の居た世界の過去って訳でもないから、名前が一緒でも全然違うのかもしれないし。

奥州って東北だったよね。仙台は宮城か。

落ち葉を払いのけて適当な木の枝を手に取ると、ざっと日本地図を書く。

確か、北海道はまだ開拓されてないはずだからパス。

えと、東北が奥州だとして、新潟辺りは越後で上杉謙信。長野と山梨は甲斐で武田信玄。

神奈川辺りは北条？んで、千葉辺りが里見だっけ？

それから静岡とか辺りは徳川で、名古屋は織田で、大阪が豊臣。

あと南はごめんなさい。分からないや。てへ。

で、時代の流れ的には、織田の鉄砲で武田信玄やられちゃうんだっけ。

織田信長は本能寺で明智光秀に打たれちゃって、明智光秀もすぐに豊臣秀吉に打たれちゃう。

で、しばらく豊臣秀吉の天下が続いて、秀吉の死後、関が原、大阪冬の陣、夏の陣で徳川の天下が確定。

うーん。そうするとき、政宗はどの辺りでどう活躍するんだろ。もっとちゃんと勉強しておけばよかったなあ。

ダメだ、私一人で考えてても、ない知識からは何も分からないや。今度小十郎に聞いて見よう。

棒を投げ捨てる、今度は少し近くを歩いて見ることにした。

なんだか、アレが出てきそうな感じの山だなあ。

えーと、なつていったっけ。ほら、ジリ作品のやつ。森の中でカタカタ音をたてて首とか回しちゃうやつ。何だったっけかな。

あ、そうだアレだ！

「まっくー くる けでておいでー！でーないとめーだまをほーじくるぞー！！」

ん？なんか違ったか？

と、首を傾げた時。

「こわー！！」

誰も居なかったはずの木上から、男の声が聞こえて、迷彩柄の服に身を包んだ男が落ちてきた。

大将から旦那一人を奥州に向かわせたと聞いて、心配で様子を見
に向かう途中、山の中で一人でしゃがみ込む子供を見つけて立ち止
まった。

子供の近くには馬が三頭繋がれていて、それ以外に人の気配はない。
・・・いや、ここから少し離れた場所にいるな。

様子を見に走って見れば、蒼の鎧を身に着けた男たちが、競うよ
うに山菜を集めているようだ。

って、ことはあの子は留守番なのかねえ。
山に一人で置いていくなんて、無用心だな。

なんとなくほっとけなくて、子供の所まで戻ると、木上から気配
を消して様子を窺うことにした。

しゃがみ込んで何事か考え込んでいる子供の足元には、かなり精巧
な日の本の地図が描かれていた。

この子、一体何者なのさ？

危険な感じはしない。ただの子供に見える。

そのうち飽きたのか、辺りをうろつき始めて、やがて首を傾げてま
た考え出した。

見ている飽きないな、この子。

何を悩んでるんだろ。

しばらくして、何か閃いたのか、嬉しそうな顔を見ると、突然大
声で歌いだした。

「まっくー くる けでておいでー！でーないとめーだまをほーじくるぞー！！」

こわー！何この子ー！突然無邪気な顔で目玉ほじくるとか言い出したあああー！？

衝撃は思わず口をついて出て、驚いた拍子にバランスを崩して、子供の前に落ちた。

ううーん。俺様忍失格。

びっくりして固まっている子供にへらっとな笑いかけると、付いた土を払って立ち上がる。

「いや、びっくりさせちゃってごめんね？俺様もびっくりしちゃってさ。」

目をまん丸にして固まっていた子供は、木の上と俺様を何度か見比べて、それから真っ赤になった。

あれま。可愛い反応。

「も、もしかして、聞いてたの？」

「だめだよー？目玉くりぬくなんて恐ろしいこと言っちゃ。」

めっとな軽く叱ってやると、子供は真っ赤な顔を手で隠して悶絶し始めた。

「誰も居ないと思ったのにいいいい……」

まずい。可愛すぎる。

この子持って帰ったらダメかな。

しばらくして落ち着いたのか、子供は疲れたと溜息を一つ付くと、その場に座り込んだ。

つられて俺様も一緒に座る。

「お恥ずかしいところをお見せしてすみません。」

ぺこりと頭を下げる子供の顔は、まだ若干赤い。

「いえいえ、通りすがりに子供一人で何してるのかと思って、しばらく見てただけど、君なかなか面白いねえ。」

「記憶から即刻抹消してください。できないなら、私が抹殺して差し上げます。」

「だから、怖い事言っちゃダメだって。……って、君、女の子？」

袴を穿いてたから男の子かなあと思ってたけど、良く見れば女の子だ。

「そう。私はツキって言います。」

「ご丁寧にどうも。俺様は佐助ね。」

「佐助？……佐助……。」

ん？どうかした？

俺様をしげしげと眺めて、何かを思い出すような顔をして、それからポンつと手を叩いた。

「真田幸村だから、猿飛佐助なのか！すげえ！」

え？なんで旦那のこと知ってるの？ってか、俺様佐助としか名乗ってないよ？

……この子、本当に何者？

俄かに警戒して距離を取った俺様に、子供はきよとんとした顔に

なつた。

「どうして、俺様や旦那のことを知ってるのかな？」

懐のクナイにいつでも手を伸ばせるようにしながら尋ねると、子供は首をかしげた。

「えと？今日真田幸村が来るって政宗が言つてて、何があるか分からないからあつち行つてろって言われて、暇だから山菜取りについてきて、会った人が佐助って名乗ったら、普通猿飛佐助でしょ？違つた？」

は？なんでこの子から独眼竜の旦那の名前が出てくるのさ！？

流石の俺様も、頭がこんがらがってきたよ。

「ツキちゃん、君何者？独眼竜の旦那のなに？」

「居候です。」

「居候？子供なのに？」

独眼竜の旦那の所にこんな小さな子供が居るなんて、聞いたこともないよ？

「事情があつて、お世話になってます。．．．いや、お世話してます．．．か？」

はあ？

事情って何さ？お世話してますってどついついこと？

聞きたいことがたくさんあつたけど、どうやら時間切れみたい。残念。

遠かった気配が三つ、こちらに近づいてきている。

「そろそろお迎えが来ちゃったみたい。俺様もそろそろ旦那の様子を見に行かなきゃならないから、行くね。また近いうちに、ゆつくり話をしようね。」

是非とも、ツキちゃんについて詳しく知りたいなあ。

にっこり笑って言うと、子供はニヤリとどっかの誰かを彷彿とさせるような笑みを浮かべた。

「佐助が政宗の敵でないならば、いつでも歓迎するよ。政宗同席でね。」

うわあ、俺様なんか一本取られた気分。

12 猿も木から落ちる（後書き）

本日もご訪問ありがとうございます。

くどい様ですが、ヒロインは歴史を良く知りません。知識は全部テレビで仕入れた模様です（笑）

おそらく、信長が現れようが、秀吉と信長が敵対してようが、全てノー突っ込み、華麗にスルーでしょう。

13 赤い人に会いました

佐助が消えた後、大量の山菜を籠いっぱいにして戻ってきた良直たちと、何事もなかったフリをして合流して、ただ今城に帰還中。安心して乗っけていられる馬って、最高だね。

ちよっとお尻が痛いのが難点と言えば難点だけど。

いやあ、佐助に会って警戒されたときはどうしようかと思ったよ。私は歴史上の人物として知っているけど、うっかり興奮して猿飛佐助ってフルネームで言っちゃったのはまずかった。

失敗失敗。

政宗の名前もつい出しちゃったしなあ。

政宗のところに佐助が行って、私と会ったよとか言っちゃったらどうしよう。

佐助、二度とこつちくんな。

甲斐へカエレ。余計なことを言っくなよ!?

それより、着いたらバレる前にさっさと着替えて証拠隠滅せねば。地べたに座ったから、袴のお尻が汚れちゃったよ。

政宗も小十郎もまだ来客の相手をしてますように!

願いむなしく、城に帰ったら門の前で小十郎と政宗が仁王立ちしてました。

とほほ……。

黙って城を出たことを怒られ、ついでに一人で山の中に居たことも白状されられて怒られ、も一つおまけに袴を汚したことも怒られた。

言い訳を言う隙すら与えてもらえず、二人がかりで怒られて、ちょっとマジに泣きたい。

そんなに怒ることないじゃん。

私だって、外に出たいんだよ。

外の世界を見てみたいのに。

なんでそんなに怒るの？

ぐっところらえていたのに、ぼろりと目から涙が落ちた。

「……………つ……………つく……………」

「ツキ？」

驚いたような政宗の声に、私はキツ顔を上げて睨んだ。

「政宗と小十郎のばかあああああ！！！！」

「お、おい！？」

そのまま二人を突き飛ばすように間をすり抜けて、そのまま外に飛び出した。

がむしゃらに走って、城の裏手に出たところで、思いつきり声を上げて泣いた。

なにさなにさ!!

わたしだつて、わたしだつて!!

ちくしょー、政宗なんか・・・小十郎なんか・・・!!

「政宗と小十郎なんかハゲちまえええええええ!!!!」

「ぶは!!!!あははははははは!!!!!!」

「こ、こら、佐助!!」

いきなり笑い声が聞こえて、驚いて振り向くと、腹を抱えて笑い死にしそうな佐助と、佐助を諷める赤い服を着た政宗くらいの歳の男の人が物陰にいた。

「さ、すけ?」

なんでこんなところに居るの?

びっくりして涙は止まったけど、しゃっくりがとまらない。

着物の袖でごしごし涙を拭くと、未だにひーひー言ってる佐助と赤い人のところに近づいた。

「ツキちゃん最高だよ!!あははは!!双竜の旦那のハゲ・・・」

ぶふ!ぶは!あはははははは!!!!

「いい加減にせぬか、佐助!」

そういつている赤い人も、必死に笑いを堪えようとしている様に見えるが。

「なん、つで、ここにっ、いるの？」

ようやく笑いが収まってきた頃に尋ねると、佐助はしゃがんで私と目線を合わせた。

「いや、帰らないとダダをこねる旦那を説得していたら、ツキちゃんが凄い勢いで走っていくのが見えたんでついてきたの。」

「某は、真田源次郎幸村と申す。何ゆえ斯様に泣いていたのでござるか？」

「……この人が真田幸村？」

若いのにずいぶん言葉遣いは古風だな。

政宗が会わせない様にとしていた人だけど、会っちゃったし、政宗の言うことなんか今は聞きたくない気分だし、いつか。

「黙って、やまっ……に、行ったのが……っ……。」

「あー、あれ、黙ってきてたの？そりゃ、怒られるよ。」

「山？どういうことだ？」

「山に山菜を取りに来た奴らに黙ってついて行ったのが、竜の旦那と右目の旦那にばれて怒られたんだって。」

「あんなに怒ることないのにいいいい……。」

思い出したらまた涙が出てきた。

「それは、ツキ殿がいけなかつたでござるよ？」

幸村が私の涙を拭って、優しく言った。

「ツキ殿が突然居なくなってしまうわれて、政宗殿も片倉殿も心から心配したのでござろうよ。怒りは心配と安堵の裏返し、でござる。」

そうかな……。

うつむいて、二人の様子を思い返す。

門の前で私を見つけたとき、ほっとした様な顔をしていた・・・かな？

「ちゃんと謝れば、お二人も許してくれるはずでござるよ？」

「・・・そうかな・・・。言うこと聞かないなら、もう出てけとか言われなかな・・・。」

「言うわけがないでござるよ！もし、万が一斯様なことを申されることがあったら、この真田幸村がお二人に鉄槌を下してやるでござる！」

ぐっと握りこぶしを作る幸村。

良い人だなあ・・・。

「旦那も成長したね・・・。俺様感動したよ。」

胸元から手ぬぐいを取り出して、目元を拭う佐助。
お前は子供の成長を喜ぶ母親か。

「ツキ。」

政宗の声が聞こえて、振り返ると腕を組んで私を見ていた。

う・・・。心の準備がまだできてない・・・。
どうしようかとためらっていると、背中をぽんと優しく押し出された。

「某がついているでござる。ちゃんと話をしてこられよ。」

「……うん。」

おずおずと政宗に近づいて、あと三步という所で立ち止まった。

「あ、あのね、まさむね。……えとね……。」

うつむいたまま、顔を上げられずに、消え入りそうな声で何とか言葉紡ぐ。

うう、この歳になって謝るとか恥ずかしいし、怖い。

本当に出て気とか言われたらどうしよう……。

「だ、だまって居なくなつて、ごめんね？」

よし、言った。言えたよ私！

けれど、政宗は黙つたままだ。

え？……もしかして、本当に、出てけコース？

怖くなつて、恐る恐る顔を上げると、何かを堪えるような政宗の目とぶつかった。

「ツキは、この城に居るのが窮屈なのか？」

「え？」

「外の世界に出たいのか？」

なんで、そんな顔？

どうして、政宗の方が泣きそうな顔してるの？

「出たいか？って言われれば、そりゃ出たいよ。でも、ここが窮屈だとか、嫌だとかそんな風に思った事はないよ。」

ここに来て二ヶ月ほど経つけど、米沢城から出たのってまだ二回

だけ。

何でか分からないけど、政宗は私が外に出ようとしたりするのを避けようとしている節がある。

「なんで一人で勝手にいなくなつた？」

「政宗が忙しそうにしていたからだよ。私を近寄らせたくないかつたんでしょ？逆に聞くけど、政宗は私を他所には出したくないと思ってるみたいだけど、それは、私が普通じゃないから？政宗も私のことバケモノだつて思ってる？」

自分で言っておいて、また泣きそう。

一度泣くと涙腺が緩みやすくなつちやつて困る。

泣かないように我慢しながら政宗を見上げると、驚いて目を見開いていた。

「違う！ツキをそんな風に思ったことは一度もねえ！」

「じゃあ、なんで!？」

叫んだ瞬間、ほろりと涙が零れた。

「私はね、見たいの。政宗や小十郎や綱元さんや成実が毎日頑張つて良くしようとしている、この国を。その上で、私にできる手伝いをしたかったの。」

今日はどこそこで雨が降って田植えの準備は順調だとか、飼っている牛に子供が生まれたとか、書類だけじゃなくて、目で見たいの。それがダメなの？どうして？」

政宗は左手で頭を抱える様に私の前にしゃがみこんだ。

あーとか、うーとか、もごもご言っている。

やがて、はああああっと盛大な溜息を吐いた後、腕の隙間から私を

見上げた。

「ツキ、お前の力はオレたちのものとは違う。それは分かるな？」

「うん。」

「その力を狙う奴らが必ず出てくる。下手したら命すら狙われる。散々そういう目に遭って来たお前を、オレはもうそんな目に合わせたくなかったんだ。・・・だが、これはただの言い訳だな。」

そんな風に思っていたなんて、知らなかった・・・。

ただ拾っただけの人間に、そこまで思ってくれているなんて・・・。
がりがり頭を搔いて政宗は立ち上がりながら私を抱き上げた。

「Sorry・これからはお前にも奥州を見せてやるよ。そして、天下をな。ただし、オレと一緒にというのが条件だ。You see？」

「I see・政宗、ごめんなさい。」
ぎゅっと首に抱きついて謝ると、政宗は優しく頭を撫でてくれた。

「あー、ところで、俺様たちの存在はなかったことにされてる？」

あ、すっかり忘れてた。

振り返ると、良かったでござるうううう！！と泣いて叫んでいる幸村と、一本足で立ったまま足を組んで暇そうにこちらを見ている佐助がいた。

すげえ、佐助器用だな！

「てめえら、なんでまだいやがるんだ？それより、今の話を聞いてたな？その記憶をきれーに消してやるから、ちよつと来い？」

私を下ろすと、すらりと腰に佩いていた刀を抜いて、佐助たちを手招きする政宗。

「ちょ、親子揃って似たようなこと言わないでよね！」

「この猿が！！誰が親子だ！！」

「んじゃ、兄妹？」

「弟ならともかく、政宗を兄とは認めません！！」

「ツキ！？」

シヨックだと私を見下ろす政宗を押しつけて、佐助と幸村の前に立った。

「おかげで仲直りできたよ。幸村ありがとう。」

「某は何もしてござらんよ。」

ほんとに幸村は人が良いあ。こつこつ謙虚さを少しは見習えと言いたい。

で、ここからは別問題なわけだけど。

うーん。どうしようかな。

幸村はともかく、佐助は初めから私を怪しいと見てるしなあ。

ここで誤魔化したところで、しつこく探りを入れられそうだなあ。

「I talk about only the power o

f h e a l i n g . O K ? (癒しの力についてだけ話すよ。いい?)」

「All right . I e n t r u s t y o u . (わかった。お前に任せる。)」

ひそひそと相談をしている間も、佐助は私から少しも目を逸らさない。

めんどくさいけど、仕方がない。

「佐助、今なら政宗のお許しも出たから、質問に答えるよ?だから、そんな穴が開きそうなほどこっちを見るな。」

溜息混じりに言えば、佐助はへえつと眉を片方だけ器用に上げた。

「良いの?じゃあ、遠慮なく。ツキちゃん、君は一体何者?」

まあ、その質問に尽きるよね。

全部を馬鹿正直に話す必要もないよね?

「私は、政宗と同じ歳の、ちょっと人とは違う力が使える、通りすがりの通行人です。」

うむ。こんな感じで嘘は言っていないな。

違う世界から来たってことは言っていないけどな。

「ツキちゃんが独眼竜の旦那と同じ歳?」

「どう見ても、装着もまだのようにお見受けいたすが?」

「どういうわけか分からないけど、縮んじやつたんだよね。そんなもって、どういう理屈かは分からないけど、満月になると、少しずつ元の大きさに戻ってるの。何で?とか言わないでよね?私だって知りたいんだから。」

完全に信じてない佐助と幸村だが、信じる信じないは私の知ったこつちやない。

「それで、力のことなんだけど、怪我を治したりすることができません。」

「怪我を？如何様にして？」

幸村が身を乗り出して聞いてきたので、自分で指先でもどこでも良からちよつと傷を作るように指示した。

私が自分でやっても良いけど、痛い思いはなるべくしたくないじゃない？

佐助にクナイを借りて、腕を数センチほど傷つけた幸村。

赤い血が垂れて、痛そうだ。

「これでよいか？」

「うん。で、こうやって、私が手をかざすとね……。」

掌に意識を集中させて、傷の上に翳すと、青い光が幸村の腕を包み込んだ。

「温かいでござる……。」

人に術を施すの、実はすんごく久しぶりだから、ちよつと不安だったけどなんとか成功したみたいだ。

ここまでかっこつけて、治せませんでしたなんて言った日には、佐助にどんな目に遭わされることやら。

気持よさそうに目を細める幸村から手を離すと、傷は綺麗になくなっていた。

よし。成功。

「ま、こんな感じ。佐助、どう？」

間抜けにも口をぱーんと開けたまま、幸村の腕を撫でたり叩いたりつねったりしている佐助に、声をかけると、そのまま私を見た。

「こりゃ、確かに凄い力だね。」

「すばらしいでござるー!!」

どうしてこう、この世界の人は、力を恐れたり嫌悪したりしないんだろう……。

怯えられたり逃げられたりするの慣れてても、賞賛とか尊敬の目で見られるのは、どうにも慣れないよ。

ちょっと困って隣を見上げれば、仕方ねえなあって顔をした政宗が、大きな手で私の頭をぐりぐりつと撫でた。

「おい、猿。これで満足か？」

「猿って言わないでくれる? ……確かに、俺らにはない力だね。ねえ、ツキちゃん、甲斐に來ない?」

「それを、オレが許すと思うか?」

佐助の言葉に、政宗の声が低くなった。

全身が殺気だつて、今にも刀を抜こうと柄に手を伸ばしている。

小十郎との鍛錬で見せたものとは、比べ物にならないほどの冷たい気が、ビシビシと飛び散つて、怖い。

「佐助の申し出はちょっと嬉しいけど、甲斐には行かない。ここに居る。これは決定事項。」

政宗の横から顔を出してはつきりと言えば、佐助はざーんねんと大して残念そうもない表情で大げさに肩を竦めた。

対する政宗は殺気を引っ込めて、満足そうにしている。

もつさ、この態度の差が私にとっては決定打だよね。
駄目で元々って感じがひしひしと伝わってるのに、本気で怒る政宗
のところにいると思うのが人情だよ。うん。

ところで、幸村と佐助は一体何しに奥州まで来たの？

事の発端は、幸村が使者としてここに来るって話しだつたはずだけ
ど。

政宗としては、用事が終わったんだからさっさと帰れって感じなん
だけど、幸村は終わってないから帰れないと言わんばかりだ。

「武田のオツサンが、同盟の話を持ってきたんだよ。もちろんお断
りだがな。」

同盟？武田？

全然話が見えません。

「質問です。武田のオツサンってだれ？」

「武田信玄公を知らぬのでござるか！？」

「武田信玄なら知ってるよ。風林火山でほうとうで信玄餅な人だよ
ね？」

「ほうとう？信玄餅？なんだそりゃ。」

あれ？ほうとうも信玄餅もないの？美味しいのに。残念。

つて、ちがう。話がそれた。

「その武田信玄が、政宗に同盟を持ち掛けたの？なんで？」

「近頃、織田の猛攻が続いていて、西はほとんど落ちた。西が片付けば、いずれ東へと侵略は始まる。各国で個別に織田に対するよりも、ここは一つ同盟を組んで織田を打とうってのが、うちの大将の考えな訳。ちなみに、上杉からは快諾を貰っているよ。」

ふーん。今日本はそういう状況なんだね。

初めて知ることばかりだ。

「で、政宗は同盟は嫌だと？」

「It is natural. (当然だ) オレはオレの力で天下をとるんだ。」

「小十郎はなんて？」

「小十郎の意見は求めてねえ。」

そうですか。

どうしたら良いのか？とか詳しいことは判らないけど、政宗が意地を張ってるみたいだってことはわかった。

こういうところが、弟にしか見えないっての。

「幸村は武田信玄の書状をもって来たんだよね？」

「もちろんでござる！御館様が直々に某に託された書簡でござる！」

「で、政宗はそれに返書を書いたの？」

「必要ねえ。」

なるほどね。

全身で御館様Love!!と訴える幸村にとって、その書状を無下にされた幸村は、帰る気にはなれないだろう。

「政宗、今夜一晩だけじっくり考えてみて。小十郎の話も聞いて。その上で同盟を断るなら、ちゃんと返書を書いて。それなら幸村も納得するでしょ？」

「ああ？めんどくせえ。考える必要なんてねえよ。」

「政宗殿がきちんと考えられた上でのご決断ならば、某も御館様の元に戻り、その意向をお伝えしましょうぞ。」

それまでは帰らない所存！と息をまく幸村を横目に、政宗の耳元にそっと顔を寄せると、ひそひそと耳打ちした。

「書簡書かない限り、たぶんこの辺りで野宿とかしてでも帰らないと思うよ？」

嫌あな顔をする政宗。

よし、後一押し。

「ちゃんと小十郎とも話をして、二人で同盟破棄するならするでちやんと礼儀には礼儀を返さないと伊達男の名が泣くよ？」

「……ツチ、仕方がねえな。」

よし。懐柔成功。

13 赤い人に会いました(後書き)

読了ありがとうございます。

14 深夜のお勉強

夕餉も入浴も済んで、今日も一日色々あったなあと思いつつ、喜多さんにお休みなさいの挨拶をして、さて寝ようかと布団に入った直後、政宗と小十郎の襲撃に遭いました。

完全睡眠体制に入ってたところだった私の機嫌は、現在うなぎ下がります。

「乙女のが就寝時間をなんと心得るか？お肌が荒れたら、責任とれよ？」

「ツキの意見も一応聞いておこうと思つてな。」
「ひとの話も聞かずに、政宗は布団の中の私を引き摺り出して、膝の上に乗せた。」

「一応程度の意見なんか、必要ないじゃんよ。失礼な奴だな！」
「すまねえな。ツキ。」

きつと暴走する政宗を止められなかった事に対する謝罪だろう。

小十郎は脱いだ羽織を私に羽織らせて、政宗の前に座った。
仕方ない。きつと昼間の事だろう。

考えろと言ったのは私だし、少しは付き合つか。

「で、話つて武田信玄の同盟の事？」

「そつだ。」

「ツキは同盟についてどう思つ？」

小十郎さん、私この世界の状況がよくわからないんで、明日あたりあなたに教えてもらおうと思つていたのですが？

私が別の世界から来た人間だつての、忘れてないだろうか？

「まず、教えてもらいたい事があります。今、この日の本の国の勢力図はどうなってるの？」

「そこからか。」

呆れた声の政宗。

「情報を故意に隠蔽していた奴が言うな。全て包み隠さず情報を公開しやがれ。」

出鼻をくじかれてがっかりしたみたいな顔すんな。

と、いう訳で小十郎先生と政宗助手席による戦国講座。

まず、東北一帯は政宗が治める奥州。小さないざござはあるものの、内政の充実を頑張っているおかげでとりあえず落ち着いている。そろそろ天下目指していつっちゃう？って感じらしい。

んで、お隣は上杉謙信が治める越後。お約束と言うかなんと言うか、ずっと武田信玄の甲斐と睨み合い&小競り合いを繰り返していて、今のところ奥州を攻める気はなさそう。

相模の北条氏政は武田信玄に押さえつけられている状況らしく、ここも奥州までは手が届かない。

その甲斐は、北条と同盟を結んで、それから越後とも同盟を結んだ。

その西に行けば、三河の徳川家康は織田信長と同盟を結び、織田は明智光秀、前田利家を配下において、中国地方および、九州を制圧。

辛うじて安芸と四国は織田に対抗をしているという状況。

なるほど。今一番強大なのは、織田軍ってことね。

「状況は大体分かった。で、武田信玄が持ちかけてきた同盟の内容は、伊達にとって不利なの？」

詳しいことを言われても分からないから、とりあえず小十郎の意見を聞く。

政宗に聞いたって、個人的感想しか出てこなそう。

「期限は織田信長の首を取るまで。織田軍が同盟国に戦を仕掛けてきた時には、他の国も兵を出して加勢すること。そして、織田を攻めるときは同盟国の連合軍で戦を仕掛けること。あとは武器や食料等の融通。対等な同盟の条件を提示してきていると、俺は判断した。」

ふむふむ。同盟としては、悪くはないわけね。

で、次は政宗か。

「政宗は、昼間天下は自分の力でとるって言ってたけど、同盟を結ぶ気にはまだなれない？」

「当然だ。織田信長の首はオレが獲る。」

「そこに、公算はあるの？織田の兵力と伊達の兵力は？」

「……ちっ。」

分かってはいるんだね。良かった。安心した。

これでオレが強いから大丈夫！とか言ったら、甲斐に行こうかとか

考えちゃうとこだよ。

政宗の膝から降りて、正面向かい合うようにして正座をすると、目を合わせて私の考えを話した。

「政宗は、奥州筆頭伊達政宗だね。奥州のみんなの生活を、命を、未来を背負う人だね。この同盟を受けるか蹴るかで、自ずとみんなの未来は変わってくる。だから、小十郎や綱元さん・・・まあ、一応成実の意見も聞いて、その上でじっくり考えて決めて欲しい。それが、私の意見。」

ゆっくり目を閉じて、政宗が考え込むと、私はほっと息をついた。良かった。政宗がきちんと感情を抜きにして考えれば、奥州のために必要な決断をすることができるはずだ。ちらりと小十郎を見れば、同じようにほっとした表情をしている。

まったく。最近なんだかんだと政宗に手を焼くと、私に振ってくるのやめてよね。単なる我がままならともかく、こんな重要な政治の局面なんて、私に振られても何もできないっつーの！

「小十郎、近いうちに甲斐に行くぞ。直接武田のおっさんと話をつける。良いな？」
小十郎の名を呼んで静かに開いた政宗の目は、迷いや苛立ちはなかった。

一つの方向を決めた、筆頭としての目だ。

「御意。」

深く一礼をして、小十郎は嬉しそうに私を見た。

だから、もう私に振ってくんない！

それからも何故か私の部屋で二人は甲斐に行く日程を詰めたり、同盟の内容で不審な点や納得いかない点を話し合っていた。再び政宗の膝の上で抱っこされつつ、最初は口を挟んだりしていたものの、日付が変わって大分時間が過ぎた頃、途中で寝落ちした。

難しい話は政宗の部屋でやれっつーの。

14 深夜のお勉強（後書き）

長くなったので分割します。

小十郎視点は23時投稿予定です。

15 右目は苦勞症（前書き）

お待たせしました。小十郎視点です。

15 右目は苦勞症

先触れ通りに、真田幸村は供の一人もつけずに、ここ米沢まで来やがった。

それが伊達など取るに足らぬと言っているようで気に入らねえ。

政宗様も同じお気持なのだろう。機嫌がよくない。

成実の案内で部屋に通され、挨拶もそこそこに書状を懐から取り出して、政宗様に手渡した。

書状に目を走らせて、数瞬の思案の後、真田に書状を突き返された。

「前から言ってるが、オレは誰とも連む気はさらさらねえ。帰りな。」

「御館様からのこの同盟の話を、受けぬと申されるのでござるか！

？」

「ああ、そう言ってる。」

そして、政宗様は話は終わったと言わんばかりに、部屋を退出なさってしまった。

確かに同盟はいずれは必要になるだろう。

それは政宗様とて心の片隅にあるはず。

だが、同盟を持ちかけた相手が悪かった。

信玄公、なぜ真田を使者になさった。

真田を好敵手としている政宗様が素直に話しを受けると思っのか？

頭が痛い。

「片倉殿、何故政宗殿は同盟を許諾ならぬのか？」

それは、使者がお前だからだ。

よっぽど言ってやろうかと思っただが、真田が捨てられた犬の様な目でこちらを見やがったので、ぐつと言葉を飲み込んだ。
そんな目で俺を見るな！

「政宗様には政宗様のお考えがある。」
それが、真田を喜ばせたくないとか、そんな理由でない事を祈るばかりだが。

ああ、胃が痛え。
畑で癒されたいもんだぜ。

それからしばらくして、ツキが城から抜け出して、うちの連中と山に出かけたと知らせが入り、ただでさえ機嫌の悪かった政宗様のいらつきは最高潮となった。
様子を見に向かわせた黒脛巾の報告で、まもなく帰ってくると分かった政宗様は、無言で城門の前に立塞がり、俺も一緒にツキの到着を待った。

政宗様はツキをそれは溺愛なさっている。

城の者は全員、政宗様の態度からそれを感じ取っている。気が付いてないのは、当のツキ本人くらいのものだ。

政宗様は、ツキの情報が外に洩れることを極端に警戒なされる。

ツキも薄々は自分が城に半軟禁状態であることに気が付いているようだったが、特段それを疎んじているようではなかった。

だが、違ったのだろうか。

俺や姉上にすら何も言わず外に出るとは。

もし、万が一、敵国の兵に会ったらどうする。

山で遭難したらどうする。

野生の獣に襲われたらどうする。

ああああああ………。胃が………。

人の気も知らずに、帰ってきたツキは政宗様と俺の姿を見つけたなり、うげええええ！！と叫んだ。

……今日は、徹底的に説教をしてやらねば。

この小十郎、修羅となろうぞ！！

政宗様と俺の説教により、小さくなっていたツキの肩が震えた。

「ツキ？」

驚いたような政宗様の声に、ハツとなつてツキを見れば、目に涙を浮かべて政宗様を睨み付けている。

「政宗と小十郎のばかあああああ!!!」

城中に聞こえそうなほど大きな声で叫んで、そのままツキは走つて部屋を出て行つてしまった。

ツキの奴、あれほどはしたないから足は広げると言つたはずだが。ましてや、政宗様に馬鹿だと?

「政宗様、この小十郎が捕まえて連れ戻してまいります。怒りを露に立ち上がった俺を、政宗様は引き止められた。」

「いや、小十郎、オレが行く。ツキにはツキの考えがあるのかも知れねえ。それも聞かずに頭ごなしに叱り付けたのは良くなかった。」
「そういうと、政宗様はツキを追つて一人で出て行かれた。」

確かに、ツキにも理由や事情があつたのかもしれない。

外見は子供でも、中身は成人した女だ。

時には政宗様よりもしっかりした考えを示すこともある。見た目に囚われて、ツキを子供扱しすぎた。

俺もまだまだ・・・だな。

しばらくして、機嫌の直ったツキを連れて政宗様に戻ってこられた。

何故か、後ろに、真田と猿飛も連れて。

「うちの旦那がどうも駄々をこねたらしくて、すいませんねえ。」
猿飛、てめえまで何でいやがる？

そして、真田。てめえは甲斐に戻ったんじゃないのか？

「・・・政宗様、ご説明を。」

「Oh、小十郎その面怖えよ。ツキが怯えるだろ？」

はっとしてツキを見れば、真田との会話に夢中でまったくこちらなど見向きもしてない。

「政宗様！！」

「うるせえよ、小十郎。とにかくこいつらを今夜は泊めることにした。準備しろ。終わったら、俺の部屋に來い。」

楽しみに話をするツキを見て舌打ちをすると、政宗様はツキを真田から引き剥がしてそのまま出て行ってしまわれた。

まさか、同盟について考え直されたのだろうか・・・。

それ以外に武田の者を城に一晚とはいえ泊めるなど、考えられん。

真田と猿飛の部屋をツキと政宗様の部屋から一番遠い離れに用意し、念のために黒脛巾の数人を張らせると、急ぎ政宗様のもとへと

戻った。

執務室にはすでにツキの姿はなく、政宗様一人が書状を手にして思案されていた。

「小十郎、この書状を読んでみる。」
渡されたのは、真田が持つてきた同盟についての書状だった。

端から端まで目を通し、同盟の内容と条件を頭で整理する。
多少の疑問や問題はあつたものの、概ね悪くはない内容だ。

だが、あの甲斐の虎とも言われた男が、出してきた同盟の話だ。
熟考に熟考を重ねて、あの男の真意を読み取らねば。

「悪くはないと思います。各地へ飛ばした者の報告では、織田の勢力は日増しに強大化し、他国を蹂躪しつくしている様子。万が一この奥州へと目を向けられれば、流石に分が悪いかと。」

「小十郎はこの同盟を結んだほうがいいと思つてゐるって事か？」

「はい。乗つてさほど損はないかと。」

書状を返して政宗様を窺えば、深く思案しておられる様子。

「なあ、小十郎。オレは魔王のおっさんの首を獲る。そして、天下を取つて奥州を今以上に安定させて繁栄させる。その決意に少しの躊躇いもねえ。」

「はつ。承知しております。」

「……。それならいい。少し考える。」

昼間はあれ程までに同盟を結ぶことを拒否されていた政宗様が、再考されているのはなぜだ？

何があつた？

それが分かったのは、夕餉も終わり、そろそろ皆が就寝しようとした頃だった。

「Hey、小十郎。ツキんどこ行くぜ？ついて来い。」

「は？ツキは先程就寝のため部屋に戻りましたが？」

そろそろ床に就く頃だろう。

「いいから、行くぞ。」

「政宗様！？」

止める間もなく、ツキの部屋の方へ向かう政宗様を慌てて追いかけた。

「ツキ！ちよつと付き合え！」

襖を開け放つと同時に言い放つ政宗様に、ふざけんな！！とわめくツキの声が中から聞こえてきた。

断りもなく部屋に入り、すでに火を消して就寝していたツキを布団から引きずり出し、膝に抱える政宗様に、頭痛を再び覚える。

「一応程度の意見なんか、必要ないじゃんよ。失礼な奴だな！」

確かにそうだな。

だがな、ツキ。政宗様が意見を求められるなど、そう滅多にあることではないんだ。

政宗様の迷いを聞いてやってくれねえか？

「すまねえな。ツキ。」

羽織を着せてやりながら言うと、仕方がないなあと呟いて、政宗様

を促した。

そもそもツキには、この日の本の他国の知識がなく、まずそこから説明をした。

違和感なく執務に携わっているおかげで、ツキが異世界から来たってことを忘れかけてたぜ。

あらかた理解を示した後、俺に同盟の内容についてどう思うかと尋ねた。

日中政宗様に申し上げたとおり、悪くは無い同盟内容だと思つと答えた。

それに何度か頷いた後、政宗様を見上げた。

「政宗は、昼間天下は自分の力でとるって言ってたけど、同盟を結ぶ気にはまだなれない？」

「当然だ。織田信長の首はオレが獲る。」

「そこに、公算はあるの？織田の兵力と伊達の兵力は？」

「・・・・・・・・ちつ。」

政宗様も本心では分かっているらしいのだ。

このまま織田と正面からぶつかることは得策ではないと。

だが、奥州筆頭としての、意地と誇りが同盟を躊躇わせているのだ。

ツキは政宗様の膝から降りると、強い光をその目に湛えて正面か

から見据えた。

「政宗は、奥州筆頭伊達政宗だよ。奥州のみんなの生活を、命を、未来を背負う人だよ。この同盟を受けるか蹴るかで、自ずとみんなの未来は変わってくる。だから、小十郎や綱元さん・・・まあ、一応成実の意見も聞いて、その上でじっくり考えて決めて欲しい。それが、私の意見。」

奥州に暮らす民の未来を優先で考える・・・か。
その通りだ。

奥州の平穏と民の暮らしの向上を考えて、天下を取ると宣言された政宗様。

その政宗様が選択する一つ一つに、奥州の未来がかかっている。俺や綱元殿は政宗様を一番に考えるあまり、その事の大切さを忘れていたのかもしれない。

しばらく目を閉じて考え込んでいた政宗様は、やがて目を開き宣言なさった。

その目は、全ての迷いを捨てた政宗様が本来持つ力に満ちた目だ。

「小十郎、近いうちに甲斐に行くぞ。直接武田のおっさんと話をつける。良いな？」

「御意。」

深く一礼をした後、ほっとした表情のツキを見た。

ツキが居てくれて本当に良かった。
これからもよろしく頼むぜ。

15 右目は苦勞症（後書き）

ヒロインと政宗に振り回される小十郎の一日でした。

16 叫ぶ(前書き)

昨夜はかなり遅くまで話し込んだ。しまった。

朝食も半分寝たままの状態で食べていたツキは、今も隣で座りながらこっくりこっくりと頭を揺らしている。

武田信玄からの書状に対する返書も書き終わり、今は小十郎が真田と猿をここに連れてくるのを待っているわけだが……。

「ツキ。もうちょっと頑張つて起きてる。もうすぐ真田と猿がくる。返書をくれてやれば、奴らもさっさと甲斐に帰る。それから寝ろ。」

「む……。眠いんだよ。パト ツシュ……。」
「なんだパ ラツシュってのは。」

揺すつても、頬を軽く叩いても、耳に息を吹きかけても、ツキの目が覚める様子はない。
しかたねえな。

昨日は外に出たり、泣いたり怒ったり走り回ったりしてかなり疲れていたところを、夜遅くまで付き合せちまったからな。

ふらふらと安定しないツキを足の上に抱き上げ、腕で背中を支えて頭を肩に凭れ掛らせた。

しばらくもぞもぞしていたが、そのうち、ふすーふすーと寝息を立て始めた。

初めて会ってから大分成長したが、まだまだ小さな体。

こうして抱き上げれば、すっぽりと収まってしまふほどだ。

それなのに、オレや小十郎を振り回して、焦らせて、心配させて、
・ ・ ・ 嬉しい言葉をくれる。

「私はね、見たいの。政宗や小十郎や綱元さんや成実が毎日頑張
って良くしようとしている、この国を。その上で、私にできる手伝
いをしたかったの。」

今日はどこそで雨が降って田植えの準備は順調だとか、飼ってい
る牛に子供が生まれたとか、書類だけじゃなくて、目で見たいの。
それがダメなの？どうして？」

あの言葉には本当に参った。

あんな殺し文句不意打ちでくるとは思わなかった。

外に出たがる理由なんて、城に飽きたか、仕事が嫌になったか、オ
レの所が嫌になったかのどれかかと思ってた。

民の暮らしが見たかったと、その上でできることをしたかったの
だと。

それは、オレと一緒に同じものを目指すということか？

オレと一緒に居ると、いうことか？

「上等だ。俺の側で見せてやる。最高の景色って奴をな。」
眠るツキの頬にキスを落として、その顔をじっくり見つめた。

早く大きくなれ。それまでは待っていてやる。

しばらくして小十郎が真田と猿を伴い部屋に戻ってきた。

慣れない人の気配を感じたのか、ツキが腕の中で目を覚まし、わずかに緊張を見せたが、オレと小十郎の姿を見つけると、くああああと欠伸をした。

「まだ眠いよ、パト ツシュ……。」

「だから、そのパトラ シュてなんだよ。」

「犬。」

……このやろう……。

「あれ？ツキちゃんどうしたの？」

猿がゴシゴシ目をこすっているツキを見つけて首をかしげた。

「昨夜遅くまで起きてたから眠いんだろ。」

「寝ようとしたら、政宗に襲われた。」

間違っちゃいねえが、誤解を招く言い方だな、をい。

この凍りついた空気を何とかしやがれ。

そして小十郎！お前も一緒に居ただろうが！！そんな目でオレを見んな！！

「は、は……。」

真田が顔を真っ赤にして、オレを指差しワナワナしだした。

まずい！

猿の野郎はすでに耳に指を突っ込んでいる。
オレはとっさにツキの耳を両手で塞いだ。

「破廉恥iiiiiiiiiiiiiiiiiiii!!!」
「iiiiiiiiiiiiiiiiiiii」

み、耳が……。

びっくりして固まったツキから手を離し、自分の頭を支えようとふっ
ふっ湧き上がる怒りのまま、真田をにらみつけた。

「うるせえよ。人んちの城で叫ぶんじえねえ!……ツキ、大丈夫
か？」

目を見開いたままのツキを軽く揺さぶると、はっとなって俺を見上
げた。

「大丈夫。びっくりして目が覚めた。政宗は大丈夫？」
「ああ。」

まだくらくらするが、これくらいなら問題ねえ。

ツキは騒音の原因真田を見ると首をかしげた。

「幸村、どうしたの？突然叫んだりして。」

「え、いや、その……。」

赤い顔のまま口籠る真田に、ツキはますます不思議そうにしてる。

「ツキちゃんが昨夜独眼竜の旦那に襲われたなんていうから、旦那

思いつきり想像しちやっただよ。」

「佐助も破廉恥!!!」

だから、うるせえんだよ!

猿、てめえわざとか?

「想像・・・?あ、そつか。襲われたって言い方が悪かったのね。」
猿に言われて初めて自分の発言の意味を理解できたようで、ふんふんと頷いた後、ツキはにやっと笑った。
嫌な予感がするぜ。

「あのね、襲われたんじゃないで、寝ているところをいきなり来て無理矢理・・・。」

「む、むりやり・・・!?」

「私を布団から引きずり出して・・・。」

「ひひひひひ#\$%&*@!?!」

おいおいおいおい!

嘘は言つてねえが、なんかすげえオレが変態みてえじゃねえか!

「小十郎と三人で・・・。」

「三人!?!」

おい、猿。変なところで食いつくな!

初めは呆れて見ていた小十郎も、自分に火の粉がかかると見ると、慌てて口を挟んだ。

「今回の同盟についての話をしていたんだ!!」
「ちっ。」

舌打ちすんな!!

「と、言うわけで三日後、こちらを出ることにする。」
「承知。申し出を受けてくださったこと、嬉しく思いますぞ!!」

今後のことについて打ち合わせをしている政宗と幸村を、少し離れたところから、小十郎と佐助と三人で眺めております。
ぶすうとした政宗と、嬉しさを全身から滲み出している幸村。
ホント対照的な二人だ。

エロ政宗に対して、純情幸村。

あの雄叫びは困るけど、なかなか面白かった。
是非甲斐に行った暁には、全力で遊びたいもんだ。

「ツキちゃんも甲斐に来てくれるの？」

小十郎の向こう側にいた佐助がひよいと顔を寄せてきた。

「うん。いくいく。駄目だって言われたら、こっそりついてく。」

甲斐についていくのは決定事項です。

小十郎もそのつもりだったのか、聞こえているだろうに、特に否定はしなかった。

「んじゃ、ツキちゃんが好きなものを用意しておくよ。何が良い？」

ひゃっほー！！んじゃ、遠慮なく！

「にほんし……。」

「酒は禁止だ。」

「……お気遣いなく……。」

小十郎のばかあああ！！

政宗の返書を手にして、満足げに幸村は佐助と共に甲斐へと帰っていった。

それを見送った後、政宗と小十郎はしばらく城を空けることになるので、その間の引継ぎをするために綱元さん成実との話し合いの為、執務室へ戻っていった。

私は喜多さんに連れられて、自分の部屋でお昼寝です。

「まったく。小十郎も殿をお止めできなかったとは、嘆かわしい。」

子供は寝ることが仕事だというのに。」

「いや、喜多さん、私19・・・。」

まあ、あと一年くらいの辛抱だから、子供扱いでもいいけどね・・・。

あ、そうだ。

「喜多さん、私甲斐に行くとき、袴がいい。着物で馬乗れないよ。」

「あら？ツキも行くの？」

「うん。小十郎も駄目って言わなかったよ。」

言っても行くがな！

「それじゃあ、いくつか用意しましょう。本当は可愛い着物を用意したかったのだけど・・・。」

動きにくいので勘弁してください。

それに一応は着られるけど、鏡がないと無理。

鏡が貴重品なこの世界で、そんな注文はつけられない。

人様んちで着崩れた着物で過ごすわけにはいかないよね。

その点、袴なら小十郎に着せてもらえる。

チビ政宗コレクション部屋にいそいそ向かう喜多さんの背中を見送って、衝立で日陰になっている畳の上にごろんと転がった。

甲斐はどこなところかな。

前の世界では山梨や長野に行った事はないけど、ぶどうや桃、林檎をよく頂いていたなあ。

この世界でもあるのかな。

あるなら食べたいなあ。でも、季節的にまだか。

同盟を結ぶなら、そのうちまた甲斐に行くこともあるのかもしいいな。

その時は、佐助に用意してもらおう。
ついでに酒もね！

16 叫ぶ(後書き)

遊びすぎました(笑)

17 甲斐の虎に会いました

やって参りました、甲斐の国〜！！

米沢からひたすら馬で移動の四日間。

お尻も太股も背中も筋肉痛。

初日は話そうとすれば下を咬み、容赦ない政宗の馬捌きにバランスを取るのも必死だったけど、流石に翌日には慣れてきて話すことくらいはできるようになった。

これなら一人で馬乗れるんじゃないかね？と思ったけど、政宗のお許しが出るわけもなく、大人しく同乗するしかなかったけどね。

政宗は何時もの着物ではなく、鎧に蒼の陣羽織を身に着け、腰には六本も刀を差してる。

確かに同盟を組むためとはいえ、敵地に向かうんだから鎧とかは分かるんだけどね。

その刀はなんですか？

普通一本。差してても二本でしょうよ。

六本って、どうすんの？

ストック？

確か、初めて森で会ったときも同じ恰好をしていたはずなんだけど、傷を負ってたし、そんな些細なことはどうでもいいってくらい混乱していたからなあ。

と、言うわけで、出発前に聞いたよ。

その刀は何事かと。

そしたら凄く嬉しそうな顔をして、刀を構えてくれました。
六本いっぺんに!!!

指の間に挟むように、右手で三本左手で三本。

六爪流と言うそうです。

二刀流なら聞いたことあるけど、六爪流……。

異世界ってすげえなど、心底思いました。

「ツキ、あそこに見えるのが、武田信玄の居城、躑躅ヶ崎館だ。」
つじがさきやかた

遠目に見えるでかい建物を指差して、政宗が機嫌よく言った。

あれが武田信玄の城かあ。

やっぱり小田原城みたくどーんって感じじゃないのね。

「政宗様、先触れのものを出しました。今より油断なさいませぬよ
う。ツキも油断するなよ?」

観光気分で城を眺めていたら、小十郎が側に寄ってきた。

「ハッ!このオレがへまなんざしねえよ。」

「りようかい。」

二人で仲良く返事をしたのに、小十郎は胃の辺りを押さえて溜息を吐いた。

そして今、武田信玄、真田幸村、伊達政宗、片倉小十郎という錚々たるメンバーに、私が違和感を与えまくりながらも同じ部屋で対面を果たしております。

政宗たちもでかいと思ったけど、武田信玄はそれ以上に大きな男だった。

二メートル超えてない？

つか、武田信玄も赤いのね。

素敵な胸筋お持ちですね。触っても良いですか？

政宗と信玄公は同盟の内容について、あーでもないこーでもない話をしている、何かの駆け引きでもしているのだろう。

二人を見る小十郎の目も真剣そのものだ。

多分、話の内容を理解してないのは私と、隣でにつきこしている幸村だけだろう。

うう、これと同列か・・・。

複雑な気持だ。

途中、感極まったらしい幸村が雄叫びを上げて、信玄公にぶっ飛ばされて佐助に回収されると言う面白ハプニングがあったけど、概ね順調に話し合いは終わって同盟は成立した。

政宗も小十郎も満足そうなので、うちの出した条件は通ったんだろ
う。
良かった良かった。

なんて思いつつ、凝った肩と首をほぐそうとクキクキと間接を動か
していると、信玄公が私に目を向けた。

瞬間、無意識に緊張が走り、思わず身構えてしまった。

「其の方が幸村が申しておった、ツキ殿か？」

「ああ、そつだ。ツキ、来い。」

政宗が手招きするので、信玄公に警戒しつつも、じりじりと近寄っ
た。

「どうした？お前が尻込みするなんて珍しいじゃねえか。」

政宗の背中に隠れるようにしておずおすと信玄公に顔を向けた。

やっぱり、政宗や小十郎、幸村たちとは違うオーラがあるよ。

殺気を放つわけでも、今にも襲い掛かるうというわけでもなく、た
だ悠然と座って私を見ているだけだというのに、威圧されてしまう。

「ほら、挨拶くらい自分でしろ。」

政宗に促されて、意を決して口を開いた。

「つ、ツキです。．．．お初に御目にかかります。」

「うむ。ツキ殿の話は、幸村や佐助からよく聞いておる。此度の同
盟を独眼竜に決意させたのは、他ならぬツキ殿だと。」

「いや、そんなことは．．．。」

「礼を申すぞ。」

頭を下げられて、慌てる私に、政宗は楽しげに肩を震わせた。

「流石のツキも、アンタの前だと緊張するらしい。」

しますよ。ハンパないんすよ。

目力っていうの？

ものすごいです。

普通にしているだけなのに、怒った時の小十郎より迫力ある気がする。

「今宵は宴を催す。存分に楽しむといい。」

政宗よりも大きな手で頭を撫でられ、本気で頭をもがれるかと思っただけ、優しい感触にほっとした。

こつくりと頷くと、信玄公は満足気に笑って部屋を出て行った。

「は、緊張した。凄いオーラだった。」

政宗の背中にもたれかかるように座って、溜まった息を全て吐き出した。

「そうか？」

「うん。なんかね、表面だけじゃなくて、奥底まで見られてる様な感じの目だった。」

よいせと政宗の正面に回って、膝の上に座ってようやくく人心地ついた。

なんか、もうここが精神安定の場になっちゃってるんだけど。

元の姿に戻るまでには治さなきゃな。

小十郎に世話を焼かれ、政宗に抱っこされているうちに、佐助が迎えにきた。

「ごめんねえ。旦那が派手に吹き飛んじやって、治療してたら時間かかったちゃってさあ。」

そういえば吹っ飛んでたねえ。

私が治療してあげればよかったかな……。

なんて考えていると、それが分かったのか政宗がいつもの事だからほっとけと言うと、佐助も苦笑してそうだねえなんて言っていた。あれが何時もの事だなんて、甲斐はどうなってるの？

そして、完全に無視されてますが、この部屋の大きな壁の穴はどうするんだろ。

ちらりとその穴を見れば、とてもさわやかな風が吹き込んでいた。ざ、斬新十窓デスネ……。

「それ？それはね、夜中に小人さんが来て直してくれるから、そのまま平気だよ。」

「は？」

驚いて佐助を見ると、虚ろな目をした佐助が、アハハースゴイデシヨーと、あらぬ方向を見てちよつとヤバイ笑いをしていた。

「ま、まさむね……。」

「ツキ、世の中には触れてはいけねえもんがあるんだ。そつとしておいてやれ。」

うん。そうだね。

日が傾いてきた頃、大きな部屋に呼ばれて宴会が始まった。

伊達の皆よりは若干大人しめなもの、こちらの宴会もそれなりに

盛り上がっている。

ええ、私は上座でお偉方に囲まれて御茶をすすってますが何か？

しかし、米沢とはまた違う食材を使った料理は美味いな！

ここは小麦が採れるのか？うどん久しぶりに食べたよ！

おなかいっぱい。満足です。

ちらつと横を見れば、政宗と信玄公が酒を飲んで言葉を交わしている。

その姿は思ったよりも怖くなくて、最初よりは大分緊張も薄れてきた。

他の人にはない甘味を私の膳に載せてくれたりと、結構気を使ってくれるのが嬉しい。

その両サイドにはそれぞれ小十郎と幸村が陣取っていて、そこから下座に向けてごっつい顔したおじちゃんたちがずらーっと並んで、更にその向こうで普通の兵士たちがやんやんやと楽しそうに騒いでいた。

いいなあ。のみたいなあ。

ここは伊達の城じゃないから、徳利を政宗がちよるまかしてくるなんてことできないだろうな・・・。

つか、政宗私の存在など忘れて飲んでやがるな？

きいっ！うらやましい！！

ご飯も食べ終わったことなので、信玄公の向こうに居る幸村のところです少し遊ぶことにした。

酒が入り、すこし潤んだ目でほんのり頬を染める幸村は、やばいく

らいに可愛い。

「つきどの、しょくじはしたにあつたでござるか？」

うおおお……。やばい。舌つ足らず萌える。

「ゆ、幸村、大丈夫？」

思わず鼻を押さえながら声をかけると、きよとーんとした顔で首をかしげる幸村。

ぐはぁ！凄いやつ破壊力だ！

「お、お持ち帰りしてもいいですか？」

「いいわけねえだろ。」

首根っこを掴まれて引きずり戻されて、振り返って見れば政宗が呆れた顔して私を見ていた。

「どこのおっさん思考だ、てめえは。」

「だってえ、可愛すぎるんだもん。見てよあの顔！」

幸村って生まれてくる性別間違えてない？女の子だったら、めっちゃくちやモテたよ。

「Ha！男の面なんざ見て可愛いとか思わねえよ。気色わりい。」

「え？やっぱ幼女萌え？」

「まだその話を引きずるか！」

ぎりぎりと頭を鷲掴みにされ、ものすごい力で締め付けられる。

「痛い！痛いって！！」

暴力はんたーい！！

「そのくらいにしておいてやれ。本気で痛そうだぞ。」
笑いを滲ませた信玄公に諫められ、政宗は舌打ちをしてから手を離した。

「つきどの？だいじょうぶでござるか？」

ひよいと抱き上げられて、よしよしと頭を撫でられる感触に驚いて顔を上げれば、萌え幸村がにつこにつここしていた。

「つきどのはかわいいでござるなあ。それがし、つきどのがだいすきでござる〜。」

そして、熱烈ハグ。

ちよ、やめっ・・・！生肌が顔に・・・！

なんかいい匂いがしゃがるな！！

完全パニック状態になった私は、わたわたと両手を振り回して暴れるが、幸村の腕はびくともしない。

「てんめえ・・・。」

「政宗様！！！」

後ろで政宗が殺気だつて刀を抜こうとするのを、小十郎が必死に止めている。

俄に殺気立つ上座で、信玄公だけが悠然と構えていて、私たちの様子を見守っていた。

「幸村離してええええ！！！」

「いやでござるうううう！！！」

「おいコラ！それは破廉恥じゃねえのかよ！！！」

「政宗様、落ち着いて！！！」

「まさむねなどは、そんざいがはれんちでござる〜。」

「それは同感！！！」

「ツキ！政宗様だって傷付くんだぞ！！本当のことを思っても口にするな！」

「小十郎！オレはおめえの言葉に傷付いた！！」

もう、カオスだ。

だれか何とかして！！と、思ったとき。

「はいはい。旦那もうそろそろ寝ようねえ。」
「ゴスっ！」

すごい物音がして、私を抱えていた幸村の腕から力が抜けた。
何事？

佐助が慣れた様子で幸村を肩に担ぎ上げて、私を見下ろした。
「ツキちゃんごめんね。旦那抱きつき癖があつてさ。酔っ払いのしたことだから許してやってよ。」

「いや、それはいいんだけど、ゴスって言ったよね。ゴスって。」

素早く政宗に回収されてしまったので、確かめることはできないけど、多分幸村の後頭部には立派なタンコブができてるんじゃないかな。

・・・それより、この後始末、どうしよう・・・。

佐助に担がれて退場する幸村を見送りながら、小十郎がひでえよおと泣きが入ってる政宗と、おろおろしている小十郎をどうするか、

頭を悩ませた。

もうさ、素面なのが敗因？

飲んじゃえば私も楽しくなる？

「こちらの騒ぎなど気にもせず盛り上がっている、武田軍の皆さんをうらやましいなあと黄昏ながら眺めていると、ポンつと信玄公に肩を叩かれた。

「なかなか面白いものを見せてもらった。ツキ殿、これからも幸村を頼んだぞ？」

「え？」

「なんでそうなる？政宗だけでも持余し気味なのですが。」

信玄公は私の話など聞いちゃいねえって感じで、楽しげに笑って豪快に酒をあおった。

17 甲斐の虎に会いました(後書き)

御館様の魅力を表現できないorz

18 満ちる月に捧げる祈り

宴会もまだ続いていたけど、そろそろ眠くなってきたこともあって、私一人先にこっそりと抜け出させてもらった。

政宗と小十郎は主役ということもあって、信玄公と酒盛り。

佐助は幸村の御世話。

私一人場違いでつまらないじゃないか。

もちろん、武田の女中さんに案内してもらって部屋に戻ってきたし、政宗や小十郎が私を探してたら部屋に戻ったと伝えて欲しいとも伝えてきた。

ようやく部屋で一人になり、ほっと一息つく。

広々とした和室の床の間には、見事な水墨画の掛け軸と、緋色の見事な扇が飾られていた。

障子を開けて外を見れば、綺麗な日本庭園と昇り始めた満月とが幻想的な景色を創っていた。

「うわー。こういうの久しぶりだ・・・。」

そこそこ大きかった私の家にもこんな感じの庭があつて、ババ様が何時も縁側に座って庭を眺めていた。

ババ様は母の前の宗主で、座を譲った後は静かに余生を過ごすはずだった。

あの日朔夜に殺されてしまうまでは。

ちらり・・・。

床の間の扇を見る。

「借りてもいいですか？」

多分近くで身を潜めているだろう、佐助の部下に聞こえるように声を出して見るが、反応はないので勝手に了承の意と受け取る。
こんな綺麗な扇、飾っとくだけじゃもったいないよ。

舞扇を手に取り、庭に下りると月に一礼を捧げて、ゆっくり扇を広げた。

「だいぶへたつぴになつちやつただろうけど。ま、許してよババ様。」

ババ様は私の舞の先生。

何時も縁側でババ様が私の舞を見て、いい所、直すべき所を細かく教えてくれた。

ジイ様が亡くなった日、ババ様が舞った送魂の舞。

あの日、私が皆の為に泣きながら舞った舞。

それをもう一度。

やはり腕の動きや足裁き、手の指の動き、体全体の表現力。全てが以前よりもぎこちなくて不恰好。

舞踊は首と手の動きが重要と言われているのに、それが満足にできない。

でも、心は高揚する。

月を見上げて、祈りを捧げ、願いを誓う。

ここにきて、私は毎日が幸せです。

ごめんね。あいつを殺すことは叶わなくなったけど、私は幸せなの。

「こうして、また舞を舞えるようになったの。」

「ばば……ママ……おにいちゃん……。」

いつか、皆のところへ逝ったら、お説教たくさん聞くから。またお前は！ってげんこを買っても、文句は言わないから。だから、ごめんなさい。

私はこの世界で生きていく。

政宗や小十郎の側で、この戦国の世を生きていく。

ここで、幸せに生きていきたいの。

ごめんなさい。

「まったく、お前はばかだなあ……。」

「幸せになりたいという娘を叱る親がどこにいるの。」

「今まで辛かった分、幸せにおなり。ありがとう。」

そんな家族の呆れたような声が聞こえたような気がした。

最後の舞を終えて、深々と月に一礼を捧げると、後ろから拍手が聞こえた。

振り返ると、政宗が障子に寄りかかったままこちらを見ていた。

「So beautiful」

「Thank you」

あまり上手に踊れなかったのに、褒められちゃった。

もっと練習をしなければなあ。ね、ババ様。

扇を畳んで政宗の居る縁側まで戻って草履を脱ごうとすると、いきなり抱き上げられて、ぎゅむうっと抱きしめられた。

ぐええええ！

ミが出る！！はみ出る！洩れ出る！！

「ぐ、ぐるじい……。」

「Oh、Sorry」

力を緩めた後も、政宗は私を離さず、その場で立ち尽くしていた。

「天に帰るのかと思った……。」

吐き出す息と一緒に囁くように呟いた政宗の言葉に、思わず笑った。

「私が帰るのは、米沢の城だよ。」

そう言つて短い腕で政宗の背中を何とか撫でると、政宗は少しだけきゅつと力を込めた。

それから二人で縁側に座つて月を眺めつつ、政宗が貰つてきた酒を飲んだ。

良くやつた！偉いよ政宗！

「さっきのは幻覚だったのか？」

ご機嫌で盃を傾げる私を横目で見て、政宗が残念そうにぼやいた。

「ま、舞を舞っているときは、1・5倍綺麗に見えるらしいからねえ。凄いね踊り効果。」

「自分で言うなよ……。」

「よく言われたんだよねえ。舞っている時の半分でもいいからおしとやかにしなさいって。」

「……母親にか？」

少しの躊躇いの後、政宗は静かに尋ねた。

その気遣いが嬉しくて、盃を置くと政宗の膝にコロんと頭を乗せて転がった。

「ううん。一族皆に。」

「ただだけお転婆だったんだよ。」

「ふふふ……。よくねえ、木登りしてはスカートを破つてだめにしちゃったり、山の中で秘密基地を作つてたら足踏み外して転げ落ちたりして怒られたんだよねえ。」

「そいつはすげえな。喜多が聞いたら大目玉食らうぞ？」

ゆっくり頭を撫でる手が気持ちいい。

ふわふわする気持ちのまま目を閉じると、怪我をして帰れば怒りつつも治してくれた母や、秘密基地の作り方をレクチャーしようとする父と兄の姿が浮かんでくる。

「ねえ、政宗。昔はすごく毎日が楽しかったの。それでね、今はその昔より毎日が楽しい。政宗が居て、小十郎が居て、喜多さんが居て、みんなが居て。」
「そうか。」

政宗は盃を置くときしゃくしゃく頭を撫で回した。

「そろそろ寝るぞ。明日にはここを発つぞ。」

「え、観光は？」

「したらその分帰りが遅くなって、仕事が溜まる一方だぞ。」

「うえ。」

仕方ない。すでに米沢から離れて四日。帰りも同じだけかかる訳だから、トータル九日間も国のトップが不在なんだもんね。

よいこらしよと起き上がると、徳利と盃を片付けて、単衣になると布団にもそもそ入る。

「もつと詰めやがれ。」

「へ？部屋に帰るんじゃないの？」

「ここはオレの城じゃないから、念のためだ。」

奥へいけと言われて横にずれると、同じく単衣になつた政宗が布団の中に入ってきた。

むう、なんかこれでいいのか？とか思わなくもないけど、米沢でも時々一緒に寝てるし、幼女趣味じゃないって言い張ってるし、とりあえずま、いつか。

「おやすみなさい。」
「おやすみ。」

慣れない部屋と布団で、いつもは寝付くまでに時間がかかるのに、政宗の匂いと声で安心したのか、さつきみたく頭を撫でられて目を閉じると、すうっと引きずり込まれるように眠りに落ちた。

夜中、ふと目が覚め、腕の中で眠るツキを見た。
体がうつすらと青く輝いて、少しずつ体が伸びている。
本人はぐっすり寝入っていて、特に苦しげな様子もない。

さつき舞を舞っていたツキも、同じように青い光に包まれて、見事な舞を見せていた。
あれほど綺麗で儂いものを見たことはない。
夢幻となって消えてしまうのではないかと、怖くなった。

奥州筆頭ともあるこのオレが、だ。
情けねえ話だ。

だが、口を開けばいつものツキで、懐かしそうに子供の頃の話をする表情は決して無理をしているようではなかった。

オレの元での生活が、ツキに変化を与えている。

その実感がオレを喜ばせる。

優越を感じさせる。

いつの間にかオレの中心にはツキが居て、それが良いことなのか悪いことなのか分からない。

だが、これだけは確実だ。

ツキを手放すことは考えられない。

半ば強行軍のように明日帰るのは、これ以上真田や猿とツキを一緒にしておくたくないからだ。

明日成長したツキを見れば、ますますあいつらはツキに興味を持つだろう。

万が一、ツキを攫うようなことがあれば、即同盟は破棄して武田を潰す。

武田信玄はオレのその考えに気が付いているのだろう。

ツキに目を向けながら、その価値がこの娘にあるのかないのか、見定めていたようだ。

おかげでツキはおっさんに怯える羽目になっちまったが。

「いつまで覗き見してやがる。とっとと帰れ。」

ツキを起さないように体を起しながら枕元の刀を掴んで警告すると、どこからともなく猿が現れた。

「あれえ？完全に気配は絶っていたはずなんだけどな。良く分かったね。」

「うるせえ。何の用だ？」

「いやあ、ツキちゃん初めての場所でちゃんと寝れてるか心配になっただけさ。」

「満月の夜だから、確かめに來ただけだろうが。」

「あ、ばれてる？」

ははつと笑って頭を掻く猿だが、その目は冷め切っている。

「ほんとに成長するとは思わなかったよ。どんな妖怪変化？」

「殺されたくなかったら、二度とその言葉を言うな。」

鯉口を切って、殺気を向ける。

ツキをバケモノ呼ばわりすることだけはゆるさねえ。

「おお怖。分かりましたよ。」

首を竦めると、猿はちらりとツキに目を向けてそれから消えた。

相変わらず幸せそうに眠るツキ。

刀から手を離して、再びツキを抱きかかえるようにして布団に入ると、隙間に風が入って寒かったのか身を寄せてきた。

「まさむね・・・？」

「起しちゃったか？」

ぼんやりと目を開いてツキがオレを見上げた。

「んー・・・。」

とんとんと背中をあやしてやれば、再び瞼が落ちてきて、寝息が聞こえ始める。

その音を聞いているうちに、だんだんオレも眠くなってきて、目を閉じた。

18 満ちる月に捧げる祈り（後書き）

シリアスになりきれませんでした（@_@。

19 朝から

鳥の鳴き声と、遠くで鶏が鳴く声が聞こえた。

うつすらと目を開けると、すぐ目の前に政宗の寝顔があつてちよつとびつくり。

寝てるよ。珍しい。

いつもはニヒルに笑みを浮かべている口もうつすらと開いていて、鋭い目も瞼の下に隠れていてあどけない。

美形は寝顔も可愛らしくて良いですね。

ぼんやり思いながらも、まだ政宗が寝てるなら、私も寝ててもいいよねえ・・・と再び目を閉じてうつとつとした時だ。

「ツキ殿、朝でござる！おはようでござるよ！」

と、朝から脳天突き抜けるような赤い襲撃に見舞われた。

びつくりうう！！となつて目を覚まして固まる私と同時に、飛び起きた政宗が刀を掴んで障子を睨み付けた。
寝起きなのに、凄い反射神経だなあ。

「真田幸村あ。てめえ、朝くれえ静かにしやがれ。」

開けたのが幸村だと分かると、一応は刀を脇に置いたものの、機嫌は滅茶苦茶悪い。

私も心臓がバクバクいつていて、まだ納まらないよ。
あーびつくりした。

「何故政宗殿がこちらに？ツキ殿はどうしたのでござるか？」
不思議そうにいう幸村に、ようやく落ち着いた私はもそもと布団から顔を出して起き上がった。
足元の方に幸村は居るから、私が見えてないのだろう。

「幸村おはよう・・・って、どうしたの？」
顔が真っ赤で今にも倒れそうだよ？

「ど、同衾・・・。」
どうきん？何それ？

首を傾げて政宗を見上げると、政宗は面倒臭そうに溜息を吐いた。

「同衾は床を共にすることだ。」

「ああ、なるほど。一緒に寝たから、同衾ね。」

「い、いつしよにねた・・・!？」

幸村が私の言葉を聞き取って、ワナワナ震えだした。

「あ、やべ・・・やな予感。」

「耳を塞げ！」

返事をする前に、さっと耳を塞いで、準備完了。

「破廉恥iiiiiiiiiiii!!--!!」

耳塞いでも結構クるなあ。

なんて思っていると、ドタバタとあちこちからこの部屋目掛けて近寄ってくる足音が聞こえた。

「何事!？」

まずは、きちんと身支度を整えていた小十郎が、血相を変えて部屋に飛び込んできた。

「なになに?なにごとく?」

「いかがした?」

続いて緊張感のない佐助と、どすどす地響きを上げてやってきた信玄公まで現れて、部屋の人口密度が一気に限界近くまで上昇。

うう・・・なんか大騒ぎになってきた。

流石に単衣で皆の前に居るのはちよつと恥ずかしいのですが。

何とかしてと思っても、元凶の幸村は、政宗とギャラリー無視で怒鳴り合ってるし。

「ツキ殿が政宗殿にいいいいいい!!破廉恥いいいいいい!!」

「破廉恥なのはてめえの頭の中身だ!!!!」

「許せん!ツキ殿は某が護る!!!!」

「上等だあ。表出やがれ真田幸村あああ!!!!」

とんでもない雄叫びを上げる幸村に、流石の政宗も耐え切れずにブチ切れた。

止める佐助と小十郎を引きずるようにして、二人はそのまま外に出ていった。

「旦那ヤメテー!その灯笼高いの!!!」

「政宗様!落ち着きなされ!!!」

破壊音の合間に佐助と小十郎の悲鳴も聞こえる。

「ゆきむらああああ!!もつと気合をいれんかああああ!!」

「おやかたさまああああ!!」

「てめえの相手はオレだああ!!」

「ちよ!!大将!!それこの前直したばつかなのにいいいい!!」

.....

あ、わたしまた成長したんだ。単衣がつんつるてんだ。

喜多さんが少し大きめの奴を持たせてくれていたはず。

着替えなきゃなあ。アホどもが戻ってくる前に。

今日は濃紺の袴に、浅葱色の着物をチョイスしました。

通りすがりの女中さんに手伝ってもらいながら準備を終えると、することもなくなつたので外の様子を見に縁側に出た。

あーあ、綺麗だったのに、庭が滅茶苦茶だ。

庭の隅では、魂が口から抜けかけてる佐助が体育座りを。

その近くでは、一生懸命他人のフリをしようとしている小十郎が、庭の土いじりなんかしている。

庭の真ん中では、信玄公立会いの下、政宗と幸村がぜえはあぜえはあと肩で息をしながらまだ戦っているようだった。どうでも良いけど、政宗はまだ単衣であり見目がよろしくくないです。すね。

「政宗え、いつまでやってんの？」

呆れて声をかけると、今ケリをつけるからもうちょっと待ってる！と返ってきた。

「幸村あ、おなかすいたよう。」

幸村もあとでござる！！と取り合ってくれない。

仕方がない。

この二人はほつといて、ご飯食べに行こう。

そうと決めれば、小十郎と佐助だな。

庭の隅の2人の方へ向かうと、とりあえず小十郎の袂を引っ張って意識を呼び戻す。

「小十郎くお腹すいたよ。ご飯食べに行こう。」

「あ？ああ、ツキか。いつの間？」

「結構前からいました。で、ご飯食べたい。」

「しかし、政宗様が……。」

「ほつといていいよ。なんだかんだで楽しそうだし。お腹空いたら勝手にやめるよ。」

「だがなあ。」

信玄公公認で暴れている二人を止めるのも、かといってそれを無視

して朝ごはんにするのも、気が引ける様子の小十郎。

むきい！もういいもん！

1人で行っちゃうもん！

縁側に上がって、ご飯をもらいに行こうとすると、武田軍のガタイの良いおじさんが現れた。

「どうなされた？この状況は？」

「朝の鍛錬ですよ。」

「なるほど。」

聞かれたので適当に答えただけど、おじさんは納得したように頷いた。

え？あんなに壊しまくってるのに、鍛錬ですよで納得しちゃうの？もしかして、武田にとってはいつもの事？

おじさんを眺めていると、私の視線に気がついたのか、おじさんは私に視線を合わせるようにしゃがみ込むと、ニカッと笑った。

「僕は山本勘助と申す者。そなたはツキ殿と申したか？」

「はい。そうです。ツキと申します。」

どストライクです。

その笑顔にやられました。

顔がかあっと熱くなるのか自分でもわかる。

もじもじしていると、山本勘助（いや、心の中で勘サマと呼ばせて下さい）は優しく頭を撫でてくれた。

「これからは同盟国に属するもの同士、よろしく頼むぞ？」

「は、はい。こちらこそよろしくお願いいたします。」
語尾にハートが飛んでるのは、仕方がないよね！

なんてちらつと思った時、背後に気配を感じて振り返った。

「何をしている？」

今先ほどまで幸村と遊んでいた政宗がすごく怖い目で勘サマを睨んでいた。

Why?

幸村はどうした？

庭に視線を向ければ、大の字に引っくり返ってる幸村がいた。

おお、政宗が勝ったんだね。

で、勝ったのに、なんで不機嫌？

首を傾げていると、政宗の向こうで小十郎が身振り手振り何かを伝えようとしているのが見えた。

必死に私と勘サマを交互に指差して、何かを撫でる仕草をして、それからモジモジ。

って、小十郎、言っちゃ悪いけど、かなりキモいよ？

え？なに？私が頭を撫でられてモジモジしてたから、政宗が怒ってるの？

なんじゃそりゃ。

ますます意味が解らん。

反対側に首をかしげると、今度は私を指差して、モジモジ。

それから政宗を指差して、懐から出した手拭いの端を歯で噛んで、

きいっ！と引つ張る。

小十郎、キャラ違くないか？

主のためとはいえ、その捨て身のジェスチャーはちよつと……。

「ほう……。」

後ろの勘サマから呟きが聞こえ、振り返ればうんうんと楽しげに頷いていた。

「ツキ殿も罪作りな女子おんなだの。」

「は？」

え？私が悪いの？

なんで？

もう一度小十郎を振り返れば、うんうんと頷いている。

「ま、あとは若い者同士で仲良くやるが良いよ。はっはっはっはっは！
いや、はっはっはっはっはって、え？」

訳が分からず去り行く勘サマの背中を呆然と見送った。

「さて、ツキ。ちよつとこい。」

むんずと政宗に腕を掴まれ、はっと我に返ったときには、部屋まで強制連行と相成ったのでした。

誰か説明プリーズ！！

部屋に着くとすぐに小十郎が政宗の着替えと、桶に水を汲んで持ってきた。

「朝餉の支度をしてまいります。ツキ、後は頼んだぞ。」
頼んだぞって……え？私が政宗の着替えを手伝うの？

無理くね？身長的に。

が、止めるまもなく、小十郎はささっと部屋から出てってしまった。しかたない。やれることは手伝うか。

手ぬぐいを濡らして、顔についた泥や血を清めてやると、政宗は大人しくされるがままだった。仕方ない。傷も治してやるか。

頬についた傷にそっと触れて意識を集中させると、一瞬青く光って傷がすうっと消えた。
同じように右の眼帯の脇にできた傷に触れようとすると、伸ばした手を掴まれた。

「それには触るな。」

低い、脅すような声。

それが却って怯えているような印象に感じた。

「なに？突然。どうした？」

「あいつを見て顔を赤くしてたじゃねえか。ああいう男が好きなのか？」

振り向いて政宗の顔を見ようとしたけど、がっちりホールドされていて、身動きができない。

「やだなあ。見てたんだ。確かに好みど真ん中なんだよね。あとね、小十郎も結構良いと思うよ。」

「そ、そうか……。」

なんか部屋の温度が少し下がった気がするなあ。

気のせいかな？

「政宗も良いと思わない？強面が笑った顔！もうさ、あのギャップがたまらんと言うか、萌えの極みだと思うんだよね！ギャップ萌えって良いと思わない？」

「は？」

あの勘サマの笑顔を思い出して、興奮してきた！

政宗の戸惑いにも気がつかずに、マシンガントークスタート！

「あのね、前の世界でも軍で一緒にいた中年の上司が居てね、年中むすーっとしてて怖いイメージしかなかったんだけどさ、ある日軍の官舎の裏でこっそりネコに餌を上げてる姿を発見してね。その顔がもうどうしちゃったの？ってくらい緩んでさ。可愛いったらなくてさ！あとね、あとね、某戦場でね、泣く子も気絶するって有名な男が居てさ、そいつがねある日戦場にいた孤児を預かる羽目になったんだけどさ、もう子供泣いちゃって大変で、どうにかしようとして考えたんだらうね。いきなり猫耳つけて登場してさ、もうアレ

は一生拝めない超レアな衝撃的瞬間だったよ。子供はひきつけ起しちゃったんだけどさ、私的にはもうツボだったよ。あそうそう！これも凄いいんだけどさ、ちよっとの間ある国のスパイをしたこともあったんだけどさ、そのの諜報機関の長官がね、これまた」

「Stop! もういい、止まれ！」

絶好調で語り続ける私の口を手で塞いだ政宗が、慌てて止めた。むう。ここからが良いとこなのに。

「一つだけ聞かせろ。山本勘助や小十郎のような男が嫁にと望んだらどうする？」

え？ああいう男がいいのか？って結婚とかそういう話での意味だったの？

てつきりもつと軽い、芸能人で誰が好き？的な話かと思ったよ。

そついうことなら、答えは一つだ。

「お断りするよ。」

「・・・そつか。」

ほっとしたような政宗の声。

うん。ムリ。

だって、私が誰かの嫁になるなんて、できない。

たくさんの人を殺して来た人間が、母親になるなんて。

私が、命を育てるなんて。

できるわけがない。

政宗に私の顔を見られなくて良かった。
きっと、今の私の顔を見たら、政宗はまた気にしてしまっただろうか
ら。

目を閉じて、心を閉じて。

自分自身をコントロール。

凍えた感情は奥底に沈めて、鍵をかけて。

ゆっくり十まで数えたら、いつもの私。

1、2、3、4、5、6、7、8、9、・・・10。

「それにしても、小十郎はまだかあああ！！お腹空き過ぎて、仕舞いにゃ政宗を食べちゃうぞー！！！」

「はしたないぞーツキー！！」

気分を変えるために叫んだら、タイミングよく小十郎が現れて、余計な説教を受ける羽目になりました。

がつくり。

19 朝から（後書き）

あるえ？小十郎がどんどん崩壊していつてる気がするナア（汗）

20 立つ鳥跡を濁さず？

朝ごはんも食べ終わって、伊達軍は帰り支度です。

とは言っても、私はやる事が無いので、みんなの邪魔にならない様に自分の部屋で待機中。

壊された庭を、眺めております。

ここの修理費って、どこが出すんだろ。

真田？伊達？武田？

まさか、本当に小人さんが来るわけないよねえ。

あの横倒しになってる灯籠が、高かったって佐助が悲鳴をあげてた奴かな。

見事な彫刻が施された灯籠が碎けて横倒しになっている。

その横には、私が丸まって入ればすっぽりはまっちゃいそうなくらい大きな穴が開いていた。

・・・なんで剣と槍の戦いで、地面に穴があくの？

だらーっと寝転がると、雲一つない良く晴れた空が視界いっぱい広がった。

いい天気だなあ。

帰りも雨に降られないといいな。

濡れるとそれだけで疲れちゃう。

ぼけーっとしていると、不意に人の気配がしたので体を起こした。知らない人の気配。

そして、極力気配を隠しているようだ。

こっちの様子を伺っている？

いつでも動けるようにとこっそり身構えると、ちょっと強めの向い風が吹いた。

まばたきをして目を開けると、目の前に見た事の無い赤い髪の長身の男が立っていた。

額当てで目元が隠されているので、表情は読めないけど、私を見ているのはわかる。

そして、微かな殺気。

なんで、初対面の人に殺気を向けられなきゃならないのよ。

疲れるから早くどっかに行ってくれ。

「信玄公は多分自室、幸村はどっかで佐助に手当されてる。あとは知らない。」

そう言っつて再び庭に目を向けようとすると、男は私を指差した。

あ？何？口で言え。

「私が何？誰か？つてこと？」

問えば、微かにこくつと首を動かした。

「人に名を尋ねる時は、まず自分から名乗りましょうね。名乗れないなら、私も名乗る必要はないよ。」

まったく。服装からして、どこかに属してる忍者だろうけどさ。

一体どこの忍よ。佐助んとこの部下か？

教育がなつてない！

イラっとしながら男を睨みあげると、少したじろいだ様なそぶりを

見せた。

「あなたは、佐助のこの人？」

ふるふる。

「違うの？んじゃ信玄公のこの人？」

ふるふる。

え？この人じゃ無いの？

つか、話さないんじゃなくて、話せない？

「声が出ないなら、口パクでもいいよ。読唇術なら多少はできるよ。」

そう言うと、男の口が動いた。

『わかるか？』

「うん。わかるわかる。そっか。ゴメンね。きつい事を言っちゃった。」

『いい。よくあること。それより、ここで何をしている？躑躅ヶ崎に子供などいたか？』

「帰り支度をしている皆を待つてるんだよ。今日奥州へ帰るの。」

『奥州……。そうか。同盟は成立したか。』

同盟のことを知っている？

武田でも、伊達でもないこの人は一体何者？

「貴方はだれ？どこの人？」

『人に名を尋ねるときは、自ら先に、ではないのか？』

むきーっ！一本取られた！

悔しくて思わず頬を膨らませると、フツと小さく笑う音が聞こえた。

「私は、ツキ。貴方は？」

さあ、名乗ったんだから、教えなさいよ！！

じいっと見上げると、男は少しの間の後、ゆっくり口を動かした。

『風魔小太郎。』

「ふうま・・・こたろう・・・って、ええええええ！？あの北条の！？」

驚いて小太郎を凝視すると、しいっと人差し指を口に当てた。

そして、辺りの様子を窺うと、『いずれ、また』と言って、一瞬で消えてしまった。

うわあゝ。凄い！

あれが忍者の動きって奴ね。

佐助も忍者なんだけどさ、なんか今ひとつ忍者らしくないって言うか、なんていうか。

初対面が木から転げ落ちたってのが、もうさあ。

この世界では小太郎は伝説の忍って言われてるらしいんだけど、いやあ、あの身のこなしは確かに伝説っぽいわあ。

瞬き一つの間に見れて、目の前で消えちゃうんだから。

なんて一人で感動していると、どこかかと足音が聞こえた。

「Hey、なに一人で騒いでやがるんだ？」

すっかり身支度を整えた政宗が現れて、空を見上げている私に声を

かけた。

「今、ここに風魔小太郎がいたんだよ。すごいねえ。ほんとに風みたいだった。」

「What!？風魔小太郎だと!? ツキ、何もされなかったか!？」
「がしいつ!と半ばタックルされるような勢いで飛びつかれて、ぐはあ!と悲鳴が洩れた。」

「ぐふっ……。い、いま政宗に受けたダメージの方が深刻です。」
「Oh.Sorry.」

鎧も立派な凶器になるってことが良く分かったよ。

「なんか同盟の様子を見に来たみたいだったよ。私が伊達の人間だつて分かったら、同盟は成立したのかつて、一人で納得してみたみたい。んで、多分政宗がこつちに来たのが分かったみたいで、帰つたよ。」

「そうか。偵察か。」

そろそろ出発らしいので、借りていた部屋を片付けながら小太郎のことを話すと、政宗は何か考えるように脇息に凭れてふーんと呟いた。

「あっさり忍び込まれちゃって、佐助たち大丈夫なのかね。」

「いや、一応、俺様の所にも来たよ。」

え?佐助?

いつの間にか、襖に凭れ掛るように佐助が立っていて、ちょっと驚

いた。

「そろそろ時間らしいよ。二人を片倉の旦那が呼んでたよ。」

「ああ。」

立ち上がった政宗は、私の手を取ると先導する佐助の後ろに続いて歩き出した。

「そういえば、幸村はどうしたの？大丈夫？」

「ああ、旦那なら、もう復活してるよ。大丈夫。次は勝つんだって騒いでる。」

「ならよかった。」

流石は幸村だ。打たれ強さは折り紙付きだね。

「それにしても、ツキちゃん小太郎とどうやって会話したの？」

前を歩く佐助が、こちらを見て後ろ歩きしながら尋ねた。

「佐助、転ぶよ？」

「大丈夫、大丈夫。で、どうやったの？あいつ、しゃべらないですよ？」

『転んで泣いても知らないよ？』

口パクでそういうと、佐助は目を丸くしたあと、なるほどと頷いた。「どういうことか？」

1人背中を向けていた政宗は解らなかつたようで、私を見下ろして聞いて来た。

「口だけ動かすの。声は出さずに。読唇術っていうんだけどね、口の動きで何を話してるのかを読み取るんだよ。」

「それ、簡単にいうけど、結構難しいよ。ツキちゃんはなんでそんな事できるの？」

相変わらず佐助は細かいところを突っ込んでくるなあ。

「女には秘密がたくさんあるんだよ。それを無理に暴こうとする男は嫌われるよ?」

無駄だらうなあと思いつつ、誤魔化してみたり。

だって、軍に所属した時のカリキュラムにあったからなんて言ったら、別の世界から来ましたって事まで話さなきゃならないじゃない? めんどくさい。

「ツキちゃんは秘密がいつぱいなんだね。俺様秘密を探るのが仕事みたいなもんだから気になっちゃってしょうがないよ。」

「うわー、最悪だ。めんどくさいなあ。」

すんごく嫌な顔をして見せると、佐助は首をすくめて前を見た。

「でも、独眼竜の旦那が怖いからやめておくよ。」

「そりゃ賢明だ。」

低い声で応えた政宗を見上げれば、手を繋いで無い方の右手が刀の柄にかかっている、不機嫌なオーラがビシビシ放出されている。

「ありや。助かつちゃった。」

ありがとうの意味を込めて、キュツと手に力を込めると、ギュツと握り返してくれた。

案内された部屋には、すでに幸村や信玄公が待っていて、勘サマまでいらっしやいましたよ!

小十郎も待っていて、勘サマと何かを話していた様だった。

部屋の入り口で繋いでいた手が離れたので、そそくさと小十郎の隣に座って、政宗の挨拶を待った。

「これから奥州へ発つ。件の内容については奥州でも迅速にすすめる。それでいいな?」

「うむ。道中気をつけて戻られよ。何時織田の手の者が潜んでるやもしれんからな。」

「ああ。そつちも、いろいろ頼んだぜ？」

「承知しておる。」

こうやって眺めていると、政宗も武田信玄と肩を並べるような戦国武将なんだなあって思う。

堂々としていて、自信と威厳を兼ね備えていて。

いつもこうだったら、かっこいいと思うんだけどね。

なんて考えていると、信玄公が政宗を通り越して私を見た。

「ツキ殿、昨夜より少し大きくなったか？」

朝もお会いしてますがね。ははは・・・。

「昨夜は満月でしたから。」

佐助から報告は聞いてるでしょ？とにっこり笑えば、信玄公はうむと頷いた。

「次に会うときは、また更に成長をしているであろうな。楽しみにしておるぞ？」

「私ごときが、信玄公のご期待に沿う事などできませんよ。顔を出しにくくなるので、期待などしないでくださいね。」

見せモンじゃねえんだぞ、ゴルア！

うふふあははと笑いあう私と信玄公に、誰もが声をかけ兼ねていると、空気を讀むのがちょっと苦手な幸村が膝を進めてきた。

「ツキ殿、今朝程は失礼したでござる。某もつと修練を積み、政宗殿からツキ殿を守って見せるでござるよ！」

キラキラ輝く純真な瞳がまぶしいよ。

まずい。幸村が完全に政宗変態説を信じきっているよ！

ここは誤解を解いておかないと、後々同盟に支障が出ちゃうかも！

冗談が通じない幸村をからかった私が悪かった。

「あのね、幸村。私は政宗に拉致された訳でも、強制的に連れ回されてる訳でも、ましてや強姦されてるわけ「ツキ!!!」はい。ごめんなさい。露骨すぎました。まあ、なんだ、手籠め？にされてる「ヤメロ!!!」え？これも駄目？うーん、ま、とにかく無理矢理なんかされてる訳でもないのよ？だからね、一緒に寝てるのも政宗が寂しがりや「誰がだ！」うるさいなあ。とにかく、政宗が布団に入り込んできても、やましい事してないし、安心して？」

政宗の突っ込みで話がちょっと分かりにくくなった気もするけど、あとは笑顔で誤魔化せ。

幸村は頭の中で私の話を整理しているようで、ぶつぶつ言っていたが、ポン！と手を叩くと、大きく頷いた。

「なるほど！寂しがりやな政宗殿のお世話をツキ殿はされているの
でござるか！」

「ふざけんな!!!」

「いや、政宗もうそれで良いじゃん。変態キャラより、さみしんぼ
キャラの方が可愛いって。」

「そうでござるよ。政宗殿、可愛らしいでござる!!!」

「真田幸村あ、てめえ、同盟解消の暁には真っ先に地獄へ送ってやる
からな!!!」

小十郎と佐助が何か言いたそうに私を見てるけど、しーらないつと。

予定よりだいぶ出発が遅くなったのは、私のせいじゃないですよ。
。

20 立つ鳥跡を濁さず? (後書き)

甲斐偏はここまで。次話から奥州へ戻ります。

21 傷跡

同盟を結びに甲斐まで行って即戻ってきて、早2ヶ月。

梅雨も終わり、夏がやって参りました。

あれから2回満月の夜が来て、私もだいぶ大きくなった。

もう子供扱いされることも少なくなってきた、日本酒解禁まであとちょっと。

それにしても暑い。

東北だからだいが暑さはマシなんだろうけど、着物がねえ。

紗というガーゼみたいな生地羽織を羽織ってるんだけど、これも暑い。

本当は袴が良いんだけど、外出するわけでもないのに女の子が袴なんてだめですって喜多さんが貸してくれない。

最近は政宗の手伝いもなく、一人で部屋で過ごすことが多くなってきた。

兵士の皆も、綱元さんも小十郎も、なにか緊張感を漂わせていて、うかつに遊びに行ったりもできない。

おそらく、戦が近づいているのだろう。

先月上がっていた報告書で、前回も不正が見られた小手森城が、また同じように不自然だった。

城主を呼びつけたり、実際に綱元さんが監察に行ったり、いろいろやっていたようだが、ついに敵国への内通が発覚した上に宣戦布告なんかしてきちゃったもんだから、さあ大変。

前々から戦の準備はしていたらしくて、まもなく出陣らしい。戦が決まってからは、私は執務室に入ることすら許されず、ここ数日は政宗にも小十郎にも会ってない。この分じゃ、当然私は留守番なんだろうな。

付いて行くんだ！とは言えない。遊びじゃない。人の命が懸かった戦だ。

この世界で生きていくとは決めただけど、どうやって生きていくかまではまだ決められてない。

政宗や小十郎のように、戦場で戦うのか。喜多さんや綱元さんのように、城で政宗を支えるのか。

ここにきて五ヶ月、平和な日々が続いていたから、あえて考えなかった。

ここに残っていて、もし、万が一戦場で政宗が、小十郎が、皆が切られたりしたら。

私には皆を助ける力があるのに、ここに残っていたら役立てられない。

でも、元の世界の時のように、人の命を奪いながら戦えるのか？

力を使って戦えば、政宗が前に言ってたように、私の命を狙う人間も現れるだろう。

その覚悟が今の私にあるのか？

どちらにもなれず、甘えているだけの自分が苛立たしい。いまさら過去から逃げようたって、そうはいかないのに。

着物の袖を捲り上げて左の肘を見れば、うっすらと傷跡が残ってい

るのがわかる。

これは私が9歳の時に、自転車から落ちて作った傷の跡。
先月の満月まではなかったもの。

つまり、生まれ変わったわけではなく、ただ体が逆行して若返っていた私が、満月の度に元に戻っているということだろう。

あと半年すれば、元の年齢にもどる。

と、言うことは、半年前ここに来る前の自分に戻るということだ。

あの、血と硝煙と埃にまみれた自分に。

それならば、また戦場で政宗を助けて走り回るほうがいいのかも
れない。

「I die in the blood and gun smoke inside. (血と硝煙の中で息絶える)」

243

昔僅かな期間組んでいた男が、壊れた笑みを浮かべていった言葉。
その言葉どおりに、彼は戦場で死んだ。

「そんなことオレが許すと思うか？」

一人だと思っていたのに突然声が聞こえて、凭れていた脇息から身を起して部屋の入り口を振り返れば、ちよつと恐い顔をした政宗が立っていた。

「私のことじゃないよ。昔そんなことを言った男が居たなあって思
い出していたの。」

部屋に入ってきた政宗を迎えるために立ち上がりながら、さりげなく捲くつた袖を元に戻す。

「どうしたの？ なにか私に用事？」

上座を譲って、自分用の円座を用意すると、政宗の前に座る。

政宗はまだ恐い顔のままだ。

どうしたんだろ？

首を傾げて政宗の様子を窺うが、一向に話そうともしないし、動こうともしない。

本当にどうしたんだ？

「政宗？」

痺れを切らして名前を呼んでみると、ちょいちょいと手招きをされた。

なんなんだ？ いったい。

とりあえず呼ばれるままにハイハイで近寄ると、ぎゅむっと抱き寄せられた。

「ま、まさむね？」

「明日には出陣する。ツキはここに居る。いいな？」

「……わかった。」

こくりと頷けば、政宗は安心したようにほっと息を吐いた。

「まだこの体じゃついて行っただって、足手まといになるし大した力が発揮できるわけじゃないから。」

我ながら言い訳がましいと思いつつ、ぼそつと言つと、政宗は首を横に振った。

「これから先も、戦場にお前を連れて行かない。」

「え？ どうして？」

びっくりして顔を上げると、政宗は厳しい目付きで私を見下ろした。

「迷いがある者が戦場に立てば、命を落とす。」

ああ、政宗は私が迷っていることをわかってるんだ。

確かに、一瞬の躊躇いや迷いが命取りになるのが戦場だ。

その迷いなく戦ってきたからこそ、今の政宗があるのだろう。

私は自分可愛さに恐がってばかりだ。

戦で政宗たちを失うかもしれない恐怖。

戦場でまた人の命をうつことになるかもしれない恐怖。

いつか、ここに来た日の自分に戻ってしまうかもしれない恐怖。

「。。。。」

うつむいて着物をきゅっと握り締める私に、政宗は背中をぽんっと優しく叩いた。

「聞いてやるから、全部話せ。」

まるで初めて自分の力について話をしたときみたいだ。

いつもはふざけんなくなってくらい強引なくせに、こついつときだけ優しい。

だから、つい話したくなるのかな。。。

「体に傷跡ができたの。9歳のときにできた傷の跡。満月の夜まではなかったのに。私の体が成長するのは、今までの時を急激に取り戻してるようなものみたい。という事は、いずれはここに来る直前の自分に戻るってことなんだよね？」

震えそうになる声を頑張って押し出しながら話すと、政宗はまっすぐ私を見て頷いた。

「そうだな。外側だけな。」

そとがわ・・・？

「確かに見た目はそうなるだろう。だがな、中身は違うぜ？この世界でお前が見て感じたものは、過去にはなかったものだ。そうだろう？」

こちらに来て私が感じたもの・・・。

政宗や小十郎と会って、この城で暮らし始めて、みんなと仲良くなつて、佐助や幸村たちと会った。毎日笑って怒って、時々泣いて。

「たとえば、外が同じであっても中身が違えば、それはもう同じ人間じゃねえ。過去のお前だ。」

ああ、そういわれてみればそうかもしれない。目から鱗が落ちるとはこのことか。

「私は、あの日の私にならない？」

「なるわけねえだろ。」

「そっか。そっだよな。」

過去は消えなくても、過去に戻らなくても良い。

あの日の自分に戻るけど、同じじゃない。

そんなことを悩んでいたのか？とちょっと呆れた顔の政宗が、今はこんなに頼もしく見える。

「私ね、まだ迷っているの。政宗たちが戦場で怪我をしたときに、すぐに助けてあげられる位置に居たいと思う。でもね、まだ、戦場で戦う覚悟がない。」

「そんなことは分かっている。」

くしゃつと頭をかき回されてふんぎゃーつと叫ぶ私に、政宗はにやりと笑った。

「オレの背中は大十郎に預けてあるんだ。ケガすることなんざねえよ。それより、帰ってきたらPartyだ。この前みたく、舞の一つでも見せやがれ。」

そういうと、ぶーぶー言いながら髪を直す私の目の前に、木箱を差し出した。

「なにこれ？」

「開けてみる。」

言われるままに蓋を開けると、扇が一本納められていた。手にとって広げて見ると、綺麗な蒼い扇だった。

「どうしたの、これ。」

「作らせた。」

甲斐で見たものよりは、シンプルなデザインだけど、私の手にしっくり収まっていて、すべりも滑らかだ。

「とてもいい舞扇だよ。綺麗だねえ。」

「お前にやる。」

「いいの？」

「ただし、これで舞を見せる。良いな？」

うわ、こりゃ下手なものを見せたら、大変なことになりそうだ。ちよっと冷や汗をかきつつも、手の中の扇を握り締めて頷いた。

「政宗も、くれぐれも気をつけて。帰ってくるのを待ってるから。」

「ああ。」

ぎゅっと首に抱きつけば、同じだけの力で政宗も抱き返してくれた。

次の日の早朝。

「Are you ready Guys!？」

「Yeah!！」

「Ready Go!！」

口元に不敵の笑みを浮かべた政宗を先頭に、小十郎以下伊達軍全員
出陣。

21 傷跡(後書き)

シリアスは苦手です) ^ _ ^)

22 お留守番です

政宗達が戦に行つて、早五日が経ちました。

そろそろ敵地に着く頃だと、綱元さんが毎日来る忍び達の報告から推測してた。

にぎやかだった面子が居なくなつて、米沢つてこんなに静かだったんだなあつて驚くくらい。

私は綱元さんの仕事を手伝つたり、喜多さんの仕事を手伝つたりする傍、こっそり舞の練習をしたりして毎日けっこう忙しく過ごしている。

今日は喜多さんの手伝いで、着物の繕い物。

これが難しい！

まっすぐひたすら縫う作業がこんなに大変だったとは。

ボタンつけくらいしかした事ない私には、喜多さんの手がゴッドハンドに見えます。

「った！」

「あら、大丈夫？」

本日五回目の悲鳴に、喜多さんはすでに苦笑気味だ。

うう、痛い。

地味に痛い。

「それは、殿の着物だから大きいのよね。少し大変だろうけど、頑張つて。」

だから、こんなに縫う距離が長く感じるのか！
おのれ、政宗め！

「なんで、あんなにでかいんだ？何を食べたらあんなにによきによき育つの？」

ちよつとだけ人よりちつちやい私には羨ましい限りだ。

「殿も幼少の頃は小さかったのよ？あの頃はね、殿にも色々あったから。」

政宗の小さい頃！

聞きたい！どんなだったのか、すんごく聞きたい！
きつと、今以上に生意気で手に負えなかったに違いない！

「政宗の小さい頃ってどんなだった？」

縫い物の手を止めて喜多さんに尋ねる。

喜多さんは少し困ったような顔になった。

何で困った顔？

「殿は幼少期に疱瘡に罹られて、一命を取り留めたのだけれど、その毒が右目に行ってしまったって……。」

ああ、それで眼帯をしているのか。なるほど。

「保春院様、殿の御生母様なのだけれど、保春院様はその右目を嫌悪されてしまって、以後あまり殿と接することがなくなりましたの。」

……そうだったの。

だから、眼帯に触ろうとしたら、あんなに怯えたんだ。

「それで一時はお部屋に籠りがちになっていただけで、それが、今ではあんなに御元気になられてねえ。ふふふ。」

「元気すぎるのも問題だと思います！」

「ツキが来てからは、だいぶ落ち着きも見せるようになって、ほつとしているのよ?」

「あれで落ち着いたの?いままでどんなだったのさ。」

「小十郎を出し抜いては城から抜け出して、数日戻ってこないことや、成実様と熊狩りに行くとか出かけていくことが、もうしょっちゅうで。小十郎も黒脛巾を総動員したりして、必死に殿の後を追っていたわねえ。」

「小十郎、良く胃と髪がもってるね・・・。」

十年後が心配です。

「とは言え、隻眼つて物の距離感とか掴めなくなるし、死角もどうしても人より多くなるから不利なのに、それも克服したんだねえ。」

「政宗は強いなあ。」

「ええ。そうですね。でも、いくら強いとはいえ、時には休息も必要だと思うのよ。」

「え?あれって休息の合間に仕事してるって感じだけど?」

「ツキも殿には休息と癒しが必要だと思うわねえ?」

え?脅し?あれ?もしかして私今結構な命の危機?

「ま、まあ、そうですね。」

ごめん、小十郎。私は命が惜しい。
冷や汗を背中に感じつつ、こくこくと頷くと、喜多さんは嬉しそうに笑った。

ツキの同意も得られたし、楽しみになってきたわ〜！と言いなから再び手を動かし始める喜多さんに、嫌な予感がしながらもツッコミを入れる勇気もなく作業を再開させたおかげで、10日後どえらい目に遭う事になるとは、この時は思いもしなかった。

お手伝いも一段落したところで少し時間が空いたので、ここ数日の日課となった体力作りを兼ねての散歩をする事にした。
チビ政宗ちよい成長したんだぜコレクションから、稽古着っぽいのをチョイスして、軽く準備運動。

これだけでうつすら汗ばんで来る。
今日は暑いからなあ。ほどほどにしなきゃ。

「さて、いきますか。」
先ずは大手門目指して走り始める。

「あら、今日も走ってるの？気をつけてね。」
「はいっ。」

すれ違う人に挨拶しながら、あっという間に大手門。

門を守ってる兵士にも挨拶をすると、そのまま城の堀沿いをスピードをやや上げて走る。

数日で前の持久力が戻るはずもなく、そのうち息切れしてきた。半周程走ったあたりで、スピードを緩めると、辺りに人がいない事を確認。

「Muscular strength reinforcement」
(筋力強化)

ここにきたばかりの頃よりも、遥かに安定した力が体を駆け巡り、軽くジャンプすると、数mは飛び上がった。

よし。いけるな。

ニマッと笑うと、正面に見える木が生茂つてるところを目指してダッシュ。

多分、距離にして10キロちょいくらいか？
慣らしにはちょうどいい距離だろう。

ちょっとした馬くらいの速さで走れませぬ。
ふはははは！

15分くらい走ると、目的の場所に到着。
術を解除して、辺りを見回すと、ラッキーなことに魚が泳いでる綺麗な川があった。

人の気配は辺りになく、危険な生き物もこの近くにはいなさそうだ。

袴の裾を腰の帯に差し込んで、膝まで捲ると、袖も捲り上げて川に足を突っ込む。

「つめたー!!」

さすが東北の天然水!

汗が一気に引っ込んだよ。

顔を洗って袖で拭いて、樹々の間から零れる光を見上げた。

「きれー……。」

世界はいつだって、こんなに綺麗なのに。

今戦場で駆けているだろう政宗を想う。

同じ世界で、殺し合い奪い合い、己の目指すものを得る為に戦う人間。

必死に、不様でも、這いつくばって、しがみついて。

なにも得られず散って行く命の方が遥かに多いのに。

それでも、手を延ばし続けて、血を流す。

自分の手を見つめる。

人の血で汚れた手。

救う道もあつたのに、奪うことしか考えられなかった。

今あの時に戻つたとしても、きつと同じ道を選ぶだろう。

そんな自分が怖い。

今もこの胸の片隅で燻ってる。全てを焼き尽くしても足りない程の憎悪。

世界はこんなにも綺麗で、優しいのに。

人間は、決して綺麗には生きていけない。

溜息を吐いて川から出ると、袴を元に戻して、さて城に戻るかと思つたとき。

目の前を何かが通り過ぎた。

ん？今のはなんだ？

一瞬の出来事で、風が通り過ぎたのかと思つた。が、目の前で立っている男を見て、風ではなかったことを知つた。

「小太郎！」

以前躑躅ヶ崎館で会った風魔小太郎が、私を見て首をかしげていた。

『なんでこんなところに一人で居る？』

「訓練かねてここまで走ってきたんだよ。」

『走って？馬ではなく？』

「うん。マラソンって言ってね、長距離をゆったりしたペースで走るの。」

決してマラソンと呼べるスピードで走ってはなかったけどね。そこは秘密なのです。

「そろそろ城に戻ろうとしたところだったんだよ。小太郎はどうしたの？」

『伝令。伊達政宗に。』

「政宗は戦に出てしばらく帰らないよ？」

『知っている。これからそこまで行く。』

そうなのか！凄いな！

馬でも数日かかる距離なのに、走っていくんでしょ？どんだけ早いのか？

私が本気を出しても勝てないよ。

そもそも、小田原からここまで走ってきたんでしょ？

この世界の忍者ってどういう体の構造してるんだろ。

「そっか。気をつけてね。」

『城に戻るなら、連れて行く。』

「え？でも、仕事中でしょ？」

『ここから城までなら大した時間かからない。』
「そ、それじゃ、お願いしちゃうかな。」

小太郎のスピードがどんなものなのか気になるし！

片手で抱っこされて、一気に視界が高くなった。

『しっかりつかまってて。』

「うん。」

首にぎゅってつかまると、小太郎はぐつと身を低くして、一気に跳び上がった。

「ふんぎゃあああ！！跳ぶなんて聞いてないいいいい！！！」

人間なら地面を走れえええええ！！

想像を絶するスピードで、ものの数分で米沢城の私の部屋の前に到着。

なんで私の部屋を知ってるの？とか疑問も出てこないくらい放心状態。

ま、政宗の手放し運転が可愛らしく思えてきた。

『大丈夫？』

オロオロする小太郎に、なんとか笑顔を作って頷いた。

「大丈夫。なんとか。送ってくれてありがとう。」
『大したことじゃない。』

今度はちよつと照れてるようだ。
なんか可愛いな、小太郎！

「これから政宗の所に行くんでしょう？気をつけてね。」
見送ろうと思つて縁側で待っていると、小太郎は何か迷っているように私と外を見比べていた。

「どうしたの？」

『・・・手紙とか、なにかあれば。』

政宗に持つて行つてくれるってこと？
なんていい人・・・！

でも、今から書いてたら小太郎の仕事に差障りがでちゃう。

「いっぱい練習して待つてるから、寄り道しないで帰つて来いって伝えて。」

本当は無事で居るのか、この目で確認したいけど。
ここで待っていると、政宗と約束したから。

『わかった。』

こくりと頷いて、小太郎は風を残して姿を消した。

あ、そういえば、最後に会ってから大分成長したのに、違和感なく話しかけてきたな。

佐助辺りから情報を仕入れてたのか？
だから私の部屋も知ってたのかな？

今度会ったら聞いてみよう。

22 お留守番です(後書き)

ガールズトーク断念。

いつかりベンジします(〜)

23 追憶(前書き)

とても短いです。

23 追憶

満月の夜が明けて、家族を亡くした10歳の体まで成長した。

ここにきて初めて一人で目覚める成長した後の朝。

早朝だというのに、セミの声がもう聞こえていて、今日も暑くなり
そんな予感がした。

障子を開ければ、西の空に沈みかけている白い月が見えた。
体に力が満ちているのが分かる。

あの日を境に、日々強大化していった力。

あの男を殺すために、ひたすら磨き続けた力。

それがまた私の中に戻ってきている。

皆の葬儀を済ませた後、私は寝食の時間を削って、英語を勉強し
た。

朔夜がアメリカに逃亡したと、刑事から聞いたからだ。

それから半年もたたないうちに、私は身一つでアメリカへ渡った。

広いアメリカの地で、闇に属する人間たちの間をくぐり、いつ殺
されてもおかしくはない世界で3年間生きた。

力を使いきれずに怪我をして命を落としかけたことや、仕事で人を殺すこともした。
生きるか死ぬか。

ギリギリの中で技を磨いて、人を殺す技術を身につけた。

強くなつていく体と、死んでいく心。

狂気とも呼べる憎しみに囚われて、自分すら殺しながら生きていた。

そのうち裏社会で名が知られるようになって、あちこちから金で雇われては様々な依頼をこなした。
ある程度金が溜まれば、組織を出て、また朔夜の情報を求めて裏社会を彷徨う。

15の時に、朔夜が中東に居るといふ情報を聞きつけて、対抗する軍の特殊部隊に入った。

あの頃はもう自分の経歴や戸籍など、自由に書き換えられることができたから、楽に潜入はできた。

何度か朔夜と戦うこともあったが、決着がつくことはなかった。
あと一歩というところで、するりと逃げられるのだ。

結局、私の7年はそれで終わった。

けれど、全てが終わったわけではない。
私は生きて、ここに居る。

政宗や小十郎、喜多さん、綱元さん成実、たくさん兵士たちに助けられて、ここに居る。

これから、満月のたびに体に刻まれていくだろう傷跡。それでも、行き着く先は過去の自分ではない。

この奥州で、政宗やみんなと一緒になら、きつと違う未来を選ぶ。

「ツキ、起きてる?」

喜多さんがちよつと驚いたように入ってきた。

「おはようございます。今日はなんだか早く目が覚めたの。」

「いつもそうだといいいのに。」

寝起きが悪いのは自覚があるので、ここは誤魔化し笑いをする。喜多さんはしょうがない子ねと笑った。

「先程、綱元の所に知らせが入ったそうよ。殿が戦を終えてこちらにお戻りになるって。」

「本当?良かった。」

もうすぐ、セミの声すら聞こえないほど、賑やかな連中が帰ってくる。

きつと得意げな表情で帰ってくるだろう政宗を想像して、私はひとり笑った。

23 追憶（後書き）

ヒロインの過去話でした。

次話は蒼い人ご帰還です。

24 おかえりなさい

綱元さんのお手伝いで、領地内の年貢収穫予想をフリーハンドで表にまとめる作業をしております。

初めて作って見せた時は、物凄く驚かれてこんなまとめ方があるのか！と感動されました。

まあ、横書きの習慣なんかないから仕方が無いんだけど、単なる一覽表でしかないのに驚かれたこっちが驚いたよ。

しかし、筆というのは、書きにくいなあ。

腕がプルプルしてきちゃう。

おまけに、ちよつと表を小さく作っちゃったもんだから、中の文字が小さくなって、余計大変。

「ツキ、それが終わったら、次はこちらの集計をお願いします。」

どさつと置かれたのは、先月の歳出金領収書の束！

よ、容赦ないっすね。

ヒクつく頬を押さえてなんとか笑顔を作って頷くと、今やってる作業をさつさと終わらせるべく猛然と取り掛かった。

どの位やっていたらどうか。

なんだか場内の空気が変わったような気がして顔を出しあげると、綱元さんも苦笑気味で手を止めた。

「なんかあつたのかな？」

「おそらく、殿がご帰還なさったのでしょう。ツキ、様子を見てきてください。」

「はい。」

部屋を出て人の気配が集まる方向にゆっくり歩いていくと、まるでお祭かってくらい大騒ぎをしている兵士たちが居た。

良かった。皆元氣そうだ。

薄汚れてはいるけど、怪我をしたり疲れていそうな気配はみえない。笑顔で留守をしていた仲間と再会を喜び合っている。

政宗や小十郎たちはどこだろう。

キョロキョロ辺りを見回すけど、姿はどこにも見えない。

「お嬢!!」

今日もリーゼントがガツチリ決まってる良直が、私に気がついて走り寄って来た。

「良直、お帰りなさい。ケガとかしなかった？」

「もちろんでさあ!今回も筆頭の活躍で楽勝でしたぜ!」

「それなら良かった。ところで、その政宗はどこ行っただの？」

「あれ?てつきりお嬢の所に行かれたのかと思いましたが?」

「すれ違っただのかな……。わかった。ありがとう。」

まあ、いいや。とりあえず綱元さんの所に報告に戻るか。

来た道を戻りながら歩いていると、向こうから成実が鎧姿のまま歩いてきた。

「ツキちゃん発見!綱元の所に行ったら、様子を見に行かせたなんというから、捜しに来ちゃったよ。」

「成実お帰りなさい！」

近寄った成実からは微かに血臭がして、戦帰りなんだなと改めて実感した。

本人が怪我をしている様子はなさそうだから、きっと敵の血なんだろう。

「あ、ちよつとおう？ごめんねえ。」

「ううん。大丈夫。それよりも、私に何か用事？」

「梵がツキちゃんにを捜してたよ。今は多分湯殿に行つてて、小半時もしたら戻ってくるだろうから部屋で待つてあげてよ。綱元もそれでいいって言ってたよ。」

「了解。成実もお風呂行つてさっぱりしておいでよ。」

「そうする。もう、流石に限界だよ。」

でしょうね。この暑さと血臭じゃねえ。

足早に風呂場の方へ去つていった成実を見送ると、自分の部屋に戻った。

昨日までは鳥やセミの鳴き声がうるさいくらいだったのに、今日はあまり気にならない。

やっぱり米沢城はこうでなきゃ。

自分の部屋で政宗を待ちながら、外から聞こえてくる笑い声や叫び声をBGMに、喜多さんからの課題のお裁縫の練習。

くう！縫い終わる前に、布が血染めになりそうだ。

またもぶすつとやってしまった人差し指を啜えて、ちよと涙目になったとき、足音が聞こえて政宗が部屋に入ってきた。

いつもの着物と袴姿の政宗は、指を啜えている私を見つけると、一瞬驚いたような顔をして、それから笑った。

「刺したのか？」

「うん。きつと才能ないんだよ、私。」

すぐ横に胡坐を掻いて座った政宗にちよつといじけて答えながら、布と針を箱に仕舞った。

それから、改めて政宗を見上げる。

出発前よりも僅かにやつれた？

顔つきもいつもより険しくて鋭い。

全身が鋭い刃のような気配を纏わりつかせていて、戦場での政宗の姿がそのまま目の前に居るようだ。

「おかえりなさい。政宗。」

もう、ここは自分の家なんだから、安心していいんだよ？

「ああ。ただいま。ツキ。」

政宗は私を抱きしめると、深く息を吐いて、しばらくそのまま動かなかった。

ゆっくり、少しずつ、気配が穏やかになり、いつもの政宗に戻っていった。

向かい合わせで座りながら政宗がいない間の他愛もない話をして
いると、廊下から足音が聞こえて部屋の前で止まった。

「ツキ、こつちに政宗様はいるか？」

小十郎の声だ。

「いるよ〜。」

返事をする、珍しくも袴姿の小十郎が襖を開けて入ってきた。

「小十郎、おかえりなさい。」

「ああ。留守の間何もなかったか？」

「うん。特には。」

何か喜多さんが企んでいそうだけど、多分、平和だったよ。うん。

そうかと、私の頭を撫でて、微笑をこぼす小十郎。

「・・・萌え・・・。」

「は？」

「いえ、なんでもありません。」

危ない危ない。

「小十郎、オレに何か用事があるんじゃないのか？」

あ、ちよつと政宗の機嫌が降下した。

まったく。自分以外に注目がいくとすぐ不機嫌になる。

めんどくさい奴め。

「まもなく宴の仕度が整うようなので、ご準備を。」

「ああ、もうそんな時間か。」

しびしびながら立ち上がる政宗を追って、私も立ち上がると、小十郎は慌てて止めた。

「ツキはここで待っていてくれ。姉上が用事があるようで、ここで待っておくよう伝えるように言われている。」

なんたる。準備の手伝いかな。

「わかった。って、事らしいので、政宗また後で。」

「ああ。」

なんか小十郎の様子が変だったな。

そわそわというか、ビクビクしているような気がする。

なんかあったのかなあ。

なんて思っていると、喜多さんと数人の女中さん達が何やら色とりどりの布を持って部屋に入ってきた。

何これ？着物？

これから宴会だから、忙しいはずなのに、何で着物なんかこんなにたくさん？

「ツキ、こっちにきて立ってちょうだい。」

にっこり微笑む喜多さんとその手下達のオーラが怖い！

恐る恐る立ち上がって、示された所で立つと、一斉に飛びかかられて、着物を剥ぎ取られた。

「んぎやああ！なにすんの!？」

「しっ！静かになさい！殿に感づかれたらどうするの?」

え？私が悪いの？

今先ほど四方八方囲まれて、着物をいきなり剥ぎ取られて、悲鳴を上げた私がダメ？

呆然としているうちに、単衣にされて、あーでもないこーでもないと、沢山の着物を片っ端から広げては何やら相談しあってる。

「喜多さん？これは何事？」

「殿への戦勝祝いですよ。」

「は？着物をプレゼントすんの？だったら、女物じゃなくて、男物の方が良くない？」

「着物ではありません。ツキ様を可愛らしくして、愛でていただくのです！」

なにか言いやがりましたか？手下その1!？

「そうです。お疲れの殿に、ツキ様の癒し！素敵です！」

どこが素敵な手下その2！

癒しじゃなくて、ストレス発散に使われるだけだよ！

「まだ夜伽は無理でしょうけど、殿にはきつとご満足いただけるはず！」

手下3が恐ろしいことを言ったあああ！！
なに夜伽って！！

小十郎め！こうなるって知ってたな！

おのれ！後でギャフンと言わせてやる！！

ぶすーっとしていると、喜多さんが苦笑して一枚の着物を手に取った。

「ツキも、そろそろ装着を迎えるような年頃になったんだから、いつまでも殿の着物ばかり着ていてはダメですよ。殿だって、ツキが可愛らしく着飾るのを楽しみにしていらっしやるはずよ？」

「私はあまり楽しくないもん。」

ぶいっつと顔を背けると、喜多さんは仕方がないわねと呟いて、溜息を吐いた。
諦めたかな？

と、思つてそおつと様子を窺うと、喜多さんはにっこりしながら。「裳着を迎えたなら、大人として認められるのよ？大人として認められたら、ツキの大好きなものも誰にも咎められることなく飲めるのよ？」

・・・酒!!

酒が飲めるようになるの？

怒られることなく？

・・・・・・・・・・・・・・・・。。

「大人最高〜！」

意気揚々と着物を選ぶ私の後ろで、グッと親指を立て合つ喜多さんと手下共。

酒が飲めるなら、着物くらい喜んで着ますとも！

24 おかえりなさい（後書き）

ピンチというほどの事もなく、酒で解決。

25 解禁

戦は開戦から僅か一日でケリがついた。雑魚兵に紛れて逃げようとする大内を討ち取って、蘆名にその首を送りつけてやった。

それでもまだこの独眼竜に楯突くというのなら、蘆名も潰すという Message だ。

事後処理で数日小手森城に留まっている間に風魔小太郎が現れて九州の島津が安芸の毛利、四国の長曾我部と手を組んだという情報と、ツキからの伝言を届けにきた。

いっぱい練習して待ってるから、寄り道しないで帰ってこいと。

仕方ねえなあと、小十郎と苦笑しながらも、残党を狩りつくしてようやく米沢に戻ってきた。

ツキに会いたかった。

たかが半月ほど離れていただけだというのに、側にいないというだけで焦燥に駆られるような気分になった。

湯殿から出てすぐにツキの部屋に行くと、指をくわえて涙ぐんでいる姿を見て何事かと驚いたが、すぐに針で指を刺したのだと察して、ツキらしいと笑った。

布と針を箱にしまうツキの横に座り、満月を過ぎてまた少し成長

した姿を見た。

親を殺されたという年齢になったはずだった。

そろそろ裳着を行ってもおかしくはない年齢だが、まだ幼さの残る顔。

「おかえりなさい。 政宗。」

その笑顔に、帰ってきたという実感が湧いた。

ツキを腕に抱き寄せて、その体温に緊張がほどけていくのが分かった。

留守の間何をしていたとか、こんなことがあったとか話していると、小十郎がオレを呼びにきた。

小十郎もツキの姿を見て気を緩めたのだろう、珍しく笑顔なんぞ見せてツキの頭を撫でた。

そういえば、前にもこんなことがあったような気がするな。

ちらりとツキを見れば、少し顔を赤くしてやがった。

Shit！面白くねえ！

小十郎に何の用だと聞けば、Partyの準備ができたからそろそろ広間に来るように言われた。

それなら行くかと立ち上がり、ツキも一緒に行こうとして立ち上がれば、喜多がここで待っているように言っていたので待てと、ツキを慌てたように引き止めた。

「わかった。ってことらしいので、政宗また後で。」
「ああ。」

また後で。

すぐ近くにいるからこそ、当たり前に見える言葉に自然と頬が緩むのを感じながら、小十郎に続いてツキの部屋を出た。

なかなかツキが来ないまま、Partyは始まった。

準備はとつくに終わって、女中たちも下がったのに、何してやるんだ？

ちらつと小十郎を見れば、どこかそわそわしていて落ち着かない様子だ。

さつきといい、なんか知ってるな？

問い詰めようとした時、ふと意識せずに広間の入り口に視線が向いて、息を呑んだ。

おい、うそだろう・・・？

喜多に連れられてようやく現れたツキが現れたのだが、その姿を見て心底驚いた。

酒が入って大騒ぎをしていた連中も、ツキの姿を見た奴から口を開けたまま動きが止まった。

縹色の紗の打掛を羽織り、伸びてきた髪を結び上げ、薄く化粧を施したツキがゆっくりと顔を上げて微笑んだ。それだけで静まり返っていた広間がざわめきだした。

「おい、小十郎、あれはツキだよな？」

あいつ、あんなに華やかな女だったか？

確かに一度だけ見た舞を舞う姿は、儂く美しかったが、今目の前に居るツキはまた違う。

儂さとは真逆の圧倒的な存在感。

部屋に入って来ただけで、騒いでいた連中が振り返る程の。

小十郎も啞然として他の連中と同じように口を開けて見ている。

ツキは広間を見回して、連中の反応に満足そうに頷くと、ニヤリと笑った。

「野郎共おかえり！そして、お疲れ！」

お前。その姿で……。

良くも悪くも、ツキはツキだった。

我に返った小十郎は、こめかみを押さえて残念そうにため息を吐いている。

兵士共はいつものツキに戻って安心したらしく、お嬢綺麗っす！とか叫んでやがる。

一人一人に答えながら歩くツキの後ろを歩く喜多も、すっかり諦め顔だ。

「お待たせ。どう？」

ようやく俺の前に来たツキが、くるりと一回転して見せた。

「口を開かなきゃ、美人だな。」

「言うと思ったー！」

素直な感想を聞かせてやれば、憤慨するツキ。

「小十郎！政宗が酷い！なんか言っちゃってよ！」

憤慨してツキに詰め寄られた小十郎。

正直に言っちゃれ。

「一瞬幻が見えた。」

「小十郎も失礼だー！！」

頬をパンパンに膨らませて、ツキはオレの横に用意された膳の前に座った。

「それなら最後まで淑やかにしてる。」

ニヤニヤしながら言ってやれば、ツキはむっとした表情を見せた後、ガラリと雰囲気を変えてみせた。

大人のような雰囲気を醸し出して、艶やかに微笑んで首を傾げた。

「殿はこうして、ただ微笑んでいるだけの女を御所望でございましたか？」

「No. 面白くも何ともねえな。」

綺麗なだけの女なんぞ、これっぽっちも興味はねえ。

悪かったと、頭を撫でてやれば、機嫌を直して盃を手にとった。

なんだ？飲むのか？

今までは喜多や小十郎がうるさく言って飲ませないようにしていたのに、今日は止めようとする小十郎を喜多が止めていた。

「今日から解禁なんだよ。」

「そうか。じゃ、ほら。」

徳利を差し出せば満面の笑顔で盃を差し出した。

そうそう。こっちの笑顔のほうが、オレは何倍も気に入ってるんだ。

「あれ？ツキちゃんが飲んでるのって、酒だよな？」

戦場でオレよりも派手に暴れていたくせに、疲れた様子もない成実が素っ頓狂な声を上げてこっちに来た。

ちっ、うるせえのが来たな。

隣でちびちび酒を飲んでいるツキは、上機嫌でそうだよと暢気に

答えて、自分の膳にあつた芋の煮付けを頬張つた。

「うまー。ご飯も美味しいし、お酒も美味しいし、もう最高だ〜！」
「みんなで食べるってのもいいんだよね。」
「うんうん。」

ちやつかり横に座り込んだ成実の言葉に、頷きながら次々と膳をた
いらげていくツキ。

「なんだ、寂しかったのか？」
冗談のつもりで言つたら、ツキは同じようにうんうんと頷いた。
「一人で食べるのは味気ないよね。食欲も半分位しか湧かないよ。」

ちらりと喜多を見れば、困つたように笑つて、微かに頷いた。
そうか。少し痩せた様な気がしたのは、成長をしたせいじゃなかつ
たのか。

「そうか。これも食つて良いぞ。」
思いつきり抱きしめてぐりぐりと撫で回したい気持を抑えて、俺の
膳にあつた煮物を乗せてやると、ほんのり頬を染めたツキがにこに
こ嬉しそうに箸を伸ばした。

かわいいじゃねえか。酒が入ってるせいかな、やけに素直だしな。

「ツキちゃんは本当にかわいいなあ。ねえ梵、ツキちゃんを大森に
連れて帰つてもいい〜？」
「いいわけねえだろ。一人で帰れ。」
「酷い！ツキちゃん、こんな冷たい梵の所じゃなくて、うちに来な
い？」

いつの間にか手酌で飲んでやがったツキは、きよとんとした表情の後、にやつと笑った。

「成実、私を連れて帰ったら、彼女にふられちゃうよ?」

「ツキちゃん、何で知ってるの!？」

彼女? どういうこと?

小十郎を見ても、同じように不思議そうにしている。

「ツキ、彼女つてのはなんだ?」

面白そうなおいがするな。

慌てて止めようとしている成実からツキを奪って膝の上に乗せて、詳しく話せと先を促した。

「巨理城の城主のお嬢さんに一目ぼれしたんだって。」

「んきゃー!! ツキちゃんやめてえ〜!」

「成実キモイからその悲鳴やめたほうが良いよ。んでね、手紙とか送ったら、字が汚いって怒りの返事が返ってきて、伊達政宗に仕える家臣ともあるう人間が云々って大森城にわざわざ指導しに来たらしいよ。すんごい行動的な姫様だよねえ。」

巨理城・・・っていうと、巨理重宗か。

娘ともなると会ったこともないが、成実が気に入るような女か・・・。

「おい、成実、モノにはできそうなのか?」

「今頑張ってる所だよ。」

開き直つたらしい成実が、自棄酒を呷りながら答えた。

「成実、行動力があって、姉御肌な御姫様には強制や俺様の態度は

ダメだよ？」

ふふふと笑いながら酒を飲むツキ。
ちよつと飲みすぎじゃねえか？

「ドジっ子属性を前面に出しつつ、でもやるときゃやるんだぜって所も見せて、意外と頼れる所もある？でも、やっぱり私がいなきやダメ？って感じに思わせて、一気に畳み掛けると多分いけるよ。」
「え？ちよ、ちよつとまって、もう一回。」

だからね、と、女の落とし方についての講義が始まって、慌てて居住まいを正した成実にはツキがベラベラと一方的に話し始めた。

「女って、アホで馬鹿な男の人ほど手が焼けると思いつつも、ついつい面倒見ちゃうんだよね。で、そこを突く訳よ。」

「ふんふん。」

「あ、もちろん、そうでない女の人もあるから、見極めは重要ね？喜多さんと、馬鹿な男は斬って捨てるよね？」

「あら、ツキはよく見ているわねえ。」

にこりと笑う喜多が恐れ。

オレと小十郎が引いていると、それに気がつかない成実がぐぐっと身を乗り出した。

「なるほど。ちなみにツキちゃんはどっちのタイプ？」

「私？私は馬鹿な男は利用して、自分の都合のいいように使う、かな？」

にっこり。

.....

心当たりがありすぎるぜ。

一瞬にして凍りついた空気を気にもせず、どンドン杯を重ねるツキに、ついに喜多の Stop がかった。

「今日はもうそのくらいにしておきなさい？」

見れば、一人で徳利三本は空けていた。

「確かに飲みすぎだな。」

これ以上飲ませたら危険度が増すと判断した小十郎も、喜多に便乗してツキから盃を取り上げて代わりに白湯を与えた。

「そお？そんなに酔ってないと思うんだけどなあ。」

確かに顔を見ただけではほろ酔い程度だが、姿勢のいいツキがくてつとオレに寄りかかっている。

「酔っ払いは大概自分は酔ってねえって言うもんだ。」

白湯を飲み終わるのを待って、そろそろ部屋に帰らせるよう喜多に指示をすると、ツキを膝の上から立ち上がらせた。

「さ、部屋に帰りましょうね。」

「……うん。喜多さん、手を繋いで？」

先を歩こうとした喜多に手を差し出すと、ちょっと潤んだ目で上目遣いで強請った。

「まあ、まるで子供みたいですよ？」

「喜多さん好きだから良いの。」
「こっつと笑うツキ。」

やばい……。

何がやばいって、全てがヤバイ。

今まで僅かな量の酒しか飲ませたことがなかったが、酔うところなると分かっていれば……!!

「梵、ツキちゃん一人で飲ませちゃダメだよ……？」

「そうですね。」

「ああ。」

そのまま二人が広間を退場していく後姿を三人で呆然と見送った。

25 解禁(後書き)

くどいようですが、お酒はハタチを過ぎてからですよ。

26 お友達ができました(前書き)

かすがを春日と書いていたので、修正しました。

26 お友達ができました

暑い日も少しづつ減って行って、朝晩が涼しくなってきた葉月。最近織田信長の動きが今までと少し変わってきていて、伝令の忍たちが同盟国を飛び回っているらしい。

先日佐助が現れて、俺様時間外勤務ばかりで嫌んなっちゃうよとかぼやいていた。

一度は制圧されたと思われていた九州の島津が四国の長曾我部と中国地方の毛利と共に盛り返してきたことから、なにやら動きに統制が見られなくなってきたとか。少しづつ国がまた動き出しているようだった。

そんな中でも、ここ米沢の朝はいつもと変わりませんがね。

「DEATH FANG!!」

「霞断月!」

「Expand the shield・Level 100!!
(シールド展開。レベル100)」

今日も大技出すまで熱くなった政宗と小十郎の二人をシールドで囲ってやった。

もうこのくらいは余裕でできるようになりました。

喜多さんからも褒められたし、被害は二人だけで他にはないし、
良い事尽くめだね！

なんて清々しい鍛錬をしていると、復活した政宗がむくりと起き
上がって屋根の上を見上げた。

「そんな所にいねえで、さっさと降りて来い。」

ん？誰？

つられて屋根の上を見ると、金髪の女の人が立っていた。

初めて見る女の人だ。

スタイルがいいなあ。うらやましい。

ただ、あの露出はいかん。

幸村が見たら、絶叫すること間違いなしだね。

しかし、この世界にはボディスーツがあるんだね。

どこに売ってるんだろ。動きやすそうでいいな。

でも私が着たら、大惨事なんだろうなあ。メリハリないし。
ちえっ。

「あいつは越後の上杉謙信の所の忍でかすがだ。」

少し険しい表情の小十郎が屋根の上を見上げて教えてくれた。

かすがかあ。

ぜひお話がしたいな。
降りてこないかなあ。

と、思っていると、スタツと軽い音を立ててかすがが小十郎の前に降りて来た。

「朝つぱらから何の用だ？」

「謙信様からの書簡だ。」

愛想の欠片もないかすがが、同じく愛想のあの字もない小十郎に通の書簡を手渡した。

うーん。にこやかにとは言わないけど、もう少し口角を上げれば可愛いのかなあ。

「ツキ、こつちに来い。」

興味津々で見ていると、政宗に呼ばれた。

「なあに？」

私は今かすがの観察で忙しい。

綺麗なお姉さんは好きですか？

はい。大好物です！

視線をかすがから外さない私に痺れを切らせた政宗が、ズカズカと寄ってきて強制的に私を引き離した。

「あつ。理想のバストが〜くびれが〜ケツが〜！」

「だから、お前そのおっさん思考やめる。」

未練がましく見ているのがわかったのか、かすががちよっと引いたように私を見ていた。

お！そんな顔もかわいいなあ。

「その小娘は何なんだ？」

きた！会話のチャンスきた！

「ツキです。綺麗な女の人大好きです！お、お友達からお願ひします！」

「友達からって、てめえはどこまで行く気だよ！」

政宗うるさい。

何でか焦ってる政宗を無視して、期待に満ちた目でかすがを見上げると、すすすと後ろに下がって恐ろしいものを見るような目で私を見ていた。

「独眼竜、こいつ頭がアレなのか？」

「否定はできねえな。」

おのれ、政宗！！

「ひどい。仲良くなりたいたけなのに。あわよくば、その胸を鷲掴んでみたかっただけなのに。」

「かすが、悪い事は言わねえ。今すぐ逃げろ。」

ちよ！待って！本当に逃げないでえ！！

冗談だよー！！

・・・まあ、八割は本気だけど。

渡された書簡を読んで少し考えたあと、政宗は返書を書くから半刻までと言つて、小十郎と一緒に奥へ下がった。

する事もないので、縁側に座つて待つようにかすがに言つと、お茶の用意をしてから再び縁側に戻った。

まだ警戒されてる気がするけど、かすがは言われた場所で待つてくれた。

「はい。どうぞ？」

「あ、ああ。すまない。」

一つの急須で居れたお茶を均等に同じ湯呑みに入れて、まずはかすがに取らせる。

余った方を手にして、そのままずびーっとすすった。

あー、鍛錬のあとの茶はうまい。

その様子を見ていたかすがは、くんつと匂いを嗅いだあと、恐る恐るお茶を飲んだ。

もちろんすぐに飲み込まずに、口の中で吟味してからだ。

やっぱり忍つてのは、用心深いんだなあ。

「何をニヤニヤしている？」

あれ？にやけてた？

無意識だったよ。

「いや、一名除いて、あとは男しか周りに居ない生活だから、やっぱり女の人はいいなあと思って。」

「お前も女だろう？」

「女だからだよ。右みても左みても、男しか居ないし、みんなデリカシーないし、人の事を女と思っちゃいけないし、そのくせちよつと足を広げて柔軟したり走ったりすればはしたないはしたないってさあ。そうだ！かすがのその服はどこで手に入れたの？」

ぐいつと前のめりで勢い込んで尋ねると、呆気に取られた様子でバサラ屋と教えてくれた。

バサラ屋ね！奥州にもあるかなあ。

あとで政宗に聞いてみよう！

「こちらからも質問があるんだが。」

若干腰が引いてるかすがが、湯呑みを置いて私を見た。

「先ほど独眼竜と右目を何やら青い幕で覆っていたらどう？あれは何だ？」

やっぱり見られてたか？。

「あれはね、うーん、何と言うか、防御幕？あの2人を閉じ込めて、周りに迷惑被害が及ばないようにしたんだよ。」

「お前は何者だ？」

「何者だ？って言われてもなあ。どう答えたもんか。」

「忍か？」

「ちがうよ。ちょっと特殊能力のある一般人だよ。」

果たして特殊能力がある時点で一般人と云うかどうかは怪しいけど、でも、私は忍びじゃないし、武士でもない。ただの一般人だ。

「できることは、その防御幕をはることだけか？」

「ほかにもできるけど、教えてあげない。」

「なにっ？」

気色ばむかすがの目の前に、手を差し出して、にんまり笑った。

「お友達になってくれたら、教えてあげる。」

むふふ〜同世代の美人なお友達〜

かすがはしばらく私の顔と手を見比べていたが、やがてふいっと顔を背けてしまった。

あれ？ダメ？

「と、友達とは、取引でなるもんじゃないだろうが！」

ん？なんかちよつと顔が赤い？

「私はかすがのこと可愛いし綺麗だし、好きだよ？」

もしやと思つてちよつと大げさに告白紛いのことを言つてみると、思つたとおり。

「ば、馬鹿!! そういうことを恥ずかしげもなく言うんじゃない!」と、真つ赤な顔になつて怒つた。

よし、あと一息!

「ダメ?」

しよぼんとした声でうつむきがちに言つと、かすがはちよつと焦つたようにこつちを見た。

「だ、ダメとは言つてないだろう! 仕方がないな! 友達になつてやる!」

「よっしやああああ!! ツンデレ美人げつとおおお!!」

あ、また引かれちゃつた・・・。

そんなこんなで、治癒もできるのよゝつて教えている所で、返書を書き終えた政宗が戻つてきた。
楽しい時間というのは、あつという間に過ぎるなあ。

ここからはお仕事の時間だろうから、私は小十郎の側に寄つた。かすがも仕事の顔に戻っている。

「これを持って行け。用意が整い次第こちらも出る。」
「分かつた。お伝えしよう。」

受け取つた書簡を懐に仕舞い、かすがは私を見た。

「ツキも来るのか？」

は？何が？

訳が分からずに首をかしげると、政宗が溜息混じりに答えた。

「連れて行かねえ訳にはいかねえだろ。まったく、武田のおっさんも余計なことをしてくれる。」

「どういうこと？」

「軍神の城で会合がある。その席にツキも連れて来いとき。大方武田のおっさんが軍神にツキのことを話したんだろつよ。」

「信玄公が？・・・まあ、行くのは構わないよ。越後でしょ？」

ぐふつ、越後といえは新潟。新潟といえは米所。

米所といえは・・・！！

酒！日本酒！

ひゃっほー！

「これを置いていったら、何が起きるかわからねえからな。」

「そ、そうか。」

うふふ。何とでも言っが良いさ。

「んじゃ、気をつけて帰ってね。」

「ああ。お前も気をつけてこちらに来てくれ。」

バイバイと手を振ると、少しだけ笑ってかすがが頷いた。

しゅぱつと助走もなく塀の上に飛び乗って、そのまま塀の向う側に消えていった。

さすが忍。動きが綺麗だなあ。

「さて、朝餉を食ったら即仕事に取り掛かるぜ？」
「了解！」

さー、がんばるぞー

26 お友達ができました(後書き)

どんどんヒロインが壊れていってますな

27 軍神と常春男に会いました(前書き)

27 軍神と常春男に会いました

甲斐より遠い春日山城は、日本海にほど近い場所にありました。遠いよ。この距離をかすがは走ったのか。

やっぱり忍はずごいな。

馬に乗せてもらってる身分でも、もう限界です。

今回は馬に慣れてきたって事もあって、容赦なく飛ばされてかなりグロッキー。

力なく俯いている私を、先に降りた政宗が抱えながら降ろしてくれただけど、足がふらついて数歩よたついてしまった。

「大丈夫か？」

「まだ上下に揺れてる気がする。」

「距離があるからちよつとばかり飛ばしたが、そんなにきつかったか？」

小十郎も心配そうに声をかけてきた。

「とりあえず、揺れない所で休みたい。」

うぷつ。ちよつと気持ち悪い。

その場に座り込みたくなるのを必死に我慢して、みんなが馬を預け終わるのを待つ。

我ながらなんか産まれたての子鹿の様だわ。

「顔が青いぞ。」

ひょいっと抱っこされて、誰かと思えば小十郎だった。

小十郎に抱っこされるのは初めてかも。

ちよつと役得ゝとか思いつつ、ぐったりと目を閉じた。

「どうした？」

女の人の声が聞こえて、うつすら目を開けると、かすががいて私を見ていた。

「馬に酔つたらしい。すまねえが、休める場所を。」

「わかった。こっちに來い。」

運ばれた場所は、風通しのいい部屋だった。

とりあえず布団を敷いて貰つて、その上に転がる。

「寝てれば大丈夫だから、政宗も小十郎も到着の挨拶してきてよ。」

「だが……。」

渋る政宗と小十郎。

とにかく到着して世話になるんだから、挨拶くらいは早く済ませないとダメじゃないのよ。

「かすが、二人を謙信公の所に案内してあげてよ。」

早く連れて行つてと目で訴えると、かすがは呆れたような顔をして政宗と小十郎を見た。

「ほら、謙信様がお待ちかねだ。行くぞ。」

渋る二人を半ば無理矢理部屋から追い出すと、かすがは懐から鈴を出して枕元に置いた。

「何かあったら、この鈴を鳴らせ。すぐに誰かが来る。」

「うん。分かった、ありがとう。」

「気にするな。」

そう言っていると、そのまま二人の待つ廊下に出て、無駄のない動きで襖を閉めた。

こみ上げる吐き気を大きく息を吸って堪えて、目を閉じる。

うーん。乗り物酔いなんてしたことなかったんだけどなあ。

ちよつと頭も痛いな……。

風邪かなあ……。

なんて考えているうちに、いつの間にか意識が途切れた。

誰かが呼んでいる？

遠くで私を呼んでいる声が聞こえて、顔を上げた。

真っ暗な、何も見えない世界。

でも、誰かが呼んでいる。

ドコニイル？

誰が呼んでいるの？

コノ世界ニイルコトハワカッテイルンダ。
ドコニイル？

・・・だれ？

ミイ。ドコ？

え？・・・なんでその呼び名を・・・？

ミイ。必ず探シ出スヨ。

逃ガサナイ。

いやあああああああ！！！！！！！！！！

悲鳴と共に目が覚めて飛び起きた。

心臓がものすごい速さで動いている。

ガタガタ震える体を抱きしめて、すぐ近くに武器になるようなものはないかと視線を走らせた。

あの声は……。

まさか、まさか、まさか、まさか……！！

「ツキ！？どうした！？」

複数の足音と一緒に、政宗の声が聞こえた。

外れるんじゃないかってくらいものすごい勢いで襖が開けられて、恐い顔の政宗が部屋に飛び込んできた。

続いて、数人の見知らぬ顔と、見知った顔が後に続いた。

混乱する頭と、言うことを聞かない体をどうすることもできずただ震えて視線を彷徨わせる私に、侵入者がいないことを確認した政宗はもう一度どうした？と声を和らげて尋ねた。

「あ……。」

カタカタ震える手で政宗の羽織の裾を掴んで、すがりつく。その手を握り締めると、政宗は顔を顰めて、足元に丸まっていた掻巻を取って私を包んだ。

それから後ろを振り返って、様子を窺っている人たちに顎で廊下を示した。

「悪いが、部屋から出てくれ。ツキが落ち着いたら、そっちに行く。」

「わかりました。なにかいりようなものがあつたら、もうしでてください。」

「ああ。すまねえな。」

初めて聞く優しそうな声が、政宗の話に答えて、他の人たちを部屋から連れて出て行った。

足音が聞こえなくなるのを待って、政宗は私を抱き上げて膝の上に乗せて座った。

政宗の匂いに少しだけ暴れていた心臓が落ち着く。

何も言わずに、なだめるように背中を撫でてくれる手。しばらくして、震えが収まって脈も普通に戻り始め、ゆっくりと深呼吸をすると力を抜いて政宗に凭れ掛った。

「大丈夫か？」

「・・・うん。」

「何があつた？」

「・・・あの男の・・・朔夜の声聞いたの。」

背中を撫でていた手が、ピクリと動いた。

「真つ暗なところで、私を捜している声。まさか、あの男もこつちに来たの？」

私を呼ぶ声。逃がさないと呟く声。

私を「みい」と呼ぶのは、もうあいつ一人しかいない。

再び心臓がドクドクいい始めて、目の前が真つ赤に染まる。

「やっと解放されたのに。またあの日に戻るの？」

「ツキ、落ち着け。」

あの日には戻りたくない。嫌だ。怖い。

「ああ、でも、今度こそ、あいつを・・・朔夜を殺せる？」

心の片隅で凍っていた憎しみが、じわりと溶け出す。

矛盾する気持ちかせめぎあって、カタカタと体が再び震えだした。

「ツキ、ツキ!!」

揺さぶられてハッと我に返ると、ひどく焦った顔の政宗が私を見ていて、その政宗の目に映る自分の顔が真っ青になっているのが分かった。

「酔って寝ていたせいで、見たくもねえ夢を見たんだ。忘れる。ただの夢だ。」

「ゆめ・・・?」

「そうだ。ただの夢だ。」

夢・・・。そうなのかな・・・。

あの声は、私が作り出した幻影?

「あの森に居たのはツキ一人だ。他の人間なんて居なかった。低く落ち着かせるようにゆっくりと話す政宗。」

確かに、あそこには私しか居なかった。

やっぱり夢を見ただけなのかな。

「長旅でムリをさせちまったな。ここには数日滞在するから、ゆっ

くり休め。」

「うん。・・・ありがとう。」

再びゆっくり背中を撫でる大きな手を感じながら、政宗の胸に顔を埋めて目を閉じる。

うん。あれは夢。

ここにいるわけがない。

大丈夫。

30分程してようやく血の気も戻って、気持悪さも抜けたので政宗にもう大丈夫だと告げて立ち上がった。

寝るときに腰紐を緩めたせいで着崩れしてしていた単衣を直して、それから荷物の中から藤色の内掛けを取り出して羽織った。

「変なところない？」

くるりと回って政宗に見せると、ちよいちよいと手招きをされた。近寄ると髪を梳かれて、横髪を耳に引っ掛けて毛先を肩の後ろに流した。

寝ていたから、頭がぼさぼさになったのか。

頭はぼさぼさ出し、単衣は着崩れてるし、最悪の状態を皆に見られちゃったな。

恥ずかしいなあ。なんて言い訳しよう。

なんてぼんやり考えていると、細かい所を手直しし終わった政宗が、じっと私を見下ろしたまま止まった。

「ツキ、真田にあまり不用意に近寄るなよ？」
「なんで？」

近距離で政宗を見上げながら首を傾げると、引っ掛けてもらった髪が崩れた。
ちよつと髪がうつとおしくなってきたな。

自分で髪を耳にかけようとすると、政宗が私の手を止めてすつと耳元に顔を寄せた。

「お前が子供から女になったからだよ。」

は？何を言ってるの？

驚いて横を見ようとしたら、フツと耳に息を吹きかけられた！

「んぎやあああ！！！」

み、耳に息を吹きかけんな！！ばかあああ！！

ぞわぞわする体中をこすりながら、半歩先を歩く政宗の後ろについて皆が待っているという部屋に向かった。

「幸村が女の人全般が苦手って普通に言えないの？」

「それじゃ面白くねえだろうが。」

「面白くなくていいっつーの！」

先程まで政宗に泣き付いていたことなんかすっかり記憶の彼方に押しやって、ぶーぶー文句をたれると、政宗はピタリと足を止めた。

な、なによ……。

耳を塞いで警戒をして構えると、振り返った政宗は私を見下ろしてちよっと笑った。

「顔色も良いし、もう平気だな？」

「うん。もう平気。……と、いうか、なんか皆に顔見せるのが恥ずかしくなってきた。」

あんなに悲鳴を上げて、取り乱した姿を皆に晒してしまったよ！
うわああああ！恥ずかしい！

「具合悪くて恐い夢見たって言えばいいじゃねえか。」

「それが恥ずかしいって言ってんでしょ！」

デリカシーのない奴め！

蹴りでも入れてくれようかと思ったとき、ちよっと先の襖が開いて、

佐助が顔を出した。

「あ、やっぱりツキちゃんだ。元気になったみたいだね。」
「うあー！心の準備ができる前に見つかった！」

先に行ってしまった政宗の後ろから恐る恐る部屋に入ると、中には佐助の他に、信玄公、幸村、かすが、そして見たことのない人が座っていた。

「どうぞなかへは行ってください。」
「こやかで穏やかなこの声は、さっきの人だ。」

政宗の横に座ると、まずはと、頭を下げてお礼と自己紹介をした。

「先程は失礼をいたしました。ツキと申します。到着早々ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。」
「いいえ。かおいるもよくなったようで、なによりです。わたくしはうえすぎけんしんと申します。」

この人が、上杉謙信。

信玄公から想像した人物とは真逆だなあ。
もっと大柄でたくましそうな人を想像してただけぞ。
かすがと並んでるとまるで宝塚っばいわあ。

まじまじと見てみると、斜め前から不穏な気配がして、ちらっと見るとかすがが怖い目で私を見ていた。

Why?なんで?

「ふふ、わたしのつるぎよ、そうこわいかおをしてはいけませんよ?。りゅうのはながおびえてしまいます。」

「謙信様!申し訳ございません!」

謙信公に諭されると、かすがは慌ててスライディング土下座かつてくらい勢い良く頭を下げた。
おいおい?どうしちゃったの?

何が起きてるのか分からないまま呆然と見てみると、宝塚の舞台のごとく謙信公がかすがの手をとって体を起させると、顎に手を添えて至近距離で見詰め合った。

「わかればよいのです。さあ、そなたのうつくしいかおをわたくしにみせてください。」

「ああ、謙信様あゝ。」

ぶわああ!とバラが咲き乱れる幻覚が見えます。

どうしたらいいかわからずに、隣の政宗を見上げると、暇そうにアクビをしている。

え?放置?放置で良いの?

「いつものこった。ほっとけ。」

「そうそう。それより、ツキちゃん具合悪いつて聞いたけど、もう大丈夫なの？」

小十郎の言葉に同意して、佐助がにこやかに聞いてきた。

「うむ。長旅がたたったのであろう。無理はするでないぞ？」

「ツキ殿、甘いものを食べればきつと気分も良くなりますぞ！」

心配顔の信玄公と、斜め上を貫くアドバイスをする幸村。

みんな変わりなさそうで何よりです。

「ありがとうございます。信玄公。ご無沙汰を致しております。遅ればせながらの挨拶をすると、信玄公は鷹揚に頷いてから私を見て目を細めた。

「うむ。それにしても、美しく成長をしたのう。どうだ？ワシの所に嫁に来んか？」

さらつと爆弾発言いただきましたー！

暇そうにしていた隣からは殺気が。

信玄公の隣に控えていた幸村は真っ赤になって拳動不審。

小十郎はいつでも政宗を取り押さえられる位置にスタンバイ。

佐助は幸村が叫んだらすぐに口を塞げるように真後ろに移動。

ナイス連携。

「信玄公。ご冗談も程々にしないと、春日山城が瓦礫とかしちやいますよ？」

周りを見やがれ。

遠回しに断る意味でも、冗談で躲かせば、信玄公も意図に気がついたようで、愉快げな顔をした。

この状況を楽しめるなんて、やっぱり大物は違いますな。

「はっはっはっ。これはすまない。」

勘弁してくれと思ったのは、私だけじゃないはず。

「ワシではなく幸村の嫁の方がいいかもしれんな？」

わざとか？わざと言ってるのか？

「御館様！！な、なななななにおっしやられるのでござるか！

！？」

「Hey そいつは聞き捨てならねえ話だな、オイ。」

案の定過剰に反応した二人が、困惑と殺気をそれぞれ纏って、信玄公に詰め寄った。

あーあ。どうなってもしーらないっつと。

あわや一触即発かと思ったとき、スッパーン！と小気味のいい音がして障子が勢い良く開けられた。

「恋の話かい！？それなら、俺にまかせなよ！」
はい？

仮装か？つてくらいど派手な衣装に身を包んだ男が現れて、にか
つと笑った。

うわー、なんか凄いのが現れたな。

「けいじ。きてくれたのですね？」

けいじ？

謙信公が立ち上がって、派手男を迎え入れると、私に紹介してくれ
た。

「このおとは、まえだけいじです。けいじ、かのじよはおうしゅ
うのりゅうのはな。つきです。」

なんじゃ、その童の華っていうのは。私のことですか？
ちょっと気になったけど、まずは目の前の派手男からだな。

「初めまして。ツキといます。」

「こちらこそよろしく！俺は前田慶次。こいつは友達の夢吉だ。」
肩からひょっこり顔を出したのは小猿。

あ、可愛い。

愛らしい仕草にちょっと和んだ時、慶次は私の肩をがしっと掴んだ。

「ツキ、恋してるかい？」

「……は？」

咄嗟のことで、何を言われたのかを理解できずに間抜けな顔で慶次
を見上げてしまった。

「おい、てめえ。ツキから離れる。」
ぎらりと抜き身の刀が私と慶次の顔の間に突きつけられて、ぎよつとした。

肩から手が離れたので、慌てて後ずさつて、刀の持ち主を見ると、政宗がものすごく機嫌悪げに慶次を睨み付けている。

「危ないだろう？ツキが怪我したらどうするんだよ。」
ちよつと怒った慶次が政宗を睨み付けるけど、今回はかりは私も政宗に付くよ。

「初対面でいきなり恋してるか？なんて突拍子もないこと言わないでよ。びつくりするじゃない。」
怪しい宗教の勧誘か？

すすすつと政宗に寄りながら溜息混じりに言っていると、慶次は「めんごめんと笑って頭をかいた。」

「珍しい連中が恋の話をしていたから、つい盛り上がったよ。」
「この脳味噌常春人間が！」

「恋もしないし、嫁にも行きません。皆さん他をあたってください。」

戦国の世の武将たちの会合の話がこれかよ！
どこの女子高だこころは！！

27 軍神と常春男に会いました(後書き)

28 竜の誓い（前書き）

筆頭視点です。

28 竜の誓い

突然現れた前田慶次も交えて、しばらくの間他愛もない話をして
いると、夕餉の準備が整ったと報告がきた。

もうそんな時間なのかと外を見れば、日が傾いて沈む頃合だった。

軍神の城に着いて早々に寝込んでいたツキは、酒酒と連呼して二
タニタしてやがる。

オレの気も知らねえで、まったく。

到着の挨拶をしていたら、突然ツキの悲鳴が聞こえて、心臓が止
まるかと思つた。

襲撃かと駆けつけて見れば、家族を殺した男が自分を探す声を聞い
たと、取り乱して震えていたツキ。

縋りつく手は氷の様に冷たくなり、顔も死人の様だった。

ツキがここにきて間もない頃に、蒼竜と名乗った奴から、その男も
こちらの世界に運ばれていると聞いている。

そいつがツキを探しているともいうのか。

ツキが成長をして力を取り戻しているのと同じ様に、そいつも力を
取り戻しているんだろう。

接触は避けられないのか？

今回は単なる夢かもしれない。

だが、いつツキの目の前に現れてもおかしくはねえ。

夢で声を聞いただけであの取り乱し様だ。

実際にその男が現れたら、ツキはどうなる？

最悪、オレの前から姿を消すかもしれないねえ。

・・・そんな事は許さねえ。

こつちも本格的にその男を探して、ツキに悟られる前に先に始末するか。

「政宗？どうしたの？行かないの？」

すでに他の連中は部屋を出たらしく、オレと小十郎とツキだけが部屋に残っていた。

「ああ、今行く。」

「政宗も疲れてんじゃないの？」

「HA！オレを誰だと思ってるやがる。」

「セクハラエロ俺様男。」

セクハラエロの意味は良くわからねえが、後半の言葉から察するに、ロクでもねえことだな。

仕置き決定だな。

「ぎゃああつ！痛いっ！その鷲掴みやめてっ！」

「政宗様、そろそろ行きませんと。」

ギャーギャー喚くツキの反応を楽しんでいると、呆れ顔の小十郎が止めに入った。

ちっ、仕方ねえな。

「へえ、幸村たちは昨日ここに着いたんだ。」
「うむ。今朝方海を見に行ったでござるよ。甲斐には海がない故、その大きさ偉大さに某いたく感動したでござる！」
「そうだねえ。海を初めて見た人はよくそう言うよねえ。」
「ツキ殿は海を見たことがあるでござるか？」
「あるよ。日本海はないけど、太平洋なら。」
「にほんかい？たいへいよう？」
「あ、そっか。えっとね、越後の海はないけど、相模の海なら見たことある。」
「おお！相模の国でござるか！」

オレの横でさつきからツキと真田が楽しげに話していて

「かすがはさ、謙信に恋してるだろ？いいよねえ、恋！」
「だまれ！」
「みんな恋すれば、こんな戦の世もなくなると思うんだ。」
「だまれと言っている！気持ちが悪いぞお前！」
「こら、女の子がそんなこと言っちゃダメだろ？な？夢吉？」

「謙信様！なんでこんな奴呼んだんですかあ！？」

向かいではかすがに前田の風采坊が一方的に布教活動

「ふふ、こまりがおのつるぎもあいらしい。そうおもいませんか？
かいのとら。」

「はっはっはっ。若いもんはいいのう。」

喧騒にもかかわらず、のんびり酒を酌み交わす軍神と武田のおっさん。

ちなみに、猿は夕餉が始まる前に姿を消している。

「小十郎、猿はどこに消えた？」

「わかりませぬ。が、おそらく何かしらの命令を受けての事かと。」

あいつ、もしかてさっきのツキの話聞いてやがったか？

「佐助ならば、買い物に行ったでござるよ。」

「そうそう。さっき幸村が団子が食べたいって駄々こねて、ぶつくさいいながら出てったよ。」

「越後は米処。団子も美味しいでござるよー！」

同盟組む相手を間違えた気がしてならねえのは、どうしてだろうな？

我慢の限界を迎えたかすがが前田を力で黙らせて畳に沈める頃には、三本の徳利がツキの膳の側に並んでいた。半ば意識を飛ばしている真田の顔も、茹蛸のように赤い。

そろそろ御開きか。
ツキの様子を見ると、眠そうに時折あくびをしている。

「わかきとらも、りゅうのはなも、けいじもそろそろねたぼうがいでしょう。かすが、へやにあんないをしてさしあげてください。」
「はい。謙信様。」

立ち上がったかすがは、小姓を呼ぶと前田を連れて行くように指示し、それから真田を担ぎ上げた。
ほとんど意識がないようで、破廉恥と叫ぶ様子もない。

「ツキ、部屋に行くぞ。」
こっちも半分夢の中だ。
うとうととしているツキを抱き上げると、うー？と寝ぼけた声が返ってきた。

真田を担いだかすが、オレ、小十郎の順に廊下を歩いていると、

中庭に出た。

明日は中秋か。

僅かに欠けた月が東の空に浮かんでいた。

「……ツキは大丈夫なのか？」

「いつもはもつと飲んでる。今日は疲れているのだろう。大丈夫だ。」

おそろくかすが言いたいののは、そんなことではないだろうということとは分かっていて、小十郎がしれつと答える。

かすがもそれ以上は何も言わず、客間まで三人黙ったままだった。

「この三部屋を好きに使ってくれ。武田は突き辺りを左にいった先の部屋だ。」

「わかった。後のことは俺がやる。」

小十郎に後のことは任せて部屋に入ると、用意されていた布団にツキを寝かせる。

内掛けを脱がせて、単衣にして上から掻巻をかけてやったところで小十郎が中に入ってきた。

「喜多に怒られちまいそうだな。」

「でしょうなあ。ツキに無理をさせたとあつては、姉上も黙ってはおりますまい。」

ばれない事を祈るばかりだな。

うなされる事もなく静かに眠るツキの頭を撫でてやると、むふーと

おかしな声を上げて寝返りをうつた。

「政宗様、ツキは何故あそこまで怯えていたのですか？」

「夢を見たんだとよ。家族を殺した男が夢でツキを探していたらしい。」

「・・・まだあれ程までに・・・。」

その男がこの世界にいて、ツキを捜している。

そして、最近の魔王のおっさんの動きに統制が執れなくなって来たこと。

なにかの繋がりがあのような気がするのはオレの勘繰りすぎだろうか。

「小十郎、黒脛巾を数名西に送れ。各地の状況を探らせる。」

「斥候はすでに放っておりますが？」

「それとは別だ。ツキと同じ様な力を持つ男がいないかを調べたい。」

「政宗様、まさか・・・。」

驚愕を浮かべた小十郎に、半年前に蒼竜との話を聞かせてやった。

ツキが見たのは単なる夢ではないかもしれない。

話を聞き終えて、しばらく考え込んでいた小十郎は、顔を上げて真正面からオレを見据えた。

「政宗様、貴方は天下を獲ると決められた。その決意にお変わりはありませんな？」

「当然だ。」

「ならば、全てをツキに話し、その上でツキ自身がどうするかを決

めれば良い。」

何を、言っつてやがる？

呆然となつたオレに小十郎は厳しい目をして言った。

「今各国が、織田の脅威を取り除くために、影で動いている。逆にいつ織田にこちらの足元を掬われるかも分からないこのような時に、ツキ一人のために我が伊達軍の人員を割くわけには参りませぬ。お分かりか？」

「つまり、ツキを狙う男が現れたとしても、ツキに任せるといふことか？」

頭の芯がすつと冷えた。

左目で睨みあげれば、小十郎は動じることなく頷いた。

「そうです。天下を獲られる決意ならば、小さなものに目を囚われていてはなりません。」

「お前は、ツキを小さなものだというのか？」

「天下の前には小事です。」

そうか。

それが小十郎の考えか。

奥州の平定と天下を獲ることを決めたのはオレ自身だ。今もその決意に変わりはない。

そして、ツキを守ると、側に置くと決めたのもオレだ。

「小十郎。オレは二者択一するのは嫌いなんだ。欲しいものは全て

手に入れる。知っているだろう?」

「両方を失いかねませんか?」

「HA!このオレを誰だと思ってる。」

「政宗様!」

「決めたことだ。天下もツキを守ることも。竜は自らの誓いは必ず守るぜ?」

どちらかしか手にできないなんて、誰が決めた?

天下も手に入れるし、ツキも守る。

そして、いずれはツキを手に入れる。

「天下とツキを手に入れるのは、この独眼竜だぜ?」

にやりと笑って見せれば、小十郎はこめかみを押さえて大きく溜息を吐いた。

「天下よりもツキを手にする方が困難そうですね。」

「その方が燃えるだろう?」

「分かりました。この小十郎も覚悟を決めましょう。」

それでこそオレの右目だぜ。

29 夜、ふと目が覚めて（前書き）

夜のほんのひとコマの話です。
短いです。

29 夜、ふと目が覚めて

夜中喉が渴いて目が覚めた。

ぼーっとしながら起き上がって部屋を見渡すと、見たことがない場所だった。

あれ？私何をしていたっけ？
ここどこ？

夢と現実が分からなくなって混乱をしていると、突然腕を掴まれて悲鳴を上げそうになった。

なに！？

「どうした？」

掠れた声がして、見下ろすと半分体を起した政宗が私を見上げていた。

「政宗？あれ？ここどこ？」

「軍神の城だろうが。」

軍神・・・あ、そうだ。謙信公のところだ。

ほっとして体の力を抜くと、政宗は私から手を離して欠伸をした。

「朝までまだ時間がある。寝るぞ。」

「うん。」

再び布団に潜る政宗に背中を向けるように横になると、障子から透ける月の光をぼんやりと眺めた。
明るいなあ。確か明日が満月だった。
中秋か……。

まだ家族がいて、私がただの子供だった頃、旧暦の8月15日の満月には一族総出の観月会が催されていた。
宗主が舞を献上し、一族の全員で祈りを捧げる日。

一族を失ってから、この日だけは祈りを捧げてきた。
皆の安らかな眠りを願って。

明日、またその日がやってくる。

一年で一番明るく輝く月のおかげで、私の力も強くなるだろう。
こっそり内緒で海に行ってみようかな。
そこで舞うのも良いかもしれない。
蒼き月の方も喜んでくれるだろうか。

「……眠れないのか？」

つらつらと考えていると、政宗の静かな声が響いた。

くるりと寝返りを打つと、少しだけ眠そうな隻眼が私を見ていた。

「うつん。寝るよ。」

頭を摺り寄せる様にして目を閉じると、政宗は大きな手で私を引き寄せて、満足げに息を吐いた。

やがて聞こえてきた寝息と、とくとくと穏やかに刻まれる政宗の心臓の音を聞きながら、私も緩やかに眠りに落ちた。

30 温泉に行きました

朝起きてなかなか目が覚めずにぼーっとしながら朝ごはんを食べていると、どすどすと地響きをさせながら信玄公がやってきた。

「本日は温泉に参るぞ！」

襖を開けるなり宣言する信玄公に、政宗、小十郎、私の三人ははあ？と首をかしげた。

温泉つて、あの温泉だよな。

あるのか？

「この近くに謙信が作らせた温泉があるらしくての。そこに行くことにしたのだが、お主等もどうだ？」

楽しそうだね、信玄公。

遠くから、「お背中お流しいたしますぞ御館様あああああ！

！！」と、幸村の雄叫びも聞こえてきた。

温泉かあ。いいねえ。行きたい！

「行くのはかまわねえが、少し待て。ツキ、飯をさっさと食え。それを全部食い終わらなかつたら、温泉はなしだ。」

政宗が一向に減らない膳を指す。

うう、眠いし、食欲ないし、でも温泉は行きたい。

「朝餉はきちんと食さねば、体がもたぬからのう。」

うんうんと頷いて、信玄公は出発は一刻後だと告げて去っていった。

「ほら、いつまでもボーっとしてないで、さっさと食っちゃえ。」

小十郎がすでに終わっている政宗の膳を片付けながら、私に促した。

「政宗え、半分食べてよ。」

「NOだ。移動中も食わねえから体を弱める羽目になったんだ。ち

ちゃんと食べ。」
くっ、反論できない。

結局全部食べ終わるまで、皆を待たせる羽目になったのであります。
とほほ。

謙信公が作ったという温泉は、馬で10分ほどの距離にあった。ちよっとした旅館かってくらいの建物で、中にはたくさんのお客様がいた。つばい人がいた。

すごい。これは想像してなかったわあ。
休憩所に通されると、すぐにお茶が出てきて、少し休憩をした後に脱衣所に案内された。
かすがも来れば良かったのになあ。
任務があるとかで、あとで来るとは言ってたけど。
一人で温泉に浸かるなんて、ちよっとつままないなあ。

湯帷子という麻で作られた浴衣つばいものを着て入るらしくて、女中さんから一式渡される。
どうやらタオル代わりも兼ねているみたいで、湯上り後はこれを絞って体の水分を拭き取る物らしい。

いつもは米沢城の比較的小じんまりとした湯殿に一人で入るので、

湯帷子なんか着ないで裸で普通に入るもんなあ。

湯帷子を着て戸を開けると、壮大な山の景色と、ほかほか湯気の立つ温泉が見えた。

湯帷子を着たまま入るのがルールらしいので、そのまま手桶でお湯をすくって体にかけて、中に入る。

「くはーっ。たまらん。」

思わず声を漏らしながら肩まで浸かると、手足を伸ばしてうっとり。温泉にしてはぬるい方で、多分40 あるかないかくらい。長く浸かるには最高だ。

縁に腕を乗せて、自然を眺めつつまったりしていると、私がいた小屋とは違う方の小屋の戸が開いて、がやがやと人が出てきた。

「なかなかだな。」

「広いでござる!」

「へえ、本格的じゃねえか。」

「こんな立派な温泉なんて、そう滅多にないよな!」

「きにいつていただけましたか。」

え？

なんで、目の前に全員集合？

混浴？混浴なのか？

流石に、佐助や小十郎の姿はなかったけど、信玄公、幸村、政宗、慶次と夢吉、謙信公と、湯帷子姿の男どもが並んでいた。

衝撃のあまりに固まる私の方へ、政宗がずかずか歩いてきた。

「な、なんで、こっちにくる？」

「なんでって、温泉に入りきたんだから、当然だろう？」

不思議そうに答える政宗に、からかいや面白がる様子はない。もしかして、この湯帷子を着るから、混浴は当たり前なのかな。

その後が続く面々も、それぞれ好きな場所で湯に浸かって気持よさそうにしている。

郷に入りては郷に従えっていうからな。

水着で混浴と思えば……って、思えるかあ！！
思いつきり布が体に張り付いてんじゃん！！

視線を外に向けて、なるべく皆を視界に入れないようにしながら、遠くの山を眺めた。

あー、気持が良いなあ。

温泉に浸かるのなんて、何年ぶりだろう。

ぼけーっという具合に奴らを意識せずにまったりした頃、ざばあ！！と誰かが立ち上がって、大きく湯が揺れた。

「うおおおお！！みなぎるあああああ！！」

びっくりして思わず振り返れば、真後ろに政宗がいて、その顔の向こうに仁王立ちしている幸村の腰から上が見えた。

あ、あぶねえ！！

政宗がいなかったら、かなり危険なものを見てしまう所だった！

ざばあ！！とまた別の場所で誰かが立ち上がる音がして、恐る恐るそちらを見ると、慶次の向こう側にいた信玄公が立ち上がり、やっぱり仁王立ち。

慶次もナイスポジション。

おい、チーム武田。乙女が居ることを忘れて足広げて仁王立ちすんな、ボケが。

「温泉くらい静かに入いらんかああああ！！」

ざばざばとお湯を掻き分けて幸村に近寄った信玄公は、そのままぶわきい！！とものすごい音をさせて幸村を殴りつけた。

とつさに顔を伏せて目をそらすけど、お湯に宙を舞う幸村が映し出されて、こつちに跳んで来る様子が見えた。

「ツキ、こつちに来い。」

くいつと腕を引き寄せられて、ひんやり冷たい濡れた布の感触が頬に当たると同時に、だっぱーん！とすぐ後ろで水飛沫を上げて幸村が墜落したようだった。

「ちよつと！温泉くらい静かに入ってくれよな！」

頭から水飛沫を浴びた慶次が夢吉を庇いつつ迷惑そうに言うと、夢吉もキキツ！と慶次の顔を拭ってやりながら迷惑だと言わんばかりに鳴いた。

「げんきがあつてよいではないですか。」
いつの間にか、一人だけちゃっかりお酒を飲みながら浸かっている謙信公。

「限度つてもんがあるだろうよ。」
同じくお湯を被った政宗が、髪をかき上げながら呆れたように言うと、慶次がそうだそうだといいながら、なぜかこっちに近寄ってきた。

な、なんでこっちに来るの？
つか、信玄公もなんでしようか？

気がつけば、後ろに沈んでいる幸村、右に慶次と夢吉、左に信玄公、前に政宗という状況。
ひいひい！！目のやり場に困ります！！

「ツキ殿、大丈夫か？すまん。殴りつける方向を誤った。」
「ツキ怪我はしてないかい？なんか顔が赤いけどのぼせたんじゃない？」

両脇から心配そうに覗き込まれて、しどろもどろ大丈夫だと答える。
うう、でも本当ののぼせそうだよ。でも、この状況じゃ出るに出来ないし。

「本当に大丈夫か？そろそろ一旦上がるか？」

そわそわと目を泳がせる私の様子に、政宗が聞いてきたので、これ幸いにとコクコク頷いた。

「さ、先上がります。みなさんごゆつく・・・り・・・？」

言いながら勢い良く立ち上がった時、くらあっと目の前が真っ黒になつて体が傾くのが分かった。

「ツキ！」

やばい・・・。

そう思うのと同時に意識が途切れた。

ひんやりと冷たいものが額に乗せられて、そつと目を開けるとかすがが私を覗き込んでいた。

「意識が戻ったか。」

ほつとしたような響きに、温泉で倒れたことを思い出した。

うわー、あの状況で倒れたのか・・・最悪。

「まだ横になっている。」

起き上がるうとした所を制されて、仕方なく横になつたまま部屋を見渡すと、幸いなことにかすが以外の人影はなかった。

「えと、みんなは？」

「今佐助と竜の右目の説教を受けている。」

「は？」

なんで？どうして？

「湯帷子を着ているとはいえ、男が一人の女を囲むなど言語道断。」

「・・・もしかして、混浴ってありえないの？」

「いや、温泉に限っては、混浴が通常だ。」

やっぱりそうなんだ。

「だが、ツキはそういうことに慣れてないのだろう？気を遣えない

あいつらが悪い。」

「かすが・・・。」

うう、なんて嬉しい言葉。

そうなんだよ、奴ら気遣いしてもんが足りないんだよ。

「水を飲んだほうが良いんだが、飲めそうか？」

「大丈夫。貰うよ。」

ゆっくり体を起すと、良く冷えた水を渡されて、ちよつとずつ飲む。

湯帷子はすでに脱がされていて、浴衣が着せられていた。

「昨日からいろいろごめんね。」

ここに着いてから、私迷惑ばかりかけてるな・・・。

「気にするな。奥州からここまでは大分距離があつたんだ。疲れもする。」

「かすがはすごいねえ。あの距離を走るんでしょ？」

「まあな。忍びならばそれくらいのことはどうってことない。」

どうってことある距離ですよ。

「それに、謙信様の御役に立てることならば、多少のことなど苦とも思わない。」

そう自慢げに言うかすがの頬がほんのり赤く染まった。

かわいいなあ。

「かすがは謙信公のことが好きなんだね。」

だから昨日の夜、謙信公を見ていたら睨んできたんだね。

にまにま笑って言うと、ますます顔を赤くしてかすがは慌てふためいた。

「か、からかうな！尊敬申し上げているだけだ！恋慕など……！」

「ふふふっ。かすがはかわいいなあ。」

「そ、そういうお前はどうかなんだ!？」

「へっ？」

「独眼竜のことだ!」

政宗？政宗がどうかした？

きよとんとすると、かすがは驚いたような顔になった。

「独眼竜のことを好いているのではないのか？」

「え？まあ、嫌いじゃないよ。けっこう好きだよ?」

「いや、そういう意味ではなく……。」

戸惑ったようなかすがに、ようやく意味を悟る。
ああ、そういうことか。

「私は恋愛をするつもりは、これから先ずつとないんだよ。」
うまく笑えているだろうか。
恋をしたり結婚したり、私にはそんな夢を見ることはできない。
そういう感情は、遙か昔に凍り付いて砕けてしまったから。

「だからね、謙信公をかすがから盗ったりしないから、安心してよ
ね。」
「んなー！」

冗談めかしてにやりと笑えば、かすがは再び真っ赤になってわたわ
たしだした。

ほんと、かすがは可愛くてきれいだなあ。

体調も戻ったので、説教中と思わしき部屋に行ってみると、とん
でもない光景に遭遇しました。

痺れた足を抱えて悶絶する幸村、政宗、慶次。
信玄公と謙信公はなんでもないうように胡坐をかいているけど、小刻
みに震えている所を見ると、やせ我慢をしている模様。

「な、何事？」

「あ、ツキちゃん具合よくなった？」

佐助が一仕事終えた清々しい笑みを浮かべて片手を挙げた。

その横の小十郎は、乱れて一房落ちた前髪を上げて撫で付けている。

「心配かけてごめん。・・・で、これは何事？」

「ああ、右目の旦那が獄殺モードで説教しただけ。ほらほら、みんなツキちゃんに言うことがあるんじゃないか？」

ばんばんと手を叩いて佐助が言うと、五人の視線が一斉に私を見た。その目が縋り付くような、助けを求めるようなものだったのは、気のせいではないだろう。

「「「「すみませんでした。「「「「

ひいひいひい！！

謝られてるのに、怖い！！

「い、いえ。私もご迷惑おかけしました。」

引きつる顔でなんとか答えると、小十郎がすっと立ち上がった。その目付きは、尋常じゃないほど怖い。

「これからは、十分お気をつけなされよ？」
「「「「はい！」「」「」「」

こ、これが噂に聞いていた獄殺モードでの説教・・・！！
こええええええええええ！！

今日初めて、小十郎と喜多さんとの血の繋がりを強く感じました。

30 温泉に行きました(後書き)

31 月に惑う(前書き)

やっちまった。だが後悔はしてない！YE

。(b

S!!

d)。

31 月に惑う

どうやら温泉施設で今夜はみんなでお泊りのようです。

やたらでかいなと思っていたら、宿泊機能も備えた施設だったらしい。

謙信公は時々ここに来て温泉に浸かりながら、酒を飲むのだとか。

うらやましい……。

米沢にもそんな施設がないのかな？と期待を込めて小十郎に聞いたら、「そんなもん作ったら、政宗様がますます執務をしなくなるじやねえか。」と、一刀両断されました。
がっかり。

日が沈んで、東の空に見事な満月が昇り始めた。

月を眺めながら、皆で夕食を食べ終わって、夜も遅いということまで解散。

とはいっても、まだ亥の刻、22時にもなっていないんだけどね。

小十郎もおやすみなさいの挨拶をして、部屋に戻っていった。で、政宗はというと、当然のように同じ部屋にいる。
すぐに寝る様子もなく、縁側でまったり月を見上げていた。

「今日はよく晴れたね。雲一つないお月見だ。」

政宗の横に座って、空を見上げる。
青白い光を放つ月に、力が溢れそうなくらい強まるのを感じた。

手のひらを上に向けて少し集中しただけで、青い光の珠が生まれ
て宙に舞い、弾けて小さな光の粒になった。
蛍の様に浮かんで、私と政宗を囲んで漂う。

「さて、これで準備は完了。」

「なにかするの？」

「練習の成果をお見せ致しますよ。」

本当は海に行きたかったんだけど、まさか抜け出すわけにもい
ないからなあ。

政宗から貰った扇を手にして庭に降りると、息を吸って深呼吸。

よし。始めるか。

月に向かって深く礼をした後、扇を広げて膝をつく。

「蒼き御方に蒼月華そうげっかが捧げ申す。」

いつか母がそうしていたように。

一族に伝わる祝詞を歌いながら、舞い始める。

不思議なことに、もう7年も口にする事のなかった祝詞は、一言

も間違えることなくすらすらと紡がれて空に溶けた。

扇が天に向かえば、光も舞い上がり。

扇を下ろせば、雪のように降ってくる。

指先にまで意識を込めて、ばば様の言葉を思い出しながら、母の舞姿を思い出しながら。

力が体からあふれて、更に光の粒を作り出す。

眩しいくらい光が辺りに漂う頃。

最後にくるりと回って、扇の上に集めて再び一つの光になった珠を、そっと押し上げるように空へ放った。

するすると昇った光が、やがて月と重なると、ぱつと弾けて消えた。

オオーーーーン・・・・・・・・。

風の音か、それとも蒼き御方の声なのか。

空気を震わす声が聞こえて、やがて聞こえなくなった。

最後に深く一礼をして、頭を上げた。

ふう。なんとかできたかな……。

縁側に戻ると、満足そうな顔をした政宗が拍手をしてくれた。

「見事な舞だった。」

「ありがとう。」

ちよつと照れつつ政宗の隣に座ると、ワシワシと頭を撫でられた。

「あの蛍みたいな光は何だったんだ？」

「あれは私の力の結晶みたいなものかな。」

手のひらを上にして、さつきと同じように力を集中させると、蒼い光が生まれた。

「これをもう少し凝縮するとね……。」

更に力を注ぐと、光はだんだん形を作っていた。

今夜だから作れる、結晶。

まぶしいほどに輝く月の力を集めて、少しずつ固めていくイメージで。

観月会の影のメインイベントとも言われる、蒼い結晶石作り。

なんでも、これを大切な人に贈って、その人が一年館平穩無事で行われる様にと願うものらしい。

これが作れる様になって、初めて一人前と認められるんだけど、結局私は誰にもあげた事がなかったなあ。

父は母に。母は父に。兄は教えてくれなかったけど、誰かにあげていたようだ。

これは政宗にあげよう。

戦場で怪我をしない様に。
病気にならない様に。

いつも政宗らしく駆けていられる様に。

直径2センチ程の大きさになった石が手のひらでコロリと転がった。

「政宗、あげる。お守りだよ。」

大きな手のひらに乗せれば、石は淡く輝いて政宗の全身を一瞬包み込んだ。

うむ。我ながら完璧だ。

「今のは何だったんだ？」

「加護だよ。」

「加護？」

「そう。怪我や病気から、政宗を守る様になって。」

そう言うと、政宗は手の中の石を握り締めて「そうか。」と呟いて
大事そうに懐に仕舞った。

喜んでもらえたようで嬉しい。

「ふふ、初めてにしては完璧だね。」

「初めて？」

「そうだよ。だって、今まであげる様な人いなかったし。」

「そうか。」

うん、いい仕事をしたわあ。

さて、そろそろ寝ようかなと、立ち上がるつもりしたら、政宗がぐいっと腕を引っ張った。

「うお！」

重力には勝てずに、そのまま政宗の肩に手をつけて膝の上ののしかかった。

「あぶなっ！急に引っ張らないで・・・っ!？」

文句を言おうとした途端、政宗の顔がどアップで近づいて、唇を少しかさついた柔らかいもので塞がれた。

は？なに？

どうなってるの？

え？

あれ？

「目え閉じる。」

「は？何いつ・・・!!！」

顎を掴まれたと思ったら、第二波が来た。

しかも、なんか、表現しにくいものが口の中に入って来ましたよ!!！

熱いものが我が物顔で口の中を掻き回して、私の舌も絡め取る。

「~~~~っ!」

ぺしぺしと政宗の肩を叩く手に力が入らない。

何度か角度を変えてようやく離れる頃には、息も絶え絶えだった。

「なにすんのよお……。」

半べそかいてる自覚はあるけど、もう何がなにやら。

くったりと政宗の肩に顔を埋めて、真っ赤になっているだろう顔を隠すので精一杯です。

「Sorry、いろいろ限界だ。」

大して悪いと思ってなさそうな政宗に、むっとして顔を上げる。

「欲求不満なら他で発散してこい！」

「他の女じゃダメなんだよ。」

きゅっと抱きしめられて、身動きが取れなくなる。

「お前がいいんだよ。ツキ。」

耳元で低く囁かれて、背中がぞくつとなった。

ヤバイ、流されちゃダメだ……！！

「私は……。」

「言うな。聞かねえ。」

恋なんてしない。

そう言おうとしたら、強めの言葉で止められた。

「オレは、欲しいと思ったら必ず手に入れる。You see?」

「お、横暴だ……。」

「いまさら、だろ?」

確かに。

不覚にも納得してしまった。

いや、納得しちゃダメじゃん私!

「今すぐには言わねえ。それくらいの覚悟はオレにだってある。」

「それなら、限界とか言っていきなりキスなんかすんな。」

肩に手をつけて、ぐいっと背中をそらせるように政宗を睨んでやれば、にやりと笑い返してきた。

「お前が可愛いことばかり言つのが悪い。」

「言いがかりだ!」

「初めてをオレにくれるんだろ?」

「そんなことは言つてねえ!!!この破廉恥男がああああ!!!」

顔から火が出るかと思つたわ!

じたばた暴れて抜け出そうとする私を笑いながら押さえつける政宗。

「今すぐには言わねえが、オレの理性が持つうちに、落ちて来いよ?」

再び耳元で囁かれて、撃沈。

わざと耳元でしゃべるのはやめろおお!!

「そろそろ寝るぞ。」

いろいろありすぎて魂が半分口からはみ出てる状態でいると、政宗が立ち上がった。

「ほら、何もしねえから、さっさとこい。」

腕を引つ張られて立ち上がると、そのまま手を引つ張られた。

「明日情報交換をして、問題がなければ、明後日には奥州へ帰る。それまでに体調を整えとけよ?」

「お前が言っなよ……。」

いっばいっばいですよ。

着いた日よりも、疲れた気がするよ。

先に布団に転がった政宗に引きずり込まれて、一瞬緊張が走ったけど、すぐに寝息が聞こえ始めて力が抜けた。

なんなんだよ、もう!

私一人がオタオタして馬鹿みたいじゃん!!

政宗に背中を向けて、やけくそ気味に目を閉じると、そう時間が
かからないうちに眠りに着いた。

自分の神経の太さに、ちよっと驚きました。

背中を向けてしまったツキから、すぐに寝息が聞こえ始めて、閉じていた目を開いた。

不意打ちで、しかも半ば強引にKissしたオレと同じ布団にいて、良く眠れるな。
しかも、寝付きが早え。

それにしても、あの表情はまずいだろう。

嬉しそうな、恥ずかしそうな、あの笑顔。
もっと大人になるまで待つと決めていたのに、気がついたらツキを
引き寄せて、口付けをしていた。

やわらかな感触に、理性の糸は脆くも切れた。

あとの感触は思い出すのもヤバイ。

オレの肩に顔を埋めて、微かに震えるツキ。

女が欲しいなら他に行けと言われて、考える前に言葉が漏れた。

他の女なんかいらねえ。

オレが欲しいのは、ツキだけだ。

ツキがこういふ話やそぶりからあえて遠ざかるうとしているのは、前々から感じていた。

何があつたのかまでは知らねえが、恐がっているようにすら見えた。

嫌われていないことは分かる。

だが、それだけじゃ足りねえ。

オレは貪欲なんだよ。

「んー。。。。」

くるっと仰向けに寝返りを打ったツキが、眉間に皺を寄せて唸った。ゆっくりと頭を撫でてやれば、徐々に眉間の皺が取れて、幸せそうな寝顔に変わった。

あと、どれだけこうして穏やかな夜を一緒に過ごせるだろう。

まだ子供の姿だから保てる理性も、あと数ヶ月もすれば保障はできねえな。

「できるだけ早く、落ちて来いよ?」

口のすぐ横に軽く触れるだけの口付けを落とす。

くすぐったかったのか、再び寝返りを打ってオレの胸元に顔を埋めるツキの体を抱きしめて、今度こそ眠るために目を閉じた。

32 事の終わり(前書き)

32 夢の終わり

春日山城に戻ってきて、政宗たちが佐助やかすがの警護の下で難しい話をしている最中、私は今海に来ています。

難しい話は寝ちゃいそうだからね。

真剣に話しているのに、居眠りしたら悪いもん。
空気を読んだのですよ、うん。

と、言うかね。

政宗と一緒にするのが、もう耐えられないのよう!!

朝起きて、政宗と顔を会わせるのが、ものすごく恥ずかしかった……!

頑張って普通に振舞っていたつもりだけど、小十郎に具合が悪いのか?と聞かれて心臓が止まるかと思ったよ。

具合が悪いのは、政宗の脳みそだよ!!

まさか、政宗が……。

あんな……。

「うわああああー!!」

まざまざと感触が蘇って、その場にしゃがみ込んで叫びながら悶絶。

初めてだったのに、いきなりデープはないよ!!

って、思い出すなわたしいいいい!!!!

バンバンと砂浜を叩いて、うおおおお！とか、ぎゃあああ！とか、心のままに雄叫びを上げていると、急に影がさした。

「大丈夫ですか？」

「うはあい!？」

一人だと思っていた砂浜で、突然声をかけられて、飛び上がるほど驚いた。

顔を上げれば、見たこともない男がこちらを見ていた。

真っ白な長い髪と病的なまでに白い皮膚に、一瞬ぞつとするものを感じたけど、穏やかそうなその声音に気を取り直す。

「大丈夫です。」

立ち上がって答えると、男はそうですかと呟いて微かに笑った。

うう、なんたる。

この人苦手だ。

さつきからぞくぞくする。

「ところで、こんな所で一人で何をされていたのですか？」

「海を見に来たんですよ。」

「御一人で？」

「ええ。みんな忙しくしているものですから。」

もう帰りますけどね、と半ば逃げるようにその場を去ろうとする。

男に引き止められた。

「実は、私人探しをしているのですが、もしご存知だったら、教えていただけませんか？」

人探し？

逃げ出したい気持ちを抑えて、どんな人ですか？と聞くと、男はふふつと笑った。

「女性です。癒しの力を持つ、奇跡の女性。ご存じないですかねえ？」

心臓がものすごい速さで脈打っているのが分かった。

目の前の男に聞こえてしまっただけじゃないかと、心配になるほどだ。

うーんと首を傾げて、思い出す振りをしてみせる。

緊張のあまりカラカラになる口を湿らせて、ゆっくり口を開いた。

「聞いたことないですね。そんな人、本当にいるんですか？」

「私も半信半疑なんです。ただ、私の上司とその知人が探せと言ったものだから。」

困ってるんですという顔をする男。

「そうなんですか。お役に立てません。では、私そろそろ行かな

いと。」
会釈をして、その場を去ろうと後ろを見た瞬間。

「ですから、こうして試しに来たんですよ。」

背後に殺気を感じた瞬間、意識する前に体が横に飛退っていた。
体があつた場所を銀色の光が走つた。

「おや、よく避けられましたね。すばらしいですよ。」

信じられない思いで視線を向けた男の手には、二本の死神デスサイスの鎌のよ
うな鎌が握られていた。

男の表情は愉悦に歪んでいて、ゆらりと体が揺れた。

「・・・危ないじゃないの。いきなり斬り付けるなんて。」

この男、危険だ。
人としての正常を逸脱している。

この世界に来て初めて感じる命の危機に、全身の細胞が目覚める
ような感覚が起きた。
武器も防具もないこの状況で、あの鎌のリーチの差を埋めて戦うの
か。

「貴女、癒しの力を持つお嬢さんですよ？私に見せてくださいよ。その力を。」

「あなた、だれ？」

「私ですか？ああ、申し遅れてしまいました。私は織田信長公が家臣、明智光秀と申します。」

ラスボスの家臣かよ！！

明智光秀がこんなイっちゃってる男だったなんて……！

嫌な顔をしてやると、明智光秀は嬉しそうに笑った。
変態め！

「ふふつ、貴女は、ツキさんですか？ああ、ミツキさんと呼びました方がよろしいですね。」

その名を聞いた瞬間、全ての音が消えた。

な……んで……？

その名前……どうして……？

前の世界で捨てたはずの名前。

両親から貰った満月みつきという名前を知る人は、この世界では誰一人いないはずなのに……。

—昨日見た夢は・・・現実？

「どうやら、当りのようですね。ふふっ、良い表情ですよ、貴女。とても良い表情です。絶望と驚愕が入り混じって、そこに恐怖が覗いている。とてもおいしそうな表情ですよ。」

はっとなって、明智光秀を見ると、心底楽しそうな顔をしていた。

「あなた、さっき上司とその知人って言ってたわね。まさか、知人っていうのは・・・。」

「朔夜殿ですよ。貴女にとっても会いたがってます。どうです？私と一緒にいらっしやいませんか？」

朔夜・・・！！！！

体中の血液が沸騰したように全身が熱い。けれど、心は逆に氷のように冷えていく。

あいつが生きてこの世界にいるのならば。
今度こそ必ず……!

「断る。朔夜に伝える。時が満ちれば、こちらから出向くと。」

「一緒に来てはいただけなのですか？」

「そう言った。」

「それはいけませんねえ。信長公は貴女をご所望ですよ。」

一度は下ろした鎌を片方持ち上げて私を指すと、明智光秀はくくつと笑った。

「多少傷をつけてでも、連れて帰ります。」

「ならば、受けて立つ。」

朔夜を知っている人間に、手加減は一切無用だ。
コロセ。

「Unlimited capacity to release .
」

全ての能力を解放すると、体から放たれた青い光が爆発し、明智に

襲い掛かった。

同時に砂を蹴って懐に入り込んで、驚愕に彩られているその顔を下から思いっきり蹴り上げた。

宙を舞って崩れ落ちると、すかさず手を硬化させて、仰向けに倒れ込んでいる腹に容赦なくぶち込む。

「ぐ……！」

内臓が潰れる感触が手に伝わり、明智が口から血を吐き出した。

「こ、これほどまでとは……。油断、してしまいましたね。」

「油断したら、死ぬ世界で生きてきたんじゃないの？」

止めだ。

無駄口を叩いていたら、どんな反撃があるか分からない。

今のうちに殺してしまわなければ。

首の骨を叩き潰そうと、手を振り上げた瞬間。

「なっさけないな、こんな女にズタボロにされてんのかよ!？」

変声期もまだのような、子供の声と、数本の矢が飛んできた。

明智から飛退いて矢を避け、声の主を見やれば、男の子が小馬鹿にしたような顔で次の矢を構えていた。

「蘭丸。何しに来たのです？」

ふらつきながら明智が立ち上がり、鎌を支えにして苦しげな息を吐いた。

「助けに来てやったんだよ、この蘭丸感謝しな！」

そう言いつつ次々と矢を放つと、子供は後ろに控えていた兵士たちに明智を救助するように命じ、明智はその兵士たちに抱えられるようにして、馬に乗せられて運ばれていった。

「うち、逃がしたか。」

苛立ち紛れに飛んできた矢を掴み取ってへし折ってやると、子供は驚いたような顔をした。

「お前、女の癖にやるな！信長様にすぐ帰ってくるように言われてなければ、戦いたかった！」

その無邪気さに、苛立ちが増す。

この子供は、戦を、人の命を奪うことを、ゲームと勘違いしているのか。

「帰って朔夜に伝える。決着は必ずつけると。」

「いいよ！んじゃ、またな。」

そういうと、くるりと背を向けて、子供は去っていった。

再び、一人になった砂浜に、波の音が戻ってきた。

「終わっちゃった……。」

がくりと膝をついて眩いた。
ぼつり、頬を伝って落ちた滴が砂浜を濡らす。

楽しかっただけの、夢の時間が終わった。
手に残る、肉を潰す感触。
吐き出された血で汚れた着物。

「……………つく……………」
歯を食いしばって、洩れる嗚咽を堪える。

どうしても、どうしても逃げられない運命。
この世界に来て、ようやく逃げ切れたと信じていたのに。

「……………ふえつ……………」

再び凍り始めた心が痛い。
嫌だと叫んでる、助けてと悲鳴を上げている。

どうして、こつも私は弱いんだろう。

許すことも、憎んで殺そうとすることも、どちらを選ぼうとしても、辛い。

もう、こんな気持ちにならなくなったのに……。

もう、後戻りはできない。

たとえ、どんな結果になろうとも、進むしかない。

夢は終わったのだから。

33 分岐点

城に戻ると、まだ会合をしている最中だったらしく、部屋に政宗の姿はなかった。

汚れた着物を脱いで、出掛けるまで着ていた内掛けを羽織ると、バシッと自分の両頬を挟むように叩いた。

「よし。」

部屋を出て、とりあえずは皆に織田軍がすぐ近くまで来ている事を教えなきや。

会合をしている部屋に近づくと、ちょうど佐助が部屋から出てきた。佐助は私に気がつくのと、すぐにこちらに近寄ってきた。

「ツキちゃん、なにか用事？」

「佐助、明智光秀がすぐそこまで来てる。みんなに伝えて。」

「それ本当？」

佐助の顔が飄々としたものから、忍の顔に変わる。

「本当。海にいた。蘭丸って子供もいる。兵を引き連れていた。」

「わかった。ツキちゃん、もう出歩いたりしないで、部屋にいてよ？」

「了解。」

体に潮の香りが纏わりついてたようで、佐助は顰め面をして私に言うと、そのまま慌しく部屋に戻っていった。

さて、私も動きますか。

部屋まで戻ると、私の荷物の一番下から、以前こっさり用意していた忍装束を取り出した。

佐助に、政宗に内緒で用意してもらったもので、ご丁寧にクナイまで添えてよこしてきた。

どうやら佐助の部下に、私と似た様な身長の人がいるらしく、その人のお下がりのらしい。

奥州からここに来るまでにも使った、旅に必要な品を手製のカバンに詰め込んで、忍装束と一緒に丸めて物陰に隠し、そろそろ来るであろう人を待つ。

おそらく、各地の忍たちの報告で、織田軍が動き出したことは知っているはず。

いつ仕掛けるか、どこで仕掛けるかを話し合っていたのだろう。

城内は慌しくあるが、混乱の様子は無い。

佐助に報告してから一時間ちょっとして、政宗と小十郎が険しい表情で現れた。

すでにいつでも戦に出られるような恰好だった。

「明智に会ったのか？」

入って来ると同時に小十郎が問うて来た。

「会ったよ。話の通じなさそうな人だったから、軽く沈めておいたけど。」

「怪我は？」

これは政宗。

「大丈夫。私は怪我はしてない。」

相手は内臓潰れてるだろうけどね。

なんて言えば、大変なことになりそうなので言わない。

本当に怪我をしてないか上から下まで観察した後、大丈夫そうだと判断したのか、政宗はようやくほっとした様な顔になった。

それから少しのお説教を貰った後、佐助やかすがからもたらされた報告と、これからについてを教えてもらった。

明智光秀と蘭丸の隊は加賀の国に撤退。

織田信長率いる本陣は、安土城を出陣して甲斐に向かっているらしい。

まもなく慶次含む上杉軍と、武田軍は甲斐に向かって出陣。

すでに幸村と佐助は、躑躅ヶ崎城に戻って本陣を指揮する為に、こ

こを出たそつだ。
信玄公が後に合流することになる。

伊達軍は、すでに伝令が奥州に向けて走っていて、成実が全軍を引き連れて来る手筈になっているらしい。

小十郎によると、甲斐との国境付近にまで軍を進めてあつて、いつでも出陣できる状態だとか。

なんでそんなに早いのか？と小十郎に訪ねたら、同盟国の頭が集まるこの時に、敵がしかけてこねえはずがねえと事も無げに答えた。おそらく、戦場は川中島になるだろうと、小十郎は予想しているらしい。

「オレと小十郎もすぐに出る。ツキは、明日には奥州からの迎えが来るから、そいつらと一緒に先に戻っている。いいな？」

政宗はそう言うと、私の返事を聞く前に立ち上がった。
小十郎もその後が続く。

「政宗。」

「なんだ？」

すぐにも飛んで行きたそうな政宗を呼び止めて、微笑んだ。

「どうか、気をつけて。」

今までで一番綺麗に笑えてるだろうか。
どうか、そうであってほしい。

「ああ、行つて来るぜ。米沢でいい子にして待つてろよ。」
いつもの自信に満ち溢れた政宗の笑顔を、瞬きすら忘れて見つめる。

忘れない様に。

「ツキ？」

小十郎が訝しげな顔をしてこちらを見た。

「小十郎も、政宗のお世話は大変だけど、気を付けてね。怪我しちやダメだよ？」

「あ、ああ。ツキも、帰り道は十分気を付けていけよ？」

「うん。わかった。」

何か腑に落ちなさそうな顔をしつつも、政宗が部屋を出て行くこと
しているのを見て、踵を返した。

「行くぜ、小十郎。」

「はっ。」

背を向けて部屋を出て行く政宗の後を追って出て行く小十郎。
二人が出て行って、再び私一人になった。

遠くから兵たちの声や、馬の嘶きが聞こえてくる。

戦が始まるというこの時に、私のことなど気にかける人はいないだろう。

人が来る前に、準備をしなければ。

まずは政宗に宛てた手紙を書いた。

今まででのお礼と、朔夜がこの世界に來ていると明智光秀に聞いたこと。

これから朔夜の元に向かうこと。

そして、さようならを。

ここでキスをされたのが、もう遠い昔のように感じる。

混乱から抜け出して思い返してみると、驚きはしたけど決して嫌ではなかった。

このまま一緒にいられたら、いつか政宗に恋をしたのかもしれない。

でも、もう……。

行かなければ。

覚悟を決めたんだから。

私は私の運命を、政宗は政宗の運命を、それぞれ歩いて行く。

楽しかった。

幸せだった。

政宗や小十郎、喜多さんは、私にとってはこの世界の家族だった。

朔夜に見つかった以上、一緒にいたら迷惑にしかない。

あいつは、私の大切なものを全て奪って壊してしまう。

大切な、本当に大切な人たちだから。

もう、ここにはいられない。

手紙を机に置いて、隠していた荷物を取り出し、着ている着物を脱いで忍装束に着替えた。

まだ少しだけ大きな服の隠しポケットにクナイを仕込む。

政宗から貰った扇を少しだけ悩んで、カバンの奥に仕舞った。

庭に出る頃には、太陽が西に傾き始め、空がゆっくりと茜色に染まり始めていた。

まずは、武器を手に入れなければ。

バサラ屋ってどこにあるんだろ。

と、思いながら城の外にまずは出ようと裏門の方へ歩き始めたとき、目の前に人が現れた。

「小太郎……。」

両手を広げて、行くなと首を振っていた。

『明智を追っていて、先程の海での話は聞いていた。』

「聞いていたって、隠れる場所なんかなかったよ？」

『俺は風だ。』

良く分からないけど、忍術って奴ですか？

『朔夜という男の所へ行くのはだめだ。あぶない。』

「どんなに危険でも行く。見ていたのなら、分かったでしょ？私弱くはないんだよ？」

苦笑して、小太郎の腕をそっと下ろさせた。

「皆は皆の戦いに行った。私は、私の戦いに行く。お願いだから、止めないで。」

『ツキ……。』

「朔夜は私と同じ。癒しの力を使うことができる。明智も朔夜に治癒してもらえば、一瞬で完治してしまうの。あいつを殺さないで、連合軍の勝利の可能性は低くなってしまふ。」

悔しいけれど、治癒の力は私よりも、あいつの方が上だ。

私は治癒よりも攻撃の方が得意で、他者の傷ならまだしも、自分自身の治癒については、ほとんどできない。

月の光を浴びて、治癒力を上げることでも今までなんとかやってきたような状態だ。

『ならば、俺も一緒にいく。』

「だめ。北条はどうするの？同盟に参加しているんでしょ？」

『北条は今回の戦には無関係を通すことに決まった。織田も狙いは甲斐の武田。北条には見向きもしてない。』

それはそれで、どうなんだろうか・・・。

ちよっと呆れてしまったけど、それが北条の姿勢ならば仕方がないのか。

「それでも、ダメ。小太郎は連合軍の中で、すべきことがたくさんある。少しでも有利な戦況に持っていくための情報集めとかあるでしょう？」

『それは、猿飛やかすががする。』

しぶといな・・・。

私の聞いていた伝説の忍つてのは、ドライでビジネスライクなはずなのに。

そもそも、私にここまで構う理由なんてないでしょう？

譲らない小太郎に、仕方なく私は妥協案を出すことにした。

もう、ここで振り切って出て行ったら、即行で政宗の所にチクリに行きそうなんだもん。

「ならば、私と一緒にいこう。ただし、織田信長の居場所が分かったら、すぐに政宗たちに知らせに行くこと。いい?」

『ツキはどうするんだ?』

「私の目的は朔夜だもの。織田信長の近くにいる朔夜のところに行くよ。そこからは、小太郎は手出ししないで。」

アレは、私の獲物だ。誰にも譲る気はない。

すっと冷えた表情を見た小太郎は、少し考えた後、こくりと頷いた。

「これで決まりね。それじゃ、しばらくの間よろしく。相棒。」

『ああ。』

まあ、地図を手に入れたと思えば、この先の旅も楽になるか。

あとは武器ね。

あ、そうだ。小太郎なら知ってるかも。

「小太郎、バサラ屋って知ってる?」

期待を込めて尋ねると、こくりと肯定の頷きが返ってきた。

よっしゃ。

「まずはそこに行きたい。」

『分かった。』

さて、では行くか。

表の喧騒も落ち着き始めたようだ。

「んじゃ、いじょう。」

こくりと頷くと、小太郎は私を抱き上げ、しっかりと掴まるように指示すると、助走もつけずに跳んだ。

春日山城の屋根の上上がったようで、眼下には出陣していく兵士たちの列が見えた。

先頭を駆けていく政宗たちの姿は、すでにここからでは目視できない。

「……………おやうなほ。」

小さく呟いた声は、風にきえた。

34 バサラ屋(前書き)

短めです。

34 バサラ屋

殆どの店が閉店して、人も殆どいなくなった城下町の一角にバサラ屋はあった。

見た目は普通の雑貨屋さんだけど、小太郎の姿を見た店の人が急に営業スマイル全開で、奥に通してくれた。

奥の部屋に入ると、一人の初老の男性が煙管を吹かせて座っていた。

小太郎によると、この人が店主らしい。

「いらつしゃい。おや、初めて見る顔だね。」

「こんばんわ。こんな時間にすみません。」

頭を下げると、店主はかまわないよと笑った。

「ここは営業時間なんぞ有って無きが如しさ。先日も伊達の子倅が夜中に来おって、ごますり棒を買って行きおったわい。」

「ごますり棒？なにそれ？」

首をかしげると、店主が効能を教えてくれた。

使つと、みんなに褒めて貰えて、いい気分になれるらしい。

間違いなく小十郎と綱元に使つたな。

怒られそうになった時に使つたに違いない。

そんなことに使う金があるなら、もっと他に使い道があるでしょうが
ああああ！！

あまりのアホらしさに頭を抱えていると、店主はかっかっかっかと、
どこかのご隠居の様に笑った。

「男とはそんなもんじゃよ。さて、お嬢ちゃん、ご入用の品は何か
な？」

そうだ。私買い物に来たんだった。
政宗のせいで、すっかり目的を忘れるところだったよ。

小太郎は部屋の入り口近くの壁に背中を預けて、腕を組んだまま
口を挟む気はなさそうだった。

「武器を。」

一言はつきり告げると、店主はじっと私を見つめた。
見透かすような、見定めるような視線を向けられて、私もじっと見
つめ返した。

「お嬢ちゃんはずいぶん変わった属性をお持ちのようだ。」

そう言つと、店主は少し考えた後、後ろに並んでいる棚の一つから、いくつかを取り出して机の上に並べた。

「お嬢ちゃんが欲しいのはこれらだね？」

そう言つて店主が並べたのは、光沢を放つ糸のようなものと、一丁の拳銃。ホルダーのついたベルトと、弾薬が収められたケース。

うそでしょう・・・？

糸の様なものを手にとつて見ると、元の世界で私が良く使用していた極細の鋼糸ワイヤだった。

金属とは思えないほどしなやかで、重さも感じない。

「なんで、これを？」

鋼糸は元の世界で私が一番得意として使用していたものだ。どうして何も話してないのに、これを選んだの？

「客の希望する商品を提供するのが、俺らの仕事じゃからの。」
「にやっつと笑つ店主。」

希望も何も、どんなものが欲しいのかなんて話してないのに。

こつちの拳銃も、自動式拳銃だし。
オートマチック
リボルバー
話で回転式拳銃ならこの世界にもあるってのは聞いていたけど、まさか自動式拳銃まであるとは思わなかった。
異世界だからありなの？

はてなマークが頭の中を埋め尽くしているけど、使い慣れている武器が手に入るのは嬉しい。

小太郎も初めて見る武器に興味があるのか、壁から離れて鋼糸を手にとってしげしげと眺めていた。

「さて、それで支払いだが。」

あ、そうだった。ただで貰える訳はないもんね。

最近あまりお金を使うことなかったから、うっかりしていた。

越後の酒を買って帰ろうと思ってたから、多少は持ってはいるんだけど……。

足りなかったら、ローン利くかなあ。

って、私収入がなくなっちゃったから、ローンもダメじゃん！

小太郎、貸してくれるかな……。

などとビクビクしながらも、値段を聞いたら、これまたびっくり。本当に良いの！？ってくらい安い。

小太郎もびっくりしているくらいだから、本当に安いのだろう。

「店主、桁を間違ってるじゃない？二つくらい。」
「いや。これはこの価格が正当じゃよ。そもそも、原価はあって無きが如しじゃからのう。」

どういふこと？

原価がかからない銃なんてあるわけないじゃない。

「実はな、これらは今から半年ほど前に、店の棚に独りで現れたんじゃ。店の者に聞いても誰も知らんというし。この店には、たまたまに武器自らがこの店に現れて、主を待つことがあるんじゃよ。」

じゃから、この値段は保管料金じゃな。

と店主はかっかっかと笑って、再び煙管をふかした。

半年前って・・・まさか。

拳銃をもう一度良く見てみると、DESERT EAGLEと刻まれている、小さな傷が幾つもあった。

「って、これって・・・!!」

私が使ってた奴じゃないの!!

どういふわけなのかはサッパリ分からないけど、これは私がこちら

に来る寸前まで使用していたものだ。
弾が入っているか弾倉を外して見ると、フル装填されている。
予備の弾薬のケースもホルダーもある。

私と一緒にこの世界に飛ばされてきて、途中で何かがあつて武器だけここに飛ばされたのかな・・・。

「使い方の説明などは必要なさそうじゃの。」

「ええ。これは、私のだもの。」

言われたお金を支払って、腰にホルダーをつけて銃を挿し、鋼糸はくるくると輪になるように巻いて反対側に留めた。

よし。これで良いかな。

落ちないようにもう一度確認すると、小太郎を見た。

「お待たせ。これでもいつでも出発できるよ。」

小太郎は一つ頷くと、店主に軽く頭を下げて部屋の外に出た。
続こうとして一歩歩き出したとき、店主がお嬢ちゃんと私を呼び止めた。

「なんでしよう?」

「老いぼれからのお節介じゃ。人間生きていれば、良いことも悪いことも起こる。じゃが、人は決して一人ではない。それを忘れてはいかんぞ?」

店主はそう言つと、またいつでもおいでと、優しく笑つた。

「ありがとうございます。」

頭を下げると、今度こそ小太郎を追つて店の外に出るために、部屋を後にした。

35 風と一緒に

越後を出発して、現在小太郎と併走して走って山の中を突き進んでいる。

小太郎は初め背負って連れて行くといって聞かなかったが、勘を取り戻すためと言って私は譲らなかった。

私の意志で今こうして動いているのに、小太郎に背負われるなんて情けなさ過ぎるといのが本音だけ。

夜に越後を出発したので途中野宿して、その翌日には甲斐の国に入った。

川中島まで、あと数刻走れば着くらしい。

太陽が西に傾いて、そろそろ山の中は薄暗くなってきた。水場を見つけたので、今日の野宿場所にすることにした。

「織田信長は川中島まで来るかな・・・。」

休息をとりながら、足元に即席の日本地図を描いてみる。

安土城は琵琶湖の近くにあつて、ここからだといふ距離があるんだよね。

まあ、米沢から川中島に比べたら近いけど。

『わからない。だが、確かに織田の兵が山越えをしてこちらに向かっている。』

小太郎が加賀から北アルプスを越えて来るルートを指で示した。

「これって、越後から一旦引いた奴ら？それって規模はどのくらい？」

『そうだ。兵は五千ほど。』

「蘭丸って子供が率いてるの？」

『明智が動けない以上は、それしかないだろう。』

そうか。んじゃ、織田信長は？

あの中にはいなかったはず。

「織田信長はどこに？」

『三河を抜けて、東側から来ている。』

そう言って示したのは、北アルプスと南アルプスの間を抜けるルート。

ってことは、挟み撃ちにする気か？

「このことはもちろん、信玄公たちも知ってるよね？」

『もちろんだ。』

それならいいや。

小太郎が書いたルートを指でなぞる。

織田信長はこちらにいるのか。

ならば、朔夜もここにいるはず。

あいつはいつだって敵の頭の側について、私に分かりやすいようにしていた。

今回も、織田信長本人の側にいるに違いない。

「順調に進んだとしたら、幸村たちはいつごろ川中島に着く？」

『早くて明日。』

「伊達は？」

『同じくらい。』

「織田は？」

『もう何時着いてもおかしくない。』

間に合わないかもしれないのか。

元の世界なら、リアルタイムで情報が入ってくるのに、この世界はなんて不確かな予想で回っているんだろう。

小十郎の予想通り、川中島で戦は始まる。

あとは、武田と伊達の本陣と、織田の本陣がどこでどのよう絡んでくるか。

様子見になるか……。

今日の夕飯の食材ゲットと、武器を使う勘を取り戻すため、辺りの獣を探してうろついていると、視界の端を何かが横切った。

腰から鋼糸を引き抜き抜いて、振り向きざまに鋼糸を猪に向かって投げつける。

先端が私の意志のままに飛んで、草むらに逃げ込んだものに襲い掛かる。

ピギイイイイ！！

手に鈍い衝撃が伝わって、獲物を仕留めたことを伝えた。ウサギか何かかな・・・。

鋼糸を伝って草むらを覗くと、茶色のウサギがぴくぴく痙攣していた。

うーん。なんか視線が微妙に低くなってるせいか、思ったよりも下にいったなあ。

後で練習をしておいた方が良さそうだ。

「小太郎、夕飯獲ったよ。」

そう言いながら水場に戻ると、小太郎が火を熾して待っていた。どこから採ってきたのか、木の実もある。

「これ、マツタケって言うものではないですか!?!?」
茸の王様、マツタケを震える手で掴んで匂いをかく。
間違いない。

『こんなものどこにもある。』

なんでもないことのように言って、小太郎はウサギを受け取ると捌き始めた。

どこにももあるの？

まじで？

マツタケは串に刺して遠火でじっくり。

ウサギは塩を振って、直火でこんがり。

木の実をかじりながら、焼き上がりを心待ちにしていると、小太郎が私を見ているのに気がついた。

「なに？」

『朔夜という男と何があった？』

唐突に、且つストレートに聞いてきたわね。

まあ、別にいまさら隠すような話でもなんでもないか。

「私と朔夜は、従兄弟なんだ。私達は蒼き月にいる御方の血を受け継ぐ月の一族。月の力を使って、人の傷を癒すことを生業にしていたんだけど、朔夜に全て殺されて残ったのは私と朔夜だけ。私は復讐のために、朔夜を追っていたの。元の世界で。」

『元の世界？』

「そう。私たちはここではない別の世界から、飛ばされてきたんだよ。今から半年前に。奥州の森で政宗に拾われたときは、今より七歳くらい小さい年齢の姿だったんだけど、満月の度に少しずつ成長して、多分あと半年後には元の姿に戻るはずなんだ。で、まさか朔夜までこっちにきているとは知らなかったから、復讐を諦めざるをえなくて、途方にくれてたんだけど、政宗がここにいれば良いって言うてくれて……。」

でも、朔夜はこの世界にいる。
ならば、私のすべきことは一つだ。

「朔夜は力を使いこなすことができなかった私の師だったの。諦めずに私を指導してくれて、ようやく人並みになった。信頼していたけれど、その信頼は、家族を殺されて粉々になった。」

ウサギを火から下ろして様子を見ると、もう食べても良さそうだ。大きな葉を洗って作った皿の上で切り分け、三分の二を小太郎に渡した。

「私は朔夜を何があっても許せない。奥州で過ごした日は、その思いを薄れさせてはくれたけど、消すことはできなかった。」

自分の分を持って、かじりつく。

うま。

胡椒があつたらもつと良かったけど、贅沢は言えないね。

「だから、私は私の思いを貫くんだよ。」

これだけは譲らない。

誰にも。

小太郎は『そうか』とだけ言うと、あとはもう何も言わなかった。

次の日。

朝もやが漂う中、川中島に到着した。

東に連合軍、西に織田軍が陣を構え、睨み合っているのが少し離れた場所から確認できた。

数から言えば、連合軍の方が若干多め。

でも、織田軍には銃がある。

「織田の本隊はどこかな。」

西に目を向けてみても、その姿は見えない。

ここにはいないなら、もう少し西に行ってみようかな……。

そう思った時、戦場に動きがあった。

連合軍の誰かが一人、織田軍に向かって走り出した。

その後ろに続くもう一人。

「ねえ、あれって、政宗と小十郎だったりする？」

あんまり答えは聞きたくないんだけどさ。

恐る恐る小太郎を見ると、こっくりと深く頷いてくれました。

敵は鉄砲を持ってるってのに、何考えてんのよ!!
撃たれたらどうするの!?

食入るように見つめていると、号令が出たのか、連合軍の全員が総攻撃を始めた。

政宗はすでに敵陣の中に突入している。

「し、心臓に悪すぎる……。いつもこんな戦い方をしているの？」

「大体は。」

無茶を越えてるよ……。

そのうちに敵も味方も入り混じった混戦になり、時間だけが過ぎていった。

時々赤い火柱が上がったり、氷の塊が飛んだり、雷が落ちたり、突風が吹き荒れたり、しているので大体どこに誰がいるのかが分かる。

つか、この世界の戦って、元の世界の戦争より激しいな……。

どのくらいだったか。織田軍が劣勢になってきた頃、南の方角から武田と伊達の本隊が姿をみせた。織田の本隊はどこ？
なんで姿を見せないの？

このままなら、連合軍の勝利だ。

そう思ったとき、連合軍の本隊の後方で異変が起きた。黒い炎が昇って、爆発したのだ。

「なに？あれは？」

『あの技は・・・明智光秀。』

明智!?

なんでもそこに明智がいるのよ?

まさか、朔夜に治してもらった・・・?

そうだとすれば、朔夜はこの辺りにいる!

視線をめぐらせると、西の方から御旗が次々と上がり、木瓜の紋からそれが織田信長のものと分かった。

いた。

あそこだ。

前から後ろからも包囲されて、動揺が走る連合軍を嘲笑うかのように、織田の軍勢はその包囲網を締め始めた。

「小太郎。」

静かに名前を呼んで小太郎を見ると、すでに小太郎は私を見ていた。

「約束だったよね。ここでお別れだよ。」

少し笑って言うと、小太郎は目元を隠していた額当てを外した。

初めて見る小太郎の素顔。

まったく、この世界の男共は無駄に顔がいいのが腹立つ。

バーミリオンの瞳は言葉以上の感情を表していた。
行くなど。

ああ、なんでそんな額当てしてるのかと思ったら、小太郎は目に感情を表すのね。

「小太郎。政宗に伝えて。明智は陽動。本陣は信長。明智に気にすることなく、織田信長を叩け。私は仕留め損ねた明智を始末した後、朔夜の元に行くわ。」

さあ、行って。

『死ぬな。』

「最大限の努力はするわ。」

『生きる。』

「うん。」

死ぬつもりはない。朔夜を残して死んだりするもんか。

再び額当てを付けて、数秒私を見下ろした後、小太郎は意を決したようにその場から姿を消した。

まずは、明智光秀。あんたを仕留める。

今も連合軍を背後から襲撃している明智光秀。

ああ、はじめよう。

36 墮ちる(前書き)

流血描写あります。苦手な方は回避願います。

36 墮ちる

春日山城でツキと慌しく別れて、出陣してから四日目。

川中島で織田の奴らと開戦し、手応えがないままそろそろ仕舞いかと言う頃になって、前方に魔王のおっさんの軍勢が現れた。

成実と真田の率いる本隊も到着したと猿が報告に来たが、その後本隊の後方から明智光秀が率いる軍勢が攻撃を仕掛けてきたと別の忍から報告が上がった。

敵味方が入り乱れた状態で、混乱が置き始めやがった。

武田のおっさんも軍神もこの混戦の中でどこにいるのか把握ができねえ。

「政宗様！ここは一度体制を立て直すべきです！一度陣に戻りましょうー！」

ちっ、仕方がねえ。

南から成実が連れてきたうちの連中もまもなく到着する。
一斉に仕掛けたほうがいいか。

「小太郎、成実はどこだ？」

「あちらに。我が伊達の旗印が上がっております。もう目と鼻の先です。」

「明智はどうした？」

「分かりませぬ。おそらく、しんがりの者が抑えているかとは思いますが……。」

これ以上の混乱はよくねえな。

Shit! 敵も味方も多すぎて、統制がきかねえ。

「小十郎、本隊を任せる。成実一人じゃ荷が勝ちすぎるだろ？準備が出来次第、一斉に攻めろ。」

「政宗様はいかがなさるおつもりで？」

「決まってるだろ？魔王のおっさんの首を貰い受けに行くんだよ！」

「なりませぬ！せめて、体制がもう少し整ってからでなければ……！」

おいおい、小十郎。

一番乗りはオレと決まってるんだ。

ぐずぐずしていたら、他の奴に魔王の首を持っていかれちまう。

小十郎の制止を無視して、馬を走らせようとした瞬間。

「まああああああむうううねえええどのおおおおおお！！！！！！」
砂埃を上げてこちらに突進してくる赤い塊。

ちっ。一番うるせえのが着いちまったじゃねえか。

あっという間にオレの目の前にたどり着いた真田は、息切れ一つした様子もない。

「御館様に我が武田の全軍の指揮権を御譲りしてきたでござる。」
「てめえ、明智はどうした。」

まさか放つて来たわけじゃねえだろうな？

こいつは前に進むことしか考えずに、後方で明智がいたこと自体を知らねえとか言い出しそうなんだよ。

「先ほど風魔殿が佐助と共に現れて、明智光秀殿は別の者が相対しているゆえ、織田信長殿を討てと。」

「他の者？武田のおっさんじゃねえよな？軍神か？」

「いや、上杉殿は御館様と一緒にござった。」

「前田か？」

「前田殿も先ほど上杉殿と共にしておられたでござる。」

ならば、誰が？

「はいはい、皆こんな所に固まっていたら、狙われちゃうよ？」
猿が風魔と共に現れた。

「織田信長はあの本隊の中にいる。確認済みだよ。明智は小太郎曰く、陽動なだけだから旦那たちは気にせず行けってさ。うちの大将もいることだし、問題ないですよ。」

猿の言葉に、風魔は一つ頷いた。

OK.ならば、Partyを始めるか。

「小十郎、お前は成実と共に、本隊の指揮をとれ。」

「承知。」

「真田、遅れんなよ？」

「望む所でございます！！」

さあ、魔王のおっさん。首を洗って待っているよ？

片倉の旦那は大將たちがいる本隊へ。
旦那と竜の旦那は織田の本隊へ。

それぞれの役割を果たすために、走り出した。戦が始まる。もう誰に求めることはできない。

「小太郎、本当にこれで良かったのか？」

俺様の問いに、小太郎は答えずに、南の方を見つめている。明智光秀と、ツキちゃんがいる方向を。

小太郎から話は聞いた。

ツキちゃんの親の敵が織田信長の側にいたと。そして、癒しだけではなく、バサラ技のような力を持っていることを。

敵を討つために、竜の旦那の庇護から出たと。

何かを隠しているとは思っていた。

それが、癒しの力や若返ってしまった体だけではないことも。

「今なら助けにいけるんだぞ？」

『彼女はそれを俺に望んではいない。』

空気を震わせるような微かな《声》が聞こえた。

『彼女が望むのは、救いだ。』

「救い？何からの？」

『抜け出せない自分の心。』

そういつと小太郎はどこへともなく姿を消した。

自分の心……ねえ。

そんなもの、捨ててしまえば楽になれるのに。

超一流の忍な俺様には、理解できない話だね。

けど、ツキちゃんがそうなってしまふのは、俺様なんとなく嫌な
んだよねえ。

あの子は俺様と同じ世界の人間にはなって欲しくはないんだ。

だから。

「俺様も働くとしますかね。」

まずはツキちゃんの復讐相手ってのがどんななのか探ってみるか
な。

「もう少し、遊びたかったのですが、貴女がいらしたのならば、もっと楽しく遊べそうですね。」

鎌に串刺しにされた兵士は、すでに事切れていた。

鉄のような血の香りが辺りに充満していて、気を緩めれば吐きそうになる。

「悪趣味な男ね。明智光秀。」

腰から鋼糸を抜き取って、両手に渡らせるようにして構える。

明智光秀は、くすつと笑うと兵士の死体を放り捨てて、ゆらりと――

歩前に出た。

「私はね、ミツキさん。人の絶望と嘆きが大好きなのですよ。もちろん、貴女のその心もね。」

「虫唾が走る。」

「ありがとうございます。」

吐き捨てたセリフを嬉しそうに受け取り、明智はまた一步前に進んだ。

「Unlimited capacity to release .
一つ聞く。朔夜はどこにいる？」

能力を解放すると同時に、蒼い光が体から溢れた。

体が軽くなり、五感も常の数倍鋭くなった。

その分血の匂いがきつくなり、明智の微かな笑い声や息遣いまで良く聞こえるようになって、気に障る。

「朔夜殿ですか？信長公と一緒にいらっしやいますよ。」

「そう。ならば、あなたを殺して、朔夜に会いに行くとするわ。」

さつさと終わらせてしまおう。

地を蹴って明智の懐に入り込もうとしたが、一瞬鎌を振り下ろす方が早かった。

「つと。」

鋼糸を張って鎌の刃を止めると、右足で明智の脇腹を真横に蹴った。

足も強化しているせいで、明智の体はあっけなく吹っ飛んで、10mほど転がる。

鎧で覆われている部分を蹴った為か、明智はさしてダメージを受けた様子もなく起き上がった。

「ふふ・・・いたあい・・・」

心底嬉しそうに痛いと呟く明智光秀。

こいつ、本当に気持悪い。

再び鋼糸を構えて走り出すと、今度は左右の真横から鎌が振られ、咄嗟に上に飛び上がった。

たわんだ鋼糸が明智の首に回るように指を動かしたのと同時に、クロスした鎌が私の背中に向かって振り上げられた。

「しま・・・!!」

避けようとしても、空中では避けようがない！

次の瞬間、右の肩に焼け付くような痛みが走り、視界の端に鎌の先端が見えた。

「おや、串刺しにするはずが、思ったよりも小さいので肩に当たってしまいましたか。」

そのまま鎌の柄で抱き寄せられるように引き寄せられて、肩に刺さった刃先を更にぐりつとねじ込まれた。

「ぐうっ!!」

口から飛び出そうになる悲鳴を押し殺してなんとか堪えると、明智は笑いながら私を解放した。

「良いですねえ。その苦痛に歪む顔。」

左手で抑えると、生暖かい液体の感触がして、滴ったものが地面にぼたぼたと落ちた。

治癒をしようと試みるけど、やっぱり自分には治癒の効果が見れない。

ああもう。痛いなあ！

「さて、そろそろ信長公もお待ちです。朔夜殿には申し訳ないですが、貴女には死体となって信長公に謁見していただきましょう。あの時、結構痛かったですよ?」

上機嫌で話す明智。

越後で半殺しにしたことを根に持つてるのか。

まあ、子供みたいな女に、油断したとはいえ内臓潰されちゃ腹も立つか。

どこか人事のように思いながら、動かない右腕に鋼糸を絡ませて、反対の先端を血で滑る左手に巻きつけた。

「さあ、死になさい!」

奇声を上げながら突進してくる明智光秀は、能力を解放している私から見ても、相当早い。

これを避けて尚且つ攻撃をする。

やらなければならぬ。チャンスはこれだけだ。

あ！！！！！」

右腕を肩から切り落とされた明智が、噴出す血を左手で抑えてのた打ち回る。

「私の腕が・・・腕が・・・！！痛い・・・ああ・・・痛い痛い！！」

その姿を見ても、何も感じない自分。

ああ、堕ちるのは簡単だなあ。

腰に挿していた銃を抜いて、震える手でスライドを引いた。
右手は使えないから左手で銃を握り、照準を明智に当てる。

もう、戻れないね・・・。

ズガアアアアアン!!!!

まっすぐに弾丸は私の狙い通りに、明智を貫いた。

37 喪失

明智光秀討死の知らせは、瞬く間に忍を介して戦場中に広がった。一角の武将の手ではなく、一人の幼い少女の手によって死んだと、忍達は口々に伝え合った。

その知らせを黒脛巾組の一人から受けたのは、日も傾き始めた頃だった。

明智光秀を討つ程の力量を持つ少女など、俺は一人しか知らない。だが、そいつは今、春日山城から米沢に向かっているはず。こんな戦場になんかいるはずがねえ。

いるはずはねえんだが……。

春日山城で最後に見たあのツキの態度に、ずっと違和感を感じていた。

まるで、最後の別れを惜しむような……。

「小十郎、どういう事なんだよ!? なんで、ツキちゃんが!」
「落ち着け成実! まだツキと決まったわけじゃねえ!」

共に報告を聞いていた成実も、同じことを考えてたようだ。取り乱す成実を落ち着かせようとする俺自身が、冷静さを欠いている事は頭の片隅で理解している。

しかし、政宗様のお気持ちを思えば、冷静でなどいられるか！

「その明智を討った女を探せ。ツキなら連れてこい！」

「はっ。」

瞬時に消える忍と入れ替わる様に、別の忍が現れた。

「政宗様より伝令です。海津城へ全軍引く様にと。」

はっと空を見上げれば、間もなく夕暮れを迎える頃合いだった。海津城には、以前甲斐で同盟を組んだ際に政宗様と信玄公とで話し合って取り決めたうちの一つ、戦を想定した食料の備蓄がある。今夜はそこで体制を整えるということだろう。

「政宗様もこちらにお戻りか？」

「はっ。」

「わかった。成実。全軍を海津城へ向かわせる。明智を討った女の話は、それからだ。」

「了解。」

馬を走らせる成実の後姿を見送って、俺自身も海津城へ向かうべく馬の頭の方を変えた。

伝令が慌しく走る戦場を見渡し、溜息をつく。

万が一、ツキがここにいるとしたら、政宗様にお教えすべきか否か。

今は織田信長を討つ事だけに集中すべき時。

できることならば、俺の手で事態の收拾を図りてえ所なんだが・・・

政宗様は天下もツキも両方手に入れると、守ると誓った。
俺もその誓いをお助けする覚悟を決めた。

ツキがここにいるとしたら、ついにツキの家族を殺したという男の存在を知ってしまったという可能性が高い。

と、するならば、どこでツキはそのことを知ったのか。
越後に着いた日の、あの取り乱しようを考えれば、その時点までツキは男がこちらにいることは知らなかったはずだ。
ならば、明智光秀と接触をした時としか考えられねえ。

政宗様の読み通り、男は織田にいたと、そういうことなのか。

何にせよ、まだ推測の域を出ない話だ。

猿飛か風魔から話を聞かないことには、どうにも動けん。

だが……。

俺の予想通りなら、もうツキが止まることはないだろう。

まだツキを他国の間者と疑っていた出会ったばかりの頃、自分の身の上を語るあの表情は、暗い底のない目は、ツキの憎しみの深さをまざまざと物語っていた。

奥州で過ごすうちに、その影は見えなくなったが、人の心はそんなに単純じゃねえ。

ちよつとしたきっかけがあれば、すぐまた元に戻る。

政宗様。どうなさるおつもりですか？

戦場を走り回り、立ち向かってくる雑魚どもを切り捨て、魔王のおっさんの姿を探したが、見つからなかった。

まさか、尻尾を巻いて逃げたんじゃねえだろうな？

朝からの戦でとここに来るまでの強行軍で、うちの連中にも疲れが見え始めているようだ。

「真田、今日は一旦海津城へ引くぜ。忍を放って、魔王のおっさんの居場所をもう一度特定する。」

「そつでござるな。」

そう答える真田の表情にも、流石に疲れの色が見え始めていた。

ちょうど戦況の報告をしに来た忍に、全軍への伝令を命じた。

「海津城へ全軍を一旦引け。オレ達もすぐに向かう。」

「承知。」

頭を下げた走り去る忍を見送り、海津城へ向かおうとすると、良直

が慌てた様子でこちらに走って来るのが見えた。

「ひ、筆頭！！！明智光秀が討たれましたあ！」

明智が？討つたのは誰だ？

確か、軍神でも武田のおっさんでも前田でもない、別の奴だって話だったか……。

明智ほどの武將を、そこいらの奴が討てるとは思えねえ。他に誰が？

考えていると、焦れた様に良直が詰め寄ってきた。

「筆頭！お嬢がまさかここに来ているんですか！？」

「何を言ってるんだ？ツキならば、米沢に帰っているはずだろうが。」

ちゃんと迎えの手配もしただろう。

どうしたのかと問いただすと、良直は泣きそうな顔になった。

「忍たちの話では、明智光秀を討つたのは、年端も行かない女だつて！」

年端も行かない女？

……まさか……。

春日山城で明智に会ったというツキ。

魔王を討つんだと、そればかりに気が逸っていて、碌に話を聞きもせずに戦に出してしまった。

まさか、明智は朔夜を知っていて、その上でツキに接触したのか？

Shit!!

どうしてもっとちゃんと話を聞かなかった!?

なぜ明智に会ったと聞いて、こうなると予想しなかった!?

ツキが朔夜のことを明智から告げられたとして、あいつが動かない訳がねえ。

明智が朔夜を知っているならば、朔夜は織田にいる。

ツキはオレ達の後を追ってここまで来たのか?

明智を別の者が討ちに行ったらと真田に告げたのは、猿と風魔。

その明智を討ったとか言う女の正体を知っているとすれば、この二人だ。

「政宗殿? どういうことでござるか?」

ツキが使えるのは癒しの力だけだと思っている真田は、話が見えな
いと訝しげに聞いてきたが、構ってる暇はねえ。

「すぐに海津城へ行くぜ。真田は猿を引きずってでも連れて来い。
聞きてえことがある。」

戸惑う真田を無視して、馬の腹を思いっきり蹴り上げると全力で海
津城へと向かった。

海津城に到着すると、武田の小姓の案内で真つ先に小十郎のいる部屋に向かった。

すでに小十郎や他の連中も戻っていたらしい。

先ずは用意された座に座ると、戦況報告を小十郎から受ける。

「我が伊達の被害は微小。武田、上杉も大した被害はございません。一方織田ですが、明智光秀討死、森蘭丸は上杉謙信公との戦いを後に行方不明。織田信長も陣の中心で姿を見た後の行方は不明。」

「指揮する者が不在の状況で、織田の軍はよくもってるな。誰か他にいるのか？」

「いえ。忍の報告では、武將の姿は他にはないと。」

あれだけの大軍が自分達の意味だけで、まとまりを持てるのか？

魔王のおっさんがいるはずだ。

居なけりや他に誰が指揮を摂るんだ。

などとつらつら考えていると、小姓が来て武田のおっさんと真田が来る事を告げた。

その後すぐに、不貞腐れた顔の猿を引きずった真田と、おっさんが現れた。

いや、確かに引きずってでも連れてこいとは言ったがな……。本当に引きずって来やがるとは思わなかったぜ。

流石は真田幸村だ。

とりあえず、オレの部下にはいらねえがな。

武田のおっさんも、苦勞が絶えねえんだろつな……。

僅かばかり同情をしていると、武田のおっさんは真田達に座る様に促し、自らも座るとオレを見た。

「明智光秀の件は聞いておるか？」

「ああ。」

苦り切った顔で答えれば、小十郎と成実も渋い表情で頷いた。

小十郎と成実も忍の話を聞いていたか。

「その事で、佐助から話がある。」

「うわー、大将丸投げっすか？俺様明日の朝日拝めるかなあ。」

心底嫌そうな顔をした猿が、ため息を吐いた。

「朝日が拝めるかどうかは、てめえの話次第だな。さっさと知ってる事を全て吐きやがれ。」

小十郎が低い声で言い、その横で成実が頷いた。

殺気立つオレらを見回した後、分かりましたよと呟いた猿は、表情を消して忍の顔になった。

「明智光秀を討ったのは、ツキちゃんだよ。」

その言葉に、成実がなんでだよ！と叫び、小十郎はやはりかため息を吐いた。

「政宗殿？」

真田が不思議そうにオレの顔を見た。

「なぜ、笑っているのござるか？」

笑っている？

オレがか？

「幸村、黙っておれ。佐助話を続ける。」

武田のおっさんが真田を黙らせた。

そうだな。それが賢明だ。

オレは今最高に機嫌が悪い。こんな胸糞悪い気分は久しぶりだぜ。目の前のもの全てを斬り捨てちまいたい気分だ。

「小太郎が越後の海でツキちゃんも明智の話聞いていたんだよ。

朔夜って奴が織田信長のところに居て、癒しの力を持つ女を探して
るって言ったらしい。ツキちゃんに切りかかった明智は、逆に臍
を潰される様な目に遭って森蘭丸に回収されたんだってさ。」

「なんと・・・！ツキ殿にそんな力があつたとは・・・。」

真田の驚きに、成実はそうなんだよと、溜息をついた。

「ツキちゃんが本気を出したら、俺なんか一瞬だよ。あの子に勝て
るのなんて、梵か小十郎くらいのもんじゃないの？」

「それほどの・・・！」

「続けるよ。」

戦馬鹿二人の話の間に入った佐助は、また話しだした。

「その後、大将や竜の旦那たちが城を出た後、ツキちゃんも城を出
ようとした所を小太郎が捕まえて、説得しようとしたんだけどダメ
だった。なんとか川中島まで同行はしてきたけど、それも戦が始ま

るまでだったらしい。ツキちゃんはずちの軍を引つ掻き回す明智を討ちに行った。竜の旦那が織田信長に集中できるようについて。」

「……あの馬鹿たれが……！」

「川中島に向かう途中で、ツキちゃんが言ったらしいよ。家族を殺した男を何があっても許せない。どうしても消すことができなかったって。だから、自分の思いを貫くんだったって。」

「そうか……。」

「ツキは、選んだのか。」

「オレと奥州で生きることではなく、朔夜を殺す為の戦いを。」

「政宗様……。」

「小十郎が物言いたげにしていたが、それに気づかない振りをして立ち上がった。」

「悪いが、しばらく一人にしてくれ。」

「そう言つと、オレはそのまま部屋を出た。」

38 追う者

廊下を歩いて人のいない庭に出ると、月のない空を見上げた。虫の声と、遠くから時折聞こえる具足の音だけの、静かな空間。いつも傍らにいた、小さな存在がいない。

当たり前のように傍にいた存在は、オレの足りなかった何かを埋めた。

ツキがいれば、それだけで満たされた。

だが……。

この手をすり抜けて、離れて行っちゃった。

あの時、明智に会ったと本人から聞いたとき、なぜもっと詳しく話を聞かなかった？

その後悔だけが、ぐるぐると頭の中を回っている。

なぜ、どうして、あの時もっと、ああしていれば、こうしていれば

オレらしくねえとは分かっている。

こんなのは奥州筆頭伊達政宗じゃねえ。

持余す気持を、誰もいない庭で刀を振り回してどうにかしよう

しても、少しも晴れねえ。

刀が空気を切る音が、余計に苛立ちを募らせる。

「Shit!」

私はね、見たいの。政宗や小十郎や綱元さんや成実が毎日頑張つて良くしようとしている、この国を。その上で、私にできる手伝いをしたかったの。

あの言葉を、お前は忘れたのか？
オレよりも、復讐を選んだのか？

しばらく刀を振り回していると、近くに人の気配を感じた。
「誰だ？しばらく近寄るなど言っただろうが。」

刀の先を気配に向ければ、物陰から風魔が現れた。

「今、一番見たくねえ顔が現れたか。何の用だ？オレは今機嫌が悪い。くだらねえことなら今すぐ消えろ。」

オレの言葉を気にした様子もなく、風魔はこっちに来ると、書簡を

差し出した。

「何だこれは。」

刀を鞘に収めて書簡を見れば、見覚えのある字だった。

受け取って中を開いて見ると、ツキからオレに宛てたものだった。

伊達政宗様

この手紙を読んでいるということは、もう私が居なくなったことを知っているんでしょうね。

急に居なくなつてごめんなさい。

今日、越後の海で明智光秀に会つて、朔夜もこちらの世界に来ている事と、私を探しているということを知りました。

明智光秀を私のところに向けたということは、私が政宗の所に居るということも、あいつはもう知っているんだと思う。

このまま奥州に居たら、政宗や小十郎、喜多さん兵士の皆、全てに迷惑がかかつてしまうので、奥州を離れようと思います。

本当は、いつまでもみんなと一緒に居たかった。

政宗の目指す国を、傍で見てみたかった。

でも、あいつは、私の大切なものを全て壊そうとする。

それだけは、絶対に嫌だ。

それに、やっぱり、私はあいつをどうしても許せない。

だから、行きます。

私は私の戦いに。
心配しないでください。

政宗は政宗の戦いがあるでしょ？
政宗が目指すものがあるでしょ？
それを忘れないで。

今まで、本当にありがとうございました。

さようなら。

ツキ

なんだ、これは。
迷惑がかかるから、だと？
大切なものを壊されたくないから、だと？
迷惑だなんて、思うわけがねえだろうが。
大事なら、尚のこと近くで守りてえと思うだろうが。

オレの目指すものの中に、お前も入っているってことが、わかってないんだな？

見たいなら、見れば良いんだ。オレの傍で居たいなら、いつまでも居れば良い。

分からないならば、教えてやる。

書簡を畳むと懐に仕舞い、そこに立っていた風魔を見た。

「風魔、ツキの居場所は分かっているな？」

こくり。

「ならば、しばらくツキを守れ。オレはこのまま魔王のおっさんを討つ。ツキに説教するのは、それからだ。」

こくり。

どこか満足気に頷くと、風魔は風になって消えた。

お前はずっとオレの傍に置くと決めたんだ。
今更、オレから逃げられるなんて思うなよ？

先ほどの部屋に戻ると、軍神も揃って地図を広げて軍議をしていた。
全員の視線がオレに向いているのを感じながらも、小十郎の隣に座る。

「待たせたな。」

「いえ。わたくしたちも、さきほどきたばかりです。」

「前田はどうした？」

今朝開戦前に見たきり、前田の姿は見えてない。

「けいじは、にしにむかいました。こたびのおだのうごきがあまりにもふしぜんだったゆえ、おわりのようすをみにいってくれるそうです。」

「うむ。いつまでも姿を見せぬ織田信長。姿を消した森蘭丸。だが、織田の兵に混乱は見られぬ。もしや、織田信長は未だ尾張の安土城に居るのではないかと思つてな。」

軍神の言葉を引き継いで、武田のおっさんが難しい顔で頷いた。

「猿、てめえ言ったな？魔王のおっさんの姿を確認したと。」
「言った。確かに見た。これは間違いない。」

はつきり言い切る猿が、嘘をついている様子はない。

「ならば、考えられるのは、三つだ。魔王のおっさんは居たが、逃げた。今もこの辺りに居るが姿を隠している。影武者。」

「あれだけ戦場を走り回っても姿を見つけないことが叶わず、忍たちも見つけれないということは、姿を隠していることは考えられないでござる…」

真田が力説すれば、猿も頷いた。

「確かにここに織田信長はもう居ないと考えた方が自然だ。」

「なれば、逃げたと？」

「あのだいろくてんまおうが、ですか？」

「一人で撤退する理由がないかと。」

武田のおっさん、軍神、小十郎が撤退の線を否定すると、成実が影武者だよ！と主張した。

「ただの影武者が、あの大軍を動かしているとしても言うのか？」

「朔夜とかいう男なら、できるんじゃないの？」

・・・ほう。

成実、お前はいつも直感で物事を判断しやがるが、今回はその直感に助けられそうだな。

「それが正解だ。」

成実の発言で静まり返っていた部屋に女の声が聞こえ、視線を向ければ軍神の横に跪いているかすが居た。

「謙信様、織田の軍が退いております。その軍の先頭に、朔夜と呼ばれている男がおります。」

「そうですか。ごくろうさまでした。わたくしのつるぎ。」

「い、いえ！これくらい当然のことです……。」

恒例の二人の世界が始まったのを尻目に、武田のおっさんが腕を組んでうなづいた。

「撤退を始めたとは、どういう……。」

「我らの力を思い知り、逃げ帰るのでありますよう……！」

「そんな奴らなら、苦勞はしないでしょ、旦那。」

真田の楽天的な考えに、猿の指摘が入った。

「おそろく、誘いかと。」

「だろうな。」

「で、梵。どうする？」

にやりと成実が笑い、オレも同じように笑い返した。

「当然、追う。このまま尾張まで行って、さっさと魔王の首を獲るぜ。」

「あえて誘いに乗じるか。」

武田のおっさんも、うむと頷いた。

「ツキ殿はどうするのでござるか？」

「朔夜が尾張に向かうのならば、ツキも来るはずだ。それまでは好きにさせるさ。念の為に風魔も護衛につけた。」

「道中は大丈夫でござろうか……。」

「HA!あいつはSurvivalには慣れてるんだ。問題ねえよ。それに、少しは苦労して、オレの元を離れたことを後悔しやがれてんだ。」

「うわあ、梵黒いなあ。ツキちゃんがかawaiiそうになってきた。」
「うるせえよ。さつさと魔王のおっさんの首を獲って、ツキを回収するぞ。」

ニヤリと笑えば、成実はツキちゃん逃げてえ!など無礼極まりないことを言いやがった。

「うおおお!!漲る!みなぎるぞおおお!!」

「うむ!幸村!!後れを取るでないぞ!」

「畏まりました!ごぞいます!!御館様!」

「幸村あ!」

「御館様あ!」

「ゆきむらあ!」

「おやかたさまあ!」

「ゆきむるああああ!」

「おやかたさばああああ!」

「はいはい。みんな避難してくださいねえ。」

どういう理屈かは知らねえが、嬉々として名前を呼び合って殴り合いを始めた武田のおっさんと真田から、離れるようにと猿がオレ達を部屋から出した。

グアシヤアアアア!!

障子を突き破り、真田が庭の壁まで吹っ飛ばされて、人形の穴が開いた。

「すげえ……。」

初めて見る成実が呆然と呟いた。

「もうさ、修理費とか修理費とか、修理費とかがさ。」

「ええい！男がしみつたれた声を出すな！」

「これからは、しおではなく、もくざいをおくることにしましょう。」

「ホント！？助かるよ！」

軍神を拝み始めた猿と、それを引き剥がそうとするかすが。

「いけ！そこだ！ああ、そうじゃないって！」

隣では真田とおっさんの殴り合いを観戦している成実。

「なあ小十郎。このままオレたちだけで尾張に向かった方が良い様な気がするんだが。」

「政宗様、それはこの小十郎も、思ったり思わなかったりするようにならないような気がしなくもないですが、ここは皆で向かった方が得策かと。」

うちの軍師も少し壊れ始めたようだ。

39 吐露(前書き)

流血描写があります。ご注意ください。

川中島での戦から7日が過ぎ、今は尾張と甲斐の国境の山の中にいる。

明智光秀を殺したあの日、傷を癒すために一度森に身を隠し、翌朝戻って見ると織田軍の姿はどこにもなかった。

伊達、武田、上杉の連合軍も西に向かっただけで、ここにはもう織田信長も朔夜もいないんだということは分かった。もし、昨日のうちに織田信長を討っていたなら、連合軍は解散して各国に戻るはずだ。なのに、一緒に動いているということは、おそらく織田信長は軍が進む方向に居るだろう。

西。即ち、尾張の国に。

そんなわけで、私も少し遅れて西に向かうために、山に入ったんだけど……。

「ワン！」

「お！今日は鹿か！凄いなしろがね白銀、くろがね黒金！」

目の前で獲って来た鹿を自慢げに口にくわえつつ、尻尾を全開に振っている銀色と黒色の毛並みの狼たち。

山越えの途中で怪我をしている所を助けたらついてきた、この狼たちと一緒に今は尾張の安土城を目指している。

火を熾して捌いた鹿を火にかけて、残りを白銀と黒金にあげると、

二匹はすばらしい勢いで食べ始めた。

白銀はメス。黒金はオス。どちらもライオンくらいにでかい。

白銀が猟師の罠に嵌っていた時、黒金はその傍に居て必死に助けようとしていた。

はじめのうちは、噛み付こうとしたり引つかこうとしたりしていた二匹だけど、体を強化していたから怪我もしない私に尻尾を巻いて怯え、それから助けて治癒したら服従を示すようになった。

昔子供の頃家で白銀と黒金という名前の犬を飼っていたから、なんだかほっとけなくて助けただけだったのに、二匹はそれからずっと私に着いて来ている。

なのでこの狼たちも、白銀と黒金と名前をつけて呼んでみたら、不思議なことにそれぞれきちんと反応してきたので驚いた。

まるで最初から白銀と黒金という名前だったといわんばかりだった。

そんなこんなで、奇妙な一人と二匹の旅も、早五日を過ぎた。

「さて、そろそろ尾張に入る頃だと思っただよね。ええと、この辺りは木曾って言ったっけ。」

「ウオン！」

私の独り言に、黒金が返事をした。

「このまま山を下ると、木曾川に出るから、そこを下っていけば、良いはずなんだ。」

「ワン！」

これは白銀。

うーん。君たちが居てくれるおかげで、独り言も虚しくなくなるよ。ありがとうね。

焼きあがった肉を食べ終わると、体を休めるために横になる。

すかさず白銀と黒金が両脇を挟むように寝そべってくれるので、寒さなどまったく感じない。

「そろそろお風呂入りたいなあ。一昨日川で体を拭いただけだもんなあ。」

「くうーん……。」

ぺろんと頬を舐めて慰めようとしてくれる白銀の頭を撫でて、目を閉じる。

「川に出たら、水浴びするか。」

今が夏でなくて良かったなあ……。

そう思いながらゆっくり眠りについた。

翌朝、山を下っていると、微かな殺気を感じて立ち止まった。

黒金と白銀も止まって低く唸り声を上げている。

腰の鋼系に手を伸ばして、いつでも使えるようにしながら様子を窺っている、上から何かが飛んできた。

はい、敵確定。

飛んできたものを避け、鋼系の先端を気配に向かって投げると、小さな悲鳴が聞こえた。

そのままぐいっと引き寄せると、首に鋼系が絡まった、黒尽くめの忍が落ちてきた。

「あなたどちらの人？」

「……。」

ま、そうでしょうね。聞かれてはいはい答える忍なんか、居るわけないか。

「あなた、私が明智光秀を殺した女だつて知ってるわね？」

「・・・・・・・・・・。」

「そうか。その無反応っぷりが、YESだといっているようなものなのよ。」

「織田信長は安土城にいらっしやるのかしら？」

「・・・・・・・・・・。」

「朔夜は一緒に居るの？」

「・・・・・・・・・・。」

「そう。ならば、御使いを頼めるかしら？」

「？」

初めて忍に戸惑いという感情が表れた。

「朔夜に伝言を。会いに行くから、逃げるなど。」

そう言つて鋼糸を外してやると、忍はふらつきながらも立ち上がり、憎憎しげに私を見た。

「その様な伝言は無意味。」

せつかく、命は助けてあげようと思つたのに。

素早い動きで切りつけて来た忍をかわすと、鋼糸を操つて忍の首に再び引つ掛け、くいつと引つ張つた。

「ぐ・・・・・・・・ぎゃー！！」

刃物と化した鋼糸が容易く忍の頸動脈を切り裂き、血飛沫が辺りに飛び散つた。

生暖かい液体が顔に飛んできて、頬を垂れ落ちるのを感じて、ぐいつと拭つた。

鮮やかな赤に染まる手の甲を見ても、もう何も感じない。

明智を殺してから、何人目だろうか。

「黒金、それは食べちゃダメ。」

血が付着した鋼糸を、事切れた忍の服で拭って、匂いを嗅ぐように黒金を制止させる。

大人しく従った黒金の頭を撫でて、辺りの様子を窺う。

どうやら単独行動だったらしく、他に人の気配は感じられない。

「しかし、今人に会ったら、相当スプラッターな状況なんだろうな・
・。」

溜息をついて立ち上がると、白銀が私の服の裾を銜えて引っ張った。
なに？どうした？

服を離して、とてととと数歩歩くと、振り返ってこちらを見ている。
着いて来いってこと？

少し歩いては振り返る白銀の後を着いていくこと二時間。

「ふおおおお！！！」

目の前には湯気の立ち昇る温泉がありました。

「白銀凄いや！」

天然100%、源泉掛け流し、完全露天温泉。しかも、でかい。

こんな所に人は来ないから、完全に自然にできた温泉だ。

恐る恐るお湯に触れて見ると、少し温めだけど問題なく入れそうだ。

来ていた服を脱いでお湯に浸けて汚れを洗い落とすと、固く絞って
岩の上に乗せる。

天気も良いし、そのうち乾くでしょう。

それから湯に入って、体に付いた汚れを落とす。

「くはー生き返るう。」

白銀と黒金は入る気がないのか、服を乾かしている辺りで寝そべっていた。

聞こえるのは、鳥の声と、風が木を揺らす音、お湯が岸边に打ち付けられる音だけ。

川中島で明智が死んだという知らせは、もう織田側にも連合軍側にも伝わっている。

そして、殺したのが私だということも。

あれから一度だけ、伊達の忍、黒脛巾組の一人に会った。

私のことを知っていたらしく、政宗や小十郎が探しているから一緒に行こうと言ってくれた。

申し訳ないと思いつつ、気を失わせて安全な場所に寝かせてから、その場から逃げ出した。

自分の復讐の為だけに人を殺す私が、自分の守るべき民のために戦をする政宗たちと一緒になんか居られるわけがない。

これは、私が決めた、私の為の戦いだ。

政宗たちを巻き込むわけにはいかないんだよ。

あの日の夢をまた見るようになった。
家族が殺され、一族全てが殺されたあの夜の夢。

それがどんどん私の心を侵食していく。
なぜ皆を殺した？なぜ私だけ殺さなかった？
一緒にあの時殺してくれれば……。

アナタヲ憎マズニ済ンダノニ……。

頭まで湯に静めて水面を見上げると、万華鏡のように綺麗な光の
模様が映っている。

こぼり……。

口から空気が零れて、泡となった。

こぼ、こぼ……。

少しずつ息苦しくなってくるけど、そのまま水面を見上げ続けた。
このまま、水に溶けて消えられたら、楽になれるのかな……。

こぼ、こぼ、こぼ……。

何もかもを放り出して、死んじゃったら、もう終わりにできるのか
な……。

こぼ………。

でも、そんな終わり方、しちやだめなんだ。
そんな終わり方を、したいわけじゃない。

どぼん！どぼん！と言う音が水を伝わって聞こえてきて、白と黒の塊が必死にこちらに向かってくるのが見えた。
ぐいつと鼻先で体を押し上げられて、無理矢理水面に押し上げられる。

え？ちよ！？

「げほっ！げほっ！」

驚いた拍子にお湯を飲んでしまつて、激しく咽た。

「ウオン！ウオン！」

「ワン！ワン！」

唸り声を時折混ぜながら、白銀と黒金が私に向かって吠える。

「ちよ、まつて、大丈夫、大丈夫だから。こんな所で自殺なんかしないって。」

鼻にまでお湯が入って、かなり痛い。

二匹に押されるように岸に上がると、荷物の中から手ぬぐいを出して顔を拭いた。

あー、苦しかった。

未だに唸っている白銀の頭を撫でると、苦笑をもらす。

「白銀も黒金も、本当に頭が良いね。まるで私の心が分かつてるみたいだ。」

「ワン！」

「うん。心配させてごめんね。」

体の水分を拭いて、干しておいた服の様子を見ると薄い下着は乾いていたけど、厚手の上着とズボンはまだ生乾きだった。

裏返してもう一度日の良く当たる岩の上に乗せると、下着を着て白銀と黒金の間座った。

「私の中にね、もう楽になりたいっていう気持と、朔夜だけは許せないって気持があるの。」

擦り寄ってくる二匹の首に腕を回して抱きつくと、お日様の匂いがした。

「今でも、家族を殺して私を裏切った朔夜が憎いと思う気持があって、どうしてもそれを抑えることができないから、こうして政宗の元を離れて独りになったの。」

じりじりと低温火傷のような痛みが、心を締め付ける。

「・・・弱いのかな。私。全てを忘れて政宗たちの所に戻って、ぬくぬくと幸せで楽しい毎日をごせたらとも思っちゃうの。」

心が凍えきらないのは、まだ奥州で過ごした日々を暖かく感じるから。

「でも、戻れないの。朔夜が居るから。朔夜は私の大切に思うものを全て壊す。そして、私に自分を憎めという。だから、朔夜を殺さ

ないと、私は……。」

憎いから殺したい。もう全てを忘れて政宗の所に戻りたい。でも、朔夜を殺さないと、戻れない。朔夜を殺した自分は……戻れない。

もう一度ゼロからやり直せたと思った人生だけど。

また前の世界と同じように、人の血で汚れてしまった。

ほんの少しだけ滲んだ涙を無理矢理飲み込んで、白銀と黒金の背中を撫でた。

「白銀と黒金と一緒に居てくれて本当に良かった……。」

「くうくん……。」

「くうくん……。」

もう決めたの。朔夜を殺して、全てを終わらせるって。戻れないなら、進むしかないの。

40 貫く想い

海津城を出発して10日。

ようやく美濃を抜け、尾張に入った。

今夜の野営地を決め、質素な夕餉を済ませて、また明日の為にそろそろ眠りに就こうかという時間。

天幕を出て空を見上げれば、月のない夜空に、星が無数に散らばっていた。

ただ黙って見上げていると、後ろに慣れた気配を感じた。

「政宗様、いかがなされましたか？」

小十郎が幾分声を潜めて、オレの横に並んで尋ねた。

「今夜は月がねえな。」

「葉月も終わり、明日より長月ですから。」

朔日か。

中秋からもう半月たったのか。

ツキも今頃は寝ているのだろうか。

こんな明かりのない夜に、今どこで何をしているだろうか。

時折風魔が報告に来る限りでは、体調に問題はなさそうだった。

途中でオオカミを二匹拾ったとの報告もあった。

無事ならばいい。

「明日も一日移動になるでしょう。そろそろお休みください。」

「ああ。」

小十郎の言葉に頷くと、もう一度空を見上げてから、天幕に戻った。

月のない夜に動くのは危険。

そう判断して川のすぐ近くの木の下で、白銀のお腹を枕に、黒金の尻尾を掛け布団にして、寝転がった。

見上げた空には、沢山の星があつて、どれがどの星座なのかなんてわからないくらいにすごい。

「政宗達はいまどの辺だろうねえ。」

向こうは大軍で移動だから、私の方がもう追い抜いちゃってるのかも。

いつもの政宗らしく、元気できるといいな。

最後に見た笑顔を思い出しながら、静かに目を閉じると、すうっと眠りについた。

「逢いたいと願うならば、逢えばよかるつに。」

眠りに落ちる瞬間、誰かの声が聞こえた様な気がした。

ふと気が付くと、小高い丘に立っていた。

この世界に来る前の、本来の姿で。

空を見上げると、蒼くはない大きな満月が昇っていた。

届きそうな気がして、そっと手を伸ばすと、強い風が吹付けた。思わず目を閉じて風から顔を背けると、背後に人の気配を感じた。

風がやんで、気配のする方を見た。

「うそ……。」

目の前で驚いた顔で固まっている政宗がいた。別れた時と同じ、鎧に蒼の陣羽織姿。

ああ、これは夢か。

ちよっと笑えば、政宗もホツとした様に笑った。

「飯はちゃんと食ってるのか？」

やけに優しい気がするの夢だからかな。

「食べてるよ。三日前は温泉も入ったし。」

「うらやましい話だな、おい。」

「ちゃんと食べて、ちゃんと生きてる。だから、安心してよ。」

もう、私のことは忘れて、自分のすべきことを成し遂げてよ。

そう言おうとして、顔を上げたら、目の前が蒼一色に染まっていた。

え？

「オレから逃げようなんざ、100年早え。」

気が付いたときには政宗の腕の中だった。

成長してもまだこんなに身長差があるのかと、現実逃避的なことを考えていると、頭の上で溜息が零れた。

「朔夜を殺して、お前の戦いが終わったら、オレの所に帰って来い。」

「政宗？」

なにを……？

思わず見上げた政宗の顔は、いつになく真剣で、哀しげだった。

「許せないなら、許さないで良い。憎いなら、憎めば良い。どれだけの人間を殺そうが、オレはお前を否定したりはしない。だから、逃げるな。オレから離れるな。」

「でも……。私の手はまた真っ赤になっちゃった。心の中だって、憎しみでドロドロ。」

「そんなのは、誰にだってある。オレにだって。」

そういうと、政宗は右目の眼帯をそつと手で押さえた。

「この右目を失ったせいで、母上はオレを蔑んだ。弟はオレを哀れむ目を見た。オレはあの日母上を失った。母上が、弟が、心の底か

ら憎かった。」

「政宗……。」

苦しそうに話す政宗は、泣きそうにも見えた。

「父上だけが、オレを認めてくれた。だが、その父上をオレは敵もろともに、殺した。」

政宗の両親を米沢で見たことがなかったのはそういう事情があったのか。

お母さんのことは喜多さんから、少しは聞いていたけど……。

「オレは奥州の民の為だけに戦ってるんじゃない。弟よりも、父上よりもオレが優れていることを母上に見せつけてやりてえんだ。そのためならば、父上を見殺しにだってした。」

「政宗！」

政宗を力の限り抱きしめて、私は叫んだ。

そんな私の頭を優しく撫でて、政宗は微笑した。

「なあ、ツキ。この戦国の世は、どいつもこいつも自分の想いを貫くために、戦っている。その想いに良いも悪いも、綺麗も汚ねえもねえ。お前は一族を殺した男を殺したいという、自分の想いを貫くために戦っている。オレは母上を見返したいがために、戦っている。オレもお前も、踏み越えてきた人間の血に塗れてな。」

もう泣かないと決めたのに。

もうこの腕にはすがらないと決めたのに。

溢れ出した涙で、政宗の顔が見えない。

「オレはお前を止めない。納得するまで戦え。自分の力で成し遂げなければ意味がないからな。だが、これだけは約束しろ。必ずオレの元に帰って来い。」

「うん。・・・うん。」

「前に言ったな？迷いがある者が戦場に立てば、命を落とすと。決めたのならば迷うな。」

「うん。」

頷いた私の涙を大きな暖かい指がそっと拭った。

帰りたい。

政宗たちの所に。

全てが終わったら。

「帰る。それで、また皆でお花見して、山菜採りに行って、螢見であちこち遊びに行って・・・。」

「そうだな。」

「政宗が大好きな奥州を見て回りたい。」

お母さんを見返すためだけじゃないことも、お父さんを自ら望んで見殺しにしたわけじゃないことも、ちゃんと分かっているよ。

政宗の選んだ一つ一つに、苦渋があつたはず。
それでも、選んで勝ち取ってきたから、今の政宗がいるんだね。

私も、そんな風に強くなれるかな。
ううん。なりたい。

そつと眼帯に手を伸ばすと、政宗は少しだけびくつとなつたけど、
前かがみになってよく見えるようにしてくれた。

伸ばした手が、淡く光っていて、私の輪郭が少しずつぼやけ始めた。

「夢から覚めるのかな……。」
「かもな。」

至近距離で見る政宗の顔。

「政宗、ありがとう。」

そう言うてから、右目にそつとキスをする。

「な……!!」

焦つたような、驚いたような、一瞬で真っ赤な顔になった政宗に、
思わず噴出す。

「ツキ!!」

「あはははは!!」

やがて視界は真っ白に染まって、僅かの間の後。

「ワン！！」

白銀の肉球パンチで、目が覚めた。

「白銀、もうちょっと優しく起して下さい……。」

夢から覚めれば体はまた子供のもので、現実は何一つ変わってないけど。

何かが一つ心に生まれたような気がした。

目が覚めると、天幕の中だった。

「政宗様、おはようございます。」

「あ……ああ。」

いつもどおり起しにきた小十郎から、さりげなく手で顔を覆って隠した。

ツキめ……。

夢だというのにやけにRealな感触に、顔が上げられねえ。

「政宗様？どこかお加減が？」

「何でもねえ。」

天下を獲って民の暮らしを安定させて母上に認められる時には、ツキお前に隣に居て欲しいんだ。

「さつさと飯食って出発するぞ。」

「はっ。」

まずは、魔王の首を獲ってからだ。

「まったく、手のかかる娘だ。」

「そうして人は輝きを手にするものだ、主も申しておられたではないか。」

「確かに。」

「竜の宝玉を見守ることこそ、我らが務め。」

「我らが主の望むままに。」

40 貫く想い（後書き）

本作品は、史実を都合よく摘まんで加工しております。
ご了承ください。

41 魔王謁見（前書き）

お待ちせして申し訳ありませんでした。

41 魔王謁見

ようやくたどり着いた安土城は、とても立派な城だった。ものすごく高く、強固な作り。それが第一印象だった。

すでに戦は始まっていて、だいぶ離れた場所からでも、織田の兵と連合軍の兵がぶつかり合う音が聞こえる。

安土城を正面に見て、左が赤の武田、右が水色の上杉、真正面が蒼の伊達。

時折銃声が聞こえる中、連合軍の包囲網がじりじりと狭まっているのが見えた。

相変わらず信玄公や幸村の炎は災害級だな……。

正面の蒼い光は政宗かな。

またずいぶんと敵陣の奥深くに入り込んでるなあ……。

「ウォーン！」

戦の行方を見守っていると、黒金くろかねが牙を剥いて私の後ろに向かって吠えた。

後ろを見ると、弓を構えた子供がこちらを睨みつけていた。

確か、蘭丸って言ったっけ。

「Expand the shield・Level 50・（シールド展開。レベル50。）」

つぶやいた途端、10本の矢が一気に飛んで来た。

シールドの手前で全て弾かれて燃え尽きる矢を見て、蘭丸は益々怒

りを露わにする。

「お前が、光秀を殺したんだな!？」

「それがどうした？」

「許さないぞ！」

許さない？

殺すか殺されるかしかない、戦場で戦って私が勝った。

私が生きて、明智光秀が死ぬのは必定でしょ？

この子供は、そんなことも分らずに、戦場で人を殺しているの？

ああ、やっぱりこの子供は私を無性に苛立たせる。

唸り声をあげる白銀しろぎんと黒金の頭をひと撫ですると、銃を取り出してスライドを引いた。

「命の奪い合いで負けたら死んで、勝ったら生き残るのは当然。明智光秀は私に負けた。だから、死んだ。お前も私と殺り合うならば、死ぬ覚悟を持って挑んで来い。」

言い終わると同時に、蘭丸の右頬目掛けて一発銃を撃ち放った。

「っー！」

おそらく、この世界の物よりも、私の銃の方が遥かに殺傷力は高い。

飛距離も比べ物にならないだろう。

狙い通り右頬を掠った痛みにも、蘭丸は目を見開いた。

「さて、それでどうするの？死ぬ？」

わざと優しく言っていると、蘭丸はかあっと顔を赤くした。

「ばー！バカにすんな！」

そう叫ぶと、弓をこちらに向かって放った。
さっきとは違い、帯電した矢がシールドを突き抜けて、私のすぐ脇を数本すり抜けた。

ふーん。私のシールドを突き抜けるくらいの力はあるのね。

「上等。」

シールドを解除して、瞬発力と動体視力を上げると、飛んでくる矢を除けながら一瞬で蘭丸の懐に飛び込む。

「はいっ!?!?」

「何言ってるのよ。明智光秀はこのくらいのスピードは軽々防いでいたわよ。」

銃口を額に突きつけると、蘭丸は真つ青な顔で小刻みに震えた。

「死ぬ覚悟がないくせに、殺人武器そんなもの持ってんじゃないわよ。」
呆れて言えば、蘭丸は悔しそうに唇を噛みしめた。

「殺せ! 殺せばいいだろ!」

「そんなに死にたいなら、望み通りに。」

トリガーにかけた指に力を込めようとした時、私のものではない銃声が放たれた。

はっとすると同時に、弾丸が私と蘭丸の間を通過した。

「そのくらいにしておいていただけないかしら?」

女の声が聞こえ、そちらを見ると、着物姿のセクシーな女の人
が両手に銃を構えたままこちらを見て居た。

スリットが際どい所まで入っている黒い着物には、見事な蝶の柄が描かれている。

「どちら様？」

「織田信長が妻、濃と申します。」

濃姫？確か、美濃の国の姫だっけ。

信長の妻ねえ。

こつちの世界の本物のお姫様を初めて見たけど、二丁拳銃ぶつ放すなんて凄いな。

「濃姫様がわざわざこんな戦場に何のご用？」

「その未熟な子供を連れ戻しに。」

「これは、私に勝負を挑んで負けた。死は免れない。そう思わない？」

蘭丸から銃口を外す事なく、にっこり笑って言っていると、濃姫は困ったわねと呟いた。

「それでは、取引をいたしません？その子を返して頂けたら、朔夜殿の元へご案内いたしましょう。」

この姫様、私が誰か知っているわけね。

ま、殺して得する相手でもないし、教えてくれるってなら手間も省けるし？

ただ、その取引は正当に交わされるかどうか？ってことね。

いつでも撃てるように警戒しつつ、蘭丸から離れた。

「取引成立、ね。蘭丸君、お行きなさい。」
にこりと笑った濃姫は、銃を下ろすと太腿のホルダーにしまった。

美女は何をしても様になっただけですね。
うらやましいスタイルだな。

ちょっとだけいじけつつ私も銃をしまつと、蘭丸は悔しそうに私
と濃姫を見比べた後、何も言わずに走り去った。

「では、ご案内いたします。」

そのまま背を向けて歩き出す濃姫。

その後ろを、白銀と黒金を連れて数歩離れてついていくと、戦をし
ている場所を避けてだいぶ大回りをして、安土城の裏手にでた。

そのまま中に入る濃姫の後に続くと、山の上に城があつて、城へ
と続く階段が伸びているのが見えた。

うわー、攻め上げるのが大変そうだな作りだなあ。

毎日通つてる人はさぞ足腰が鍛えられるんだろうな……。

「こちらです。」

濃姫はそのうんざりするような階段を示した。

「げ……ここを登るの？」

「ええ。それが何か？」

うう、そのスタイルもこの階段を登って作られたの？

くそー、登つてやるわよ！

人気のない階段を登って、城の内部に入り、更に中の階段を登って、ぐるぐる回って、また登って、迷路のような城内を歩くと、やがて最上階の部屋にたどり着いた。

暗い。じめつとしてる気がする。

視覚ではなく、感覚でこの部屋は気持が悪い。

そして、中に居たのは、白い鎧を纏った男。

いやね、階段を登り始めた時点で、なんか嫌な予感してたんですよ。

「上総介様、ご所望の娘を連れてまいりました。」

朔夜じゃないんかい！

何で織田信長とご対面なんだよ！

「話が違くない？」

チラリと濃姫を見ると、彼女はクスツと笑った。

「朔夜殿は今前線で戦ってるわ。こちらで待っていれば、独眼竜の首を持って現れるわ。」

「政宗が朔夜の首を持って現れる確率の方が高いわよ？」

お返しにフンツと晒ってやれば、濃姫はギツと私を睨みつけた。ふふん。美人な顔が台無しね。

「濃、これが、彼奴の言っていた女か？」

「はい。」

やけにゆっくりした話し方で、信長は濃姫に尋ねた後、こちらを見た。

感情というものが欠落した、闇そのものの様な眼が、じっとこちらを見ている。

この人、本当に人間？

体温を感じない。心を感じない。

人形のような、でも圧倒的な存在感は人形ではありえない。

白銀と黒金も唸りながら、いつでも跳びかかれるように姿勢を低くした。

「あなたが織田信長？」

「いかにも。」

肘をついてこちらを見下ろしている信長。

それだけで、全身から汗が吹き出てくる。

下っ腹に力を込めて、深呼吸をすると正面から信長を見据えた。

「なにか私に用？」

「彼奴が探している女が如何程のものかと思っただけよ。」

「大したことなくてすみませんね。」

肩をすくめれば、信長は表情を変えることなくふんつと晒った。
感じ悪いな！

「ならば、もう用はないわね？ここに間もなく政宗が来るから、大人しく待ってなさいな。」
それじゃね、と部屋から出ようとすると、濃姫がこちらに銃口を向ける音が聞こえた。

「ここで大人しく待つのは、あなたよ？」

「Expand the shield・Level 70・Enhanced body・（シールド展開、レベル70。肉体強化）」

中を抜けて行くのは色々めんどくさそうだ。外から行こう。

濃姫を無視して、天守閣を囲む柵から直接外に出ようと足を出した途端、背後から銃声が聞こえた。

シールドを突き抜けて、私の左腕を掠める弾丸へえ。この人も属性を持っているのか。

素早く腰の銃を抜いて、三発を後方へ撃った。

「きゃあっ！！」

濃姫の悲鳴が聞こえ、肩越しに振り返れば、右肩を押さえてうすぐまる姿があった。

信長は微動だにしないどころか、苦しげに呻く濃姫には一瞥をくれることもない。

ただ私を見ているだけだった。

朔夜も大概だと思っけど、信長は異常だ。
人としての感情が欠落している。

自分の妻が撃たれたっていうのに、無反応ってどついつことよ。
こんなのが天下を獲ったら、確かにヤバイわ。

振り返ったまま動かない私に向かって、信長は猫を追い払う様に手を振った。

「去ね。お前にもう用はない。」

本当に見てみたかっただけなのかよ！！
なんて自分勝手に、冷血漢なんだ！

「一つ聞くけど、朔夜はどこ？」

「余の知ったことではない。」

あ、そ。

まったく、こんな所まで連れてこられて、いい迷惑だ。

柵を乗り越えて屋根に降りると、そこから下に向かって一気に飛び降りた。

シールドと強化した体のおかげで、数階分を落ちても問題なく着地する。

白銀と黒金も難なく着地して、私の横に張り付いた。

立ち上がってもう一度天守閣を見上げれば、信長がこちらを見下ろしていた。

が、やがてマントを翻して中に戻っていった。

織田信長・・・か。

42 相容れぬ者

安土城に到着すると、魔王のおっさんの軍勢は、すでに陣を展開して待ち構えていた。

事前に打ち合わせた通りに、武田、上杉、伊達の軍が三方に散って織田軍を一気に囲む。

右側はその軍神の所。

左側は武田のおっさん。

正面はオレの所が展開して、同時に攻め入る。

魔王がここに居る事は、前田が確認した。

その時にやられた傷は決して浅くはなく、今上杉のところでは手当てをしている所だ。

あいつをあそこまで痛めつけられる奴なんざ、そう滅多にいねえ。

魔王のおっさんがここに居るのは間違いねえ。

「小十郎、行くぜ？背中は任せたぞ。」

「承知！」

さあ、Partyを始めようぜ。

「Hey, Guys!! Are you ready!？」

「Yeaaaaah!!！」

「遠慮はいらねえ！思う存分楽しみよ!？」

「何処までもついて行きやすぜ！筆頭!!！」

「川中島は手応えなかったからね！今日は思いつきり行くぜ!？」

成実も兵士共も良い面構えをしてやがる。
今日は楽しめそうだな。

「魔王の首を獲るのは、このオレだ！」

馬の腹を蹴りつけて一気に織田の陣地に向かって走り出すと、後ろに小十郎や成実兵士等も続き、向かってくる雑魚共を蹴散らす。ほぼ同時に武田も上杉も攻め入り、戦が始まった。

「HELL DRAGON！」

鉄砲隊が一齐に火を噴くのと同時に、こっちも技を出して弾を全て弾き飛ばし、そのまま中央を突破。

群がる足軽共を蹴散らし、城門目指して突き進む。

「政宗様！無茶をなさいますな！」

後ろで小十郎が叫んでるが、無茶をしてるつもりはねえからな。どンドン行くぜ！！

「邪魔だ！どけえ！！」

城門を固める足軽ごと門を突き破ると、一気に中に雪崩込んだ。

嬉々として暴れまわる成実と、背後の足軽共を切り伏せる小十郎に後ろは任せて、馬を下りると辺りを見回した。

さて、魔王は何処に居やがんだ？

時々現れては斬りつけて来る雑魚を斬り捨てながら奥へと進むと、本丸の手前で一人の男が現れた。

「君が、伊達政宗？」

年齢はオレの少し上くらいか？

細身で、顔の造作は整っている方だろう。

目元がツキにとても似ている。

「お前は朔夜だな？」

「はじめまして。だね。」

「宜しくはしたくねえな。」

ふんつと鼻で哂ってやれば、朔夜は肩をすくめた。

「オレに何か用か？」

「会ってみたかっただけさ。あの子を保護したこの世界の独眼竜に。」

「

なるほどね。会ってみたかっただと。

ならば、その隠しようのない殺気はどう説明するつもりだ？

「会って、オレを潰そうって魂胆か？」

「そのつもりは始めはなかったんだけどね……。」

そう言うと、朔夜はすつとオレの胸辺りを指で示した。

「君、あの子の加護をもらった？」

「加護？」

「そう。結晶石を貰っただろう？」

ああ、あれか。

今も懐にしまつてある蒼い石。

左手で懐を押さえると、朔夜は目を細めた。

「君はあの子に相当大切にされているんだね。」

「あ？」

「その石は一年に一度だけ、祈りと願いを込めて作る石。誰にでも渡せる物じゃない。」

そうなのか？

初めて人に贈ると言っていたな。

そうか、そういうものだったのか。

「……気に入らないな。あの子の全ては、僕に向いていなければならぬのに。」

緩みそうになる頬に力を入れてみると、苦々しい表情の朔夜がオレを見据えた。

あいつの全て、だと？

「奇遇だな、オレもてめえが気にいらねえ。」

あいつはてめえに囚われて、長い間苦しんだ。

そして、今もまだ苦しんでいる。

もうあいつを解放してもいいんじゃないかねえのか？

「僕とあの子の間に入り込むものは、全て排除する。」
「上等だ！吠え面かくなよ！？」

ツキ、悪りいな。朔夜はここでオレが殺る。

こいつの前を素通りする事はできねえ。

魔王の前に、こいつだ。

刀を頭の横の高い位置で構える。

「奥州筆頭伊達政宗、推して参る。」

「独眼竜、死んでもらうよ？」

後ろに手を回し、腰につけていた見たことがない形の懐剣のような物を二本取り出した朔夜は、両手にそれぞれ逆手で掴んだ。

「はああああ！！！！」

正面から得物を前に突き出すようにして、突っ込んでくる朔夜。それを刀で受けると、右脇から蹴りが飛んで来た。

とっさに右腕で防御して直撃は避けるが、打撃の重さに腕が痺れた。

「くっ。」

こいつ、型がツキと同じ？

鈍く痺れる右腕で朔夜の足を振り払い、バランスをわずかに崩した所を左手で持っていた刀で押し込む。

「はっ!!」

朔夜の刀を弾き飛ばし、倒れかけた所を返す刀で斬り付ける。

「危ないなあ。僕はあの子と違ってそんなに反射神経は良くないんだよねえ。」

斬ったはずの人間の声が、後ろから聞こえた。

こいつ、忍か？

目の前には何もなく、背後には銃を構えた朔夜の姿。

「あの子は体内の機能を高める術が得意。僕は幻影、幻覚が得意なんだ。川中島でも、信長の幻影に皆よく引つかかってくれて楽しかったよ。」

「なるほどな。いくら探しても魔王のおっさんの姿はなかったわけだ。」

「あの子に光秀を殺させる事が目的だったからね。わざわざ信長を連れ出す必要はなかったんだよ。」

悪戯が成功したと喜ぶガキのような朔夜を、油断なく刀を構え直して見据えた。

「なぜ、ツキに明智を殺させた？」

「だって、君の所であの子はすっかり丸くなってしまったんだもの。僕は、僕に向けるあの子の闇に染まった目が一番好きなんだ。綺麗なんだよ。とても。」

ふふふつと笑う朔夜。

この野郎……。

人を殺したことで、どれだけあいつが泣いたか知ってるのか？

どれだけ苦しんだのか、どれだけ悩んでいたのか、どれだけ怯えていたのか!!

「てめえは許さねえ! 地獄へ落ちろ!!」

「奇遇だね。僕も君が気に入らない。死んでくれよ。」

朔夜の指が引き金に掛かると同時に、走り出した。

一発、二発、三発と銃声が響くが、当たらない。

「MAGNUM STEP!」

雷帯びた突きが朔夜を捉える瞬間、背後に殺気を感じた。

「学習能力が無いんじゃないかな?」

しま……!!

パン!!

四発目の銃声が、すぐ後ろで聞こえた。

・・・？

痛みはない。撃たれたわけじゃなさそうだ。
今何が起こった？

振り返ると、銃口をこちらに向けて驚愕を浮かべる朔夜がいた。

「どうして？」

掠れた眩きは、オレの視線より下に向けられている。
つられる様に視線を下げると、忍装束の女が蹲っていた。

まさか・・・。

43 やじして？

信長の所を離れた後、どこをどう行ったもんだか分からなくて、適当にうるついでしていると、白銀しろがねと黒金くろがねが突然走り出した。どうしたの？

二匹の後を追うと、前方から銃声が聞こえてきた。

誰かが戦っている！

気配を消してそっと覗き込むと、そこには政宗とかなり若返っているけど朔夜の姿があった。

「MAGNUM STEP！」

政宗がすさまじい突きを繰り出す先にある朔夜の姿は幻覚。

考える前に足が動いていた。

蒼い背中に向かって銃を構える朔夜。

「学習能力が無いんじゃないかな？」

間に合え・・・！！

パン！！

銃声と、政宗の背中に縋り付くのと、どちらが早かったのか。

「どうして？」

呆然とした朔夜の声がして、ようやく自分がまだ生きていることを知った。

次に、右の脇腹に微かな痛みを感じた。

私が飛び出したことで、驚いて的を外したのか、弾は掠ったくらいですんだようだ。

「ツキ……？」

呆然とした政宗の言葉に、私は苦笑しながら立ち上がった。多少血は流れているが、動けないほどのものではない。

「大丈夫。」

青褪めた政宗に笑いかけると、はあああと安堵の溜息をついた。

「肝が冷えたぜ。」

「それはこっちのセリフだ。背中を守るはずの小十郎はどうしたのよ。」

「軍の指揮をおし……任せている。」

今押し付けてるって言おうとしなかったか？

ジト目を向けると、さっと目をそらした所からも、確信的に置いてきたんだな。

私の視線に耐え切れなくなったのか、政宗はがしつと私の両肩を掴むと、じつと見つめてきた。

「ツキ、この戦が終わったなら、お前に話がある。」

は？なに？

真剣な目で見つめられて、思わず顔が赤くなる。

「オレと、小十郎と、ああ、それからきつと喜多も参加したがるだろうな。」

・・・そ、それって・・・。

もしかして・・・。

今度はさーつと顔が青くなった。

「オレは言ったよな？大人しく米沢に帰れと。」
話って、説教か！！

喜多さんの説教・・・！！

勝っても負けても、死亡フラグ！！

ガクブルする私を満足そうに見た後、政宗は私の後方を睨みつけた。

「必ずあいつに勝て。いいな？勝ったら説教は免除だ。」

「それは何が何でも勝たなきゃね。」

くすっと思わず笑ってしまいながら、政宗と同じ方向に目を向ける。

半年振りに見る朔夜は、私と同じように若返っていたのか、家族を殺したあの時とほぼ同じくらいの年齢に見えた。手にしたサバイバルナイフを遊びながら、私と政宗を眺めている。その目はあの頃と変わらず、暗い狂気が潜んでいる。

だめだ……。やっぱり、どうしてもあふれ出てしまう。憎しみが、恨みが、悲しみが、悔しさが。

もう少しだけ堪える。
政宗を送り出さなきゃ。

「政宗、織田信長は天守閣にいた。そつちも必ず勝ってよ？アレはやバイ。天下獲らせたら、この国滅ぶよ。」

「任せとけ。」
にやりと笑う政宗はいつもの政宗で、無条件で信頼してしまえるから不思議だ。
まあそつでなきゃ、あの連中のトップはやってられないんだろうけど。

「まああさああむううねええどのおおお！！」
砂煙を上げながら、ものすごい勢いで突進して来る赤が見え、政宗がやれやれとこぼした。

「追いつかれちゃったか。」
あつという間にたどり着いた幸村は、息切れ一つしていない。すごいな。どんな鍛え方したらそうなれるんだろ。

「ツキ殿!！」
「や。」

私に気が付いて目を丸くする幸村に、片手を上げて挨拶する。

「ツキ殿も一緒に行くのでござるか？」

「いや。」

幸村の問いに、政宗が苦虫を噛み潰したような顔で否定した。

そう。私にはやることがあるからね。

「私はここに残るよ。さ、二人共もう行かなきゃ。」

不思議そうな顔をしている幸村に言うと、政宗もそうだなと答えた。

「そろそろ魔王退治に行くぜ？遅れんなよ？真田幸村！」

「望む所でござる!！」

「武運を。」

みなぎるあああああつ!！と叫ぶ幸村を軽く無視して、私は政宗の懐を叩いた。

「お前もな。」

そう言つて朔夜を一瞬睨みつけたあと、ニヤリと笑つた政宗は、屈みこんで私に軽く触れるだけのキスをした。

なっ!！

あわてて口を押さえる私と、そこだけはバッチリ見てやがった幸村の顔が一瞬で赤くなる。

「破廉恥iiiiiiii!！」

叫びながら走り去る幸村の後を追うように、政宗も走り出した。

「夢のお返しだ。続きは米沢に戻ったらだ。」

「ば、ばかたれええええ!!!」

夢って何!? あれは、私が見た夢であって、政宗がなんで知ってるのよ!?

塀の向こうに政宗の姿が消えて、残ったのはアワアワしている私と、空気のような存在の朔夜だけとなった。

「随分、楽しそうだね?」

苛立ちを交えた冷たい声があった。

頭がずっと冷えていくのを感じながらゆっくりと振り返った。

「久しぶり。生きてここにいると思わなかったから、だいぶ遅くなつたわ。」

「この世界に着いて、随分探したよ?ここにみいがある事はわかっていたから、それも楽しかったけどね。」

その声に。

言葉に。

時間が戻っていく。

ここに来る前の自分に。

「白銀、黒金、離れてて。絶対に手を出さないで。」

心配そうな目で後ろに控えている二匹に告げると、彼らは大人しく引き下がった。

「その狼たち、白銀と黒金って名づけたんだ。」
「そう。そっくりでしょ？ババ様が飼っていたあの子達に。」
「そうだね。その楯突く態度とか、ホントそっくり。もう一度殺したくなる。」

「サバイバルナイフをくるくる回しながら、朔夜は白銀と黒金を見下ろした。」

もう一度……。やっぱり、あの二匹も殺されたのか。

あの屋敷から姿を消した二匹の行方は、分からないままだった。

お墓くらいは作ってあげたかったな……。

元の世界の白銀と黒金を思い出していると、朔夜はところで、と呟いた。

「みい。お前は这个世界で、どれだけまた大切なものを作ったのかな？一つずつ壊していつてあげるから、教えて？」

こいつは……！！

カツと目の前が赤くなるほどの怒りを覚えて、にらみつけた。

「まずは、あの独眼竜だろ？許せないな。みいが僕以外を見つめるなんて。」

ふふつと笑つと、朔夜は天守閣を見上げた。

「でも、信長にもうすぐ殺されちゃうね。僕の手で壊したかったけど、ま、仕方がないかな。」

「どつして、私なの？」

怒りに震える声で、朔夜に尋ねた。
ずっと、聞いてみたかったこと。

「どうして、私を殺さなかったの？私を残したの？」

宗主に私が選ばれた。

他はもういららないと言った朔夜。

母が好きだったんでしょ？

ならば、なんで母ではなく私を残した？

「どうして？そんなの簡単だよ。みいは僕が好きでしょ？迦月さんはあの男を選んだ。僕じゃなくてね。許せなかったんだ。だから、迦月さんもあの男も殺して、僕とみいだけの世界を作ったんだよ。二人の世界には、他の連中も要らない。みいだって、僕の所に来るために、一緒に落ちてくれたじゃないか。」

なに？この男、何を言ってるの？

「一緒に遊んだ7年は楽しかったよね？みいはほとんど僕のために壊れていってくれた。本当に可愛いよみいは。半年前のあの日も楽しみにしていたんだ。どんな風に僕の所に来てくれるのかなって。だけど、あの地雷の暴発があつて、蒼竜がみいを連れて行こうとして驚いた。とつさに捕まえて一緒に来れてよかったよ。」

「蒼……竜……？」

「君たちが蒼き月の御方と呼ぶ、神だよ。」

許さない。
絶対。

44 対成すもの(前書き)

流血、残酷シーンがあります。

44 対成すもの

鋼糸を全て引き出して、鞭のようにしならせて朔夜に打ち付けた。軽く避けられた鋼糸は、地面を抉った。

「確かに好きだったよ。力を満足に使えなかった私を、見捨てずに導いてくれた朔兄がね。でも、あの日、パパを、ママを、お兄ちゃんを、ババ様を、皆を殺された日に、私の好きだった朔兄も死んだ。」

そのまま鋼糸を横に薙ぎ払えば、朔夜の幻影が真つ二つに分かれた。

「お前だけは何があるとも、許さない。必ずこの手で殺してやる。そう誓った。なのに、お前は……！」

真後ろに向かって銃を一発撃つと、朔夜のうめき声が聞こえて、どさっという音がした。

振り返れば左肩を押さえた朔夜が、痛いなあと呟きながら治癒を施していた。

「ママがパパを選んだから？私が朔兄を好きだったから？ママを殺して、私を同じ場所まで引きずり落とした？どんだけ自分勝手なの！？私は、皆は、あんたのおもちゃじゃない！！！」

続け様に残り六発を撃ち放つ。

寸分狂うことなく、眉間を打ち抜いた朔夜はやはり幻影。

「あの七年が楽しかったって？私があんたの為に堕ちたって？そん

なわけないでしょ!!」

弾倉に弾を装填しながら、ふつつつと湧き上がる怒りを、言葉に変えて朔夜にぶつける。

傷を治癒し終わったのか、朔夜はサバイバルナイフを握りなおすと、不思議そうに私を見ていた。

「私はね、私の為に戦った。私の意志を貫くために。たくさんの人を殺しても、何を犠牲にしても、私は私の想いを叶える為に戦ったんだ!」

装填し終わった銃のスライドを引くと、まっすぐに朔夜に銃口を向けた。

落ち着かなきゃ。

幻影を見破れなくなる。

深呼吸をして心を静めると、引き金に指をかけた。

「私は、私を裏切ったお前が憎い。私の家族を殺したお前が許せない。だから、殺す。それだけを思っていた。ここにくるまでは。」

「今は違うと?」

「ここには私を、ありのままの私を受け入れてくれる人がいる。この世界でできた新しい私の家族がいる。これ以上あなたに私の大切なものを壊させない。」

朔夜は母のことが好きなんだと思っていた。

私を通して母を見ているのだと思っていた。

それは違っていた。

こいつはおもちゃとしての対象を、母から私に移したんだ。

そのおもちゃが、他の人間に盗られないように、全てを排除しようとしてる。

朔夜という男の本性は、傲慢で自己中心的で、思い通りにならないおもちゃは叩き壊し、欲しいと思ったものはどんな手段を用いても手に入れる。それが良く分かった。

「皆は私が守る。もう、何一つ大切なものはお前になんか奪わせない。」

引き金にかけた指に力を込めようとした時、朔夜がクスクスと笑い出した。

そのままさも可笑しそうに腹を抱えて、哄笑した。
なにが可かしい？

一頻り笑った後、朔夜はそうかと俯いて呟いた。

「そこまであいつらはみいの中に巣食っちゃったのか。」

ゆっくりと顔を上げた朔夜は、あの日と同じように、にいつと三日月のように目を細めて私を見た。

朔夜の纏う気配が黒く禍々しいものに変わっていく。

今までとは明らかに違う、あからさまな殺気。

「みいに巣食う奴らはみんな殺してしまおう。伊達も、武田も、上杉も。それで、みいはまた僕と同じになるんだ。」

そんなこと、させない。

ここで決着をつける。

「死ぬのは朔夜一人だ。」

昔、朔夜は言葉を使うことで、力をイメージしてコントロールすることを私に教えた。

下手に力を使って、癒すどころか傷つけてばかりいた私。

私は人より蒼い月の力を強く受け継いだから、制御することが難しいのだと、朔夜はそう教えた。

やがて制御を覚えて、治癒をすることができるようになったけど、他の人よりはずっと弱い力しか出せなかった。

恐かった。人を傷つけることが。

私が力を暴走させることで、家族が傷ついたらと思うと恐かった。

朔夜と満月は表裏一体。

光に満ちる月と、闇に満ちる月。

背中合わせだけど力は同じだと、昔朔夜は言った。

同格の力。

その朔夜を捻じ伏せる為には、全ての力をもって戦うしかない。

常に意識をして押さえてきた力を解放する。

暴走して、周りを巻き込むことになっても。

私の命を削ることになっても。

元の世界では失うものは何もなかった。

でも、ここは違う。
私が負けたら、政宗たちが殺される。

あの人たちを傷つけることは、絶対に許さない。

「さあ、始めよう。」

幻影で躲す朔夜と、反射神経と瞬発力で躲す私。
早々に銃弾はお互い尽きた。

銃を投げ捨て、鋼糸を手にとると、朔夜にスピードを上げて突っ込む。
対する朔夜もサバイバルナイフを手に、まっすぐ突っ込んできて、ナイフと鋼糸が高い音を上げてぶつかつた。
衝撃波で周りの砂や石ころが吹き飛んで、壁にめり込む。

幻覚ではない朔夜を捕まえなければ、いつまでも決着なんかつかない。

ナイフと切り結んでいる鋼糸を一瞬緩め、こちらに傾いてきた朔夜の脇腹に膝をめり込ませた。

朔夜の体を覆っていた防護壁を砕き、ぶちぶちと脇の筋肉が断裂する感触がした。

「ぐ……!!」

体を折り曲げる朔夜の左腕に鋼糸を絡ませると、ぐいっと引き絞った。

「これで逃げられない。」

「みいもね。」

呟いた私を下から見上げて、朔夜は笑った。

右腕に握っていたサバイバルナイフが光を反射して、はっとなって後ろに飛び退った。

こちらもシールドは張っていたけど、ナイフに力を込めていたらしく、簡単に刃は私の腹を切り裂いた。

「………っ。」

裂かれた服から、じわりと血が垂れた。

脇腹を蹴った時に内臓を痛めたのか、朔夜も脇腹を押さえて苦しげに顔をゆがめている。

治癒をしようとしている朔夜の腕が淡く光るのを見て、鋼糸を思いっきり引っ張った。

治癒なんかさせない。

手繰り寄せた鋼糸に引きずられるようにして、朔夜が前のめりになった所を首を狙って回し蹴りをした途端。

「足癖悪いよ。」

足首を捕まれて身動きが取れなくなった。

しまった……!!

「捕まえた。」

にたりと笑った朔夜は、サバイバルナイフを私の太股の内側に思いつきり突き立てた!

「ああああああああ!!!!!!」

激痛に絶叫が迸る。

朔夜はそれを愉快気に眺めた後、サバイバルナイフをぐりっとなじ込んだ。

「ぐああああああ!!!!」

「痛い? ねえ、痛い? 治癒すれば?」

こ、この……!!

痛みのがあまり霞む視界で朔夜を睨みつけると、捕まれた足を軸にして、反対の足で思いつきり鳩尾を蹴りつけた。みしりと肋骨が碎ける感触がした。

「ぐは……!!」

手を離して、その場に膝を付いて血を吐く朔夜。バランスを崩して地面に落ちた私も、足を抱えて蹲った。

「……く……ああああ!!」

太股のしかも動脈に刺さったサバイバルナイフを抜いて、噴出す血を引きちぎった袖で力いっぱい縛って止血する。細胞が壊死するかもしれないけど、しないよりはマシだ。

高められた五感が、辺りに充満する私と朔夜の血の匂いと、荒い息遣い、そして咳くうめき声を捕らえる。

互いに力を限界以上に駆使しているせいで、体力の消耗も激しい。でも、後には引けない。

引いたら皆が危険に晒される。負けられない。

抜いたサバイバルナイフを手にして、体を引きずって朔夜に近づく。と、首目掛けて振り下ろした。

「ぐあああああ！！」

咄嗟に体を反らして首は避けたものの、前上半身を斜めに切りつけられて、朔夜は悲鳴を上げた。

このまま、方を付けてやる！

とどめを刺す為に、朔夜の胸倉を掴もうと伸ばした腕を逆に捕まえて、振り回された。

背中から地面に叩きつけられて、押さえつけられる。

背中に受けた衝撃で、咳き込む私の首を掴むと、そのまま持ち上げられた。

首を絞められて、目の前が真っ白になる。

「う……ぐ……。」
首の骨を押し折る気なのか、みしつと嫌な音がした。

こんな、ところで、死んでたまるか……!!
約束した。米沢に帰ると。
誓った。必ず勝つと!

「っあああああああ!!!!」
手にしたサバイバルナイフを振り上げ、朔夜の脇に力の限り突き刺した。

「ぐああ!!!!」

堪らず悲鳴を上げた朔夜の手が緩んで、私はそのまま地面に落ちた。
咳き込みながら這いずって朔夜から離れ、ポケットにしまっておいたクナイを取り出した。

出血が多すぎたのか、目が霞んで寒気を感じる。
足を見れば、止血もあまり効果がなく、ズボンは血でぐっしょり濡れていた。
腹からも流れる血が止まらない。

「……の……!」
呻きながら立ち上がろうとする朔夜。
いま治癒を朔夜にされたら、負ける。

あと一撃。

どうか、当たって……!!!!

眉間を狙って、クナイを渾身の力を込めて投げつけた。

「ギャツ!!」

短い悲鳴が上がって、ゆっくりと仰向けに、朔夜が倒れる。

立ち上がらなきや。

止めをささなきや。

力の入らない体で辛うじて立ち上がり、もうほとんど見えない目で朔夜を探す。

「この馬鹿娘が!! さっさと治癒をせんか!!」

え？

聞いたことのない声が聞こえて、のろのろと振り返ると霞む視界に
白銀と黒金しろがね くろがねが映った。

「え？」

「え？ではない! さっさと治癒をしろと言っているんだ!」

白銀の口が動いて、声が聞こえるって事は、話しているのは白銀？

「さく・・・やは・・・？とどめ・・・ささなきや・・・。」
「朔夜は・・・もう死んだ。」

黒金に向けた視線の先に、仰向けに倒れたままの男の姿があった。
死んだ？

「勝者はツキ、お前だ。」

勝った？

ぐらりと体が傾いて、そのまま地面に倒れた。

「ツキ！！」

「おねが・・・い。さ・・・くやのところに・・・。」

殆ど声にはならなかったけど呟けば、風が吹いて小太郎が現れた。
小太郎は私をそっと抱き上げると、朔夜の元へと連れて行き、その
場にしゃがみ込んで私に見えるようにしてくれた。

霞む目を凝らして朔夜を見ると、目を見開いた驚愕の表情のまま、
息を止めていた。

朔夜の眉間にクナイが根元まで突き刺さっていた。

朔夜が死んだ。
私が、殺した。

「おわったの・・・ね。」

ぽろりと涙が零れた。

「ツキ、治癒を！！早く！！」

白銀が焦ったように叫んでいるけど、もう体が動かない。勝ったけど、もう、ここまでみたいだ。

暗くなっていく視界と、遠のいていく白銀と黒金の声。

「こたろ・・・ありが・・・と。ごめ・・・。」

ずっと傍にいてくれたのは、気が付いていたの。死ぬなど、生きると言ってくれたのに。

「まさむねを・・・たすけ・・・て・・・。」
まだ戦っているだろう、政宗を助けてあげて。

私の代わりに。

政宗。

ありがとう。

あなたがいたから、私はここまで来れたの。

認めてくれたから。

受け止めてくれたから。

包み込んでくれたから。

弱い私を政宗が守ってくれた。

私を救ってくれた。

そばに居ると、言ってくれたのに。

帰れなくてごめんなさい。

傍で一緒に同じ景色を見たかった。

あなたの傍で、同じ夢を追いかけてみたかった。

一緒に奥州を駆け回りたかった。

強くて、優しく、時々小十郎たちを困らせたりもするけど、皆に心から慕われているそんな奥州筆頭。

本当は、好きなの。

いつの間にか、とても好きになったの。

政宗……。

ずっとずっとその腕の中に居たかったよ……。

でも、ここまでみたい。

ちょっとは強くなれたかな。

政宗のように、強くなれたかな。

そうだったら、嬉しいな……。

沈む意識の彼方で誰かが、よく頑張った、と囁く声が聞こえたよ
うな気がした。

4 4 対成すもの（後書き）

45 第六天魔王（前書き）

45 第六天魔王

魔王は天守閣に居た。

血の気のうせた顔で倒れる女には一瞥もくれることなく、悠然と座つてオレと真田を睥睨していた。

「余は、第六天より具現し、魔王なり。」

ゆらりと立ち上がった魔王は、一步、また一步とオレらに近寄つた。刀を抜いて構えるオレと、二本槍を構える真田。

「このオレに喧嘩を売つたこと、地獄で後悔させてやるぜ。」

「罪無き民を蹂躪せし魔王！お相手いたす！！」

「虫ケラどもめ……。」

筒の長い銃を手にした魔王が銃口をこちらに向けた。

「死をもって贖うが良いわ。」

「奥州筆頭伊達政宗、推して参る！」

「天・覇・絶槍！ 真田源次郎幸村、参る！」

行くぜ！後悔すんなよ！？

魔王の撃ち放つた銃声を合図に、オレと真田は走り出した。

「小童共が……。我に逆らうことの愚かさ、その身に味わせてくれるわ！」

闇そのものの気が突風となってオレと真田を襲い、耐え切れなかった真田が壁に叩きつけられた。体を丸めて衝撃を和らげた真田は、顔を顰めているものの、問題はなさそうだ。

確かに衝撃はあったが、吹き飛ばされるようなものだったか？オレにはそれほどには感じなかったが・・・。

真田が弱いわけじゃねえ。あいつはオレがRivalと認めただけの実力はある。何が・・・？

「あ？」

刀を構える自分の体が、青く光っていることに気が付いた。

これがツキの加護ってやつなのか？
防御の力が働いているのか。
ならば。

「ハッ！遠慮なく行かせて貰うぜ！！WAR DANCE！！」
飛び上がって頭上から魔王のおっさんに飛び掛り、次々に斬り付けるが、刀で防がれてしまう。

「うおおおお！！烈火ああああ！！」
後ろから真田が追隨して炎を纏った槍を突き出した。

「ふん！！」

刀を横に薙ぎ払い、真田ごと炎を吹き飛ばす魔王。

「脇がから空きだぜ！！」

隙について脇を切りつけると、ぐあっというかすかな声と、血の匂

いがした。

「おのれ、小癩な真似を……！」

ぶわりと闇が広がり、直撃を受けて真田の所まで吹き飛ばされて、強かに背中を打ちつけた。

「ぐはっ！」

「政宗、殿……！」

心配する真田に片手を挙げて応え、魔王を睨みあげた。

脇腹を押さえちやいるが、眼光は一向に衰えた様子のない魔王。

「我が前に立塞がる者、全て滅す……！」

バァン！バァン！

続けざまに撃たれた銃を避け、体勢を立て直して刀を構え直す。

今ので背中を痛めたようで、呼吸が辛い。

このまま長引けば、オレらが不利になる。

西国を蹂躪したというその実力は良く分かった。

力が、覇気が、禍々しい気配が、存在が、半端ねえ。

ツキが言ったように、こいつが天下を手にしたら、この日の本が滅ぶ。

オレの奥州も……。

させねえ。

魔王はオレが、ここで、この手で狩る……！！

「真田、傷はどうだ？」

「心配無用でござる！」

上等だ。伊達に武田のおっさんに殴られ続けちゃいねえな。

「行くぜ！真田幸村あ！！！」

「望む所でござる！！伊達政宗殿お！！！」

「無に還るがよいわ！！！」

撃ちつくした銃を投げ捨て、腰に佩いた刀を抜く魔王。

「おおおおおおお！！！」

「うおおおおおおお！！！」

突きの構えで魔王に向かって走り出す真田とオレ。

「散れえええ！！！」

振り下ろされる魔王の刀を真田が受け止め、オレの刀が魔王の腹を貫いた。

「真田、止めを刺せ！！！」

「承知！！！」

「ぐおおお！！！」

黒い炎を纏った魔王拳がオレの頭を薙ぎ払い、衝撃に意識が一瞬途絶えた。

政宗・・・。

ツキに呼ばれた気がして、はっと目を開けた。
目の前では真田が魔王と戦っている。
オレとしたことが、気を失っていたのか。

すぐに立ち上がるうとした時、風が吹いて目の前に風魔が現れた。
ツキの傍に着けておいたはずの、風魔が。

何で、ここに居やがるんだ？
ツキはどうした？

「朔夜は死んだ。」
空気が洩れるようなかすかな言葉で、風魔が伝えてきた言葉の意味は分かった。

「そうか。」

勝ったか。ツキ・・・！

オレも負けらんねえな！

「待たせたな！真田！！」

駆け寄るオレの隣を併走する風魔。

風魔は鎌鼬のような風の刃を放って、魔王にぶつける。

その隙に真田が魔王と間合いを取って、槍を構えなおした。

「Lastだ。行くぜ！！」

刀を構え、ぐつと体を沈めると一気に飛び出す。

真田も風魔も続く。

「うおおおおお！！！！」

「ぬおおおお！！」

オレと真田と魔王の雄叫びが安土城に轟く。

風魔の放つ風の刃が魔王の体を傷つけ、真田の突き出した炎の槍が魔王の刀と交わる。

渾身の力を込めた刀を振り下ろし、真田の槍と交えている魔王の刀を真つ二つに叩き折った。

「地獄へ帰りな!!」

雷を帯びたオレの刀と、真田の槍が同時に魔王の体を貫く。

「ぐ……あ……。」

大きく傾いで、刀と槍を体に刺したまま、ゆっくり仰向けに倒れる魔王。

「滅せぬ……もの……のある……べき……か……。」
仰向けのまま天を見上げ、微かに笑う魔王。

「是非もなし……。」

最期の言葉を残し、魔王は微笑を浮かべたまま、事切れた。

45 第六天魔王（後書き）

勢いだけで書いてしまったので、近いうちに改稿します。

46 慟哭

魔王が討たれたという知らせは、忍を通じて戦場を瞬く間に駆け
た。

体中に傷を負った真田と、背中を痛めて肺を傷つけたオレは、魔王
の遺体の横で座り込んでいた。

「政宗様！！」

「旦那！！」

知らせを聞いて駆けつけてきた小十郎と猿が天守閣に飛び込んでき
た。

そんな焦った顔してるんじゃないよ。

心配しなくてもちゃんと生きてるぜ。

真田の腕を取って立ち上がると、真田を猿が受け取った。

「あーあ、流石の旦那もぼろぼろだねえ。」

「なんの、まだまだあ・・・ったあ！！」

強がろうとした途端、激痛が走ったのか顔を顰める真田。

「大人しくしててよ。」

呆れ顔の猿が真田を支える。

「政宗様、怪我は？」

「大丈夫だ。」

多少呼吸が苦しいがな。

あえて言わずに天守閣から外を見下ろす。
織田軍は大将を失って、戦意喪失で逃げ惑っている。
勝鬨を上げる連合軍の声が、地響きを伴って響き渡った。
勝った。

ようやく奥州へ帰れるぜ。
ツキと一緒に。

「小十郎、ツキを迎えに行くぜ。あいつ、勝ったらさっさと来いって言ったのどこで道草食ってやがるんだ？」

上機嫌で振り返ると、小十郎の顔が沈痛に歪んでいるのが見れた。
どうした？

訳が分からず猿を見ると、猿の顔も歪んでいた。

「竜の旦那……。ツキちゃんは……。」「
おい、なんだよ。どうしたんだよ。
「政宗様、ツキが待ってます。こちらへ。」

小十郎が意を決したように言い、オレに背を向けて歩き出した。

小十郎に案内されて来たのは、伊達の陣地の最奥。張られた天幕の中で、狼たちに守られて、ツキは静かに横たわっていた。

「ツキ？」

血の気の無い、真つ白な顔。まったく動かない体。

顔をうつむかせて泣いている成実と、兵士共。

オレの姿を見ると、全員が無言で頭を下げ、天幕を出て行った。小十郎もその後について出て行った。

ゆっくりとツキに近寄ると、むくりと銀色の毛の狼が起き上がった。「どうか、褒めてやって欲しい。」

喋る狼だと、驚く思考が頭の片隅を過ぎったが、そんなことは瑣末なことだった。そのまま出て行く狼。

二人きりになった天幕で、そつとツキの頬に触れる。冷たい。

口元に手を当てれば、息をしていない。

うそだろ・・・？
勝ったんだろ？

「ツキ？起きろ。迎えに来たぞ。奥州へ帰るぜ？」

小さな体を抱き起こして、腕の中に抱える。
冷たい体からは、血と硝煙の匂いがした。

「ツキ、起きてくれよ。」

熱を分け与えるように抱きしめても、ツキはピクリとも動かなかつた。

口元に、微かな微笑をのこして。

「ツキ・・・。」

そつと頭を撫でてやる。

ツキは何も言わなかったが、こうして撫でてやればいつも気持良さそうに目を細めていた。
いくらでも撫でてやるから。

起きてくれ。目を開けて、オレを見てくれ。
勝ったんだ。オレも、お前も。

奥州へ帰れるんだ。
一緒に帰るんだろ？

だから、いつまでも寝てねえで、起きろよ。

「ツキ……。」

目を……。

ぼつっと目から溢れたものが、ツキの頬を濡らした。
次から、次へと。

「っ……！！！」

嫌だ。こんな終わりは嫌だ。
これからじゃねえか。
これからはじまりだろ？

オレの隣で、オレと一緒に同じものを見るんだろ？
やっど、お前が自由になれて、心から笑えるようになったんじゃね
えか。

なあ、笑ってくれよ。
ツキ。

「逝くな……！！！」

掻き抱いた冷たい体を、オレは一生忘れないだろう。

天幕から微かに聞こえる政宗様の咽ぶ声を背中に感じながら、天を仰いだ。

知らせを受けて駆けつけた現場は、凄惨なものだった。

クナイを眉間に突き刺したまま絶命している男と、体中を血で汚し静かに目を閉じているツキ。

黒と銀の狼が頂垂れてツキを囲んでいた。

慌てて駆け寄り、様子を診たがすでに手遅れだった。

抱き上げた体はぞっとするほど冷たく、軽かった。

あの時、春日山城でツキを一人にさせなければ……!!
ぎりつと食いしぼる齒の間から、堪えきれないものが洩れる。
滲む涙を拭い、周囲の様子を窺った。

まだ織田の残党は居る。
政宗様とツキを護らねば。

やがて、知らせを聞いた信玄公と謙信公、前田とかすが、猿飛に
連れられた真田がこちらに向かってきた。
一様に沈痛な面持ちで、言葉もなく天幕を見ている。
ツキの奔放で明けっ広げな性格と、天真爛漫な振る舞いは誰もが好
いていた。

その影で、ツキがどれだけの苦しみと憎しみを抱えていたのか。
ここに来たばかりの頃、大怪我をしていたにもかかわらず、慣れて
いるから平気だと、けろりとした表情で答えたツキ。
いつも、お前はこんな戦いをしていたのか？

こんな、小さな体で。
たった独りで。

この世界に来て政宗様と出会って、少しずつ笑顔を増やしていった。だが、時折もとの世界のことを思い返しては、唯一、政宗様にだけその胸の内を零していたツキ。

あの男を殺して、解放されたのだろうか。
眠るツキの口元には、微かに笑みが浮かんでいた。

「じゅろおおお・・・。」

「男がそんなに情けない面晒して泣くんじゃねえ。」
号泣する成実を窘めるが、伊達軍は皆声を上げて泣いている。

太陽が西に傾き、空を赤く染めていた。
今日ここを動くのは、なしだ。
政宗様とツキをゆっくり休ませてやりたい。

その意を謙信公と信玄公に伝えると、双方とも頷いた。

「それが良いだろう。」
「いまはそつとしておきましょう。」
感謝を込めて黙礼すると、信玄公たちは自分の陣へと戻っていった。

泣きながら伊達の兵士もそれぞれの持場へと戻っていき、天幕の前には俺と二匹の狼だけが残った。

明日になれば、戦後処理が待っている政宗様。
残党狩りもある。

せめて、今夜だけは……。

藍色に染まるそらを見上げ、溜息をひとつついた。

47 黎明

なにか暖かいものに包まれながら、ゆらりゆらりと揺れていた。とても眠い。

うとうとと微睡んでいると、誰かにそっと撫でられた。さらりと髪が揺れて、頬にかかる。

そのくすぐったさに、ゆっくりと目を開いた。

「よく、頑張ったな。」

慈愛に溢れる微笑を浮かべて私を見下ろす人。蒼い瞳と髪的女性。

だれ？

こんな綺麗な人……。

ぼーっとする意識のまま、女性を見上げていると、次第にまた眠くなる。

「今は、ゆっくりお休み。」

うん。眠いの。

ここはとても気持ちいい。

政宗の腕の中に居るみたいな感じがする。

再び沈む意識に逆らうことなく、ゆっくりと目を閉じた。

妾の元に戻ってきた末の娘。

本に、よう頑張った。

最後まで己を貫き通したその心。

強く、気高くあれと願った通りに。

妾の元で、傷ついた魂を癒す眠りに就いた娘。

安らぎに満ちた、穏やかな顔をしている。

だが……。

地上からは隻眼の竜の子が娘を想って、嘆き哀しむ慟哭が聞こえる。
途切れることのない、悲痛な願いが。

戻ってこいと。

逝くな……と。

もう一度、二人を逢わせてやりたいとも思うが、妾にはその様な力は無い。

我が元へ上がった魂を地上へ戻す術など……。
いかがしたものか……。

「蒼、どうした？」

思索していると、背後に主の気配が生まれ、即座に平伏した。

「ああ、その娘か。」

我が主の前に、言葉は不要。

妾の思考を読み取った主は、その手を伸ばすと娘の額に当てた。

琥珀の光に包まれた娘は、瞬時に赤ん坊の姿へと転じた。

「これでよい。下界の刻限にして半年、か？ ゆっくり眠らせてやれ。その後、下界へと還してやれば良からう。」

は？

何事が起こったのか？

「即座に還してやるには、娘の力が弱くなりすぎている。俺の力を分けてやった。それでも眠りが必要だ。魂が疲弊しすぎている。」

眠る娘の頭を撫で、主は笑った。

「この娘も、下界に還りたいと願っている。ここまで頑張ったんだ。願いの一つくらいは叶えてやっても良からう？」

安らかに眠る娘。

そうか。そなたは還りたいと願うのか。

「下界の奴にも教えてやれ。煩くて敵わん。」
苦笑すると、主はもう一度娘の頭を撫でた後、琥珀の光を残して消えた。

ここまで声を届けられる者など、そうはいない。
よほど強い意志を持たぬ限り、届かぬ声。
我が娘を、心から求める切なる願い。

「竜の子よ、その願いは聞き届けられた。」

ツキを抱いたまま、どのくらい時間が経ったのか。

夜明けが近いのか、うっすらと天幕の隙間から光が洩れていた。

腕の中のツキは、相変わらずで。

「ツキ……。」

頬を撫でると伝わる、ひやりとした感触にまた心が締め付けられる。

「娘は今、妾の元におる。」

久しぶりに聞く声に、はっと顔を上げると、蒼の光を纏った女がオレの前にいた。

蒼い目の女。

「蒼竜……。」

掠れた声が天幕に響いた。

蒼竜は音もなくオレに近寄ると、オレの頭を撫でた。
途端に楽になる呼吸。

こんなに簡単に癒せるのなら……。

絶る気持で蒼竜を見上げると、穏やかな目とぶつかつた。

「すまぬ。妾には途切れた命を繋ぐことはできぬのじゃ。」

だめ……なのか……。

ならば、何しにきやがつた？

「そう威嚇するでない。妾にはできぬが、我が主が娘に温情をかけた。」

どういう……ことだ？

蒼竜の一挙一動も見逃すまいと凝視すれば、苦笑をもらした。

「この世界の約半年、それまで娘は上界にて妾が預かる。」

そう言うと、蒼竜はその細い腕をツキへと差し出した。

オレの腕の中のツキがふわっと浮き上がって、蒼竜の腕に引き寄せられた。

「時が来れば、白銀と黒金をお主の元に遣わそう。」

「ツキは、帰って来るのか？」

震える声で尋ねれば、蒼竜ははつきりと頷いた。

「お主の願いと、娘の願いが、我が主に聞き届けられたのじゃ。」

ツキの願い……。

オレと同じ……？

帰ってくる。

ツキが、オレの元に。

ふつつと湧き上がる衝動を抑え、蒼竜の腕の中のツキを見た。

「分かった。半年後、だな。あまり待たせるなよ？」

「相変わらずな男よの。」

呆れ顔の蒼竜に、ニヤツと笑ってみせる。

「今のオレに、恐れるものなど一つもなくなったからな。」

「まあ、お主はそれで良いのだろう。」

笑みをこぼす蒼竜の腕の中のツキを見下ろす。

半年後までに、この混乱を押さえて、奥州でツキを迎える。

だから、安心して休め。

そして今度こそ、オレの所に帰って来い。

そつと触れた頬は、やはり冷たいが、もう心は痛まない。

額に、瞼に、鼻に、唇に。

触れるか触れないかの距離で撫でる。

「待つてるぜ？ツキ。」

やがて、朝日が天幕に差し込むと、蒼竜は立ち上がった。

「では。」

そう言つと、蒼竜は蒼い光を放つてツキと共に消えた。

一人残った天幕で、目を閉じてゆっくり息を吸って吐く。

半年後。

ちょうど、ツキと出会った季節か。

また一から始めるのも悪かねえな。

だがその前に。まずはこの戦の後始末からだな。

目を開いて、床に置いたままの刀を拾い上げて、顔を上げる。

よし。忙しくなるぜ。

天幕の入り口を覆う布を勢い良く捲り上げ、朝日に輝く外へと力強く踏み出した。

48 竜の華は蒼月に舞う

安土城で織田信長が討死して半年。

抑圧されていた各国は、自国の建て直しに忙しく、また同盟を結んでいた国々も新たな体制を構築するため水面下で慌しく動いていた。

我が奥州も政宗様を中心に、新たな天下取りの磐石の基礎を築くべく、自国内の安定を図っている。

あの日、ツキの死を受け一晩天幕に籠っていた政宗様は、朝日が昇ると同時に天幕を出て来られた。

「小十郎、さつさと処理を済ませて、奥州へ帰るぞ！」

そう宣言された政宗様の左目には、僅かな揺るぎもなく、確固たる意志が秘められていた。

何があつたのかと慌てふためく俺たちに、政宗様はいつもの自信に満ち溢れた表情で話された。

「ツキは一時、蒼き竜に預けられた。ツキが戻るまでに、この混乱を沈め、安定した奥州を作るぜ。」

覗いた天幕には、確かにツキの遺体は無かった。

政宗様がおっしゃる所によると、蒼竜が連れて行ったのだと。そんなことが起こり得るのだろうか。

正直半信半疑だったが、あのツキの事だ。ありなのかもしれねえ。

秋が過ぎて、雪深い冬が訪れて、雪解けを迎え、そしてツキと出逢った季節が訪れた。

一日、一日と過ぎていく中で、次第に政宗様の様子が落ち着かないものになっていく。

とうとう弥生も半ばになり、桜が今年も満開を迎えようとしていた。

「まったく、ツキの奴、また寝坊か？」

窓から舞い込んできた桜の花弁を一枚掴んで、政宗様はぼやいた。確かに、ツキの寝起きは人一倍悪かった。

姉上もいつも手を焼いていたからな。

夕暮れが迫る中、今年も花見をすべく準備が進められている庭を眺めながら、去年を思い出す。

「そういえば政宗様、昨年の花見の前にツキに手を出そうとなさいませんでしたか？」

「ぐっ！！？」

茶を飲もうとしていたのか、湯飲みを持ったまま咽る政宗様。

「げほっ！小十郎、突然何を言い出しやがるんだ！？」

「いえ、ふと思いついたものですから。慌てふためくツキに、政宗様は幼い子供に手を出す嗜好があるのかと尋ねられたことを。」

何をしでかしたんだ、この人は。

あの頃は、まだ8つくらいの年齢だったはず。

まさか、本当に手を出すことは無かったと信じちゃいるが。

「な、なんもしてねえよ。ただ……。」

「政宗様、この小十郎の目を見てお話ください。」

「ただ、寝起きの無防備さとか、羽織を必死に手を伸ばしてかけようとする仕草とか、いろいろ……。」

はあ。で、手を出しそうになったと？

呆れて溜息をつくと、政宗様は顔を赤くしてうるせえ！と叫んで出て行ってしまわれた。

まったく、困ったお人だ。

一年も前の事を言われて、迂闊にも取り乱した拳句、逃げ出しちゃったじゃねえか！

執務室を飛び出してドスドスと廊下を歩いていると、桜の花弁の向こうに銀と黒の姿を見つけ、目を見開いた。

「待たせたな。今宵、ようやく時が満ちる。」

黒の狼がにと口角を上げて俺を見てはつきりしゃべった。

あの日、ぼんやりと聞いた言葉は、やはり幻ではなかったか。いや、それより今は、黒の狼が言った言葉の内容だ。

「やっとか？あの寝坊助が。」

「蒼竜様と、月神様の二人掛りで起しているところだ。」

ふうと、ため息をつく銀の狼。

神二人掛りってどんな状況なんだよ。

「迎えに行つてやつてくれ。」

「Of course.」

「場所は言わなくても分かっているようだな？」

「今日ならば、思い当たるのは一箇所しかねえよ。」

やっど、やっど帰ってくる。

逸る気持を押さえもせず、厩に向かって走る。

これだけオレを待たせた女は、後にも先にもツキ一人だけだぜ。

「梵！？どうしたの！？」

すれ違った成実が目丸くしたが、構わず横をすり抜ける。

おっと。そういう訳にもいかねえか。

「成実！これからツキを迎えに行ってくる！！後のことは任せませ

！！」

「はあ！？ちょ、ちよつと！！」

慌てる声と、吠える狼の声を背に受けて、そのまま振り向きもせず走り出した。

馬を走らせて着いたのは、一年前にツキと訪れた小さな山だった。一年前と同じく、満開を迎えた桜が咲き誇り、一面を染め上げている。

太陽は西に沈んで、東の空に蒼い満月が昇り始めていた。

馬を降りて、辺りを見回したが、ツキの姿はどこにも無い。が、ここで間違いないと、確信がオレの中にある。

適当な場所に座って、懐にしまっておいた蒼い石を取り出した。触れれば僅かな温もりを感じるようになったのは、いつからだったか。

ぬくもりがツキの体温を伝えているようで、不安に駆られる夜はいつも握り締めていた。

奥州内の平定は成った。

蘆名も先日の戦でついに降伏した。

武田と上杉との三国同盟は織田の壊滅をもって破棄となったが、今の所戦を仕掛けてくる様子はどちらにも見られない。おそらく奴らも国内の充足を図っているのだろう。

これからだ。天下を取る準備はできた。

あとはツキだけだ。

早く戻って来い。

夢を見ていた。とても幸せな夢。

政宗の腕の中で微睡んで、ただただ眠る夢。

大好きな大きな手で撫でられて、優しく話しかけられて。いつまでもここに居たい。

「娘よ。そろそろ起きなさい。」

むう、だれよ……。まだ眠い……。

「起きろ、寝すぎだ。」

今度は男？だれ？眠いんだってば。

うーんと唸りつつ、寝返りを打つ。

「ええい！！起きると言うておろうが！！！」

がばあ！！っと布団を引っぺがされるような感覚がして、ごろんと転がされた。

「なにごと！？」

慌てて起き上がれば、蒼い髪と瞳の女の人と、金髪金色の目の派手な男の人が呆れたように私を見ていた。

え？え？

なに???

「放つて置けばぐーすかと。一体いつまで寝ているつもりじゃ。」

女の人が私の手をとって立たせる。辺りを見回せば、たくさんの草花が咲き乱れる草原のような場所にいた。

「え？私、確か……。」

あれ？何をしていたっけ？

首を傾げると、男の人が溜息をついた。

「お前は下界にて、同族と戦って命を落とした。」

言われた途端、最期に見た朔夜の姿と、小太郎を思い出した。

そうだ……私……。

「死を受け入れたお前は蒼の元に魂という形になって還ってきた。死んだんだっけ……。そうだ。確かに、死んだ。つて。」

「私、今どうなってるの？死んだらそれで終わりじゃないの？」

のところに来て、半年眠っていたってこと？
で、治癒が終わって、あとは私の願いを叶える？

ゆるゆると顔を上げる。

蒼竜様と金髪男は優しい表情で私を待っていた。

「帰りたい……です。政宗の所に。」
帰りたい。

あの場所に。あの人の元に。

「その願い、聞き届けた。」
満足そうに金髪男が頷いた。

蒼い光が私の体を包み込み、目の前の景色が消えていく。

「お前が寝すぎたせいで、蒼とあの男が約束した期限はとっくに過ぎていく。ちゃんと説明しておけよ？」

「は!？」

寝坊した!？って、それより、蒼竜様にお礼も言っていない!!
慌てる私に、蒼竜様は首を振って微笑んだ。

「お主の幸せだけが、妾の願いじゃ。礼など無用。」

それでも……!!

伸ばそうとした手は届かず、蒼い光の洪水に私は押し流されるしかなかった。

光が消えて、次に私の目に映ったのは、咲き誇る桜が一面に広がる場所で佇んでいる、もう二度と逢えないと思っていた人。

「まさ・・・むね・・・？」

「他に誰がいるってんだ。」

信じられずに呟いた言葉に、政宗はにっと笑った。

間抜けにも伸ばしたままだった右腕を獲られ、とすっと小さな音を立てて政宗の腕の中に引き寄せられた。

「やっと帰ってきたな。」

心から安堵したというような政宗の声と、懐かしい匂い。本物かどうか確かめたくて、恐る恐る背中に手を回した。

「本物・・・？」

「ああ。」

「私・・・戻ってきたの？」

「そうだ。」

戻ってこれた。この世界に。この人の隣に。じわりと涙が溢れそうになる。

体を離して、顔を覗き込まれる。
少しだけ精悍になった？
この半年、何をしてたの？

聞きたいことがたくさんあるけど。

けど……。

い、今はこの状況どうしたらいいですかね。
な、なんか、政宗めっちゃ色っぽいんですが。
身の危険を感じてしまっんですが。

どうしたらイイデスカ！？

逃げちゃダメかなあ！？

アワワしだした私を暫く見つめていた政宗は、盛大なため息を吐いた。

「まあ、いい。今は許してやる。」

今は!?

許してやるって何を!?

戦々恐々となる私に、政宗は珍しく優しい笑顔を浮かべた。

「城に戻ったら覚悟しろよ?」

「うわーんっ! 政宗の笑顔がこわいよおっ!」

「半年以上待たせたお前が悪い! たく、どんだけ寝坊すりゃ一人で起きられるようになったよ!」

「だって!! すごく寝心地が良かったんだよ!」

夢見が良かったなんて、恐ろしくて言えねえ!

何されるか!

「オレの所でも、最高の眠りを保証してやんぜ?」

その保証が怖いんだよ!!

思わず逃げ出そうとした私をひょいっと抱き上げ、大股で馬の所に向かった。

「帰るぞ? うちの連中が雁首揃えて待ってるからな!」

「うえ?」

小十郎、喜多さん、成実、伊達軍の皆。

皆、私を待っていてくれるの?

帰る……。
米沢の城に。

帰ろう。皆が待ってる私の家に。

これから先に、どんな事が起こるのかなんてわからないけど。
政宗と一緒になら。
みんなと一緒になら。

きっと私は私らしく生きていける。

もう独りじゃない。

「うん。帰ろう。一緒に。」
「ああ。一緒にな。」

ここが、私の世界。
政宗の隣が私の帰る場所。

48 竜の華は蒼月に舞う（後書き）

当作品をお読みいただきましてありがとうございます。皆様の支えがあつて、ここまで書ききることができました。

心より御礼申し上げます。

少しでも皆様の心の中に、残るものがあれば、これ以上喜ばしいことはございません。

本編はこれにて完結ですが、まだまだ書きたい話はたくさんありますので、これからもお付き合いいただけたら嬉しいです。

ご訪問いただきました、全ての方に。ありがとうございます。

ひなき つぐり

一 曇天下のはじまり（前書き）

お騒がせしました。第二部スタートです。

一 曇天下のはじまり

私がこの世界に戻ってきて、二ヶ月ほどが経って梅雨の季節がやってきた。

毎日毎日雨が曇りの鬱々とした日が続きます。

「あー・・・運動したい・・・」

政宗たちは毎日雨の中でも外で鍛錬をしているけど、私はダメだといわれて今日も部屋の中でストレッチや筋トレくらいしかできない。

梅雨に入るまでは、政宗たちと一緒に、木刀で素振りの練習とかさせてもらってただけだね。

障子を開けて庭を眺めると、今日もしとすと雨が降っている。今年の米は良く育ちそうだよ。ほんとに。

唯一の慰めが、庭のアジサイが綺麗に咲いてるってことですかね。青い花が咲くってことは、ここの土は酸性ってことなのですね。うむ。どうでも良い知識だけは結構覚えているものだなあ。

こんな日にできることといえば、力をより安定して使えるようにするための練習くらいだ。着物なので胡坐はかけないので、正座をして背筋を伸ばして目を閉じる。

心の中で力を手のひらに集めるイメージを描きながら、掌を上にして水を掬うような形になる。

雨の音と、蛙の鳴く声、遠くから聞こえる人の声、風の音。

それらが徐々に遠のいて、無音になっていく。

自分の体をコントロールするための力ではなく、人を癒して守る力を磨きたい。

そう思っつて昔を思い出しながら始めてみたんだけど……。

バチイイイッ！

「ふんぎゃあ！！」

なんで癒しをイメージしたはずなのに、放電すんのよ！！

「ううう……いたひ……。」

火傷までは行かないけど、静電気の強力版みたいな痛みがなんとも言えずたまりません。

なんか、明らかに今までとは違う感じなんだよね。

一回死んで体質が変わったのか？

「やっぱり今日もダメなのか……。」
がつくり。

痺れる手を振りながら溜息を吐いて立ち上がる。

……まさか、攻撃系も大惨事とかってないよね？

必要ないから、あの日以来使っつてなかつたけど……。

やっつてみるか。

ばれなきや訓練しても大丈夫！

護身用にと貰つた懐剣を抜いて、逆手に持つ。

「Muscular strength reinforcement
(筋力強化)」

ちよつと力を込めただけで、懐剣は青い光を纏って放電する。
放電はデフォルトになったようだけど、これは別に痛くもなんとも
無い。

多分当たった人は、泣くことになると思うけど。
って、なんで私の体に力が回らずに、刀にいく？

前は自分の体が軽くなって動けたのに、今は特に身軽さは感じない。

「てい！」

試しにかかるーく懐剣を空に向けて振ると、政宗の技の様に青い光
が天に向けて一直線に走った。

バアアアアン！！

光が雲を吹き飛ばして、丸く切り取られたような青空が見えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・わお。」

何がどうなったら、こうなる？

私の体、一体どうしちゃったのさ・・・。

ドタバタと複数の足音が聞こえて、襖が勢い良く開け放たれた。

「どうした!？」

政宗と小十郎が飛び込んできて、素早く室内を見回す。

やばい。なんでもないよ?とは言えないこの状況。

空は穴が開いてるし、私の手には懐剣が握られてるし。

頭の中で、おーしーおーきーだーべえーと、某お方の声がエコー付きで響き渡る。

二人は私の手の懐剣を、次に外を見て、それから最後に私を見た。

「ツキ、何をした?」

小十郎が寒気がするほど優しい笑みを浮かべて私に尋ねられた。

怖い!!

小十郎の笑顔怖い!!

「まさか、ここで力を振るってたなんてこたあねえよな?」

政宗の笑顔は相変わらず凶悪だね。

うん。怖いから近寄るな!

「え、えへ……。」

じりじりと後ろに下がりながら、笑って誤魔化そうとしたら、二人の目がカツと見開かれた。

「「ツキ!」」

それから、小一時間ほど二人掛りで説教されました。

その夜、ようやく雨が止んで、雲の隙間から朧月が顔を出した。縁側でそれを眺めていると、政宗が部屋に入ってきた。

「ようやく止んだな。」

「うん。久しぶりに月が出たよ。」

私の横に座った政宗が、同じように月を見上げる。

あの説教の後、なんかあったのか？

様子がいつもと違う政宗をちらりと横目で盗み見る。

なんか、ぴりぴりしているというか、冴え冴えとしているというか……。

「織田が消えて、しばらくどの国も大人しくしていたが、まもなくまた戦の世が始まる。」

唐突に話し出した政宗の顔を見上げた。

政宗は真面目な顔で私を見ていた。

「武田も上杉もまた戦の準備をしているとの報告も上がった。奴らが動き次第、オレもまた動く。」

そうか……。また、戦が始まるのか……。

川中島で、安土城で、たくさん兵士たちが倒れていく姿を見た。また、あの光景が繰り返されるのね……。

目を閉じると、昨日のことのように思い出される光景。

血と埃と、硝煙の匂いが充満する戦場。

その戦場へ、政宗は再び行こうとしている。
.....私を置いて。

いつだったか、戦に出る前日もこんな風に私の所に来たね。
あの時は、まだ私の覚悟が決まってなかったから、置いていかれる
ことを選んだけど.....。

目を開けて、政宗をもう一度見上げる。

「政宗が欲しいものは何？天下？」
尋ねれば、政宗はフツと笑った。

「天下は最終目的の為の通過点だ。オレが欲しいのは、民が戦などに巻き込まれずに住む時代。オレの目指すものは、この戦国の世を終わらせることだ。その為になれば、オレはいくらでも戦場で人を斬る。いくらでも血を流す。その覚悟だ。」

強い意志を秘めた視線とぶつかった。
その覚悟を政宗が背負うのなら、私の覚悟も決まった。

「私もね、決めたことがあるの。」
にっこりと笑って膝立ちになり、政宗の右目の眼帯にそつと触れた。
僅かに緊張する政宗に、気がついてない振りをして。

「あの日決めたの。帰れたら、政宗と同じ景色を見るって。同じ夢を追うって。その為に強くなるって。」
だから。私を置いて行こうなんて許さない。
また私を一人にするなんて、許さない。

目を見開いて驚く政宗。

「大丈夫、政宗を置いてもう死んだりなんかしないから。」

「ツキ……。」

「だから、置いていかないで……。」

お願いだから。

政宗はぎゅっと何かを堪えるように口元を結んだ後、両手を伸ばして私を抱きしめた。

「置いて行こうものならば、伊達辞めて放浪の旅に出てやる。」

「それは困る。」

くつくくと笑った政宗は、私の頭を撫でた。

大きな手に頭を撫でられるのは、嫌いじゃない。

「OK. いいぜ。連れて行ってやるただし、それには条件がある。」

「な、なによ、条件ってのは。」

「力を使うことなく、オレに勝つことだ。」

無茶振りキター!!!

力を使わずに政宗に勝つのか!?

「当然、オレも刀一本で力もつかわねえ。どうだ?」

そ、それならば、頑張ればいける……か?

いや、間近で政宗の戦いを見たことがあまり無いからな……。

小十郎とやりあっている時の様子を見れば、まあ力を使わないならなんとか……なるか?

それに、今のままついて行っても、体力的に足手まといになりそうだしな。

一年以上訓練をしなかったブランクを、埋める必要もあるな。

「お、男に二言は無いわね？」

「ああ。ねえよ。」

「よし。ならばその条件受けてたつ！」

鋼糸も銃もあの時のドサクサで無くなってしまった今、力なしで政宗に勝つためには、ちよつとやそつとじゃ無理そうだな……。よし。明日から猛特訓じゃあ！！

まずは武器を選ばないとなあと考えていると、頭を撫でていた手が、背中に下りてきた。
んん？

その手がなにやら怪しい動きを始めて、思わず政宗を見上げた。
なんともいえない、艶やかな表情でございますね。

「何をしてるのかな？」

「いや、一緒に良い所にいこうかと。」

「一人で逝け！！」

油断も隙もありやしない！！

二 筋トレ（前書き）

腹筋でも背筋でも、鍛えたい筋肉の場所によってもやり方はたくさんあるそうです。あくまで一例ということので、よろしくお願ひします。

二 筋トレ

筋トレと剣の稽古を始めて、数日後。

「き・・・きんにくつう・・・。」
全身を駆け巡る痛みに悶絶しております。

やっぱり人間楽したらその分ダメになる生き物なのですね。
ここまで落ちてるとは思わなかったよ。

ギシギシと軋む体を何とか動かして、ふらふらしながらも、政宗の
執務室に根性でたどり着く。
知らない人が見たら、ちょっとしたホラーかも・・・。

「AH」。大丈夫か？」

「No problem。この試練を乗り越えねば、筋肉は身に着
かないのよ。」

ぜえぜえしながら、いつもの定位置に何とか座ると、ギン！と政宗
を睨んだ。

「決着をつけるまで、政宗と私は敵同士なのです！心遣いは無用！」

「お・・・おい・・・。」

「その意気だツキ。」

戸惑う政宗と、うむと満足気に頷く小十郎。

今私は打倒政宗を掲げて、小十郎に指導を仰いでいる所なのです！
政宗を負かすためにとお願いしたのに、意外にも小十郎はあっさり
頷いた。

いつもなら、無礼者！！とか怒られてもおかしくないのに。

ま、教えてくれるのはありがたいので、そのまま付き合ってもらってる。

筋トレの後に素振りをしているんだけど、刀は重い！

鞘なしでも1？以上あるって絶対。

あれを六本構える某筆頭さんは、一体どんな体の造りをしてらっしゃるんですかね。まったく。

ぶるぶる震える手を何とかなだめて、お仕事を頑張ること数時間。「よし、今日はここまでだな。」

政宗が終了を宣言して、小十郎がご苦労様でしたと言った所で、本日の執務は終了。

最近真面目にやってるようで、前ほど時間がかからなくなった。

「ちよつとだけ休ませてえ。」

ずりずりと文机から這いずり出て、広めに開いている所に倒れる。背筋も腹筋も、首も肩もそれから足も腕も筋肉痛なので、寝ているときしか楽になれないのですよ。

「ちよつとやりすぎじゃねえのか？」

机に肘を付いて私を見る政宗は、本当に心配そうだ。仕方が無い。休憩中は休戦してやるか。

「この世界に来る前に毎日こなしてたトレーニング・・・鍛錬をして、あとは刀を素振りしてるだけなんだけどね。もうね、どれだけ自分が退化したかが良く分かりましたよ。」

「あれをか？」

近くでトレーニングを見ていた小十郎が、びっくりした顔で私を見た。

いや、本当は、前やってた奴の半分しかこなせてないのですがね。。。

だって、ここにジムが無いんだもん。

ダンベルも無いしさ。

「何をしてるんだ？」

興味津々の政宗が身を乗り出した。

「別に普通だよ。腹筋、背筋トレーニングと、腕立て伏せとスクワット、それから。。。」

「待て待て、どんなもんなのか想像がつかねえよ。」
仕方が無いな。。。

よいしょと起き上がると、政宗にまず仰向けで寝るように指示。
膝を立てた状態で、腕はお腹の上ね。

「背中丸めずに、ゆっくり起き上がって。そう、ゆっくり。はい Stop!」

「お、おお。。。。こ、これは。。。」
半分だけ起き上がった状態で10秒キープ。それからまたゆっくりもとに戻る。

顔を赤くした政宗がふーっと息を吐いた。

「これを10回を一括りにして、100回ね。」

「ひゃ。。。。!?!」

「あと、次が背筋。うつ伏せになって。」

驚いている政宗をうつ伏せに寝かせて、小十郎にいつものように足

を押さえるように指示する。

「おい。小十郎は毎日、ツキにこれをやってやってるのか？」

「え！？」

うつ伏せ状態のまま、太股を両手でがっちり捕まれて、上に乗られた政宗は殺気を放って小十郎を見上げた。

まあ、確かにこの時代の人から見れば、女の太股を押さえるなんてことはありえないでしょうけど。

「はいはい。背筋を鍛えるためなので、邪な考えを浮かばせない！」

やりにくそうな小十郎が押さえる中、政宗に手を頭の後ろに当てて、そのままゆっくり上半身を起すように言っていると、またもや顔を赤くさせて持ち上げた。

「そうそう。・・・ところで、政宗どこまで上げられる？」

ちよつとした好奇心で聞いてみると、政宗は無言のままぐいっと体を起した。

「すげ・・・。ほぼ直角と来ましたか。」

いい背筋してますね。

と、まあ初心者でも問題なさそうな所を教えたけど、二人とも楽しそうだね。

基本的に引き締まってるんだから、もういいじゃん。

慣れないから戸惑っているだけで、政宗と小十郎なら余裕でこなすよ、きつと。

小十郎と腹を鍛える運動をしていると、ツキが大人しくなったことに気が付いた。

「寝ちまつたか。」

こちらを向いたまま、目を閉じて寝ているツキ。

その寝顔を眺めながら、書簡を片付け始めている小十郎に尋ねた。

「なあ、小十郎。なぜ引き受けた？」

ツキが小十郎の下に行くことは予想できたが、小十郎がそれを受けるとかどうかは半々だった。

受けたということは、それなりの考えがあつたのだろう。

「……ツキは確かに強い。ですが、刀との戦い方を知らない。戦に出ようが出来いが、良い機会だと思つたのです。政宗様とて、そうお思いになつたからこそその条件なのでしょう？」

「まあな。本音を言えば、オレの為の安心材料を得るため、だがな。」

どうあつてもツキは付いてくるだろう。こいつの意思の強さは、身に染みて分かっている。

ならば、戦場に来て簡単にはやられないという、保証が欲しかった。

もう、二度と失わないために。

「こいつが居た世界には、刀で戦う奴は居なかつたらしい。」

だからこそ、力を使うことなく、オレに勝つまでの技術を身につけさせようとしたんだ。

まあ、すぐできるとは思ってねえけどな。

うう・・・と顔をしかめて寝返りを打つツキに、オレも小十郎も苦笑が洩れる。

「今日の午後は休ませるとしましょう。これでは立って構えることすら難しい。」

「だな。」

努力をすることは悪かねえが、やり過ぎは良くねえからな。

楽しそうな二人を眺めているうちに、いつの間にか眠ってしまったようだ。

ぼんやりと目を開けると、刀の手入れをしている政宗が視界に映った。

「起きたか？だいぶ疲れてるみてえだな。」

刀を置くと、苦笑しながらこつちに来る。

それをぼーっと見ながら、体が重いなあ・・・と感じる。

疲れているのか、体調が思わしくないのか・・・。

「ツキ？まだ寝ぼけてるのか？」

「んー……。だるい……。」

呟くと、政宗は私の額に手を当てて、首を捻る。

「熱は無いようだが……。ちよつと無理すぎたんじゃねえのか？」

だつて……。

無理しなきゃ、置いてかれちゃうもん……。

政宗の着物の袂をぎゅつと握り締める。

「寝ぼけてるな？」

苦笑した政宗がよしよしと頭を撫でるのが気持ちよくて、目をとじる。

またうつらうつらしてきたとき、ふわりと体が浮いた。

ぎよつとして目を開けると、視界が高くなっていて、政宗の顔がすぐ横にあった。

「な……。な……。！！」

なにごとおおお！？

お、お姫様抱っこですよ！！

うおおお！！恥ずかしい！！

「暴れるな。部屋まで連れて行ってやる。今日はもう何もせずに寝てる。」

「でも……。午後は小十郎が……。！」

「その小十郎がそう言ったんだから、大人しく聞いておけ。You see?」

ちよつと恐い顔で言われてしまつては、頷くしかない。

仕方ない。今日はゆっくり休んで明日また頑張るかなあ。

三 夢の国で修行です

結局、お姫様抱っこされたまま、女中さんや侍従さんたちに生暖かい目で見守られながら、部屋に連行されました。

政宗は気にすんなどか言っただけ、気になるわ！
恥ずかしいんだよ！！

うおおお！穴があったら冬眠したい！

政宗はまだ用事があるらしくて、直ぐにいなくなり、今は部屋には私1人。

障子を開け放ち、脇息に寄りかかりながら霧雨の降る外を眺めていると、庭に植えてある背の低い木の葉が、ガサツと揺れた。
次いで、ひよろつとはみ出る黒いふさつとしたもの。

「・・・・・・・・」

ねえ、あれって隠れてるつもりなのかな？

頭は確かに隠れてるますが、後ろ足と尻尾が丸出しですよー？

白銀がよく、黒金を見てため息を吐いたけど、黒金っておばか属性だよね。。。

まあ、そこが可愛いんだけど。

「そんなとこに隠れてないで、こっちにおいでよ。」

笑いを堪えながら言うと、尻尾がびくっ！！と跳ね上がったあと、しおしおと垂れ下がった。

「見つかったか。」

「次からは尻尾を隠すことをオススメするよ。」
「う。」

バツが悪そうに縁側に座った黒金の頭を、軋む腕を持ち上げて撫でる。

黒金は上目遣いで私を見ると、心配そうに言った。

「大分辛そうだが、大丈夫か？」

「まあ、なんとか。それはともかく、ちょっと黒金に聞きたい事があつたのよ。」

会えないかなあと思ってたところだったのよね。

黒金の様子からも、その事で現れたんじゃないかなと思う。

案の定、黒金は少し黙った後、力の事だろ？と言った。

私は頷くと、手を握ったり開いたりしながら説明した。

「力を使おうとすると、反発するみたいに弾けちゃうの。意図するものと違う効果が出ると思うか・・・。」

「ああ、先日空に向かって力を放つただろう？それが上界にまで届いた。」

「げ。まじで？」

どうしよう！蒼竜様に攻撃をしちゃったってこと！？

「ああ。正しくは、力の波が届いたって感じだな。」

青ざめてオロオロする私を見て、黒金は大丈夫だから落ち着けと宥めた。

蒼竜様に攻撃を加えたって訳じゃないのね！？

よかったあああ！

はあーつと安堵のため息を吐いていると、黒金はそれでわかったんだが、と続けた。

「ツキの中に、蒼竜様とは別の力が存在していて、それが原因でうまく力をコントロールできないらしい。」

「別の力？なにそれ？」

「ツキを生き返らせるために、月神様が力を分けてくださったんだ。それが無かったら、お前は今こうしてここにはいない。」

ふーむ。その月神様のおかげで私は今生きていて、その力が原因でコントロールができないわけね。
つて、まてよ？

「うる覚えなただけどき、もしかして、あの金髪に金の目の派手なのが月神様つてやつ？」

「罰当たりが！！」

がう！と吼えられて、首をすくめる。
そんなに怒らなくてもいいじゃんか。

確かに、神様に対する言葉じゃなかったとは思うけど。

つてか、すでに直接会話したときに、思いつきり素で話してたよ。

「以後気をつけます。で、その月神様の力が私の中に在るから、力がうまく使えないってこと？」

「・・・まあ、簡単に言えばそう言うことだ。だが、話はそう簡単には終わらない。月神様のお力をお前から抜けば、再びお前は死を迎える。またそのままにしておけば、膨大すぎる力にお前自身が負けて、やはり死ぬ。」

「どっちを選んでも、死亡なのかよ！！」
思わず叫んでしまって、慌てて口を手でふさぐ。

あぶないあぶない。うっかり政宗たちに聞かれようものならば、大騒ぎ確定だ。

今また戦が始まるうってこの時に、私のことで煩わせたりはしたくない。

「だから、俺が来たんだろう。安心しろ。お前が月神様の御力を自分のものとすればいいんだ。」
えへんと胸を張る黒金。

おお！黒金の後ろに後光が射して見えるよ！！

「具体的に、どうすれば!？」

「ずずい!と詰め寄ると、黒金はふふん!と笑った。

「努力と根性だ!!」

キラリ!と犬歯が光った。

・・・このバカ狼めが・・・!

「そのどこが具体的なのかな？」

黒金のこめかみをグーでゴリゴリしてやれば、ギャインギャイン!と悲鳴が響いた。

「ま、待て!最後まで話しを聞け!」

涙目で頭を抱えて伏せをする黒金に、ちよつとだけ心がすつとする。ここ最近、ストレスたまることたくさんあったからねえ。

「黒金くん?私今結構イラついてるのよ?絞められなくなかったら、さつさと話そうね?」

につこり笑って言えば、黒金はコクコクコクコクと、縦揺れ痙攣かっつてくらいの速さで頷いた。

「特訓をするから、今夜月神様が迎えに来るそうだ。」

「はい?お迎え?」

「ああ。ツキは寝てればいい。夢を介して上界に連れて行って、そこで力を制御する為の訓練をするそうだ。」

それならば、政宗たちにもバレずに行けそうだ。

なんか幽体離脱っぽいイメージだけど。

「なるほど。んじゃ、今日は早めに寝るよ。」
「ああ。そうしてくれ。」

しかし……。

昼間は小十郎と鍛錬。

夜は月神様と特訓。

どちらも必要なこととはいえ、体がもつのか、ちょっと心配。

その夜、喜多さんに早めにお休みなさいをして、布団に入った。昼間のことがあったので、まったく怪しまれることは無かった。横になると同時に眠気が襲ってきて、直ぐに夢の中へ。

気がつくと草原のような場所に立っていた。

「来たか。」

後ろから声がして、振り返ればあの金髪男が立っていた。

「俺には一応月神という名があるんで、金髪男は勘弁してくれ。」

わお。頭の中を読んじやうのね。

こりゃ、取り繕っても無駄だよ。黒金。

「失礼しました。二ヶ月程前は、命を助けて頂きまして、ありがとうございます。そして、今回も、私の為にお時間を割いて頂きましたこと、感謝の言葉もございません。」

これは本音だもん。

言葉遣いは取り繕ってますがね！

膝について、最上礼で頭を下げると、月神様はふつと笑った。

「感謝するなら、蒼と、俺の所まで声を届けたあの小僧にするんだな。ここまで声を届ける奴なんざ、ここ数百年いなかったんだ。ちよっとくらい動いてやらなきゃ神の名が廃るだろ？」

「そう、ですか。」

思わず顔が熱くなつてうつむいた。

政宗がそこまで思ってくれていること、嬉しいと、思う。

でも、同時に不安もある。

政宗が望むものは、私じゃなくて、住む人が平和に暮らせる国を作ること。

それを邪魔しているんじゃないかと。

「それならば、お前が小僧に見合うまでの女になりゃ良いんじゃないかねの？」

にやにやしなから私を見てる月神様。

しまった。思考を読まれてるんだった。

プライバシーがなさすぎるー！

「お前はうだうだ考えすぎるんだよ。まだあの小僧の方がストレートだな。」

「努力します。でも、その前に生きるか死ぬかの問題があると思うので、そちらから先に解決したいのですが？」
これも本音ですよ？
話を逸らしたいだけじゃないんだからね！

「くくつ。そんなに身構えるな。たいしたことじゃねえ。こいつを捕まえることが、まずの課題だ。」
そう言つと、月神様の目の前に可愛らしいクマのぬいぐるみが現れた。

毛並みは金に近い薄茶だ。

「力を使っても構わない。が、壊すな。」

ういつす！！やつたるぜ！

クマはとことと短い足を動かして、やる気になっている私の前まできると、その可愛らしい顔でニヤリと笑った。

「せいぜい頑張ることだな。」

.....?

空耳か？可愛らしいクマから、なんか政宗みたいなセリフが聞こえたような気がしたけど。

「空耳じゃねえよ。もうボケたのか？」
へっとバカにした様な笑いまで浮かべやがった。

このクソクマがあー！！

ふつつつと湧き上がる怒りのまま、月神様の前だということも忘れて、叫んだ。

「地獄を見せたらあ！待てやゴルアアア！！」

「待つわけねえだろうが！」

走り出したクマは、ちらりと振り返ると、あかんべをしやがった。

ふふ、ふふふ、良い根性してんじやないのさ。

「Unlimited capacity to release
！」

全力で捕まえてやる！と、力を開放した途端。

金色の光が私の体を包んだと思ったのと同時に、音も熱もない爆発が起こった。

な！？なに！？

びっくりして硬直していると、目の前にGAME OVERの文字が現れる。

は？GAME OVER？

「壊すな、と言ったろ？」

月神様が現れて、呆れた顔をした。

「今の、何ですか？」

衝撃波みたいなのが、ぶわっと広がったように見えたけど……。

戸惑っている私に、月神様は溜息を吐いて言った。

「下界であれをやらなくて良かったな。やってたら、半径数キロ圏内は壊滅してたぞ。」

はい？なんだって？

「力が暴走したんだよ。覚えておけ。俺の力は劇薬だ。使い方間違えれば、地球一つくらいは簡単に吹き飛ぶ。」

まじで……？

私自身が原爆みたいなものってこと？

「そう思って構わない。だが、怯える必要は無い。蒼の力だって、

似たようなもんだからな。」

「え？蒼竜様のは癒しの力なのでは？」

うちの一族にはそう伝わっておりましたが？

首を傾げれば、月神様は鼻で笑った。

「蒼がそういう風に伝承させたただけだ。そうでなければ、お前の力についてはどう説明するんだよ。」

そういわれればそうか。

「月が持つ力は、癒し、幻惑、狂気、引力、変化、など様々だ。その力を俺が制御している。蒼は俺の眷属だ。俺よりはかなり弱くなるが、同じ力を持っている。そしてその血を引くお前もな。得意不得意、強弱はあるだろうがお前も、お前の家族たちもその力を使うことはできたはずなんだ。ただ、癒しの力しか使えないと思いついでいたから、そちらに特化したんだだろうがな。」

へえええ。そうだったんだ。目から鱗だ。

つまり、元をたどれば、私の力と蒼竜様の力と、月神様の力は繋がっているという事なのね。

ってことは、月神様と蒼竜様の力が同質で、だけど月神様の力のほうが強いから、暴走するってこと？

んーでも、なんか違う気がするな・・・。

同質の力なんだけど、一つになれないから、コントロールがきかない？

考えながら、ちらっと月神様を見れば、満足そうに私を見ていた。そうか。そういうことね。

ならば、制御ってよりは、一つに練り合わせるってことが必要なのね。

「言うは易し、行ふは・・・だ。まずは自分の中の蒼の力と俺の力を見極める。それができなければ融合はできない。それから、コントロールができるようになるまで、絶対に地上で力は使わない。その理由は分かったな？」

「はい。」

さっきのクマが一瞬にして消えたような力が、地上で暴走したらと思うと、ぞっとする。

と、いうか、コントロールできるようになるまで、地上に帰らないほうが良いんじゃないのか？

「俺はそれでも良いが、小僧どもが大騒ぎをするんじゃないのか？」

「黒金か白銀を、政宗の所に遣いにやってもらえませんか？」

「ああ、わかった。手配しよう。この空間は、お前がいくら力を暴走させても問題は無い。納得するまでここで訓練しろ。」

「はい。ありがとうございます。」

頭を下げると、月神様は用があるときは呼べよと言い残して消えた。

四 残響

ツキを強引に休ませた翌朝。

小十郎が起こしに来るまでと、布団の中でだらだらと過ごしていると、廊下を慌しく走ってこちらに近寄る音が聞こえて枕元の刀を掴んだ。

侵入者でも現れたか？

起き上がって足音の方向を向いたと同時に、血相を変えた喜多が部屋に飛び込んできた。

「殿！！ツキが・・・！！！」

ツキがどうした！？

すぐに喜多を押しつけ、単衣に羽織を掛けた状態で部屋を飛び出した。

「何があった？」

ツキの部屋に向かいながら、後ろを付いてくる喜多に尋ねる。

「起しても起きないのです。反応も無くて・・・。」

ただ寝ていて起きないくらいなら、いままでにくらでもあったが、喜多がこんなに取り乱すことは無い。

確かに昨日筋肉痛と言つには、少し様子が変なようにも感じた。

まさか・・・。

脳裏を過ぎる思い出したくも無い記憶を振り捨て、ツキの部屋に入った。

横たわるツキの枕元に座り込んで、様子を見る。

一見ただけでは、ただ寝ているようにしか見えない。

頬に触れれば、掌に伝わる温もりに、知らずほっと息を吐いた。

「おい、ツキ？」

ペチペチと音を立てて頬を叩いても、反応は無い。

「昨夜就寝するまでは、普通だったのです。なのに今朝起しにきたらこの状態で……。」

熱があるわけでもなさそうだし、ただ深く眠っているだけの様だが……。

揺さぶっても、結構強く叩いても、体を起しても、目覚める様子は無い。

「その様なことをしても無駄だ。」

典医を呼ぶか迷っていると、庭から声がした。

「誰だ!？」

声のした方に視線を走らせれば、いつの間にか開いていた障子の向こうに、黒い毛並みの狼が居た。

「……黒金……といったか？」

確か、ツキが拾ったという狼で、蒼竜の使いとも言っていたな。

黒金を知らない喜多は、喋る狼に驚いて目を見開いていたが、才レが刀を置くのを見ると、何も言わずに部屋の隅に控えた。

ツキを布団に横たえようと、改めて黒金を見る。

「簡潔に話せ。なぜツキは目覚めない？」

「お前も短気だな？」

何故か後退りしながら、グリグリはやめてくれと意味不明なことを言う黒金に、イラツとなる。

「さつさと話せと言ってるだろうが。」

「わかってるって! ツキの体は今眠ってる状態で、夢を介して上界で力を制御する訓練をしている。」

「力を? そんな必要が……ああ。」

必要があるのか？と聞こうとして、先日ツキが力を使って、騒ぎになったことを思い出した。

本人も何かがおかしいと、しきりに首を傾げていたな。

「なぜ今更そんな事になった？」

「ツキが一度死んだあの時、生き返らせるには、弱くなりすぎた力を補うものが需要で、そこに月神様の御力が与えられた。月神様の力は、そもそも人の身には過ぎたもの。蒼竜様の血に繋がるツキだからなんとかあったが、受け入れた力を制御しきれずに暴走しやすくなっているんだ。」

「その力を抜きゃあ良いんじゃないかねえのか？」

それで解決だろ？と問えば、そうは簡単にいかないんだと、黒金は溜息をついた。

「ツキの中の蒼竜様の力と、与えられた月神様の力が、混ざり合っ
てしまっていて、今更分ける事ができなくなっているらしい。後は、
ツキがその二つの力を自分のものにするしか、方法はないんだ。」
なんかえらい事になってたんだな……。
ガリガリと頭を掻きつつ、眠ったままのツキを見下ろす。

一度は助けた命を、しかも眷属とも言えるツキに、神がそう悪い
ことをするとは思えねえ。

オレにできることといえば、せいぜいこうして眠っているツキを見
守ることくらいか。

情けねえ話しだがな……。

「いつ、戻ってこれる？」

「こればかりはツキ次第だな。」

そうか……。

間もなく川中島で武田と上杉の戦が始まる。

明後日には、伊達も出陣する手筈になっている。

間に合うか？

間に合わなければ、置いていくしかない。

そこにオレの私情を挟むことはできねえ。

「わかった。」

ツキの頭をひと撫でし、立ち上がる。

黒金も立ち上がり、庭に降りた。

「あ、そうだ。ツキが眠り続けている限りは、月神様の加護が働いてるから、危険はない。そのまま寝かせとけて事だ。」

OKと、手を上げて応えようと、黒金はじゃあなと言って、走り去った。

「ふえーつくしゅん!!!っあー。」

一人残された草原で、我ながらおっさんくさいくしゃみをしてしま

った。

政宗辺りが噂してんのか？

大騒ぎをしてなきゃ良いけどなあ。

さて、訓練の進捗状況ですが……。

色々試している中で、今までと違う力が私の中にある事はわかった。

元々の力よりも、明らかにもう一つの力の方が強いんだよね。

その上、激しい感じがする。

静電気のような反発をしているのは、明らかにこっちの方だ。

筋力をあげようとした時、今までならば体の中で力が補助してくれてたイメージなのに、表面を伝って外に放出してしまう感じ。

月神様は同質の力だと言ったけど、ぜんぜん違うじゃんよー。

できない！こんなん一つにまとまるかってーの！！

もう疲れた！！

痲癢を起こして大の字にひっくり返る。

どれだけここにいても、夜にはならず太陽の無い青空が天井に広がっていた。

このままじゃ帰れない。

でも、早く帰らなきゃ、政宗達が戦に行ってしまう。

やらなきゃならないのに、できない焦り。

昔は毎日感じていたな……。

満月みつぎの名を与えられた時から、時期宗主になる事を期待されていたのに、力を暴走させてばかりいた子供の頃。

癒しの力を使う度に、暴走させて余計な怪我を相手にも自分にも負わせていた。

今の私は、あの頃と同じだ。

《自分の中で血液の様に力を全身に張り巡らせる様なイメージを浮かべてごらん?》

ふと、朔夜に何度も言われた言葉を思い出した。

あの頃と同じならば、もしかしたら……。

仰向けに寝転んだまま、血の廻り、心臓の鼓動に意識を向ける。とくとくとくと、規則正しいリズムで刻まれる鼓動と、全身を流れる血流。

しばらく目を閉じていると、自分のものとは違う流れを感じる。慣れ親しんだ蒼竜様の力だ。

そのまましていると、体の奥底に固まって動かないものがある事に気がついた。

《滞っている所があるだろ? その部分を少しずつ崩して流していくイメージを浮かべてごらん?》

優しく撫でる様に。緩やかに解けるように。

なかなかうまくいかないけれど、まったくできないわけじゃない。

《そう。上手だ。流れた力はまた戻ってくる。流れを止めずに、いつも自分の中を廻らせていけば、いつかみいの思い通りに力を使うことができるよ。》

流れ始めた月神様の力が、蒼竜様の力と一緒に私の中を廻り始める。

あれほど反発しあっていた力が、融合して一つになった。

朔夜の教えに助けられるなんて・・・ね。

自嘲の笑みを浮かべながら、起き上がる。

「Muscular strength reinforcement」（筋力強化）」

慣れ親しんだ感覚が全身を包んだ。

よし。いけそうだ。

まずは試しにまっすぐ前に走ってみた。

「おおおおおおお・・・！！！」

気持としては普通に走ってみただけだったのに、高速道路を走る車くらいのスピードが出ました。

こ、これ、何かに当たったら、私死ぬんじゃないかな・・・。

でも、力を使うことはできた。

あとは、その力加減だけど、さほど難しいことじゃない。

暴走しやすい力を、常に抑えてきたのだから、これからもその感覚で力を使えばいいんだ。

「月神様」。

何も無い虚空に向かって声をかけると、月神様が現れた。

「どうだ？」

「何とかいけそうです。」

頷いてみせると、月神様はふむと頷いて、またあの腹立つクマを創りあげた。

「Muscular strength reinforcement Level 10.（筋力強化。レベル10）」

まずは一番押さえたレベルで。

体の感覚が変わるのを感じて、クマに目を向けた。

「ちったあ楽しませてもらえそうだな？」

「余裕かましていられるのも今だけよ。」

さっさと捉まえて、帰るわよ。

走りだすクマを追って私もダッシュした。

つて、速っ！！

クマは一瞬で遙か遠くまで走って行ってしまっていて、啞然となる。あの短い足で、どうしたらあんなに速く走れるの！？

「Level 50！」

こちらも速度を上げて追いかける。

暴走させることは無いけど、障害物があつたら避けられる自信が無いな……。

帰ったら、山で修行しなきゃなあ。

あつという間に追いついて、ちょこまかと走るクマの頭に手を伸ばした。

捕まえ……

「おらよー！」

あとちょっとで手が届くってところで、身を翻すクマ。

ムッキイイイ！！

クマのくせに生意気な！！

しばらく続けているうちに、私のほうが息切れしてきた。

向こうは余裕綽々って感じで腹が立つ！

こうなったら！！

「Expand the shield・Level 30！」

クマと私を囲むシールドを作り出し、これ以上逃げられないようにしてやった。

「ふっふっふっふ……最初からこうしてりゃ良かった。」

「く……！卑怯な……！」

「ふははは！なんとでも言え！私は早く帰りたいのよ！」

じりじりとにじり寄りながら、気分はすっかり悪役でクマの頭を鷲掴みにしてやった。

捕ったどおおおおおお！！

「合格だ。良くやった。」

「ハッポー！」と捕まえた獲物を振り回して、喜びのダンスを踊っている、腕を組んだ月神様が現れた。

「はい。月神様のおかげで、制御できるようになりました。ありがとうございました。」

「気にするな。あとは、自分で何とかしろよ?」

「はい。」

神妙な顔で頷くと、月神様はにやっと笑った。

「それと、うだうだ考えすぎるなよ?お前の悪い所だぜ?過去に囚われるな。今を見る。」

「う・・・はい。」

その話忘れてると思ってたのにい。

それからと続ける月神様に、まだなんかあるのか?と思ったら、私の手を指した。

「いつまで掴んでるんだ。いい加減それを放せ。」

まだギリギリと力いっぱい掴んでいたクマが、涙目でじたばたと暴れている。

「あらやだ。おほほ。」

ぱっと放してやると、クマは脱兎のごとく月神様の後ろに隠れてしまった。

「凶暴女め!」

ふん!そんな所から言われたって、負け犬の遠吠えにしか聞こえませーん!

クマと睨みあっていると、自分の体が少しずつ透け始めた。

ああ、目が覚めるのか。

「俺や蒼をすっかりさせるような生き方だけはするなよ?」

「はい。」

しっかり頷けば、月神様は満足げに笑った。

さあ、帰ろう。

政宗たちまだ出陣してないと良いけど……。

五 アイドルってすげえ(前書き)

五 アイドルってすげえ

真っ白になったあと、意識が浮上して目を開けると、見慣れた天井が映った。

ああ、戻ってきたんだなと、数回瞬きをしながらぼんやり思った。次いで顔を横に向けて部屋の様子を見ると、誰もいない。外を見ると、比較的強い雨が降っていた。

ボーっとしながら起き上がり、掛けてあった羽織を掴むと、おぼつかない足取りで廊下に出る。

政宗や小十郎たちはどこだろ……。喜多さんは？

ふらふら歩いていると、ちょうど角を曲がってきた政宗を見つけた。「ツキ!？」

驚きの表情でこちらに来る政宗に、ほっとした。良かった。まだいてくれた。

「おはよ〜。」

へらっと笑ったのに、手にしていた羽織を奪うと、政宗は私の肩に掛けてそのまま抱き上げた。

「そんな恰好でふらふらするんじゃないやねえ。」

「気が気じゃなくてさあ。私何日寝てた？」

「10日だ。」

「10日!？」

え?そんなに寝てたの!??って言うか、出陣はどうした!?!
驚いて目を見開く私に、政宗は苦りきった顔を見せて。

「出陣しようとしたんだが、この長雨で川が氾濫した。渡る橋が流されちゃった。」

なるほど……。それで出陣できなくなったのか。

米沢から川中島までの距離と時期を考えたら、途中で何箇所同じようなことになってるかわからないもんねえ。

私としては助かったけど、出鼻をくじかれた政宗としては面白くないんだろうな。

「おまけに、川が氾濫して流された村や田が出てきている。」

「被害はでかいの？」

「今はまだ規模は小さいが、このまま雨が続けばどうなるかわからねえ。今農民の代表者が来ていて、小十郎と綱元がその報告を聞いている。」

ふむ。なるほど。

一緒に行って聞きたいけど、この恰好じゃ無理だな。寝起き丸出しだもん。

「そういうことなら、政宗もその報告を聞きに行っておいでよ。」

「ああ、そのつもりだ。喜多をお前の部屋に寄越すから、仕度が済んだら来い。」

「うーっす。了解。」

元気良く返事をする、政宗はふっと笑った。

「だいぶ元気になったようだな。」

「うん。不調も筋肉痛もなくなって、調子が良いよ。」

「お前はの方がいい。」

部屋の前で降ろされ、政宗はそう言つと私の頭をひと撫でして去って行った。

喜多さんに御世話されながら仕度を整えて、政宗たちがいる部屋に向かうと、中から可愛らしい女の子の声が聞こえてきた。

「そうだべ。おらの村も、隣の村も家こそ問題はねえが、田んぼが流されそうだつぺ。」

言ってる内容はあれだけど、声は可愛いなあ。

「ツキです。開けます。」

声をかけてから襖を開けると、政宗と小十郎と綱元さん、それに数人の農民と一人女の子が座っていた。

小十郎と綱元さんはほっとしたように、農民たちと女の子は不思議そうに私を見ている。

「心配かけてごめんね。もう大丈夫だよ。」

小十郎の隣に座って、二人に言った後、ぽかーんとしている農民たちを見た。

「話の途中でごめんなさい。ツキといいます。」

笑顔で言うと、農民たちはちょっと顔を赤くしてごにごによんか言っていた。

「おらはいつきだべ。ツキ姉ちゃんは蒼いお侍様の家来だべか？」
好奇心にキラキラ輝く目に、お姉さんはノックダウンです。

「か・・・かわいい・・・。」

思わず呟いた言葉を聞き取った小十郎が、落ち着けと私の腕を握り締めた。

はっ！いけない。ここで暴走したら、政宗の顔に泥が塗られちゃう。

「家来じゃないけど、まあそう思っててくれればいつかな。」

ね？と政宗を見ると、政宗はちょっと渋い顔をしながらも頷いた。
なに？家来なんてそんな良い身分じゃないって？

今まで通り居候って言った方が良かったのか？

ニートってのが一番適してそうだけど、この世界でそんな単語無いだろうし・・・。

なんて悩んでいると、咳払いが聞こえた。

「とりあえず各地の状況は分かりました。あとはこの雨がいつまで続くか……。」

綱元さんがずれた話を軌道修正して、みんなの意識を引き戻した。政宗も表情を改めると、農民たちを見た。

「幸い去年は豊作で備蓄もまだ十分にある。最悪田が流されたとしても、この冬を食いつなぐことはでき

るだろう。あとは、お前ら農民だ。川の近くにある集落はいつでも高台に避難できるように準備をしる。特に老人や女子供は今からでも避難しておけ。」

おお、政宗がちゃんと領主っぽく見える！

内心感心していると、いつきちゃんがあのこと……と遠慮がちに言った。

「もし、米さ収穫できねえ時は、年貢は減らしてもらってほしいだけか？」

「ああ、それがお前らと決めた取り決めだからな。」

「それを聞いて安心しなべ！」

笑顔で頷きあう農民たちに、政宗はその代わりと声を鋭くした。

「各地に配している豪族共が不審な動きをしているときは、すぐに報告をしる。それが条件だったよな？」

ふーん……。なるほどね。

ギブ&テイクな取引で良いんじゃないの？

豪族を多く抱える奥州では、隅々にまで目が行き届きにくいもんね。前みたいに私腹を肥やした拳句に、裏切るやつまで出てきたら、天下を指すどころじゃないもの。

「分かってるだよ。そこら辺はおらがきっちり締めてるから安心してもらっていいべ。なあ！みんな！」

へえ。いつきちゃんって、農民代表なんだ。

こんなに若いしかも女の子がねえ。

「んだんだ！いつきちゃんの為なら、おらたちなんでもするだ！」

「いつきちゃんの笑顔を守るためなら頑張るべ！」

「んだ！いつきちゃんはおらたちの女神だべ！」

「……代表じゃねえ。アイドルだ……！！」

他の農民はいつきちゃんの信者か！！

すげえ。この子すげえ。

啞然として盛り上がる農民たちを見てみると、いつきちゃんは頻り賞賛の声を聞いた後、満足げに頷いて「この通りだべ！」と政宗に言った。

「ねえ、小十郎、この子たちいつもこうなの？」

ひそひそと隣の小十郎に尋ねると、ちょっと嫌そうな顔で頷いた。

「ああ。今日はまだ良い。いつきの村に行くと、もっと凄いものが拝める。」

「……なんとなく想像できた。」

武道館でコンサートをするアイドルだ。

奥州筆頭と農民たちの会談は終わり、いつきちゃんを先頭に農民たちは自分たちの村に帰るといっているので政宗と小十郎と一緒にお見送りです。

お見送りなんだけど、私の視線はいつきちゃんに釘付けだ。

正確には、その手に。

「……ねえ、政宗。あのハンマーって……。」

「あれはあいつの武器だ。昔農民一揆を起したときに、あれを振り回して挑んできやがった。」

「げ、マジ!?!」

一揆を起したことも驚きだけど、それよりあれを振り回すの!?!

あの細腕で!?!

いつきちゃん……なんて恐ろしい子!!

劇画調で驚いていると、ずりずりとハンマーを引きずっていつきちゃんはこちらにきた。

「ツキ姉ちゃん、今度おらのむらに遊びに来てくる!!」

まぶしいくらい笑顔で言われ、頷かない人間はいまい。

いたら成敗してくれるわ!

「行く行く!ぜひ遊びに行かせてもらっね!!」

「約束だ!待ってるだよ!」

嬉しそうにピョンピョン跳ねるいつきちゃん。

つて、ハンマーが信者の皆さんに当たってますよ!?!?

「ぐは!い、いつきちゃん、もっと殴ってける!」

恍惚とした表情で、地面に倒れる信者。

先生!ヤバイ人がいます!

「もうそろそろ行かねえと、日が暮れちまっぞ。」

ドン引きしている私の隣で、小十郎が呆れたように促した。

「気をつけていけよ。」

政宗が腕を組んだまま言うど、いつきちゃんは頷いた。

「んだ。そつたら、行くべ！」

いつきちゃんを先頭に、農民たちは雨の中元気に帰っていった。

「いやあ・・・個性豊かな農民たちだったね・・・。」

執務室に戻って、久しぶりないつものメンバーでお茶をしながら、しみじみというと、小十郎はまあなと笑った。

綱元さんは他にも処理しなければならぬ仕事かてんこ盛りのよう
で、さつさと自分の仕事部屋に行ってしまった。

「それより、ツキの方は大丈夫なのか？」

「10日も寝てた割には、体は衰えるどころか逆に絶好調なんだよ
ね。」

生き返ってからずっと感じていた体の重さとか、だるさとかが無く
なって、今ならトレーニングも普通にこなせそうだ。

明日からまた始めなきゃ。

それに、いつもの森で力を使って走ったりする練習もしないと。

直進しかできないんじゃ、話にならないもんね。

「大丈夫なら良いが、無茶はするなよ？」

小十郎が空になった湯飲みを片付けながら、これからのことを考えている私に釘を刺した。

うぐ……と詰まる私に、政宗と小十郎は深々と溜息を付いた。

「お前が大人しいのは、寝ているときだけかよ。」

「がーん！！政宗に言われるなんて……！！シヨックだ！！」

てめえ！それはどういう意味だ？ああ！？と、ドスの効いた声でメ
ンチをきる政宗に、私も負けじと応戦する。

ぎゃーぎゃー騒ぎあつ私と政宗に、小十郎がやれやれと苦笑した。

六 蛍の舞う晩に（前書き）

六 蛍の舞う晩に

ようやく梅雨も終わりを向かえ、大きな被害も出ることなく無事に夏を迎えることができた。

流れてしまった橋の修復も完了し、懸案事項は解決。いつでも出陣できる状態になった。

だけど、武田と上杉の方に結構深刻な被害が発生したらしくて、戦どころではなくなったらしい。

え？訓練と政宗の勝負？

連戦連敗中ですがなにか？

体力とか筋力とかじゃなくて、太刀筋が分からないんだよ。

刀と戦うことが、こんなに難しいなんて思わなかった。

もっと剣術を勉強して、先読みできるようにならないとだめだなあ。。。

603

夕飯も終わって、あとは部屋で寝るだけの時間。

外の空気を入れようと障子を開けると、黄緑色の光がふわりと目の前を過ぎった。

「ホタルだ。。。」

今日一気に羽化したのか、結構な数が舞っていた。

部屋の明かり一つだけにして、他は全部落とすと、縁側に座わる。部屋が暗くなっただけか、遠くを飛んでいたホタルが、ちらりほら

りとすぐ近くまで飛んできては、小さな光を灯した。
徐々に数が増えて、茂みのあちこちで光り始め、ちよつとしたイルミネーションみたいだ。

去年初めてホタルを見たときには、驚いて大興奮したなあ。

話には聞いていたけど、こんなに光ると思つてもいなかったから、ほんとに驚いたよ。

口をあけてホタルを追いかけてたら、躓いて転んで、政宗に指を指して笑われたっけ。

・・・良い思い出だね・・・はは・・・。

痛い思い出を記憶の奥に押し込んで、気を取り直してホタルこいと小さな声で口ずさんでいると、部屋の襖が開く音がして、振り返ると政宗が入ってくる場所だった。

「部屋が暗いから、もう寝たのかと思つたぜ。」

「ホタルが綺麗だったから見てたんだよ。」

そう言つと、政宗から再びホタルに視線を戻す。

柔らかな風が吹いて、ホタルが一斉に飛び立った。

「今年もそんな時期か。」

そう言いながら、政宗が私の隣に座つた。

ホタルをしばらく眺めた後、政宗がそういえば、と呟いた。

「今年はホタルを追いかけまわさねえのか？」

「うるさい！今年はずいぶん眺めるから良いの！」

そろそろ言つと思つてましたよ！くっそ！！

むつとして見上げると、ニヤニヤした政宗が私を見下ろしていた。
ふんっ！とそっぽをむけば、政宗はくっくっくっくつと笑つた。

「Sorry・そんなに怒るこたあねえだろう。」

「怒ってないですよーだ！」

顔を背けたまま、ずずつと政宗との間を開ければ、すぐさまそれ以上の距離を詰められた。

つまり、膝の上に抱え上げられました。

ちよ！もう子供の姿じゃないんだから、膝抱つことが勘弁してよ！！
胡坐をかいた政宗の足の上に横向きで座らされてしまい、じたばたともがいたけど、腰に回された腕はびくともしない。

こんな所でも力の差を見せ付けられるとは！

「ホタルが逃げちまうだろ？静かにしろ。」

腕を引き剥がそうと躍起になっていると、楽しそうに政宗が笑った。

「静かにするから、とにかく降ろしてよ！」

「却下だ。」

そう言うのと、ますますがっちり抱え込まれてしまい、とうとう根負けして諦めた。

大騒ぎしてホタルがいなくなるだけならともかく、誰かが様子を見に来ちゃった日には恥ずかしくて死ねる。

「足痺れても知らないんだからね。」

「HA！そんなに軟じゃねえよ。」

あつそ。後で立ち上がったときに、足を突付きまくってくれるわ！
ぶすつとしたまま政宗に寄りかかり、騒ぐ私たちなどお構いなしに
ふわふわと飛び回るホタルを眺めた。

しばらく会話もなくホタルを眺めていると、一匹がこちらに向か

って飛んできた。

そっと手を差し出すと、そこに止まった。

「ほら、止まったよ。」

掌で光を放つホタルを見せようとしたら、政宗はじっと私を見ていた。

「なに？なんか付いてる？」

頭にもホタルが止まつてるのかな？

首を傾げた振動に驚いたのか、掌のホタルが飛び立ってしまった。

「あ……。」

思わず捕まえようと伸ばした手を、政宗が掴んだ。

少し強い力で持ち上げられた手は、そのまま政宗の唇に押し当てられた。

「ま！政宗！？」

なに！？何してるのこの人！？

やわらかい感触とか、ダイレクトに伝わってきやがるんですが！！

固まった私に少し笑うと、政宗は耳元にその唇を寄せた。

「Stay with me forever, won't you? (オレの側にいろ。いいな?)」

言われた言葉が脳に到達して、噛み砕かれて理解するまでにたつぶり十数秒はかかりました。

じわりじわりと顔の温度が上昇して、何故か目が潤んでくる。

心臓が暴走してドキドキうるさくて、周りの音が良く聞こえないくらいだ。

耳から顔を離れた政宗と目が合って、慌ててうつむいた。

「ツキ、返事は？」

「と、隣にいるって言ったじゃん。」
「そういう意味じゃねえよ。」

溜息混じりに言った後、政宗は私を膝から下ろし、向かい合うようにして座らせて、両手でうつむいている私の顔をはさんで上を向かせた。

「ツキを全部オレにくれ。」

はつきりと告げた政宗は、懇願する様な、縋る様な、そんな表情をしていた。

「ぜ・・・んぶ？」

「お前のこれからを全てだ。」

私のこれからを全て、政宗に？

えと、これって、プロポーズってやつ？

え？プロポーズ！？

ダメじゃん！政宗は伊達家の当主でそれなりの家柄のお姫様を正室にしなきゃ駄目じゃん！

って、ことは私愛人！？

昼メロばりに愛憎劇とかやっちゃうの！？

ドロツドロの女の戦いをねちねちとしちゃうの？

生まれた子供は私生児で、正妻と嫡男を恨んで殺そうとしたり！？

「ダメダメ！そんなのお母さん許しませんよ！！」

「おい、ツキ？どこにイってるんだ？帰って来い。」

軽く揺さぶられて我に返った。

「あ、失礼。あまりの衝撃にちよつと魂が飛んでいきかけたよ。」
危ない危ない。

ふうっと額の汗を拭くと、改めて政宗を見上げた。

「えつと、結論を言えば、愛人は子供の情操教育によろしくないの
で辞退させていただきます。」

うむ。政宗の子供が、正室と側室の愛憎泥沼劇を見ながら育つのは、
教育上よくない。

正室一人でガンガン子供を生んでいただきなさい。

私はそれを見守っていてあげるからさ。

と、すつきり笑顔で言った瞬間、政宗のヘッドロックを食らいまし
た。

「いででででで！！！ギブギブ！！」

「このバカが！！誰がお前を側室にするって言った！！」

「ぎよへええええ！！ちよ、マジで頭蓋骨潰れる！！」

「オレは、お前しか娶る気はねえよ！！」

「ふんぎやああああ！！い、今みしって言った！頭がみしっていつ
たああああ！！」

「人が一世一代の大勝負に出たつてのに、おまえはああああ！！」

ろ、ロープ！！もしくはタオルをおおおお！！

えぐえぐと頭を抱えて泣きべそをかく私と、完全に拗ねてしまった政宗。

ホタルだけが優雅に飛び回っております。
うう、まだズキズキするよう。

「だ、だってえ。こんな後ろ盾も無い私よりも、ちゃんとしたところから正室を貰わなきゃ家臣たちが納得しないじゃんよ。」

政宗の背中に向かって言うと、ちらっとだけこちらを見て不貞腐れたように答えた。

「もうすでに話は通してある。全員認めさせた。」

「は！？いつの間に！？」

「お前が居なかった半年の間に全部根回しはしてある。」

「マジで！？つか、もっと居るでしょうが！私よりも政宗に相応しい人が！」

「オレは！！」

怒りを露にして振り返った政宗は、私を睨みつけて怒鳴った。

「家柄とか、後ろ盾とか、そんなもんオレはいらねえ！オレは、ツキが欲しいと言ってるだろうが！」

ビクツとなった私を見て、政宗ははぁーっと溜息を吐きながら頭を掻いた。

「なあ、ツキ。そんなことは考えんな。オレは、お前の気持を聞いてるんだ。周りの考えなんざ端から聞いてねえよ。」

私の気持ち……。

焦がれるほどの想いなら、胸むねにある。

でも、私が伝えても良いの？

もっと相応しい人がいるはず。

奥州筆頭を支え、癒ひよすことのできる女性むすめが。

私よりもずっと、政宗に必要な人が・・・。

だから、想いは想いのまま、秘めておいた方がいい。

そう、思っていた。

政宗を見れば、真面目な表情で私の言葉を待っている。

いい、かな・・・。

言っても、いいの・・・かな・・・。

《うだうだ考えすぎるなよ？お前の悪い所だぜ？》

呆れた声が聞こえたような気がした。

おずおずと手を伸ばして、政宗の袂を掴んだ。

「返品はできないからね？」

「しねえよ。」

「劣化しても、捨てたりしたらダメだからね？」

「もったいなくて捨てられるか。」

「あと、大事にしなきゃだめだよ？」

「ああ。大事にする。」

なら、いいか。

ふっと笑えば、政宗も同じように笑った。

「いいよ。政宗にあげる。」

「ああ。全部貰い受けたぜ。」

ちよつとだけ蒸し暑い、ホタルが舞う晩に、私は政宗のものになりました。

六 蛭の舞う晩に（後書き）

筆頭粘り勝ち（笑）

七 飲み過ぎ注意

宴会大好き伊達軍は、何かと理由をつけては酒だ宴会だと盛り上がる。

今日も顔を顰める小十郎の隣で、政宗がさも嬉しそうにLet's party!と叫び、ズラーッと並んだ兵士達がイエーイ!と盛り上がっております。

とにかくパーティーだと連れてこられた私には、何の宴会なのかがよくわからない。

渋い顔の小十郎の隣に座ると、こそつと尋ねた。

「今日は何があつたの?」

「三太の所に赤ん坊が生まれたんだ。」

三太は伊達軍の兵士の一人で、荒くれ共の中では比較的穏やかで大人しい性格だ。

最近確かにそわそわしてるなあと思ってたけど、奥さん臨月だったのね。

「あら、そりやおめでとうだね。で、三太は?」

「帰った。」

「主役いない宴会かよ!」

「まったく、酒蔵が幾つあっても足りねえ。」

何だかんだ言つて、半月に一回は飲み会してるから、小十郎としては頭が痛いんだろう。

私は酒が飲めるなら、いつでも大歓迎なんだけどね!

「まあ、めでたい事には変わらないんだし、小十郎も飲みなよ。」

徳利を持って傾ければ、小十郎もため息を吐いて、盃を手にとった。政宗は珍しく兵士達の中に入って飲んでる。多分小十郎に小言を言われるのがわかっていて、逃げたんだろう。仕方が無い奴め。

今日は私が小十郎の自棄酒に付き合うか。

「小十郎とサシで飲むのは初めてだね。」

「そう言えばそうか。」

くいつと盃を開けて、今度は小十郎が徳利を手にした。

「あ、ども。」

返杯してもらって、私も一気に飲み干す。

うまー。

「しかし、子供が生まれる度に宴会では……。」

「あはは、伊達軍は独身率が高いのが救いだね。」

「まったく。政宗様も人の祝いをする前に、御自分の祝言をお考えにならないかならないというのに。なあ？」

「ぶほっ！！」

意味深な視線付きで爆弾投下され、思いつき酒を吹いた。

「げほっ！ごほっ！こ、小十郎！？」

「あれだけ政宗の機嫌が良ければ、嫌でもわかる。」

まあ、確かに最近は機嫌良さそうだけど、それだけで何でわかるんだよ！

苦笑しながら背中をさする小十郎に、右手を上げて大丈夫だとジエスチャーすると、はーっと深呼吸した。
あー苦しかった。

しかし、小十郎にバレてるってことは、喜多さんにもほぼ確実にバレてるな・・・。

最近朝起しに来なくなったのはそのせいか!!

うう、恥ずかしい・・・。

素面でやってられるか。今夜は飲んでやるうう!!

いつも政宗の酌ばかりしていて、あまり飲んでる所を見た事がなかったけど、小十郎も飲める口だ。

飲んでも飲んでも、顔色が変わらないし、言動もちゃんとしている。こういう人とだと安心してこっちも飲めるってもんだよ。

まあ、政宗も酔いつぶれるなんて事はしないけど、奴の場合何をされるかわからないから、ある意味気が抜けない。

けっこう良い感じに酔ってきた頃、隣で飲んでいる小十郎にふと湧いた疑問をぶつけてみた。

「小十郎はお嫁さんもらわないの〜?」

「・・・ツキ、飲み過ぎだ。そろそろやめておけ。」

「大丈夫だつてえ。で、もらわないの〜?」

「家は兄が継いでいるから、俺はいいんだ。」

徳利を奪い取って、代わりに水の入った湯飲みを渡された。酔ってないって言ってるのにい。

でも、喉が乾いたので、水を飲みながら、小十郎を見上げた。

「へえ、小十郎お兄ちゃんいるんだあ。でも、お兄ちゃんがお家を継ぐから、お家を継がない小十郎は結婚しないの？」

家を継がない人は結婚しないのか？

意味が分からんと首を捻っていると、小十郎が私から取り上げた徳利から手酌で盃に酒を注いで仰いだ。

おお、その喉仏がセクシーですな。

「家を継ぐなら、家を守るために婚姻は嫌でもしなけりやならねえが、それ以外の男なんてのは、どうでも良いって感じだな。」

「へえそうなんだ。気楽だねえ。それに比べて、跡取りは大変だあ。嫌でも結婚しなきゃならないいんじやあねえ。」

と、そこまで自分で言っつて、はたと気が付いた。

政宗も跡取りだよ。

つて、ことは結婚しなきゃならない組だ。

「もしかして……政宗も嫡男で伊達家を継ぐから、仕方なく、なのかなあ。」

あ、なんかずーんと落ち込んできた。

そうか、仕方ないから、身近な私にしたのかあ。

「そ、そんな事はない！政宗様に限っては、そんな事はないぞ！」

慌てた小十郎が私の肩を掴んで必死に否定してるけど、嫌でも結婚しなきゃならないって言ったのは小十郎じゃん。

うう、なんか泣きたくなってきた。

「何で政宗は違っつて言えるの？政宗なんか、伊達家の当主じゃん。きつと周りがうるさいから私で手を打ったんだ。」

きつとそうに違いない。

ぶわぁっと涙が溢れて、頬を伝ってぼたぼたと膝の上に落ちた。

「お、おい、ツキ？勘違いしてねえか？」

「ううっ、ひどい・・・政宗信じてたのにい。」

「いや、だから、聞いてるか？」

「ぎごえないもん！！」

小十郎がひどく戸惑った顔をして何か言っていたけど、それどころじゃなくなっていた私は、腹のそこから大きな声をだして、思いっきり泣いた。

久しぶりに良直達と飲んでいると、上座の方からツキの泣き声が聞こえて顔を上げた。

小十郎が、必死になって宥めようとしているのがここからでも分か

る。
つたく、何やってやがるんだ。

「Hey、何してんだ？」

「ま、政宗様！」

上座に戻って二人に声をかけると、小十郎がホツとした様な顔で振り返った。

ツキを見れば、まるでガキのように声を上げてぎゃんぎゃん泣いてやがる。

「政宗のばかああああ！！嫌いいいいいい！！！」

「Why!？」

オレが何したってんだ!？

小十郎、お前何を言ったんだ!？

「小十郎？」

説明しろと名前を呼ぶと、小十郎は溜息を吐いて事の次第を説明した。

なるほどな。

確かに小十郎の言っていることは、よくある話だ。

だが、なぜオレが仕方なく嫁を娶るために、ツキを妥協で選んだって事になるんだよ。

どういふ思考をしてやがるんだか・・・。

呆れ気味でツキを見れば、周りに徳利が7、8本転がっていた。

明らかに飲みすぎだ。

「政宗は私のことを玩んで捨てる気なんだああ!!！」

「おおおおおい!! 人聞きの悪いことをいきなり叫ぶんじゃねえよ!!！」

勘弁しろよ! 下座からの視線がいてえよ!!！」

大トラと化したツキが畳をバシバシ叩きながら、私はお飾りの女なのようななどと、妙な小芝居を始めだした頃。

「何をしているんですか。」

と、喜多が呆れ顔で現れた。

「まったく、こんなに飲ませるなんて。」

「申し訳ありません。」

非を詫びる小十郎には見向きもせず、オウオウと泣いているツキの前に座ると抱き起こして素早く口の中に何かを放り込んだ。

「あま……。」

今まで号泣していたのが嘘のように泣き止み、口をもごもごさせながらきよとんとしている。

その隙にツキの顔を拭いてやると、喜多はオレを見上げた。

笑みを浮かべているが、背後になにか不穏な気配を滲ませている喜多に、薄ら寒いものを感じる。

「殿、ちゃんとツキと話をなさいませ。まさか、とは思いますが、これからの事をろくに話もせず、ただ床を共にしているだけ、なんてことはないですよねえ?」

「そ、そろそろしようと思っていたところだ。」

やべ……。

話してねえよとか言ったら、天下を取る前に喜多に殺られちゃう・

・！

「左様でございましたか。でしたらば、ぜひ早めに！！お話をさ
いませね？」

「お、おう。」

カクカクと頷くオレに満足そうに頷くと、喜多は去っていった。

・・・助かったぜ。

喜多が去り、再び連中が騒ぎ出す中、疲れきって脱力したオレと
小十郎は座って溜息を吐いた。

「小十郎、ツキにはもう飲ませすぎるな。三本が上限だ。」

「承知いたしました。」

隣で上機嫌で飴を舐めているツキを横目で見つつ、ひそひそと話せ
ば、小十郎も深く頷いた。

大トラから子猫に戻ったツキが、人の気も知らねえで、くあぁと
あくびをしている。

これ以上何かしでかす前に、今夜は寝かせちまうか。

喜多の言うとおり、ツキにこれからの話もしなきゃならねえが、こ
の状態でも無駄だろう。

「ツキ、部屋に戻るぞ。」

「ええ？」

眠そうに目をこすっているくせに、不服そうに唇を尖らせるツキ。

「眠いんだろ？もう寝ろ。」

「ううて。」

「ほら、行くぞ。」

先に立ち上がり、立てと手を差し出すと、ツキは両手をこっちに伸ばした。

「あ？何やってんだ？早く立て。」

「だっこ！」

「……………」

……………ここに他の連中がいなければ……………。

上目遣いで強請るツキを無言で抱き上げると、小十郎に寝るとだけ告げて足早に広間を出た。

朝目が覚めると、政宗が私の上に覆いかぶさってました。

「Good morning honey.」

「おはよう。で、この状況は一体何事？」

「昨夜のことを覚えてるか？」

人の質問を無視して、朝からエロエロしい声で政宗が囁き、私は昨夜のこと？と首をひねった。

昨夜は小十郎と飲んでて・・・飲んでて・・・。

「あれ？」

「さんざん泣いて騒いでたんだが、覚えてねえのか？」

「うっそ・・・！そんなバカな・・・！」

といいつつも、昨日の記憶が思い出せない。

確か小十郎と飲んでて、ええと・・・。

必死に思い出そうとしているのに、政宗は私の首に顔を埋めるとぺろりと舐めやがった。

「んにゃ！朝から何してんのよ！！！」

首を押さえて怒ったけど、やっぱり無視して政宗はフンと笑った。

「オレがお前を仕方なく妥協で娶ろうとしていると、泣き喚いてたんだ。」

「うええええ！！？」

なんですとおおお！？

つか、妥協ってどういうことー！？

完全パニックに陥った私は、政宗をどかして起き上がろうとしたが、両手を布団に縫い付けられてしまって身動きがとれない。

「オレは言ったよな？ツキが良いと。お前でなけりやダメだと。お前意外を娶る気はないと。」

急に恐いくらいに真剣な顔つきになった政宗に見つめられて、顔が熱くなる。

「それが信じられねえか？」

「え……いや……その……。」

寝起きの脳みそに刺激が強すぎる会話で、もう頭真っ白だ。

ただ、政宗がその場しのぎや妥協で私を選んだんじゃないって事は分かってる。

けどね、なんで朝からこんな状況なの！？

なんだか泣きたい気分で政宗を見上げると、それに気がついた政宗がふうと息を吐いてから、腕の拘束を外して起き上がり、私も引っ張り起して抱き寄せた。

圧迫と拘束から解放されて、ほつと息を吐いてから、えーとと呟いた。

「ゴメン。昨日のこと何にも覚えてないんだけど、私は政宗を疑ってるわけじゃないよ？でもね、時々でいいから、今みたいに政宗の気持を言ってくれたら、嬉しいかな。」

ぼそぼそと小さな声で言うと、政宗はそうかと呟いて私の頭を撫でた。

良く分からないけど、なんだか嬉しそうだ。

納得してくれたのかな？

良かった良かった。さて、起きて朝の仕度をしようかなと思った時。

「オレもツキから気持を聞きたいんだが？」
と、思いもよらない不意打ちに見舞われた。

恐る恐る政宗を見上げると、ニヤニヤと笑いながら私を見ていた。

ああいった手前、私も言わないわけにはいかないのか！？

でも、でも、でも……！！

葛藤していると政宗が、言ってくれないのか？とさも残念そうに、
でもニヤニヤしながら言いやがった。

ちくしょー！。絶対私の反応を見て楽しんでるな！

くそー！ならば言っつてやるわよ！

むんずと政宗の襟を両手で掴むと、ぐいっと引き寄せ、膝立ちして耳の横に口を近づけた。

「政宗が大好きだよ。」

そう言うと、おまけだとはかりに、頬にキスを一つ落とすと、そのまま立ち上がった。

「着替えてくるー！！」

政宗の顔も見ずにそう叫ぶと、単衣のまま政宗の部屋を飛び出して自分の部屋に逃げた。

その日、上機嫌でニタニタしている政宗が、あちこちで目撃され
たという……。

七 飲み過ぎ注意（後書き）

以後、ヒロインはしばらくお酒を自重したとか（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3687v/>

竜の華は蒼月に舞う

2011年10月22日02時16分発行